新・水滸伝「一」（吉川英治）

一　序曲、百八の星、人間界に宿命すること

頃は、今から九百年前。――中華の黄土大陸は大宋国といって、首都を河南省の開封東京にさだめ、宋朝歴代の王業は、四代の仁宗皇帝につがれていた。

その嘉祐三年の三月三日のことである。

天子は、紫宸殿に出御して、この日、公卿百官の朝賀を嘉せられた。そしてはや、楽府の仙楽と満庭の万歳のうちに式を終って、今しも袞龍錦衣のお人影が、侍座の玉簪や、侍従の花冠と共に珠の椅子をお立ちあらんと見えたときであった。

「あ、陛下。しばしのほど」

列を離れて出た宰相の趙哲、参議の文彦博のふたりが、帝座に伏して奏上した。

「お願いにござりまする。――いにしえから、今日の上巳ノ祝節（節句）には、桃花の流れにみそぎして、官民のわかちなく、和楽を共に、大いに愉しみ遊ぶ日とされております。ねがわくば、この佳き日にあたって、下々へも、ご仁政の実をおしめしたまわらば、宋朝の栄えは、万代だろうとおもわれますが」

仁宗皇帝は、ふと、ふしんなお顔をされた。

「なに。こんなよい日和なのに、人民は、何も愉しめずにいるというのか」

「さればで――」と、両名はさらに九拝して。「ここ数年、五穀のみのりも思わしくありません。加うるに、この春は、天下に悪疫が流行し、江南江北も、東西二京も、病臭に埋まっております。家々は飢えにみち、病屍は道に捨てられてかえりみられず、夜は群盗のおののきに明かすという有様でございますから」

「ふうん。そんなにひどいのか」

「そこで、検非違使の包待制のごときは、施薬院の医吏をはげまし、また、自分の俸給まで投げだして、必死な救済にあたっておりますが、いかんせん、疫痢の猖獗にはかてません。このぶんでは、地上の人間の半分は、死ぬだろうと恐れられておりまする」

「それは、ゆゆしい事ではないか。さっそく、天下の諸寺院に令して大祈祷をさせねばならん」

国土の患いでも、一身の乱でも、なにか大事にたちいたると、すぐ、加持祈祷へ頼むところは、わが朝の藤原時代の権門とも、まったく同じ風習だった。いや、それが文明社会に近づきつつまだ文明にほど遠かった当時の人智だったというしかない。

江西への旅は遥かだった。しかし、旅にはよい仲春の季節でもある。禁門の大将軍洪信は、おびただしい部下の車騎をしたがえて、都門東京を立ち、日をかさねて、江西信州の県城へ行きついた。

「勅使のおくだりだぞ。粗略あるな」

と、州の長官以下、大小の諸役人から土軍はもちろん、土地

の男女僧俗まで、みな道に堵列して、洪大将を出迎えた。
その夜のさかんな饗宴はいうまでもなかった。地方の吏が中央の大賓に媚びることは、今も昔もかわりがない。わけて、丹紙の詔書を奉じて来た勅使であるから、県をあげて、庁の役人は、そのもてなしに心をくだいた。
が、洪信は、さすが軍人である。豪放で、らいらくだ。かつ、朝廷の賜餐には馴れ、街の銀盤玉杯にも飽いているから、どんな歓待とて、彼の舌や眼を驚かすには足らない。
「まあ、まあ。杯は下におけ。そう酒ばかりすすめんでもよい。このたびの下向は儂にとっても、重大な勅の勤め。さきに飛脚しておいた下し令状も見たであろうが」
「しかと、拝見しております」と、州の長官は、急に、畏みを見せて、――「聖旨のおもむきは、さっそく、この地の奥、龍虎山上清宮につたえおきましたから、万端をととのえご参籠をお待ち申しあげておるはずで」
「そうか。では今夜は、不浄をつつしみ、明朝は沐浴して、上清宮へ登って行くとしよう。貴様たちも、はやく退がれ」
つぎの日、洪は暁天に旅館を立ち、州門から八十支里（六町＝一里）もある西南の大岳を望んで行った。案内の州役人らの次に、彼は山輿にゆられ、部下百騎は勅使旗をささげていた。
龍虎山一帯は、古来、全国の信仰をあつめてきた道教の大本山だ。
唐代このかた、歴朝の帰依ふかく、その勅額は、朱の楼閣にも仰がれる。渓谷の空には、苔さびた石橋が望まれ、山また山の重なる奥までも、十三層塔が霞んで見えた。また、道士たちの住む墻院、仙館は、峰谷々にわたり、松柏をつづる黄や白い花は猿や鶴の遊ぶ苑といってもよいであろうか。
ところで、この仙境は、その日とつぜん、眼をさましたように、一山の鐘台から鐘の音をゆり起した。木々は香露をふりこぼし、園の仙鶴は羽バタき、全山の禽獣も、一せいに驚き啼いた。――見れば、三清宮から大石橋へかけて、院主の大師以下、道士、稚児、力士（寺侍）などの群列が、彩霞のごとく、香を煙らし、金鈴や小鼓を鳴らしながら今し勅使の洪将軍を仙院へ迎える礼をとっているものだった。
「大儀である」
洪は、大きく目礼をほどこしながら、仙館へ入った。
えならぬ仙味の献茶一ぷくを、すずやかに服み終ると、彼はただちに、勅の主旨を、院主につたえた。
「――過ぐる日の上巳の祝節。わが仁宗皇帝におかれては、打ちつづく世の悪疫を聞こしめされ、いたく宸襟をなやませ給うた。そこで即日、大赦の令を発せられ、施薬や施粥の小屋を辻々におき、なおまた、かくは、臣洪信を遠くにおつかわしあって、当山の虚靖天師に、病魔調伏の祈りを、おん頼みあった次第である。その儀は、すでに心得おろうがな」
「うけたまわっておりまする」
「勅願の詔書は、すなわち、これなる錦のふくろに入れ、臣洪信の胸にかけて奉じてまいった。――さっそく、龍虎山の大仙、虚靖天師にお会いして、おわたし申しあげねばならんが、天師はいずこにおらるるか」
「大仙は、ここにはおいでございませぬ。ここの俗塵すら嫌

って、これよりさらに山ふかく、龍虎山のいただきも尽きるところに、一宇の草院を結び、つねに仙道ご修行のほか、他念もなくおわせられます」
「では、そこまで登らねば、天師にお会いできぬのか」
「それも、お使者ご一名のみ。……斎戒沐浴をとげた上ならでは」
「はて、不便なことだなあ。勅命なのに」
「いかに、ご勅使たりと、霊山の法規はまげられませぬ。まこと、仁宗皇帝が、万民の苦患を救わんため、万民に代って、大仙のご祈祷をおたのみまいらすなれば、ご代参の殿が、それしきの精進をつとめるなどは、何ほどのことでもありますまい」
「いうな、たれが億劫だといった。ただ不便と感じただけのこと。よしよし、あす一日潔斎して、われ一人、天師の仙家へまかるであろう」
彼の意気たるや旺であった。その朝は、星の下に、水垢離をとり、白木綿の浄衣を着て、黄布のつつみを背中へ斜にかけて結んだ。内に宸筆の勅願をおさめたのだ。そして、銀の柄香炉を片手に、折々、香を焚いては、「六根清浄」を口にとなえ、身に寸鉄を帯びるでもなく、白木の山杖一ツを力に、あまたの道士に見送られて、上清宮を出立した。
――が、禁門軍の雄、洪大将ほどな男も、そこから奥の山ではまったくへばッた。第一夜は、樹海の底の谷川を枕として寝ね、第二夜は、斧の刃のような天空の峰で身を横たえた。しかも、ゆくての千峰は、まだまだ嶮しい。
やがて、降ればまた深い渓音水声、昼か夜かも、わからなくなっていた。猿になぶられ、狼に踵を嗅がれ、ただ蔦かずらの中の道標を捜しては、それをたよって行くしかない。やっと、太古の森林を出たと思うと、あ――と仰がれる絶壁だし、めぐれば、瀑布のしぶきに吹きとばされ、攀じれば、磊々の奇岩巨石に覗き下ろされる。
それのみか、彼は、牝雄二疋の大きな虎に出会って、あやうく、虎の餌食にされかけたり、この世にはありえぬような大蛇の鱗光に胆を消したりして、そのつど、無我夢中で逃げまろんだ。いつか、杖も柄香炉も、手になかった。生命一つを大事に、よろ這い歩くのが、やっとであった。
「……おや、鉄笛の音がする？」
幾日目かの、途中である。
彼は、はじめて、人間の香に吹かれた。

「おじさん、どこへ行くんだね」
童子の方から、声をかけた。
童子は、牛の背へ、横乗りに乗っている。手には、さっきから聞えていた鉄笛が持たれていた。
「や、小僧、おまえこそ、どこから来た」
「この先の、中院からさ」
「中院」
「おじさんの泊った三清宮が麓院、この峰が中院、もッともッと天上にあるのが奥院だよ。……だけど、おじさん、そんなに苦労して登って行っても、ムダだろうぜ」
「どうして」
「天師さまは、お留守だもの」

「えっ、いない？　……。そ、そんなはずはあるまいが」
「いないよ。うそじゃないよ。十日も前に、鶴に乗って、都へお出ましになってしまったんだ。なんでも、天下に悪い病が大ばやりなので、皇帝から、道教大本山の老大仙へ、ご加持のお頼みがあったんだとさ。きっと、面倒だから、天師さまの方から、鶴に乗って、ちょっくら、開封東京の空へ、飛んで行かれたんだろう」
「はて。どうして、きさまは、そんなことを知っておるのか」
「知ってるさ。こう見えても、人里の草刈り小僧とはわけが違う。老大仙に仕えている侍童だもの」
「さてはそうか。では、そこへ案内してくれい。たのむ、たのむ」
「疑いぶかいなあ。いないっていってるのに。――ぼやぼやしてると、虎か大蛇の餌食にされちまうぜ。はやくお帰りよ、おじさん」
童子は、憐れむような一笑をくれて、あとも見ずに行ってしまった。
洪は、半信半疑の思いで、なお行くと、なるほど、ここはまだ龍虎山の七、八合目あたりだったのか、巍然として、古塔の聳えを中心に、一郭の堂廟伽藍が、望まれだした。
足をひきずって、辿りつくと、
「洪大将でおわすか」
と、羅漢のごとき道衆と、仙骨そのもののような老真人（道士の師）が、門に出迎え、礼をあつく、いたわってくれた。
それはよいが、彼の蘇生の思いも、すぐ打ち消された。この老真人もいうのであった。
「まことに、あいにくでしたの。われらも、今知ったのでござりますわ。――山上の虚靖天師がはやお留守ということを」
「そりゃ、まったくか」
「嘘か、ほんとかよりも、おん大将ご自身、なにか途中で、お気づきになりませんでしたかの」
「牛に乗った童子に出会ったが」
「やや。それは惜しいことをされましたな」
「え。可惜とは、また何で？」
「その童子こそ、天師のご化身だったにちがいありません」
「げっ、あれがか」
「お勅使にムダぼね折らせても、おきのどくと思われ、一瞬に、都から翔け来たッて、はや立ち帰れと、おさとしなされたものでしょう」
「ああ……。そうとは、知らなかった」
「が、まあ。ご安心なさるがよい。そういう示顕のあるからには、おん大将がご帰京ある頃には、もう天師の神妙力にて、かならず、ご勅願はかなえられているに相違ございません」
なぐさめられて、その晩は、霧深い一古殿で昏々と眠った。
「この上は、ぜひもない、勅願の詔を、上清宮の本殿に納め奉って、一日もはやく、都へ帰ろう」
臍を決めて、こう告げると、真人は、十人の道衆に命じて、
「お勅使を、元の上清宮まで、お送りしてあげよ」
と、いった。
洪は、十道士にかこまれて、石門を出た。歩むことやや半日。だが、これはどうしたことだ。あんなにも、幾昼夜の難所、虎や毒蛇にも襲われて登って来たものが、降りとはいえ、

坦々と平地を歩むような愉しさである。そして、またたくまに、宝塔仙館の甍が霞む、以前の三清宮へついてしまった。

あくる日、詔は、上清宮の神扉深きところの、宸翰箱に祠り封ぜられ、式を終って、夜は一山の大饗宴に移った。精進料理ばかりのお山振舞である。――これで、つつがなく下山となれば、まずは無難だったのだが、軍官僚のつねで、酒がはいると、もちまえの肌が出はじめた。何か、このまま下山しては、こけんにかかわる気でもしたのだろうか。いやに威儀ぶっていたが、ふと、まわりの雑談に、小耳をはさみ、

「なに、なに。いま申した魔耶殿とは、いったい、どこの閣か」

「は。お耳にさわりましたか。やはり三清宮の深殿の一でございまする」

「ふウむ。霊域の広さは、なかなか一眸には出来んのだな。またと、かかる山へ参ることもあるまい。ひとつ明朝は、ここの全堂閣を、遊覧させてもらおうぞ」

「かしこまりました。ぜひ、ご巡拝のほどを」

宮司、真人たちは、あくる日、彼の先導に立った。そして、上清観の唐代、五代、宋代にわたる名刹の建造物を見せてまわり、さいごに九天殿、紫微殿、北極殿の奥ふかい社廊をすすみ、

「右が、太乙殿、左が、昨夜申した魔耶殿にござります」

と、たたずんだ。

幽寂な陽の翳りも淡い四辺には、どこやら谺する小鳥の声があるだけで、何かぞくと、薄ら寒く肌に刺してくるものがある。

「ははあ、ここはもう、上清観中の奥処だな」

「さようで。いちばん奥の古刹でございまする」

「あれなる石壁に、鉄鎖をもって、物々しい錠前をかけてある門が見えるが、あれは何だ？」

「開かずの祠と申しつたえております」

「開かずの門か」と、洪はずかずか歩き出した。なにか、抵抗を感じたらしく見える。仰げば大絶壁。そこの裾をくりぬいた石窟なのだ。近づいてみると、かたわらの石柱には、

伏魔之殿

と、四文字が彫られてある。

「おうっ、宮司。――開けて見せてくれい、この内を」

洪は、伏魔と読み、また、不開の門と聞いて、たちまちその傲上慢を、むらむらと、胸に煽りたてられたらしい。

「め、滅相もない仰せを」

宮司や道衆は、青くなった。

彼らが、口をそろえていうには、

「――そもそも、ここに祠られて、呪封となっている魔ものは、ことごとく、世界の妖霊どものみで、ございまする。仔細を申せば、大唐の開山洞玄国師このかた、代々の老祖大仙が、魔ものを捕りおさえては、この石窟へ封じ込めおかれたもので、みだりに開くことはなりません」

「ははは。ばかなことを」

「いやいや、お笑い沙汰ではございませぬ。もし、過ちにせよここを開けば、窟中の魔王は、時をえたりと、人界へ躍りでて、世路のみだれは申すもおろか、人間の智恵、内臓のうちにまで潜んで、長く取り返しもつくまいぞ、といわれてお

りまする。……されば、道法九代の間、また私も、住山三十年にもなりますが、かつてただの一度も、ここの鉄錠に手をかけたためしなど、見たことはありません」
「だからこそだ。そう聞けば、なお内部へ入ってみたい」
「そ、それは、余りにも、ご無態と申すもので」
「なにが、無態だ。なんじらの馬鹿げた迷妄を、儂の勇をもって、醒ましてくるるのがなんで無態か。鍛冶を呼んで、鎖を切らせろ」
「どうか、その儀だけは、おゆるしを」
「ならん。いなやをいうなら、朝廷に奏聞して、魔霊を祠るものと、公にするぞ。なんじら、数珠つなぎとなって、上饒江の河原に、さらし首を、ならべたいのか」
言い出しては、決して、言をひるがえす洪大将ではない。都城の衛府で、部下をが鳴ッている通りな彼になっている。
恐れわなないた宮司や道衆は、ぜひなくおろおろと、やがて秘門の扉へ、むらがり寄った。鉄槌から火バナが散り、石斧からは、異様な響きと匂いが立った。不気味な谺、キ、キ、キ……と腸をしぼるような何かの軋み。――じっと、見ていた洪は、そこが開くやいな、洞然たる暗やみの中へ、まっ先に躍り入って、
「どうだ、それ見ろ、何事もないではないか。なにが厳秘の門か、なにが呪封か。わはは、みんな入れ」
と、両の手を、天井へ突ッぱり、愉快きわまるものの如くであった。
――が、余りの暗さだ、歩いてみても何も見えない。彼は、また大声で、奥でどなった。その声は、空洞にひびき、ひとつ言葉が、二つに聞えた。
「おういっ。松明をとぼせ。一同、松明を持って、儂のあとから進んで来いっ」
窟は、仏体の胎内にでも象ってあるのか、口はせまく、行くほどに広くなり、四壁には、諸仏、菩薩、十二神将などの像が、彫りつけられてある。
「や。あぶない」
洪は、一石碑に、つまずいた。
松明を呼んでよく見ると、ここばかりが円い広場となっている。冥々昏々、幾百年もの間、太陽の寸光も知らない冷土なのだ。それに六尺ほどな板碑が、にょっきと建ち、台石となっている石彫りの大亀は、碑を背に載せて、千古、眠りより醒めず、といったふうである。
「こりゃ読めん。石碑の表に、何やら細々と彫ってあるが、全文、神代文字らしい。なに、裏には、ただの楷書があると。どれどれ」
彼は、赤い火にいぶされながら、なにげなく、碑の裏へ廻って、顔を寄せた。
四つの大きな文字。それは、
遇洪而開
と、読まれた。
「や。洪ニ遇ッテ開クだと？　……。はてな、洪とはおれ、おれに遇って開くとは」
なに思ったか、彼は、全身に瘤をこさえて、大きく唸った。そして、碑を仆せ、石亀をのぞいて、その下を掘り起せと、狂気じみた声を発した。

もちろん、人々は極力、その暴を諫めぬいた。哀号泣訴、「恐ろしや、恐ろしや。そのような、大それた儀は、ど、どうぞ、お見あわせ下さいませ」

と、地へ、へばッたまま、起ちもしない。

「だまれっ」と、洪は大喝した。「――なにが空恐ろしいのだ。見ろ、碑の文字を。……洪二遇ッテ開ク、とあるではないか。すでに古の神仙は、今日、儂がこれへ参るのを、予言いたしておったのだ。いやだと申す者は、素首をぶった斬るぞ」

剣把をたたくと、人々は、もう顫えあがって、唯々諾々と、彼の命のままうごくしかなかった。

大勢の力で、碑は仆され、石亀は数百年の眠りから揺り起された。そして、一転二転、腹を見せた石亀のまろぶ地響きと同時に、人々の足の裏から、ごうッと、大釜の湯でも沸るような音が聞えた。

「わッ、こりゃ深いっ」

亀を除いたあとに、大穴があいた。穴は深さ万丈、奈落へ通じるかと思われた。いやいや、伏して覗いてもいられない。とたんに、地軸の底で、ぐわらぐわら、百雷に似た物音なのだ。洪大将も、人々も、

「あ――」と、耳をふさいで、のけぞッた。そも、なんであろう。すべて一瞬のことである。醒々冷々たる墨のごとき濛気が、ぶっ仆れた面々の上をかすめた。

無色無臭、濛気は見えない。が、穴の底から、噴き出しているのはたしかだ。魔の跫音、魔の笑い声、魔のどよめき、そういっても、まちがいではない。ごうごうの地鳴りは鳴りやまず、一震四壁を裂き、また、山を震ッて、このため、龍虎山の全峰は吠え、信江上饒の水は、あふれ捲いて、麓を呑むかと思われるほどだった。

「……ああ、これはまた、ど、どうしたことだ」

洪は、無我夢中で、石窟の外へ、逃げだしていた。いや、なにかに刎ねとばされて、魔耶殿の橋廊の下まで抛り出されたといった方が真実に近い。

とにかく、やや気がついたときでも、なお石窟は揺れ鳴っている。そして一とすじの尾を曳いた黒雲が、中天に昇ってゆくのを仰いでいると、一閃の赫光が眼を射、とたんに、無数の妖星と砕け散って、世間の空へ八方飛んでわかれてゆくのが見えた。

洪は、ただ、唖々唖々と、腑抜けみたいに、手を振って、よろめき歩いた。一山の騒動はいうまでもない。だが、下手人が勅使では、罰することもならず、三清宮の院主は、いとも嘆かわしげに、うつろな洪大将の顔へ、こう言いわたした。

「はやはや、ご下山くださいましょう。ぜひもなし、あとは虚靖天師のお帰りを待つのみです。したが、あの祠の窟には、三十六員の天罡星、七十二性の地煞星、あわせて百八の魔が封じられていたものを、あなたさまはまあ、恐ろしいことをなされたものでございましたな。物好きにも、護符の禁を破って、人の世の地上へ、百八の魔をばら撒いたからには、行く末、どんな世態を見ることやら、いまから身も縮む思いがされます。――せめて、以後は生涯、ご信心にでも身をお捧げなされませい」

道教では、この宇宙を、魔界と仙界の二元からなるものと観

て、北斗、太極、二十八宿などの星座を崇め、それは人の世の治乱吉凶禍福の運行とも、密接なつながりがあるものとしている。

だから、天体中の徳星は、これを崇め、邪星妖星は、仙術の呪をもって、封じこめておく。――古来、龍虎山上清宮の道祖代々が、そうして、せっかく人界平和のために、道行を積んできたのに、ついに今日、百八の魔星を歓呼させて、もとの世間へかえしてしまった。

「これが恐れられずにいられましょうか」

洪大将が、すごすごと下山する日も、院主は、未来を予言して、くり返しくり返し、哀嘆してやまなかった。

「――百八の悪星とは、つまり熒惑星のことです。この宇宙幾万年、太陽の周りには、億兆の星が、行儀よくめぐっていて、かりそめにもその法則をみだすことはありません。――が、熒惑星という奴は、例外です。常軌を行かず、申しわけに、太陽のまわりに、隠現明滅しているにすぎない。世間、人界の仕組みも、まったくその通りなのです。――それを、あなたさまには、好んで、もとの無軌道へ追ッ返しておしまいなすッた。なんとまあ、人間の業とは、尽きない宿命のものなのか……。思うてもごらんなされ。五代の戦乱に懲りて、あんなにも、世は平和平和と渇望していたのに、その平和も、宋朝数十年、少し長つづきしてくると、もう平和に飽いているような昨今の世相ではおざらぬか。救いがたい人間性と申すべきか、平和の退屈さから、百八の魔星を甦えらせて、ふたたび際限ない乱麻の地上を眼に見たくでもなったものやらと思われますわい。……ああ。やんぬる哉、いくら嘆じてみても、もう追いつきませぬ」

それを聞くと、洪もさすが、戦慄を禁じえず、いくたびも耳をふさぎたくなった。勅使旗を巻いて逃ぐるがごとく帰路につき、やがて、首都開封の汴梁城へもどって、仁宗帝のおん前に拝伏した。

帝は、彼をねぎらわれていった。

「洪信か。長途、大変であったろう。しかし、龍虎山の虚靖大仙は、勅をかしこみ、すぐ鶴に乗って都に見えた。そして、七日七夜の祈祷を行うてくれたため、民間の疫病は、たちまち熄み、都府の市色も明るくなった。げに、天師の功力のあらたかなこと、汝が帰るよりも早かったぞ。洪よ、安心せい」

思いきや、この御諚である。

洪は、ひや汗をかいたが、龍顔の麗しさ、嘘とも思えない。もとより山で魔封を破った過ちなどは、おくびにも復命せず、自邸に退がった後は、ひとり密かに恟々と、身を慎んで、余生を終った。

幸いに、彼が存生中には、たいした事件もなく、世間はいよいよ泰平と無事に狎れ、この間に、宋朝の廟も、仁宗から、英宗、神宗、哲宗と御代四たびの世代りを見た。嘉祐三年以来、いつか三十余年を経たことになる。

……。

――ここに、百八の熒惑星が、封を破って地上に宿命し、やがてその一星一星が人間と化して、かの梁山泊を形成し、ついに宋朝の天下を危うくするという大陸的構想の中国水滸伝は、以上の話を発端として、じつに、この年代から物語られてゆくのである。

それを、日本の史に照らすと、わが朝では、鳥羽、崇徳天皇の下に、不遇な武者どもを代表していた平忠盛や清盛などが、やがての平家時代を招き興そうとしていた時代の晨にあたっている。

東洋の風土、東洋の文物、東洋の人種、すでに遣唐使このかたは、東洋一環の交流もあって、いわば一葦帯水の、遠からぬ大陸であったものの、時運の暗合は、なにか偶然でないものを覚えしめるではないか。

哲宗皇帝の寿隆五年であった。

朝廟のうちには、このところ、不穏なうごきが見えぬでもない。権臣の陰謀だの、皇后を廃して追うなど、咲き熟れた花の腐えが、そろそろ、自然の凋落を急ぐかに思われた。そんな爛熟末期の相は、汴梁東京の満都の子女の風俗にさえ目にあまっていた。

だが、庶民は依然、太平楽だった。何が醸されていようと、宮廷の内事などは、隣家の夫婦喧嘩ほどな興味でもない。

――それよりは、その日、彼らが踵を次いで馳け出して行った先の方が、よほど大変な事件らしかった。

「なんだ、なんだ？　百叩きか」

「そうらしい。笞を食ッて、所払いにされる悪党が、いま、役人に曳かれて行った」

街城の門は、人だかりで、まっ黒だった。

見ると二十五、六歳の遊び人態の男が、刑吏に引きすえられ、一イ二ウ三イ……と数を読む青竹の下に、ビシビシ撲りつけられている。

「やあ、あれは高毬じゃないか」

「おお、ちげえねえ、高毬だ。かわいそうに、高も、とうとう年貢の納めどきに会いやがったぜ」

まだうら若い追放者だが、彼を知らぬ者はないらしい。

無職である。だが、この東京には、親代々からいた旧商家の息子で、姓を高、名を二郎という道楽者。――親に似て、家産は失っても、糸竹の道に長じ、歌えば美声だし、書道、槍術、棒、騎馬、雑芸、何でも器用だった。わけて〝賭け蹴毬〟は名人といわれている。

表向き、狭斜の巷で、幇間（たいこもち）めかした業をやっていたが、喧嘩出入りが好きで、一面、男だて肌な風もある。もちろん、悪事の数々もやって来たろう。その積悪がバレた末、ついに今日のお仕置きの破目となったにちがいない。

――で、さっきから、青竹を振ッて、

「八十っ、八十一っ。……九十っ、百ッ」

と、高の背なかへ、一打ちごとに、数を叫んでいた獄卒が、百をさいごに、ほっと身を退きかけると、

「こらっ、待て。まだ百打は打ッていないぞ。なぜサバを読むか。さては、なんじら皆、追放人の高から、賄賂をもらっておるな」

と、あたりで黙認している刑吏までを、こう叱咤した人がある。それは、禁軍の兵に、棒術の師範をしている王昇という武士で、立会いのためこれへ臨んでいたものだった。

収賄は、刑吏のつねで、その方こそ正しい実収入だとして、悪徳とは考えもせぬ彼らだが、こんな人なかで、白昼、面といわれては、いくら彼らでも立つ瀬はない。そこで、いくら

かの抗弁はこころみたものの、相手は、役職も上だし、禁門の王師範とあっては、役人面の権柄も歯が立たなかった。
「じゃあ、王師範が、よしというまで、叩きましょう。お数えください」
結局、また四十幾つまで、青竹で高の五体を、打ちすえた。
「よしっ、追ッ放せ」
王昇がいうと、初めて、高の縄が解かれた。高毬は、よろめき起った。
街城の門から追われると、四県を所払いされ、再び都の土は踏めない。高は、あちこちミミズ腫れになった肌を撫でながら、いまいましげに、王昇の姿を振りむいた。
「……覚えてろ。棒使いのでくの棒め。てめえの前身だって、まんざら知らねえ高さんじゃねえんだぞ」
かくて彼は、身ひとつ、淮西の商市臨淮（安徽省）へ流れてゆき、土地の顔役の柳世権の部屋で、およそ三、四年ほど、ごろついていた。
そのうちに、天下大赦の令があった。
元々、軽罪なので、高毬も恩典に浴したが、そうなると、矢もたてもなく、東京へ帰りたくなった。が、帰っても、さっそくの職はなし、さて、どうしたものと、柳に相談すると、
「じゃあ、おれの親戚の董へ手紙を書いてやろう。それを持って帰んなさい」
と、いってくれた。
四年ぶりで、高は古巣へ舞い戻った。――さっそく、手紙を持って、城内金梁橋の近くという宛名の人をさがし歩いた。
「ははあ、この店だな、董将士の家は」
構えも立派な薬種問屋である。
主の董に会って、柳の手紙をしめすと、董は彼の前身も問わず、ふたつ返事で、のみ込んだ。
「そうですかい。四年も臨淮においでなすっては、生れ故郷の王城でもご不案内におなんなすったはむりもない。てまえどもは、商売がら、諸方の官家へもお出入りしておりますから、そのうち、なんぞお勤め口でも心がけましょう。ま、ごゆっくりなすって下さい」
高は、好意を謝して、半月ほど逗留していた。その間に、彼の多芸や才気煥発な質を見たものか、ある日、董が紹介状を書いて、
「どうです。いつまで、遊んでるのももったいないでしょう。ひとつ、これを持って、てまえの極くお親しくしている学士さまの所へ行ってみませんか」
「いやありがとう。職につけるものなら、ぜいたくは申しませんよ」
高は、小蘇学士の門をたたいた。
だが、この学究は、ちょっと、眉をひそめた。学者暮らしは楽でない。わけて、話しこんでみると、自分とは肌合いの違う人間でもある。――といって、義理のある董の依頼では、断りもならず、といった顔つきで、
「むむ。まあ今夜は、邸へお泊んなさい。そして何だな、明日、わしが紹介して進ぜるから、王晋卿さまのお館へでも一つ伺ってみるんだな。先ごろ、ご近習の気のきいたのが一人

欲しいようなことを仰っしゃっていたから、御辺の運がよければ、多分、採用になると思うがね」
すこぶる頼りない口吻だが、ともかく、次の日、高はその王晋卿を訪ねてみた。だが、その華麗な館門の前に立つと、さしも横着者の彼も、二の足をふんでしまった。
ここは宮家である。現天子の婿君で「王大将ノ宮」と、世間でいっているのが、すなわち当の晋卿らしい。
「はて、どうしよう。小蘇学士め、ていよく俺を追っ払うため、寄りつけもしないこんな王家へなど、紹介したのかもしれねえぞ。……ええ、ままよ。物事は当って砕けろだ」
持ち前の度胸をすえて、高は、ずかずかと門内へ進み、わざと咎められるのを待った。そして番士に捕えられ、やがて出て来た公卿侍へ、蘇学士の書状を手渡して、ことばすずやかに、こう告げた。
「決して、怪しい者ではありません。職を求めに伺った者で、職能には自信があります。ご採否にかかわりなく、なにとぞご試験をたまわりますよう、よろしくお取次ぎを仰ぎます」
折ふし、大将ノ宮は、奥まった閣の内で、この春の日をしょざいもなく、生欠伸をもよおしていらっしゃるときだった。これや、高毬の開運の目であったのである。取次の言を聞き、また、小蘇学士が、心にもなく認めた一書を見ると、
「ふウん。そりゃ面白そうな書生じゃないか。なに、書生とも見えぬと。……ま、どちらでもよろしい。退屈しのぎじゃ、ひとつ会って、試験してやろう。まろ自身、その人物を見てくれる。これへ伴れてこい」
と、横たわっていた美しい榻（細長い床几）から身を起して、冠の纓（ひも）を、ちょっと正した。

二　毬使いの幸運は九天に昇り、風流皇帝の徽宗に会うこと

世の才子肌にも、とかく鼻につく小才子風と、ことば少ない誠実型との、ふたつがある。
高毬ほどな男とて、そのへんの挙止はさだめし心得ていたことだろう。王大将ノ宮から直々の試問をうけても、彼は、自己の才をすぐ喋々とひけらかすようなまねはしなかった。あくまで初心で謹直な好青年のごとく、初対面の貴人へ印象づけた。
「なるほど、小蘇学士の吹挙だけあって、この書生なら、当家の近習に加えても恥しくはないな」
王大将ノ宮は、高を一見されるや、すっかり気に入ってしまったらしい。侍臣の列をかえりみては、
「どうだな。おまえたちはどう思う。この男、なかなかよい人相をしているではないか」
などと品評したりして、即座に、お召抱えと、事はきまった。
こうして、市井の一放浪児にすぎない高毬は、はしなくも現天子の駙馬（天子の婿たる人の官名）王晋卿の館に仕える身とはなった。
まことに〝犬も歩けば棒にあたる〟みたいな幸運というほかはない。しかし、幸運に会しても、よくその幸運を生涯に活かしえない者はいくらもある。その点、彼は以後、水をえた

魚のようなものだった。つつんでいた才気は徐々に鋭鋒をあらわし、その多芸な技能は、やがて王大将のおそばには、なくてならない寵臣の一名となっていた。

そしてこの頃から、名も、高俅とあらためた。毬の毛偏をとって、彳偏の俅に代えたのである。

そのうち、ある年のこと。――当主、王駙馬の誕生祝いとあって、ここの亭館には、華麗な車駕が門に市をなした。花の楼台には、楽手や歌姫がならび、玻璃銀盤の卓には、珍味が盛り飾られて、朝野の貴紳があらゆる盛装を競ッていた。中でも、一きわ目につく貴公子は、どういう身分のお人なのか、

「九ノ宮、九ノ宮」

と、宴の上座にあがめられた。そして王大将の家族や来賓の男女から、下へもおかぬ侍きをうけつつ、琥珀のさかずきに紫府の名酒が注がれるたび、しきりに、酔をすすめられている様子だった。

その上、この君の眉目の麗しさは、金瓶の花も、玉盤の仙桃の匂いも、色を失うほどであった。だから、やがてのこと。教坊府の妓女たちが、演舞の余興をすまし終ると、たちまち、彼女らの紅裙翠袖は、この貴公子のまわりへ争って寄りたかり、

「ま、端王さま。いつになく、お澄ましでいらっしゃいますこと」

「今日はご主客でしょうが、なにもそんなにまで、よそ行き顔をなさらないでも、およろしいでしょう。もすこし、お過ごしあそばしませな」

などと、牡丹をめぐる蝶のように、戯れかかった。

「ははは。そうかね。そんなに澄まして見えるかなあ」

九ノ宮の端王は、上品な苦笑のうちに、ほどよく群蝶の攻勢をあしらッておいでになる。だが、日頃の行状には、ずいぶん弱味がおありとみえて、彼女らの口封じには、ひと骨折られたご容子だった。それをまた、陪席の来賓はみな、おかしげに眺め合って、しばしば、楽堂の胡弓や笙の音も、耳に忘れるばかりな歓声だった。

誕生祝賀の日から、まもない後のことである。

「高俅。――この贈り物をたずさえて、九ノ宮の御所へ、ちょっとお伺いしてまいれ」

王大将のいいつけで、彼はその日、端王の御所へ、使者として向けられた。

もとより、高俅は、何もかも、わきまえている。

過日の誕生祝いの折、端王が休息された書院で、ふとお目にとまった文房具がある。玉の龍刻の筆筒と、獅子の文鎮とであった。

「――そんなにお気に召したのなら、後日、お届けさせましょう」と、王大将がそのさい端王へお約束していたのを、高俅は側で聞いていたのである。

贈り物とは、その二た品に違いない。高俅は、この日の使いに、何か、会いがたき機会にめぐまれた思いと、晴れがましさを抱いて行った。

なにしろ、端王と申しあげる君は、先帝の第十一皇子で、今上哲宗皇帝の弟君にあたられ、東宮（皇太子）のご待遇を

も受けておられるお方なのだ。いや、高俅が内々、この君へ傾倒していたわけは、教坊の妓女たちが、あんなに騒いだのを見てもわかる通り、たいへん粋な貴公子だと、かねがね聞いていたからでもあった。

琴棋書画の雅びは、もちろん、管絃の遊び、蹴鞠、舞踊、さては儒仏の学問も、つまびらかなうえ、市井の人情にもつうじている風流子であるとは、この開封東京の都で、たれ知らぬ者もない評判なので、彼は、

「なんとか、いちど、とっくりお話をしてみたいものだ。その道にかけての極道百般を、この高俅から聞こえあげたら、かならず又なき者と、お目をかけてくださるに違いないが」

と、こころひそかに、久しいこと、野望していたものだった。

東宮御所は、汴梁城の一郭。つつしんで府門へさしかかると、衛兵が、

「いずれから？」

と、威厳もなかなか他とはちがう。

「王大将のお使いとして、九ノ宮へ奉るおん贈り物をたずさえてまいった者です」

と聞いて、衛兵はすぐ門をひらいてくれた。で、彼は悠々と内へ進んでいったが、さらに中門の侍郎へむかって、訪れを再びした。

中門の役人は、ていちょうに、

「それはご苦労でした。したが唯今、殿下には、おん鞠場へ出て、公卿輩を相手に、蹴まりに興じておられますゆえ、しばらく、その辺でお待ちくださらぬか」

と、いう。

「あ。鞠場でいらせられますか」

鞠とあっては、彼の特技、聞き捨てにならない。

高はつい、つばを呑むような顔して言った。

「蹴鞠は、それがしも、好む道でございますが、よそながらでも、御所のおん鞠場の景を、拝見できぬものでしょうか」

「おやすいこと。ならば、ご案内いたしましょう」

林苑を縫って行き、やがて、明るい広場へ出ると、はや快い鞠の音が耳につく。

いずれも鞠好きな、上流の貴紳や姫君や公達ばらに相違ない。広やかな鞠の坪をかこんで、ある一組は、榻や椅子に寄り、ある一群れは芝生に脚を伸ばしたりして、競技を観ているところであった。

高も、そっと、それらの薫袖のなかに立ちまじって、よそながら見物していた。

すると今、一と競技終ったらしく、次のどよめきの後から、端王の姿が〝懸ノ木〟の下に立つのが見えた。――見るからに軽快な鞠装束である。薄紗の唐巾で髪をとどめ、袍（上着）は白地きんらんに紫の繍の華文、袂に飛龍をえがかせ、鳳凰靴（くつ）を足にはいておられる。そして、相手方の備えを見て、

「よいか」

と、いったと思うと、いま、懸りの中央へ、侍者が据えた鞠へむかって、つかつかと進み出られた。

位階に従って、まず高貴な人から、第一を蹴り、以下順々に、二座三座四座と、八本の〝懸ノ木〟に備えている敵手へ蹴渡してゆくのである。さすが、端王の技は、皇族らしくき

れいで、しかも、受けにも渡しにもそつがなかった。
ところが、どうした過ちか、一人の靴先から外れた鞠が、いきなり見物の方へ飛んできた。
「ア。あぶない」
頭上に見舞われた人々は、群れを割って、こけ転んだ。しかし、ちょうど近くにいた高俅は、得たりとばかり跳び寄って、ぽーんと、その鞠をはるか端王の方へ、蹴わたした。
「おっ、見事」
彼方で谺のように声がした。
つづいて、おなじ声のぬしが、高俅の姿に、すぐ目をつけたとみえて、こう呼んでいた。
「いまの鞠を蹴った者。これへまいれ」
「はい」――と、高俅は進み出た。
「なんじか」
「おゆるし下さいませ。日頃、好める技とて、つい場所がらのわきまえも失って」
「いやいや。とがめるのではない。そちが蹴ったいまの手は、毬法十蹋の秘術のうちでも、もっとも難かしい鴛鴦拐の一ト手と見たが」
「さすが、お目が高くていらせられます」
「いったい、そちはどこの何者か」
「王駙馬さまの近習、高俅にござりまする。じつは、主人の御命にて」
と、さっそく、筥の二品を、そこへ供えて、使いのおもむきを申しのべた。――が、端王は、贈り物のそれよりは、むしろ高俅の鞠の妙技に魅せられてしまった様子で、
「よしよし、委細は、後で聞こう。それよりは、そちの技を、もう一ト渡りここで見せい」
と、たって望んだ。
求められるまでもない。高は、千載一遇のときと、思わず頬にのぼる紅を制しきれなかった。けれど、どこまでも謙譲を装って、再々辞退したが、端王のおゆるしがないので、
「では、ほんの素人技の嗜みに過ぎませぬが」
と、中央へすすみ出て、毬十法、ひと通りの型を演じてみせた。
肩技、背技、膝技から、尖飛、搭舞ノ法などと呼ぶ五体十部の基本の上に、八十八法の細かい型があって、飛燕、花車、龍髪、搏浪、呑吐星、などさまざまな秘術もある。――もとより高俅は、その道の達人であるばかりでなく、市井の間漢（定職のない遊び人）だったころは、のべつ賭け毬に憂き身をやつして、高二郎と人は呼ばず、高毬というあだ名で通って来たほどな男なのだ。いわゆる堂上遊びの、甘い芸とは、鍛えがちがう。
端王初め、人々が、
「あな、みごと。神技よ、神技よ」
と、ただただ嘆声のほかなかったのは、当然すぎる当然なことだった。
毬の庭もいつか黄昏れた。やがて、閣廊の灯おぼろなころである。高は、あらためて、端王の御前に召されていた。
奉呈の文房具に、端王が、よろこびを見せたのはいうまでもない。だが、言葉はすぐ、べつなほうへ移ってゆく。

またしても、毬の話なのだった。そして、とつぜん、こうも仰せられた。
「高俅。これからは朝夕に、まろの師となって、そちの妙技を教えてくれい」
「おそれいりまする。貴尊のお方に、師などと仰がれる身ではございませぬが」
「そして、今日以後は、この東宮にいるがよい。もう王駙馬の館へは帰るに及ばん」
「や、それは困ります。私にとっては、大事なご主君。二君には仕えたくございません」
「いや、すでに先刻、王駙馬のおん許へ使いをつかわし、高俅をわが家の臣にゆずッてたまえと、ご諒解を願うてある。駙馬はまろが義兄、いわば一門と申すもの。そちの義心は尊いが、決して、義が欠けるわけではない」
「では、それほどに」
高俅は、感泣にふるえるがごとき姿をした。
かくて彼は、東宮付きの一員となりおわせ、日がたつほど、端王の重用いよいよ深かった。
元来、俗才に富み、諸芸百般通ぜざるなし、という道楽者上がりの高俅が、風流公子とはいえ、世間知らずのお若い東宮に侍いたのであるから、これはいってみれば、彼が得意とする毬を掌の上に乗せたようなものだった。
ところが。
この幸運の毬は、まだまだ、どこまで彼の掌にその幸をもたらしてくることか。
――それから僅か半年後。現皇帝の哲宗が崩御られた。しかるに、じつの皇太子がおわさぬまま、文武百官の廟議は紛々をかさねたすえ、ついに端王を冊立して、天子と仰ぐことにきまった。
じつに人の運はわからぬもの。これぞ、玉清教主微妙道君、宋朝八代の徽宗皇帝とも世の申し奉った君だった。
徽宗は、東宮時代から、すでに風流公子たるの素行が見えていたように、帝位に即いてからも政治には関心が薄かった。
しかし、絵画、音楽、建築、服飾など一面の文化は、このとき一倍の絢爛を咲かせた。徽宗自身も、絵筆をもてば、一流の画家であり、宮中の宣和画院には、当代の名匠が集められた。
また、印刷の術が進み、書籍の版行も普及され、街には、まだ雑劇の揺籃期だが、演劇も現われ、すべて宋朝の特長とする文治政治はこの前後に或る頂点を示したといってよい。
けれど、文治のなかには、王安石一派の急進的な改革論をもつ者と、保守旧法にたてこもる朝臣とが、たえず廟に争っていたので、徽宗の代には、もうその内面に分裂と自解の、ただならぬ危機を孕んでいたのである。――にもかかわらず、徽宗は依然、風流皇帝であった。
道教をもって、国教とし、自分も教主となって、保護につとめた。全国から木石禽獣の珍奇をあつめ、宮殿の工には、民の塗炭もかえりみもしない。当然、苛税、悪役人の横行、そして貧富の差は、いよいよひどく、苦民の怨嗟は、四方にみちてくる。――時運は徐々におだやかでなく、遼を亡ぼした金(満州族)は、やがて太原、燕京を席捲して、ついに開封汴城の都にせまり、徽宗皇帝から妃や太子や皇族までを捕虜とし

て北満の荒野に拉し去った。そして、徽宗はそこで、囚人同様な農耕を強いられ、ついに帝王生活の悲惨な生涯を終えるにいたるのである。

徹夜ノ西風ハ破扉ヲ撼シ
蕭条タル孤屋、一燈微カ
家山、首ヲ回ラセバ三千里
月ハ天南ヲ断チテ、雁ノ飛ブ無シ

これは、北満の配所で、徽宗自身が、皇帝たる自身の末路を詠じた一詩だ。

いや、おもわず、これは余りに、先の先をちと語りすぎた。

徽宗の終り、北宋の崩壊などは、ここでは、まだまだ二十五年も後のことである。水滸伝は一名を北宋水滸伝ともいわれるように、徽宗皇帝治下のそうした庶民世間の胎動をえがいた物語なので、前提として、時勢の大河がどんな時点を流れていたか、それだけを知ればよい。

さて。話を元へ返すとしよう。

――新皇帝の即位とともに、高俅もまた、朝に入って、帝の侍座となったのはいうまでもない。毬はついに九天にまで昇ったわけだ。

そして、帝の重用はいよいよ厚く、彼の上には栄進が待つばかりで、やがて幾年ともたたないうちに、殿帥府ノ大尉（近衛の大将）とまでなりすましてしまった。

ときに、その叙任を見てから早々のことだった。

高俅は、禁門八十万軍の軍簿を検して、部班の諸大将から、旗幟や騎歩兵を点呼するため、これを汴城の大練兵場にあつめたが、その日、彼は、

「はてな」

と、巡閲中の駒をふと止めて、鉄甲燦然と整列している諸将の面々を見つつ、何かいぶかしげな顔をした。

「軍書記」

「はっ」

「おかしいな。もういちど、その花簿（職階の名簿）を読みあげてみい」

「はっ」

随身の一名が、軍奉行から簿を取って、列将の姓氏をふたたび点呼してゆくと、簿名にはありながら、ここには見えない一将があった。

「それみい、一名欠けておるではないか。今日の閲軍に、あるまじき不届きな沙汰」

「何とも恐れいりまする」

「かかる軍紀の弛みが見ゆればこそ、皇帝も特にこの高俅へ重任を命ぜられたものではある。しかるに、出頭の簿へ名をのぼせながら、今日の馬揃えに、姿を見せぬやつがおるとは奇ッ怪千万。そも何者だ、そやつは」

「禁林軍の教頭王進にござりまする」

「兵の師範たる職とあっては、なおゆるし難い。ただちにその者を召捕ってこい」

「いや、王師範は、日頃とて、決して懶惰ではございません。数日前から、何か病中にあるよしで」

「だまれっ。武将たる身が、いささかの病などに、大事な一日を欠くことがあろうか。もしこれが、まことの出陣だったらどうする。察するに、この高俅の就任をよろこばぬものか、

あるいは軍命をかろんじておるものに相違ない。――すぐ行けっ。折りもよし、軍紀振粛の要もある」

高俅は、こう激語して、馬蹄を蹴らせた。そしてすぐ副官や随身将校の騎馬をしたがえて、次の巡閲に移っていた。

三　教頭の王進、追捕をのがれ、母と千里の旅に落ちゆく事

棒鎗術の名人として、王進の名は遠近に高い。

父王昇の代から都軍に仕官し、兵へ武芸を教え、家は城下の一隅にあって、ただ一人の母とともに、何事もなく暮していた。

が、その日、病で寝ていた彼の室へ、

「即座に出頭せよ」

という高俅の厳命が、つたえられた。

迎えに来た兵は、みな日頃の弟子である。否めば、彼らの立場がなかろう。王進は、病床を出て身じたくした。

「母上、ご心配くださいますな。こう起きてしまえば、さほどでもありません。新任の近衛将軍のお怒りはごもっとも。よくおわびいたして戻りますれば」

兵に囲まれて出て行く子を、彼の老母は、憂れわしげに、門の外へ出て見送っていた。

近衛府では、閲軍式も終わって、そのあと、高新将軍の就任祝いの酒が下賜され、営門や幕舎は沸いていた。

「申しわけがございませぬ」

王進は、高俅の前に伏して、こう詫びた。

「ほかならぬ日、病躯を押しても出仕をと存じましたが、何ぶん一人の母が余りにも案じますので、つい親心にほだされて、参列を怠りました。どうぞいかようにもご処分のほどを」

「いうまでもない。この高俅が禁門軍の上に臨むからは、昨のごとき、軍の弛緩は断じてゆるさん。まずもって、汝のような軍を紊す似而非武士から糺すのだ」

「あいや、似而非武士とは、ご過言でしょう。また、軍を紊せりとは、何をもって」

「だまれっ。呼び出せば、こうして、歩いてもこられる体ではないか。それが仮病の証拠でなくてなんだ。また、かかる軍廷において、親の母のと、すぐ泣き落しの口実を構えおるが、そもそも、汝の父親が、前身何者かぐらいなこと、百も承知せぬ高俅ではないのだぞ」

「似而非武士とは、それ故のご放言ですか」

「おおさ。汝の父王昇は、後には、棒術をもって、禁門兵の師範へお取り立てにあずかったが、それ以前は、都の路傍に立って、棒振り技を見物に見せながら薬を売っていた者ではないか。その頃の汝は、薬売りの父のそばで、貧しい銭をかぞえていた小せがれだったわ。……こらっ、王進っ、面を上げろ。いつのまにか、旧きを忘れて、近頃、思い上がっておったな」

「……」

「ははは。二言とないざまは笑止千万だ。やよ、幕僚たち、諸人の見せしめに、こやつをすぐしばり首にしてしまえ」

猛る高俅の前に、人々は王進をかばって、こもごもに、なだめたり、詫びたりした。

「まあ、お待ちください。せっかくのお慶びに、しばり首を見るのも、不吉ではございませぬか」
「罰は罰として、後日、きびしいお沙汰あればよいでしょう。ひとまず、今日のところは、ご猶予ねがわしゅう存じます。満庭の兵も、あのように、みな酔歌して、ご就任を慶しておる時でもありますれば」
「うむ。それも一理はある……」
高俅は、ちょっと、うめいた。自分の慶事である。その就任日に、やはり不吉は見たくなかったらしい。

王進は、一時解かれて、帰ることをゆるされた。
もちろん、家の出入りには、番兵がつき、邸は「沙汰ある日まで」の囹圄だった。
墨のような夜気の真夜半。――王進はそっと室を這い出して、母の枕をゆり起した。
「……母上、ちょっと、お眼をおさまし下さい」
「オオせがれ。そなたも、夜ごと眠れないとみえますね」
「なんの、王進は元来の暢気者ですよ。決して、これしきのことに腐りはしませぬ。けれど、母上のお悩みが察しられますので」
「わたしはいい。わたしのことよりは、どうかおまえ一身の助かる道を考えておくれ」
「ところが、どうもいけません。どう考えても、こんどは高俅に命を召し上げられそうです」
「そなたが死んだら、わたしも生きてはいません。けれど、たくさんな門人衆が、助命の嘆願をして下さるでしょうし、それに何も、死に値するほどな大罪でもないんだから」
「いやいや。ふつうなら、そういえもしましょう。ところが、絶体絶命。この胸へ、どきんと来たことが一つあるのです」
「お、おまえは、まさか、反軍の陰謀などを企らんでいたんじゃないだろうね」
「とんでもない。そんな仔細ではございません。じつは、新しい近衛ノ大将軍高俅とは、どんな人物かと思っていましたら、なんと、彼の口から、私の父王昇のことが言いだされたのです。……はて、堂上人のくせに、父王昇が巷で零落していた時代の姿を知っているのはいぶかしいと……拙者もじっと彼の面体を見てやりました」
「えっ、おまえのお父さんの前身を知っていたのかえ」
「知ってるはずですよ。拙者はまだ子供の頃でしたが、この開封の都で、名うてな道楽者がおりました。そいつは蹴毬の達人で、名も高毬といわれていた野幇間の遊び人。……どうでしょう母上、それが今日の禁林八十万軍の新大将高俅だったのです」
「まあ。そんな、ならず者がかえ」
「……しまったと、拙者はそのとき観念しました。というのは、当時のならず者高毬が、四県追放となって、街門の人中で百叩きになった折、父の王昇は、もう仕官の身でありましたから、刑吏について、立ち会っておりました。すると、街の噂では、そのときの父の処置に、高毬がたいそう父へ怨みをふくみ、いつかはこの仕返しをするぞと、捨て科白を吐いていったとか。もう……十何年も昔のことですが、その記憶がハッと戸胸へきましたので、ああこれはいけないと、即座

に、自分の死が見える気がしたのです」
「せがれよ、どうしようぞ。わたしも亡き良人から、むかし聞いていた覚えはあるが」
「あいや、うろたえ遊ばすな。幸い、一時家に帰されて、母上のお顔を見たので、拙者も、死んでたまるかと、心を持ち直して、一策を案じました。さ、さ……すぐお身支度にかかって下さい。父上からの思い出多い家ですが、邸を捨てて、遠くへ落ちのびましょう」
「だ、だっておまえ、邸の前後には、番兵もいるし、天下のお尋ね者になったら」
「番兵の頭、張と李の二人は、拙者の日頃の門下です。罪の軽くすむように、母上と共に、郊外の御岳の廟へ、祈願をこめに行って、夜明けぬうちに戻るからと頼めば、彼らもきっと、見ぬふりをしてくれるにちがいありません」
老母の分別としても、今は、いちかばちかを賭すしかない。目立つ物は何一つ身につけず、息子の背に負われて、裏門から忍びでた。
番兵頭の李と張は、知らぬ顔して、見のがしてくれた。
――王進は、深夜の底を走って、西華門へかかった。ここにも彼の弟子がいる。わけを偽って、通してもらい、そのうえ一頭の馬を借りて母を乗せて、自分もその鞍尻に跨がった。
「ああうまくいった。母上、もう大丈夫です。まだ、追手も見えません」
「けれど、おまえ、これから何処をさして？」
「延安ノ府（陝西省）へまいりましょう」
「え、陝西の延安へ」
「そうです。あそこの府境の城に、経略（城代の官名）として国防の任に当っているお人は、老種と申されますが、その部下には、都で拙者が棒鎗を教えた者がたくさんおります。それに種その人とも、よく文通などもしている仲ですから」
「さぞ、遠くであろうの。延安の空は」
「黄河の西、長安の古都の北、なにせい、旅はやさしくはありません。ご辛抱くださいませ」
「おお、どんな難儀とて、わが子と二人なら、忍べぬことはない」
「この王進も、母上を抱いているのが、百人力のここちです」
逃亡の旅は、風に追わるる如く、野に伏し山に伏して、かさねられてゆく。
まだ、駅路も都から遠くないうちは、その後、高俅の激怒が、官布となって、諸道国々の守護へたいし、罪人王進の逮捕を督すこと頻りであるとも聞えていた。しかし、やがて大陸の渺々たる野路山路は、いつか、旅の母子に、後ろの不安も、思い出せぬほどな遠くにしていた。
「……さて、日も暮れたが、ここは何という村か」
王進は、トボトボと疲れを見せてきた馬をあやして、あちこち、宿をさがし求めた。
「どうも、旅籠はないようですな、母上。あそこの柳圃の奥に、四方築土の門が見えますが、ひとつ、あそこへでも宿をたのんでみましょうか」
「村の大庄屋さまらしいが」
「かまいませんよ。私におまかせ下さい」
柳の一樹に、母の駒をあずけ、王進は門へ入って、一夜の

宿をたのんだ。
「お。……えらい荘院（御大家）だな」
よほど、由緒ある旧家とみえる。
背後の岡には、草堂風な一宇が見え、道は楊柳を縫うて隠れ、渓水は落ちて、荘院の庭に一碧の鏡をたたえている。
水に臨んでは、母屋の亭館が建ちならび、山に倚っては、主の書楼が、窓を放って、いましがた、灯を挑げたらしく、新鮮なまたたきを見せていた。
――取次の童は、奥へ入ったまま、なかなか出てこない。遠くに、たくさんな牛の鳴き声がするし、釜屋や下男の長屋には、炊の煙がさかんで、何百人もの傭人が、がやがやいっているようでもある。いわゆる、負傭鶏犬も食に飽き、富戸は子孫に足り、書庫には万巻の書を蔵す、といったような趣があった。
「……旅のお人。お待たせしました。さあ、どうぞ」
出てきた小僕の姿に。
「や。お泊め下さるとか」
「はい。おあるじへ、老母をつれて行き暮れた旅人ですと、申しあげたら、それはさぞかしお困りであろうと」
「かたじけない。では、ご好意にあまえて」
王進は、外へ馳け出して、すぐ母の手をひいてきた。小僕は、親切に、
「馬は、そのままにしておかっしゃれ。おらが、飼糧をやっておくから」
家の者、みな、その小僕のように、あたたかであった。
湯浴み、食事なども、終ってから、王進は、荘主の太公に会った。折れ頭巾をかぶり、白髯は膝にたれ、道服に似たものを着、柔かそうな革靴をはいている。
「延安へ行かっしゃるお商人と聞いたが、ご老母づれではたいへんじゃな」
「いや、都ではすっかり資本を失いましたので」
「ははは。宿賃がないというご心配じゃろ。それくらいなら泊めはせん」
「あつかましゅうございますが、どうも年よりを連れては、野宿もなりかねまして」
「遠慮はない。家も広い。こよいはご老母にも、ゆっくり手足を伸ばさせてあげるがよい」
しばらく、さりげない話に過ごした。しかし、やがて退きさがってゆく王進の物腰を、あるじの太公は、雪の眉から、何やらじっと、見送っていた。
翌朝。――太公は好きな茶を煮て、王進を待っていた。が、いつまでも、起き出てこないので、自身、房へ行ってみると、王進の母が、ゆうべ夜半から持病をおこして、今朝もまだ、子の介抱にうめきを咏えている様子だった。
「なんじゃ、はやく告げて来ればよいに」
太公は、すぐ薬嚢をとりよせて、自身、煎薬を調じてくれた。のみならず、幾日でもここで養生するように――ともいってくれる。
「ご恩は、忘れませぬ」
七日ほどたった。持病もおさまり、母の顔いろもよくなった。で、今朝は早くここを立とうと、王進は、自分の馬を、厩のほうへ見に行った。

すると、まだ早暁の靄、みどりの露、肺の中まで青々と染まりそうな柳ばやしのうちで、えいッ、おうッと、誰やらさかんな気合いを発している者がある。
王進は、ふと耳を打たれて、振り向いた。そして肉づきのよい真白な壮者の肉体らしい影を、青い靄の中に見た。

年ごろはまだ十八、九か。とにかく、筋骨隆々たる美丈夫である。
もろ肌をぬぎ、顔から半裸身まで、流れる汗にうるおされ、その汗までが美しい。
さらに、王進が眼をみはったのは、その真白な半裸に画かれている刺青だった。九ツの龍が汗に光って肌から浮くばかりに見える。そして、その若者の手には、長やかな樫の棒が持たれていた。棒はぶんぶん鳴って、彼自体の前後を、まるで車のように旋回して舞う。
「……ははあ、棒術をやっておるな」
わが道なので、王進は、しおらしさよと、思わずこなたで微笑していた。
すると、気がついたとみえ、ふと棒の手をやめた若者は、
「おい、人の芸を見て、なにを笑うんだ」
「いや、あざけりはしない。なかなかやるものだと、感心して眺めていたばかり……」
「なに。なかなかやるもンだって。きいた風な口をきくじゃねえか」
「ま、怒ンなさるな。お若いからむりもない。もすこし見物しようじゃありませんか」
「ふざけるな。おれの棒術は見せ物じゃない。おつなことをいうからには、てめえも多少の心得はあるんだろう。さ、叩きのめすから、受けてみろ。受け損じたら、命はねえぞ」
「これは迷惑。お気にさわったのなら、平に平に」
「いけねえ、いけねえ。その頬ゲタか肋骨の二、三本も、ぶち砕かねえうちは、おれの虫がおさまるものか」
ところへ、あるじの太公の声がした。
「これっ、史進っ。お客人に何をする」
「あ。親父さまか」
「ひかえろ」と、太公は息子を叱って――「客人。……どうも伜めが、とんだご無礼をいたしましたが、このとおりな田舎育ちじゃ、ま、堪忍してやってくだされい」
「いやご主人、こちらも悪かったのですよ。若いお人が一心不乱に、気を研いでいるものを、思わずニヤニヤしたりしたものですから」
「これも、何かのご縁というものじゃろう。ひとつ、この伜への置き土産に、棒術の一手なと、お教えして下さらんかの」
「めっそうもない。てまえは、しがない落魄れ商人、棒術などは」
「いやいや、わしにはあなたの五体のうちに、何かご一芸があるものと見える」
「よしなよ、父さん。買いかぶるのは」
史進とよばれた若者は、父の前から、いきなり王進の胸をつき飛ばして罵った。
「おやじは今、おかしなことをいったが、おれは、てめえみたいな旅烏にご教授をねがうの、ご一芸がおありでなんてこ

とは、おくびにもいわねえぞ。さ、そんな土性骨か、食わせ者か、試してやるから受けてみろ」
跳び退いたのは、構えを作るためだった。いきなり彼の棒は、右手と一本のものとなって、ぶんっと、王進の首のつけ根へ落ちてきた。
どう取ったのか、王進は彼の棒の一端を、左の腋の下にしっかと挟み込んで、
「おあるじ。よろしいですか」
と、太公の顔を見て笑った。
「よろしいとも。うんと、こらしてくだされい。鳥なき里の蝙蝠とかで、自分以上な者はないと、何ともかとも、手のつけられん小伜じゃ。ひとつその増上慢の鼻を、折ッぴしょッてくだされば、いっそ、当人には倖せというもんじゃろ」
「承知しました。親御のお頼みとあれば」
聞くと、史進は、
「なにをっ」
と、全身九ツの龍に、ぱっと血を与えたような色を、みなぎらせた。
が、もとより田舎仕込みの武技だ。たとえこの若者の肉体と血気に、どんな精根があろうと、王進の眼には、児戯にひとしいものだったのは、いうまでもない。
一振一撥、また、眼もとまらぬ一撃一突、すべて見事な肉体の空演舞だった。史進は、声を嗄らして、その喉から臓腑を吐かんとするほどに身も疲れてしまった。それでも、まいったとはいわなかったが、あ――と感じるまに、大空が自分の脚の上に見えた。でんと、投げとばされていたのである。
「ち、ちくしょうッ」
起とうとするや、また投げとばされ、すでに手裡になかった棒は、王進の手に移っていた。そして、その棒の先に、九ツの龍の肌は、まるで竹箒に弄ばれる蜘蛛のように、離されては伏せられ、逃げかけては絡みつけられ、果ては、死に絶えたかのごとく、へたばってしまった。
「どなたか、ご子息へ、水を持って来てあげてください」
言いながら、王進は、史進のそばへ寄って、その体を膝に抱えた。そして親の太公を振り仰ぎながら、気のどくそうな顔をした。
「……どうも、ちと図にのッて、お懲らしが過ぎましたなあ。しかし、どこもお怪我はしておりませんから、ご安心を」
「いやなんの。伜めには、よい薬でしたわい」
そうはいうものの、やはり親心か。太公は、われ知らず、額に滲ませていた冷たい汗を、道服の袖でそっと拭いた。そして、
「お客人。あらためて、とくとお話し申したいことがおざる。茶なと煮て、わしの房でお待ちしておりますぞ。おそれいるが、伜めを連れて、あとよりお越しくださらぬか」
と、杖を曳いて、画中の人のように、彼方の書楼へ向って立ち去った。

四　緑林の徒の涙を見て、史進、彼らを再び野へ放つこと

ここの山村は華陰県の県ざかいで史家村とよばれている。

戸数三、四百軒すべてが〝史〟という氏だった。
荘院（庄屋）の太公は、先祖代々、村のたばね役をしていたが、しかし自分もすでに老齢である。一日も早く息子の史進に跡目をゆずッて、隠居したいものと考えている。
そこで、彼はその日、客の教頭王進へ、こんな希望をうちあけた。――かりそめの旅人に過ぎない王進母子へだが、ひとつ伜史進のために、末長く師となって、村に永住してもらえまいかという相談なのだ。
「さあ？　ご好意はまことにかたじけないが」
王進は、答えに窮して。
「今は正直に申しますが、じつは拙者は、ただの旅商人などではありません。つい先頃まで、禁軍八十万の師範役をしていたものですが、新任大将軍高俅と折合いのつかぬことがあって、無断で都門を逃亡し、いわば天下のお尋ね者の身の上です。……せっかくですが、ここにとどまれば、お世話になったご当家へどんな禍いがかからぬ限りもない。それゆえ仰せなれど、その儀は、何ともおひきうけいたしかねる」
「なんのお客人。この年までたくさんな人間を見てきた老人の眼じゃ。はて凡人ではないぐらいなことは、とく感づいておりましたよ。今さら驚きはいたしません。ただただあなた様の人物に傾倒してのお願いなのじゃ。どうぞおきき届けくだされい」
老父の乞いにつれて、そばにいた息子の史進も、いまはまったく自分の独りよがりな棒術の未熟さを覚ったものか、ともども、すがるような眼ざしで引きとめた。
「いや、それほどまでの仰せなれば」
と、ついに王進も、父子の懇請を容れて、その日の出立を見合せ、あらためて、師弟の約を、ここに結んだ。
「この上は不肖ですが、武芸十八般、知るかぎりの技は、ご子息にお授けいたそう。ご子息の名は、史進といわるるか」
「はい。背に九ツの龍の刺青をしているので、人は綽名して、九紋龍史進と私をよんでおります」
「棒術は誰からお習いかの」
「少年の頃、うちの食客（居候）に打虎将李忠という浪人者がおりました。面白半分な稽古が病みつきで、以後、村を通る旅の武芸者や浪人と見れば、片っぱしから当って試合してきましたが、ただの一度だって負けたことなどありゃしません。それが、どうも今日ばかりは」
「ははは、ちと勝手が違ったか。まあよいわさ、まだ十九か二十歳のお身で倖せ、初心に返れば、どうにでも撓め直しはきく」
かくて教頭王進の母子は、そのまま史家村に居着いてしまった。そして史家の嫡男九紋龍一人のために、かつての禁軍八十万の師範王進が、日々手をとって武芸十八般にわたる秘技を指南した。
武技十八というのは。
一に弓、二に弩、三に鎗、四に刀、五に剣、六に鍵矛、七に楯、八に斧、九に鉞、十に戟、十一に鉄鞭、十二に陣簡、十三に棒、十四に分銅鎌、十五に熊手、十六に刺叉、十七に捕縄、十八に白打。
――それからというもの、史家の裏手の柳圃では、必死に教えをうける龍児と師範との「えいっ」「おうっ」の喚きが

聞えない日はなかった。雨の日は、荘院の広床で行われ、夜は夜で、燈火をはさんで兵書を講じる声がする。

若き史進は、めきめき上達をしめし、また何よりは王師範の人柄にも感化された。いや師範の都ばなしだの雑談の端にすら、ただならぬ興味をもって、元来、山家育ちの矇は、ようやく、自分の居るところの程度の低さを知ってきた。そして広い大きな世上へと、自然、その若さは疼きを擡げだしていた。

いつか、一年余の歳月はここに流れた。

王進は、この頃になって、つらつら思う。

「……これはいかん。九紋龍は稀に見る天才児で、わしの武芸十八般の秘奥までよく会得してきたが、しかし親の太公の望みは、史進に名主役の跡目をつがせて、早く老後の安心をえたいとするにあろう。生半可、彼が世上慾に目をひらいて、先祖代々からの庄屋づとめや百姓仕事を嫌いだしたら、かえって、わしの仕込んだ道も、史家にとってはあだになる」

そう思いついたので、ある日のこと。

「長々お世話に相成ったが」――と、彼は急に、身の都合を言いたてて、あるじの太公へ、暇乞いを告げた。

「母が申すには、脚腰の達者なうち、どうしても先にこころざした延安府へ行って暮したいと望んでやみません。ご子息へはもう不肖の武芸はのこりなくご教授申しあげた。……どうぞご一家にはこの先ともごきげんよく」

ふいの別れを述べられて、太公はおどろき、子の史進も悲しんだ。けれど、いかに引きとめても無駄だと知ると、さて惜別の宴には、銀子や餞別の品々を盛って、王進母子に捧げ、かつ出立の日となると、馬や供人をも添えて、関西路へ向う隣県まで、ねんごろに送らせた。

――だが、そのあと。

残された史進は、ぽかんと虚脱に落ちてしまった。たまらない寂寥が彼をして毎日酒にひたらせて行った。いや、さらに大きな空虚は重ねて彼の一身を襲った。その秋、父の太公が、とつぜん病死したのである。

これも手つだってか、彼の放縦は自暴の相を帯びだした。元々、百姓は性に合わないといっている彼なのだ。家事はいよいよかえりみもしない。その荘院には、つねに百姓らしからぬ無頼のみを寄せ集め、ただ武勇を誇っては、遠近に喧嘩の相手と機会を求めてばかりいた。されば史家村の九紋龍史進といえば、この頃、泣く子も黙る名となっていた。

山波の影は遠く望まれるが、人里からはどの辺かよく見当もつかない彼方だ。ここに、華陰県の山また山の奥、少華山とよぶ一峰がある。

天地は人間のもの、その人間は生きものだ。おれたちがここに山寨をむすんで、こう生きているのに、何の不思議があるか、と誇りでもしているように近づけば、その少華山の山腹にも、さかんな人煙人語があるのであった。

「おい楊春。どうもこの頃は、さっぱりじゃねえか。……陳達はまだ岩窟の中で寝こけているのか」

「そうらしいて。なんでも奴あ三日ほど前から、蒲城県の方へ降りていって、何かうまい仕事はねえかと、狼のように嗅

ぎ歩いたっていうんだが、ゆうべおそく手ぶらで帰ってきやがった。よくよく下界も飢饉年らしい」
「そうじゃあるめえ。おれたち山寨の六、七百人もが、ついこの春までは、下界の貢ぎで悠々と王者みてえに食ッてられた世間じゃねえか。それが昨日今日、急に酒や肉にも干あがるてえなあ、ふしぎだよ」
「陳達もぼやいていたが、どう考えても、こいつあ、やっぱり華陰県の県城で、布令を廻しゃあがったせいだろうぜ。なんでも、おれたち三人の頭目の首に、銭三千貫の賞を懸けて、諸所の街道に高札を立て、旅人の夜歩きを禁じたり、土民の自警隊を奨めたりしているそうだから」
「ばかにしてやがら。そんな金が役署にあるならその金をこっちへそのままよこすがいい。半年ぐらいは山を出ずに、大人しくしてやるものをよ。はははは」
夏ながら山は不断の霧が冷たい。巨大な寨の柵門の内には、怪異な男どもの屯やら焚火が諸所にけむっている。中にも岩戸の階、岩穴の一大殿堂をうしろに、酒を酌みあっている一トかたまりがあった。それぞ少華山の山賊七百人の頭目、神機軍師朱武や白花蛇楊 春らの車座だった。
するとなお、岩窟の口から、また一人、
「なんの評議かとおもえば、また芸もなく飲んでいるのか」
大きな伸びをしつつ、のっそりと石階を降りて来た者がある。たった今、二人が噂していた跳澗虎陳達だ。これも三頭目の一人なのはいうまでもない。
「おう陳達か。――芸もなくといわれちゃあ面目ねえなあ。したが、三日も山寨を留守にしたおめえにしろ、やはりなんの土産もなかったじゃねえか」
「ちげえねえ。だが、ちょっと耳よりな土産はあるんだ」
「なんだい、耳よりたあ」
「帰る途中で、兎捕りの李吉っていう猟人を捕ッつかまえて聞いたことだが」
「ははは、かあいそうに、兎の皮はぎを捕まえて、そいつの皮をまたはいだのか」
「ばかいえ。この陳達が、そんなしがねえ猟人や百姓いじめをするものか。お互い三人が義の盃を交わしたとき、第一に誓ったのは、盗賊はしても弱い者泣かせはしまいぞということだった。李吉の手引きで、おれが目ボシをつけたのは、そんなケチな相手じゃねえ」
「ふウむ。猟師の李吉に手引きさせて、どこへ押込みに入ろうというのか」
「史家村の大荘院よ。あの旧家は見かけ以上な物持ちだそうだ」
「兄弟。そいつアよしねえ。史家村ときちゃあ鬼門だろうぜ」
「どうして」
「そこの名主といやあ、九紋龍の家だろう。とんでもねえ話だ。あいつに当って行けるものか。しかも県城の役署からおれたちの首に三千貫の賞金が懸っていることも承知だろうし、手具脛ひいているものと覚悟もせざアなるめえが」
「ところが、李吉のいうにゃあ、なるほど九紋龍の腕前は、四県無敵ッてえ評判だが、なんたって、旧家のお坊ッちゃんだ。誰でも負けてやりさえすれば客にして、幾日でも泊めておき、酒を飲ませたり餞別をくれたりだから、つまりは浪人

者のいい食いもの。おそらく、ほんとうのとこは旦那芸ぐらいな腕だろうというんだが」
「あてにはなるめえ。李吉が試してみたわけじゃあるめえし」
「うんにゃ、そんなことアべつにしても、この陳達には自信がある。生れ故郷の鄴城では、長鎗の跳澗虎といわれたおれだ。二十歳そこそこの青二才に、おれたち少華山の三頭目が、恐れをなしているといわれるのも我慢がならねえ。まして金持ちの荘院じゃねえか。なんで指を咥えていられるものか」
陳達は豪語してやまなかった。朱武と楊春が、止めれば止めるほど、意地にもなって、
「よし、それじゃあ、おれ一人でもやってみせる。おめえたち兄弟は、酒でもくらっているがいいや」
とばかり、即刻、二百ほどの手下に、出触れを廻し、自分も戦陣へでも臨むような身支度にとりかかった。
そのいでたちを見るに、緋房のついた鉢兜、鋳物綴りの鍍金の甲、下には古物ながら蜀江の袖をちらつかせ、半月形の革靴をはいた。そして、組糸の腰帯に、刃幅の広い大剣を横たえ、山路に馴れた白馬のくらにりゅうとして乗りそびえた姿は、さすが少華山の賊将、われから豪語したほどなものはある。
手にかいこんだ長鎗を、一振り横に振って、西の麓を穂先で指し、
「さあ、山を降りるまに、日が暮れよう。男と思う奴らは、おれにつづけ」
二百ぢかい手下が、銅鑼や太鼓を鳴らし、柵門で一度、わあっと気勢をあげた。そしてたちまち、一列の黒蛇となって麓の方へ沈んでいった。
「あぶねえもンだな。どうも近頃、陳達は少しあせり気味だぜ」
「三人の中では一番の年上だ。自分でも頭目ちゅうの頭目と任じているんで、ここンところの山寨のさびれを見ちゃあ、じっとしていられねえような気なんだろうよ」
「そうだとしたら、イヤなんとも、足も心も進まねえ相手だが、おれたち二人も、こうしちゃいられまいぜ」
朱武は元、定遠州の生れ、戦う場合は、よく両刀を使うが、得意はむしろ兵法と謀略にあるとは、彼自身がいうところだった。
また白花蛇楊春は、蒲州解良の人、大桿刀の達人だった。腰は細く、臂は長く、綽名のごとき妖蛇の感じのする白面青気の男である。
さきの陳達といいこの二者といい、いずれも元は江湖の処士や良民だった者だろう。しかし宋朝の治、徽宗帝の奢り、ようやくその紊れやら腐敗を世路の辻々にまでただらしてきたので、いずれも正業に生きる馬鹿らしさを思って、野性の自由をほしいままに、この少華山などへ緑林（盗賊）の巣を構えたものにちがいない。
一刻おいて、この二頭目もまた、大勢の手下をつれて、史家村へ降って行った。行くほどに夜は更けてゆき、やがて黒い夜霧の底に、ぼやっと赤い火光が見えだした。史家村の方角に間違いない。楊春は馬をとめ、後ろの朱武の影へよびか

けた。
「やってるぞ。あの火を見ろ。陳達はもう九紋龍の家へ乗りつけている。兄貴の難を見捨ててはおけまい。急ごうぜ」
ところが、まだ麓へも出ないうちに、陳達の小頭や手下どもが、さんざんな態で逃げ走ってきた。
「――どうした？」と訊けば、村には備えがあり、警板や銅鑼を合図に、たちまち、九紋龍の家には小作人や荘戸（村人）の若者輩が、まるでよく訓練された兵隊のように集まってきて、たちまち守りを固めてしまったという。
しかし陳達の指揮下にある賊も、「なんの百姓輩が」と、門へ向って馬群をおめかせ、また脅しの早鉦だの銅鑼を打ち鳴らした。ところが、どうして相手は手強い。矢かぜや投げ火の下で、やがて大乱戦となっていった。そのうち九紋龍自身も打ッて出てきた。そして味方の陳達と一騎打ちになったので、互いに火を降らすことかと思っていると、呆ッ気なく、陳達は長鎗を叩き落され、苦もなく九紋龍のために手捕りにされてしまったというのである。
「ふウむ。強さのほどは察していたが、そんなにも強い九紋龍なのか」
「てんで、おはなしにも何もなりません」
と、手下どもはまったく闘志を失っていう。
けれど、朱武と楊春は、まさかここから逃げ戻れもしない。それこそ山寨七百人の手下の信望は地に墜ちてしまう。といって、最初から九紋龍史進に立ち向えるうぬ惚れもなかったのだ。楊春はその白面を一そう蒼白にして。
「どうする。兄貴」
「こうなっては、どうもこうもない。おれにまかせろ」
朱武が得意とする智略が、何かひらめいたものだろうか。朱武は、たちどころに、手下のすべてに足止めを命じ、自分と楊春の二人だけで、史家村の内へ近づいていった。
すぐ見つけた荘戸の土兵は、二人を取り囲んで門内へしょッ曳いた。――見ると、邸内の広い柳園では、諸所に篝を焚き、まん中の一樹に生け捕ッた陳達を縛りつけて、今しも、それを肴に大ざかもりの最中だった。
「なに、朱武と楊春の二頭目が自分から縄目を望んでこれへ来たと。はてなあ。そいつはどうも眉ツバものだが」
史進は、陶の酒樽に腰かけていた。
鱗革に朱紅の漆やら摺り金箔をかけた甲を着、青錦の戦襖に黄色の深靴をはいていた。そして側には一張りの弓を立て、腰には両刃三尖の八環刀を佩いて、久しぶりな闘争の発汗に会ったためか酒の色か、いかにも快げな眉宇に見える。
「よし。とにかく二人を曳ッ張ってこい。たぶん偽者だろうが、どんな嘘をいうか、聞いてみるのも一興だ。もっと篝火を明るくして、おれの前に引きすえろ」
朱武、楊春の二名をまだ見ぬうちから、彼は充分に疑っていた。もし本ものだったら、これ幸い、三頭目を一ト束ねに首斬って、さらにもう一杯の酒のさかなにするつもりだった。
しかるに彼は、やがて朱武と楊春がこもごも述べたてるのを聞くうち、次第に酒の面をさまし、果ては、涙すらこぼすのだった。――朱武はひとしお言葉に憐れをこめて。
「どうぞ、われわれ両名も、兄貴の陳達とともに縄目として、

県城の役署へつき出してください。聞くならく三名の首には、三千貫の賞がある由。その金をば近郷の窮民へお頒ちくださればなおのこと本望です。……もともと、陳、楊、朱のわれら三名は、賊となるとも義賊たらんと誓い、死ぬ時も一つにと、血をすすって義兄弟の約束をした仲でした。いま兄貴の陳達が捕われた以上は、あとの両名も生きてはいられませぬ。またお手むかいをしてみたところで敵わぬあなた。いざ、どうなりとご処分を」

史進の純情はすっかりそれに打たれたらしい。山賊にもこんな義心があるかと思い、彼らが貧民の味方だというのも、大いに気に入った。かつは太ッ腹な史進なので、その寛度を大勢の荘戸の者の前で示すことも愉快でないことはなかったろう。

「おい、陳達の縄を解いてやれ。そしてこの三人へも杯をやるがいい」

史進は瞬間、声も出ずにいる三人へ、大容にまたいった。

「盗ッ人にも三分の理、仲間同士では義理固いとも聞いたが、そこまで義に厚いのは感心だ。安心しろ。おれは腐れ役人の手先になんぞなるのは生れつき大嫌いだ。賞金なぞは手にもしたくない。さあ一杯飲んで、足もとの明るいうちに少華山へでも何処へでも、とっとと消え失せろ。その代り、この近郷三県で百姓いじめをすると聞いたら、いつなんどき九紋龍が行って、その首をお貰い申すかしれねえぞ」

三人は地に這って、九紋龍を百拝した。あげくに酒と涙を一しょに呑んだ。たとえば恩を知る動物が人の手から放たれでもしたようである。やがて振り返り振り返り、暁まだき史家村から元の少華山へ立ち去った。

五　史進、家郷をすてて渭水へ奔り、魯提轄と街に会うこと

彼らの仲間うちでも〝虎は平伏した餌食は食わぬ〟という諺を知っている。「――九紋龍の度量はそれなんだ」と、楊春も陳達も、朱武も以来すっかり史進に心服してしまった。

史進の方では、そんなことなど、いつか忘れてしまっている。すると或る夜の宵の口、一荷の贈り物を担いだ山賊の手下が、こっそり、史進の屋敷へやってきて、

「ご恩返しというほどな物でもござんせんが、てまえどもの志だけを、どうかお納めなすっておくんなさい。いや申し忘れましたが、山の三頭目からも、くれぐれよろしく申しました」

と置き捨てるように、おいて帰った。

あとで開けてみると、獣皮やら山の物の種々、それに三十両ほどな金ののべ棒も入っている。

史進は笑った。

「なんだか、余り貰い心地がよくねえな。だが、奴らにすれば、精いッぱいな善意だろう。まあいいや。金はまた何かいい折につかってやろう。取ッておけ取ッておけ」

ところがその後も何くれとなく、ちょいちょい山から贈り物が届けられる。時には見事な宝石などもよこした。

史進もまた、こう貰ってばかりいてはと思って、家に伝わる紅錦織を三領の袍に仕立てさせ、脂ののッた美味い羊の

焼肉を大きな盆へいれて、日頃の礼にと、山寨へ届けさせた。
史家の奉公人頭に王四という男がいる。使者にはこの男に作男一人をつけてやった。二人が麓まで行くと、山賊の見張りに捕まった。しかし、
「九紋龍さまのお使いで」
と聞くや、彼らが先に立って、山寨へ案内した。なおまた、朱武たち三頭目も、王四の労をねぎらって、下へもおかない。酒や馳走を出して、
「一日も史進どののご恩は忘れていない」
といったりした。そして、使いの二人へ、帰りがけには十両の銀子をくれた。
史進は、王四の復命をきいて、
「そんなに歓んだか。また、そんなにも、おれのことをいってたのか」
と、これも悪い気はしなかった。
こうして、彼らとのつきあいが深まるにつれ、史進は相手が山賊であるなどという念もなくなっていた。ただ男と男の交わりとしていた。
そのうちに、秋もなかばの頃、史進は月見の宴を思い立った。ひとつ仲秋の名月に酒壺を開いて、あの朱武、楊春、陳達らの三人と、思うさま飲んだり話してみたいものだと考えた。そこでまた、いつもの王四に、招待状を持たせて少華山へやった。
朱武たちが歓んだのはいうまでもない。
「――必ずまいる」
と返書をしたため、それに四、五両の使い賃をのせて、王四へ渡した。そのうえ十碗あまりも酒を飲ませて帰したので、王四もすっかりごきげんになってしまった。
ひょろり、ひょろり、山路を千鳥足で降りてくると、日頃、顔見知りの山賊の手下に出会った。
「……よウ、大将」と王四が抱えこむと、その男も酔っていて、
「やあ、王サマか」と、ヒゲ面をこすってきた。そして漁樵問答ならぬベロンベロン問答の果てである。頭と頭とを絡み合った四本の脚が、またぞろ、麓の居酒屋へよろけ込んだ。
――だいぶ飲んだに違いない。
その晩、相手の男と別れてから、王四は途中の芒原で寝てしまった。事これだけなら、その一睡は無上天国そのものだった。ところが折ふし通りかかった猟人がある。これなん兎捕りの李吉で、さきに陳達を手引きして史進を襲わせたのもこの男だ。そのことでは思うつぼも外れてしまい、以来、村人からは白眼視されていたが、もともと狐狸以上な狡さを持つ李吉だった。今も今とて、蹴つまずいたとたんに、
「おやおや、こいつあ、史進の家の王四だぞ。はてな？」
酒臭い正体なしの体へ寄って、親切ごかしに胴巻を撫で探っていた。すると銀子と手紙が手に触れたらしい。李吉は狐のような眼をくばった。
――翌朝。李吉がその手紙を持って、県城の役署へ密訴に馳けこんでいたころ、一方の王四は、ひどく冴えない顔つきで、主人史進の前で、復命していた。
「行ってまいりました。――ご芳志にあまえて、ぜひ参上い

たします、という三頭目のご返辞でございました」
「いま帰ったのか王四。たいそう遅かったじゃないか」
「どうもその、つい山寨でご馳走になっちまいましたので」
「酒を出されると目がねえンだろう。まあいいや、それよりも早く調理場へ行って、あしたの料理の支度やら倉の中の器物などを出させておけ」
次の日は仲秋節。――史家の小作や奉公人は、昼から莚席の支度に忙しかった。羊を屠り鵞や鶏をつぶすこと、何十羽かわからない。前日から煮きこめた百珍の料理は銀盤に盛られ、酒も家蔵の吟醸を幾壺となく持ち出して、客の前において封を切るばかりに用意していた。
――ほどなく、朱武、陳達、楊春の三人は、かねて史進から贈られた紅錦の袍を具足の下に着て、時刻たがえずやってきた。
接待は土地の壮者や村娘たちである。史進は、上座に三名をすえて、
「おお、よくぞお越しくだすった。昔から好漢は好漢を知るという。月もよし、桂の花影、ひとつ今夜は、心ゆくまで語ろうじゃありませんか。さあどうぞ、おくつろぎなすッて」
と、盞をあげ合った。更けるほどに、月は冴えを増し、露は珠を桂にちりばめ、主客の歓は尽きるところがない。談笑また談笑の沸くごとに、一壺の酒は空になるやと思われた。
そのうちに、ふと、史進も客の三頭目も、何かヘギョッとしたらしく口をつぐんだ。広い土塀の外を囲んで、潮のような人馬の気配がひしひしとする。耳をすますと、こう聞えた。
「やあ史進、門を開けろ。開けねば蹴破るぞ。この荘院内に、こよい少華山の賊どもが会合しておると、訴人あって明白なのだ。四隣八隅、遁れんとて、遁るる道はない。賊を渡すか、踏み込もうか。いかにいかに」
「さては、訴人があって、県城の捕手が、襲せてきやがったか、花にあらし月に雲だが、こいつアちっと早過ぎる」
史進は、舌打ちして。
「お客人。なにも慌てることはない。しばらく、そのまま飲んでおいでなさい」
彼は酒席から走り出していった。
梯子をかけ、梯子の上から、門外の人馬へ何かどなった。おびただしい松明のいぶりである。十文字鎗、五ツ叉の戈、袖搦みなどの捕物道具、見るからにものものしい。
「おうっ、主の史進か。このほうは県城の県尉であるぞ。汝の手で、賊をからめて突き出せばよし、さもなければ」
「まあまあ、お静かに願おう。せっかく、賊の三頭目を招いて、うまく酔いつぶさせようとしているところへ」
「では、賊と汝とは、同腹ではないと申すか」
「笑わしちゃあいけません。大口を叩くようだが史家村一の旧家、親代々からの大名主だ。山賊ばらとぐるになって、なんの徳があろう。それよりは、三千貫の賞金は下さるでしょうな」
「もとよりそれは公布にあること。ただし即座にここで突き出せばだが」
「だからよ、少し鳴りをひそめて、ここを遠巻きにして待っていておくんなさい。酒を飲ませて奴らを数珠つなぎに引ッ縛

り、そのうえで、ここの門を開けますから」
史進は、もとの宴へ帰ってくると、家人若者に命じて、にわかに、家蔵にある金銀財宝の目ぼしい物をまとめさせ、女子供からそれらの荷物までを、数十人の屈強に担わせた。そして屋後の藁ぶき小屋へ、火をかけろといいつけた。
驚いた三頭目は、
「な、なんでこのお屋敷を焼き払うので？　……まさか、われらを庇うためではございますまいな」
「いや、身の潔白をしめすためだ。こよいの出来事は、まるで貴公たちを罠にかけたようなものだから」
「ご冗談ではない。何が起ろうと、九紋龍どのが罠に陥したなどと思うわれらではありません。おうっ、待ってください、火をかけるのは」
一方へは絶叫しながら、彼らはみずから後ろへ両手を廻し、覚悟のほどを見せて言った。
「かばかり潔いあなたに、山賊渡世のわれらが、おつきあいを願って、こんなご迷惑をかけたかと思えば、手前どもこそ申しわけがない。さあ、年貢の納めどき、われわれに縄打って、県城の役人へ突き出しておくんなさい」
「ばかをいえ。そんなことをしたら、史進一生の男がすたる。おれにそんな真似をしろというのは、おれに乞食をしろというのもおなじだ。……おお火の手はあがった。ともかく、ここは斬りひらいて、一時、おめえたちの山寨へ落ちのびようぜ」
邸内の火を見て、門外の喊声もまたあがった。すでに、史進が鎗を小脇に門の閂を外して躍り出したので、朱武、楊春、陳達らもともに斬ッて出ざるをえなかった。
黒けむりはたちまち疾風雲の翔けるに似、名月は血の色そのまま、剣光の雨と叫喚を下に見ていた。――まもなく掃かるる風葉のごとく、県尉の馬や捕手の群れは逃げ散ッた。
また一方。少華山へさしてヒタ走りに走った人影の列もある。そして、すべてが去った史家村の寂たる暁を、なおまだ、旧家百年の大棟木だの土倉だの四隣の木々は、ひとりバチバチと火をハゼつつ旺な炎を狂わせていた。

おもえばおれも愚かしい。――と史進は自嘲して呟いた。
――先祖はさだめし嘆くだろう。だが持って生れた性分ではしかたもない。あのとき、あの身代よりも、三人の賊に対する一片の義の方が重い気がしたのだから、こんな子を生んだ罪はやっぱり先祖にあるんだ、と。
「……だが、この山寨に、いつまで、なすこともなくいたところで始まらない。そうだ、今は家蔵もない身まま気ままの体、先年お別れした王ご師範を尋ねて、延安府へ行ってみよう」
少華山へ隠れてから約一ト月ほど後のこと。
九紋龍史進は、思い立った胸を三頭目に打ち明けて、
「すまないが、ここへ避難した奉公人や若者は、時をみて正業に返してくれ。持ってきた金銀は、その折り、皆で分けるがいい。おれは、師匠の王進先生を尋ねてこれから関西の旅につく」
もちろん、朱武、陳達らの賊頭も、村の人々も彼との離別を悲しんで、極力とめた。けれど、この流離たるや、そもそ

も史進その人が、生れながらにして百八星中の一星たる宿命だったことによるものだろう。――やがては、芦花散る江頭の船べりに霜の戈をならべ、葭の葉かげに戦艇をしのばすなどの水滸の寨に、かの天罡地煞の諸星を会するにいたる先駆の第一星こそ、まさにこの人だったのである。

――さて、少華山を去って。

飄としてここに旅へ吹かれ出た史進の姿は、いかにも宋朝時代の若人好みな粋づくりだった。

白羊羅紗の角を折った范陽帽子には、薔薇色の纓をひらめかせ、髪締めとしている紺の兜巾にも卵黄の帯飾りをつけている。

あくどい原色は嫌いなのだろう、服地も白麻の裾みじかな戦袍で、紅梅織の打紐を腰帯とし、美しい長剣をつるし、青と白との縞の脚絆という軽快さ。もちろん足拵えは長旅に耐えうる八ツ乳の麻沓だった。

だが、身なりは粋に好んでみても、旅の宿とか食い物は選べもしない。野に伏し山に寝ねだった。それも二十日余りの旅路。ほどなく渭州という一市街についた。

「ははあ、ここにも経略府（外夷の防塞関）の一城があるのだな。ひょっとしたら、王ご師範の消息がわかるかもしれぬ」

歩いてみると、城内も六街三市といった賑やかさだ。雑閙の角に、茶舗が出ている。ずっと入って、床几から、

「おい、おやじ。泡茶でも一杯くれ」

「はい、はい。……お客さまは、旅の衆でいらっしゃいますか」

「そうだ。おやじは知らんか。もと開封東京のお方で、王進師範と仰っしゃる人を尋ねてきたのだが」

「さあ、ここの経略府にも、王氏と名のるお方は幾人もおいでなのでなあ。どの王さんやら、それだけでは、どうも」

すると外から大股に、ぬっと入ってきた壮漢がある。かたぶとりな肉塊を濃緑の緞子の戦袍でくるみ、頭には黒紗の卍頭巾、それには金色の徽章がピカと光っている。

さらに眼の光もただならず、丸ッこい赫ら顔を、もじゃもじゃした髯が取り巻いている。また腰なるは、太原風の帯ヒモとそして金環の飾りある剣。――問うまでもなくこれは軍装である。しかも身長仰ぐばかりであり、腰まわりも普通人の倍にちかい。

「おおこれは、提轄（憲兵）さまで。……ちょうどよい折へ。そこなお客さま。お尋ねのお人とやらのことは、こちらのお方へ訊いてごらんなされませ」

史進は、床几を立って、ていねいに、

「ぶしつけですが、ものをお訊ねいたしますが」

「なんだ。なにかわが輩に用か」

「いえ。私は華州華陰県の者で、史進と申しますが、もしや当地に、もと東京におられた禁軍の師範王進というお方がおいでではございますまいか。或いはまた、なんぞそのお方のお噂でもご承知はありませんか」

「うんにゃ……」と、提轄はヒゲ面を横に振ったが、ぎょろっと見つめて、

「王師範は当所にはおられんが、しかし、あんたは、もしや史家村の史進じゃないのか」

「えっ、どうしてご存知なんで」

「なるほど、聞きしにまさる者だ。貴公のことは、もうかねがね聞いておる。また、お訊ねの王師範も知らんではない」
「失礼ながらご尊名は」
「経略府に勤務する提轄で、姓は魯、名は達」
「魯提轄と仰っしゃるか。いや初対面とも思われない。こりゃどうも」
「そうだ、こんな縁を、かりそめごとにしてはすまん。どうだ、茶ではつまらん。どこぞで一献あげたいと思うが」
「ありがとうございます。しかし王師範は、いったいどこにおいでなので」
「この渭州の守護は、延安府の経略使种閣下のご子息が当っておられる。貴公が会いたがっている王師範は、たしか、种閣下をたずねていったお方だろう。たぶん今でも延安に居るよ」
「そう伺って、ひと安心した。では、おことばに甘えて、お供いたしましょう」
「おやじ」と、魯提轄は、憲兵らしい顔をきかせて「――茶銭はおれにつけておけ」
二人は肩を並べて往来へ出た。
魯達の恰幅も、史進の姿も、行きかう市の群集の中では群を抜いてみえる。
行くこと数百歩、ちょっと歯の抜けたような町中の空地に、何やら真っ黒に見物人がたかっていた。
気まぐれに、二人が人の肩ごしに覗きこんで見ると、どうやら香具師が口上を述べたてているものらしい。
香具師もいろいろだが、ここの空地でシャ嗄れ声を振りしぼッていたのは、三十がらみの痩せ浪人といった風な男。垢びかりした黒い袍に幅広な平帯の房を横に垂れ、反りの強い象牙柄の刀を佩いて、半月靴の足の先をやたらに右や左と交互に刎ね上げ、そして喋る間に水洟をすすッたり、時にはチンと手洟を放って、その雄弁をふるっている。
しきりに、飛躍させているのは、足ばかりではない。左手にも右手にも一本ずつの杖を持ち、言に応じ、気合いに応え、二本の杖を、二本の傘のごとく旋して見せた。
――それから、めッたに大道では公開しない秘術のかずかずを今日はごらんに入れよう――といっているような口上振れの最中だった。
「や、や。こいつあ奇遇だ」
とつぜん、史進が人中で呟いたので、魯提轄はその大きな眼を連れの顔へもどして。
「え、奇遇。あの香具師を、貴公はどこかで知っているのか」
「知ってるどころじゃありません。少年の頃、村で棒の手ほどきをうけた打虎将ノ李忠です」
そのとき、香具師の李忠の方でも、気がついていた。
「やあ、坊っちゃんじゃありませんか」
「やっぱり師匠だったね。何とこれは珍らしいところで」
「師匠なんて呼ばれちゃあ赤面します。お宅さまには長い間、居候していた厄介者の李忠に過ぎない」
魯達が、横から口をはさんだ。
「そんなことあ、どうだっていいや。これから飲みに行く途中だ。貴様もこいよ」
「待ってください。いま見物へ膏薬を配ったところだ。その銭

を集めてから、お供をする」
「なんだい、じれッたいな。効きもせぬ膏薬などを売りつけやがって。早くしろよ」
「まあ待ってくださいよ、こっちは商売、先はお客、そう手ッとり早くはいきません。なンなら、先へ行って下さい。坊っちゃんも、提轄さんも」
「こらっ、見物人ども」と、魯達は、たちどころに憲兵づらを作って。「――横着顔して、すッとぼけるな。はやく香具師へ銭を投げてやらんと、ぶん殴るぞ」
毛の生えている魯達の拳骨を見ては、もうおしまいだ。銭などはビタ一文も降らず、見物の男女は、クモの子みたいに一ぺんに逃げ散ってしまった。

六　晨に唄い女翠蓮を送って、晩霞に魯憲兵も逐電すること

渭州でも街なかの州橋橋畔に、潘飯店という酒楼がある。まず魯達から先に入った。
「こら。空いてるか、二階の卓は」
「オオこれは提轄（憲兵）さまで。よくいらっしゃいました。さ、どうぞ階上へ」
どこへいっても、魯提轄の職権と風貌とでは恐もてときまっている。帳場のあいそもソラ耳に、彼は史進と李忠のふたりを伴って二階へあがり、そこの一卓を繞って、三人鼎のごとき大腰をおろし合った。
「おい。酒を早く出せよ。それから前菜はいうまでもないが、なんでも、美味い料理をどしどし持ってこい」
卓の賑わう間を、お互いに頬杖などして、四壁を見ると、金箔板の聯（柱懸け）に朱を沈めた文字で、

風ハ滞ル柳陰太平ノ酒旗
酒ハホドク佳人ノムネノ縛レ
杏花アマクシテ志イマダシ
シバラク高歌シテ酔郷ニ入ラム

などとある対句が読まれる。
世事の慷慨、他愛もない談笑、三人はすっかりいい機嫌になりいい仲になった。酒も四角（四合入りの酒瓶）を何度卓へ呼んだことやらわからない。――だが時折、魯提轄の神経を針で突ッつくような興醒めが洩れてきた。さっきから、どこかでシクシクいっている女の啜り泣きである。彼はついに持ち前の癇癪を起し、片足で床をどんどんと踏み鳴らしながら呶鳴った。
「やいこらっ。給仕人」
「へい。四角のお代りですか」
「ばか野郎、いくら飲んだって、そばからすぐ醒めてしまうわ。なんだい隣部屋の雨だれみたいなベソベソは」
「どうもその……。あいすみません。お耳ざわりになりましたか」
「あたりまえだ。貴様にだって神経も耳もあるだろうによ。お連れしたわが輩のお客にだって相すまん。女だろ、あの泣き声は」
「酒楼あるきの歌唄いの親娘なんでございますがね」
「ふウん。では貴様が弱い者いじめして泣かせやがったな」

「ご、ご冗談を。……それどころじゃなく、まだ夕方の灯にも間があるしと、隣の部屋で点心（菓子）などをやって宥っておいたんですよ。すぐ追ッ払ってまいりますから」
「待て待て。貴様でさえ可哀そうだと思ってるものを、追ッ払わせて、それでわが輩の酒が美味くなるもんか。連れてこいっ、ここへ」
「かまいませんか。親父付きの娘でございますぜ」
「たわけめ。色気などじゃない」
――油じみた境の帳を割って、やがて連れられてきた歌唄いの父娘を見ると、もちろん夜の町でよく見る貧しげな流シの芸人。おやじは四ツ竹を持ち、娘は胡弓を抱えている。
うす寒げな白の袗衣に、紅羅い裙子の裳を曳き、白粉痩せは、その頬に見えるだけでなく、肩にも弱々しげな翳がある。だが、髪にとめた安翡翠の釵一つが、さして美人でもないこの娘の可憐さを、いとど秋の蝶のように眺めさせた。
「……やりきれんなあ、またここでも泣かれちゃあ。頼むから、泣くのだけはよせ。それよりは、何を悲しむのか、その理由をひとつ訊かせないか」
「はい……」と、娘はやっと、嗚咽から袂を離した。そして、さっきからただ、詫び入るばかりだった老人とともに、
「わたくしたちは、もと開封東京の者でございますが、重い税にくるしめられて、商売もなりたたず、この渭州へ流離うてまいりました。ところが、心あての身寄りも今はいず、旅宿住居のうえに、母も長い病患で亡くなる始末で、もう売る物とて何一つございません。……で、つい人様の口に乗り、さるお方の世話になったのが、そもそもこんな苛責と因果にしばられる間違いだったのでございました」
と、〝街のダニ〟ともいうべき悪辣な男の罠にかかった始末を、ようやく恟々と打ちあけだした。

よくある手で。――途方に暮れていた宿屋住居のこの父娘にも、まるで地獄に仏のような親切者があらわれた。
世の中にはこんな親切なお方もあるものか、と拝むばかりに信じさせておいたところで、男は宿屋の亭主をつかって、妾になれと、半ば脅迫じみた話をもちかけた。ぜひなく身をまかせると、次には、家に入れて家具衣装も揃えてやろうが、それにはお前という者の体に大きな資本をかけることだ。身代金三千貫の証文を書けという。
ところが、身は引取ってくれたものの、本妻というのは老虎のような強い女で、三月ともたたないうちに、その家からいびり出されてしまった。それのみか、衣服一枚くれるでなし、もちろん、先に書かされた証文の金など、鐚一文もくれはしない。
あまっさえ、その後となると、こんどは男が空証文をたてにとって「――先に渡した身代金を返せ」という強談判だ。宿の亭主も事が嘘なのは、百も承知のくせにして、ぐるになってか、高利の日金貸みたいに日々、父娘を責めたてる。しかも父娘はこうして夜な夜な渭州の紅燈街に、儚い四ツ竹と胡弓を合奏せて、露命もほそぼそ凌いでいるありさまなのに、塒に帰れば、稼ぎの七分は、まず鬼の手に搾取されてしまう始末。「……もう死ぬよりほかには」と、つい狭い心につきつめられておりました、と語るのであった。

「……ふウム。ひでえやつがあるものだな。して、おやじさん、おまえの名は。また娘御はお幾ツだえ」
魯提轄は涙もろい。ぼつ然たる憤りの半面では、時々、瞼をぱちぱちさせていた。
「はい、てまえの苗字は、金と申し、娘は翠蓮といって、十九になりまする」
「泊っていなさる宿屋ってえのは」
「東門内の魯家という安旅籠でございますが」
「む。あの魯家か。いや、かんじんなのは、そいつよりも、親切ごかしに人の娘を弄んで、その上にもなお、おめえたちのしがねえ夜稼ぎの小銭まで搾り奪ろうとしている悪どい野郎のほうだった。いったい、そン畜生は、どこのどいつだ？」
「そんなことを喋ると、あとでまた、どんな恐ろしい目に会わされるかしれません」
「ばかアいえ。わが輩は州の提轄（憲兵）で人も知る魯達だ。恐がらんでもいい。わが輩がついている」
「じつは、そのお方というのは、鄭の大旦那さまでございます」
「鄭の大旦那？」
「はい、状元橋の西詰めで、大きな肉舗を構えていらっしゃる関西きッてのお顔ききの……」
「えっ、あの鄭か」と魯提轄は、ベッと唾でもするように唇を鳴らして「――鄭の大旦那なんてご丁寧にいうから、どいつのことかと思ったら、あの豚殺しのデブ野郎だったのか。ようし、わが輩の耳に入った以上、ただではおかん」
魯達は、連れの史進と李忠へ向って。
「お二人とも、ここで飲んでいてくださらんか。一ト走り飛んでいって、その悪党めを一ツうんと懲らしてまいるから」
史進は、彼の短気なのに、呆れ顔だった。
「まあ、明日のことにでもなすったらどうです。せっかく今日は三人邂逅の愉快な鼎座。酒も話もまだこれからなのに」
「なるほど。それもそうか――」魯達はやっと、思い直した態で。「……じゃあ、ここでわが輩が持ち合せの五両を出す。すまないが貴公たちも、この不愍な酒楼芸人のために、一夕の歌でも唄わせたと思って、餞別をやってくれんか。……それを路銀に故郷へ帰してやりたいと思うが」
「おお、よいところへお気がついた」
史進はすぐ十両出した。だが、膏薬売りの李忠には、ちょッと辛い。しぶしぶ二両ほど卓の上へおくのを見て、魯達は爪の先で、それをぽんと弾き返した。
「何だ、吝ッたれやがッて、二両ばかしとは。――まアいいや、爺さん、十五両もありゃあ、宿屋払いをして、あとを路銀に国へ帰れようが。……あれまた、シュクシュク始めやがったぜ。よせやい、湿っぽいのはわが輩、大の禁物だと断っているじゃないか。さあさあ、これを持って今夜は流シも休み、早く宿へ帰って身始末の算段でもしておきねえ。なアに宿の亭主が何と吐かそうと、そんな心配は一切するな。わが輩がまた明朝、宿屋の魯家を覗いてやるからな」
これで、さっぱりしたのだろう。金翠蓮父娘が何度も伏し拝んで立ち去った後も、三人は灯ともる頃まで、快飲していた。そして蹌踉と夜の街へ歩き出ると、やがて四ツ辻で、
「――ではまた、いつか会おうぜ」

と史進、李忠、魯提轄、各〻帰る先へ袂を別った。
翌朝のことである。――魯達はもう例の憲兵服を纏った偉躯を場末町にあらわして、安旅籠の魯家の入口に立っていた。
見ると、軒下の手押し車に、小さい荷梱や食器籠やボロを包んだ一世帯が、積んである。「さては翠蓮父娘が旅立ちの荷物だな」と、何か安心されたのもつかの間で、奥の方から亭主の喚き声につづいて、翠蓮父娘の詫び声やら悲鳴などがガタガタ聞え出した。
「おいっ、金の父娘、なにしとるか。早く出かけろ、出かけろ」
魯達の声を外に聞くと、宿屋の亭主が飛びだしてきて、こんどは彼に食ッてかかった。「翠蓮には貸金の証文がある。その取立てを鄭旦那から依頼されているのに、このまま旅立たれてたまるものか。それともお前さんが代ッて三千貫をここできれいに払うとでもいうンですかい」と、血相もえらい凄文句である。
「ふざけるなッ、きさまも吸血鬼の一匹だな。このヤブ蚊野郎」
靴を高く上げて、彼の胸いたを蹴るや、軽くやったつもりだったが、亭主の体は毬になって三ツ四ツ転がった。
「……ち、畜生っ」と起きあがってくるのを、二度目の靴先が、さらに一蹴を与えると、亭主の影の見失われた溝から黒い泥飛沫がたかくあがった。
「この提轄め、よくも家の旦那を溝に叩ッ込みゃあがったな」
ここに飼われている若い者の一人とみえる。けなげにも薪を持って撲りかかってきた。魯達は身もかわさず、その男のどこかをつかんだ。あッという声が宙をかすめたと思うと、男の体は廂の上に抛り上げられ、廂を破って、どたんと大地へ回ってきた。
「さあ、翠蓮も爺さんも、早く手車を押してここを立て。何をぶるぶる慄えているのか。わが輩がここで見送ってやる。かまわんかまわん、旅へ急げ」
――あと振り返り振り返り、朝霧の中を、渭州の場末から立ち退いていく父娘の姿へ、魯達もちょっと大きな手を振って見せた。そして彼自身はまた、やがて場末の辻から繁華な大通りのほうへ鈍々として歩きだしていた。
「おうっ、大将。いつも繁昌だな。肉の上等なとこを、十斤、賽の目に切ってくれんか」
状元橋の橋だもと。精肉卸売小売と見える大きな店のうちへ、ずっと入っていった魯達は、そこの椅子の一つへ、でんと腰をおろした。そして十人からの店員が立ち働いている肉切り台だの、その後ろに吊ってある沢山な丸裸の豚だの、またそれとよく似ている主人の鄭が何か筆を持って屈みこんでいた帳場の辺までを、ジロと大きな眼で睨めまわした。
「ようっ、これは提轄さまで」と、鄭は彼と見たので如才なく帳場を離れ――「おめずらしいじゃござんせんか。直々の御用なんてえのは」
「ベチャクチャいってくれんでもいい。今日はわが輩の主君、種経略使（種は名、経略は外夷防塞の城主）の若殿のおやしきでご招待があるんだ。脂身などはちッとも交じらんとこを切れよ」

「かしこまりました。ヘイ、賽の目にね。おいよ店の衆、十斤がとこ、極く上々を急いで」
「おっと待て。きさまあ肉屋の主人じゃないか。関西五路の顔役とか何とかいわれて、こんな羽振りと繁昌を見ているのも、当地のご守護種若殿のおひきたてによるものとは思わんか。自分で切れ」
「こいつアおそれ入りました。まったく、こんな時こそ、ひとつせいぜい……」と、鄭はさっそく、自身、肉切り台の前に立った。そして、さすが手練れた大きな肉切り包丁を鮮やかに使って見せ、肉も吟味に吟味して、やっとのこと、
「どうも、お待たせ申しあげました」
と、大きな蓮の葉にくるんで差しだした。魯達は、うなずいて。
「そこへ置け。次には脂身ばかりのとこを、もう十斤」
「へえ。脂身ばかしなんて、何になさるんで」
「よけいな詮索するな。それも賽の目だぞ」
「むずかしいなあ。が、ようがす」
また小半刻もかかって、鄭がこれをも、包んで出すと、今度は豚の軟骨ばかりを十斤、同様に切れと魯達が命じた。
これには鄭も、むっとした顔つきだったが、笑いに紛らして。
「旦那あ、人が悪いや。お嬲ンなすっちゃいけやせんぜ」
「洒落たことをぬかすな。自体、きさまの面は嬲りものにできとるじゃないか」
「何をっ」と、鄭のこめかみに、太い青筋がムラッと燃えあがった。「――おい、もう一ぺんいってみな。州の提轄だと思えばこそ、さっきから虫を怺えていたんだぞ」
「そうか。わが輩もきさまが本性をむきだすのを待っていたんだ。もう一皮むいてみせろ」
いうやいな魯達は、蓮の葉包みの二た包みの肉を、ばっと鄭の顔へ投げつけた。肉の雨を浴びたとたんに、鄭も鋭利な骨削り包丁を持って、肉切り台を躍りこえ、
「うぬ。やりゃあがったな」
一閃、ずんぐり丸い巨体を低めて、魯達のふところへ体当りしてきた。
ぴしゃッと、大きな響きがしたのは、魯達の平手が瞬前に彼の横顔をはたきつけたものらしい。よろっと、泳ぎかけるその弱腰へ、もひとつ、
「今日の相手は、ちと違うぞ。この豚めが」
蹴足をくれて、店先から街上へ吹ッ飛ばした。
鄭は火の玉になって起き上がる。だが、立つやいな魯達の鉄拳に眼じりを一つ見舞われて「げふっ」と奇妙な叫びをもらした。――ところは状元橋の目抜き通り、たちまちまっ黒な見物人の弥次声が周りをつつむ。関西五路の顔役としては、いまさら、逃げもできなかろう。執念ぶかく魯達の大腰にしがみついて離れない。
「ええい街のダニめ。よくも憐れな歌唱いの父娘を、骨の髄までしゃぶりやがったな。この味はその利息だ」
振りほどいて突き上げた鉄拳は、鄭の顎を砕いたとみえ、仰向けにぶったおれた顔は血を噴いて、完全に伸びてしまったようすである。
「ざまア見さらせ」と、魯達はなおも彼の胸いたを踏ンづけ

て見得を切ったが、鄭の反抗はそれきりだった。ひょいと見ると、片眼は眼窩から流れ出し、歯は舌を噛んでいる。「……しまった、こいつはいけねえ、死んじまった」

魯達は、ちょっと後悔の色を見せた。そしてすぐ見物の群れを割って去りかけたが、一顧するや、わざと後ろへこんな捨て言葉を抛った。

「ち。口ほどもねえ空つかいめ。くたばった振りなどしやがって」

――状元橋を渡るやいな、彼の歩速はだんだん早くなっていた。「つい、大変なことをしてしまった。人民の安寧を守る提轄が、人民を撲り殺した。こいつは、ただですむはずはない」と、心中の自責に追ッかけられている風だ。

彼は、自分の下宿へ帰るやいな、そそくさと持ち物や小費銀をふところにし、その月の下宿代だけを部屋に残して、ぷいとどこへやら飛びだした。手には一振の棒をかいこみ、斉天大聖孫悟空が、雲を翔けるにさながらの態だった。

時もあらせず同日の午後には、州の王観察なる役人が、同心捕手あまたを連れてここの下宿屋へ殺到したが、すでに魯提轄は風を食らってしまったあと。

さはいえ五路の顔役、鄭の遺族や乾分には財力もある暴力もある。また旅籠の魯家からも、同時に大げさな訴えが州役署へ出されていた。当然、府尹もこれは捨ておけなかった。

――逃亡した提轄魯達にたいしては、天下の随所、いついかなる土地なりと、見つけ次第に逮捕処分構いなし、の令が出された。わけて特徴いちじるしい彼の風貌背丈などの詳細な人相書がともに諸県へわたって配付されたのはいうまでもない。

七　蘭花の瞼は恩人に会って涙し、五台山の剃刀は魯を坊主とすること

食う箸には腕力の要がない。豪傑も案外、職を失うと世間に弱い。逐電の後の魯達は、野に伏し山に寝ね、今は、空き腹も馴れッ子のような姿だった。

漂泊うことも幾月か。彼の姿はほどなくここ代州雁門県（山西省北部）の街中に見出される。街は周八支里の城壁にめぐらされ、雁門山に拠る雁門関は、つねに、北狄の侵略にそなえていた。しかも古来たびたび、匈奴の南下に侵された歴史の古い痕跡は、今とて、どこかここの繁華に哀しい陰翳を消していない。

「おや、ここでもまた、掲示に人だかりがしてやがる。この辺まで落ちてくれば、もう、よもやと思っていたのになあ」

辻の人混みにまじって、魯達は暢気そうに、逮捕告示と、自分の人相書を眺めていた。

――代州雁門県署、コレヲ告示ス。
渭州ニオケル殺人犯ノ軍籍者、提轄魯達ナル凶徒、コノ地方ニ立廻ラバ即刻、官へ速報スベシ。庇護行為ノ者ハ同罪タルベシ。モシ又、上告ノ善ヲ為スアラバ、即チ、賞一千貫文ヲ降サルル者也

魯達のすぐ耳のそばで、声を出して読んでいる男や、杖の上に白髯の顎を乗せている老翁や、心憶えに筆写している書生風なのや、女や労働者や物売りやら、なんとも雑多な陽溜

りの匂いが蒸れ立っている。
それを他人事みたいな顔で眺めていた魯達は、
「……お、おい。なにをするんだ、なにを」
しきりに、自分の袂を引ッ張る後ろの老爺を振り向いて、眼にかどを立てたが、
「おや、おぬしは翠蓮の」
「しっ。……ま、こちらへ」
老爺は遮二無二、彼を人なき所まで引っ張っていった。そしてさて、大きな吐息を一つあらためてほっとついた。
「さっきから、よう似たお方と見ていたら、やはり恩人の魯達さまでございましたな。てもまあ、なんたる大胆な……」
「おや金の爺さんだったのか。こいつあ意外だ。故郷へ帰ったものとばかり思ってたら」
「じつはあれからの旅路で、この地方の趙と仰っしゃる分限者に行き会い、その方のお情けに囲われて、今では娘の翠蓮も、この土地で一戸を持っておりますので」
「オイオイ。また口のうまい豚野郎に、ころりといかれているんじゃないか」
「いえもう恩人さま。その人は鄭などと違って真面目なお方。翠蓮もあなたのお蔭だと朝夕口癖のように申しております。何よりは今の暮しを見ていただくのが一番。さ、どうぞおいでくださいまし」
「ど、どこへ連れていくんだわが輩を。……なに妾宅。そいつア苦手だナ」
「ま、そう仰っしゃらずに」と、金老爺は無理に娘の家へ伴って帰った。それと聞いて、奥から走りでた金翠蓮が、
「まあ。……魯達さま」
と、蘭花の瞼にすぐ涙をうかべ、この零落の恩人を遇するに、細やかな心かぎりを見せたのはいうまでもない。
「ともあれ、お湯浴みでも」
と風呂をすすめ、その間に、下男女中を督して、鮮魚、若鶏、酢の物などの手早い料理、さて杯やら銀の酒瓶やら、盆果、点心（菓子）なども取揃えて、席も卓の上席にあがめ。
「さ、どうぞお一杯。そして心からおくつろぎくださいまして」
「眼が眩みそうなご馳走だな。どうも近頃のわが輩には、もったいない」
「恩人さまに、こんな流浪のお苦しみをかけたのも、思えば全く私ども父娘のためで」
「よしてもらいたいな、いちいち恩人さま恩人さまといわれちゃあ、なんだか酒も美味くなくなるじゃないか」
「はいはい。もう申しませんが、もひとつだけ、いわせていただきます。あれ以来は、紅紙のお牌にお名前をしるし、朝夕お線香を上げて娘と拝んでおりました。ですから今日のご縁も、神仏の巡り合わせと思わずにおられません。のう翠蓮、おまえもこんな欣しいことはあるまい」
「なんといっていいんでしょう。私はもう、何だか、泣けて泣けて……」
「こりゃあいかん。お志は万々うれしいが、翠蓮のシュクシュクだけは、わが輩、ご馳走にいただきかねる」
「ま、ごめんなさい。ほんに涙はお嫌いでございましたのにね。もう欣し泣きもいたしませんから、陽気にお過ごしあそ

ばして」
　ところが、やがて黄昏れ近い頃、戸外でがやがや人騒ぎが聞えだした。風の音にも心をおく身、魯達が窓から下をさし覗くと、手に手に棍棒などを持った若者二、三十人をひき連れて、馬に乗った長者風の一人物が、しきりと妾宅の内外を窺っている。
「来たな」と、でも直覚したのか、魯達が裏屋根へ躍りでようとしたので、金老爺はあわててその腰帯をつかまえた。
「魯達さま、お待ちください。外へ来たのは、翠蓮がお世話になっている趙家のお主でございます。趙の長者も、かねがね娘の話を聞いて、いたくあなたさまの義侠に感じておいでだったのに、なにか勘違いでもなすったに違いございません。ま、ちょっとこの老爺がわけをお告げしてまいりますから」
　あたふたと、金は階下へ馳け下りていった。ほどなく、事は氷解したものとみえ、若者たちは追い返され、趙の長者一名だけが、老爺に伴われて上がってきた。
「ははははは。どうも変な気を廻して、とんだご無礼におよぶところでした。わしが翠蓮を世話しておる趙という者ですが、そこもとがかねて聞きおよぶ魯達どのか」
「いや、お互い危ないところだった。いかにもわが輩が提轄くずれの魯達です。どうもお留守ちゅうにうかがって」
「なんのなんの。事、さように分ったらこれも一つの奇縁。翠蓮、こよいはお前の恩人を交じえて大いに楽しく飲もう。酒肴もすっかり新たにかえるがいい」
　長者の風というか、趙は五十年配だが頗る大容な人柄に見える。あるいは義心の人に報ゆるに義心をもって接しようと努めているのかもわからない。灯は闌けて酒興も酣に入ると、
「どうです、魯達どの。こんな街中では気もゆるせません。ひとつ私の田舎へきて、ゆっくりご逗留なさいませぬか」
「かたじけない。して田舎のお屋敷というのは」
「わずか十里の郊外、七宝村と申す静かなところですが」
「なんらのあてもない身空。甘えるようだが、そいつは一つご厄介をねがおうか」
　この話には、翠蓮父娘もわがことのようによろこんだ。かくて趙の長者と馬を並べて、魯達が山紫水明な七宝村へ入ったのは次の日のことだった。
　長者の邸は富に飽かせたものである。魯達には窮屈なほど下へもおかない。彼の恐縮を、趙は笑って、
「なにもそうお固くなるにはおよびませんよ。四海みな兄弟という言葉がある」
　げにもそうだが、世間はそうではない。余り長居も――と十日目ごろには暇乞いをと思っていると、その晩の酒宴で、趙がこんな相談の口をきりだした。
「へんなおすすめだが、これも宿世の約束ごとやらも知れぬ。……とお考えなすって、ひとつ僧籍にお入りになってみるお気持はありませんか」
「えっ坊主に。……これは驚いた、わが輩に坊主になれと勧めたのは、ご主人、貴公が初めてだな。元来、みじんの仏性もないわが輩に」
「無理にともおすすめできませんが、じつは先日、あなたを

怪しんで、街の若者をかたらい、翠蓮の家の前へ押しかけさせたため、あれが噂の因になって、その後ちらちら油断のならぬ風説を巷で耳にいたします。万一があってはと、私もひそかに自責を覚えておるものですから」

「いや、この上ご迷惑をかけては、魯達こそ申しわけない。すぐにも退散するとしよう」

「いやいや。その前に、いま申した僧侶に転化する生き方もあるということを、ここでご一考なすってみては、どんなものかな。……もしお気があるなら万端の手続き費用、また五花ノ度牒（官印のある僧籍免許状）などもさっそく調えるが」

「いったい、寺入りするといえば、どこの寺へなので」

「ここより三十里彼方に、五台山という名山がある。一山の大道場は文殊院といって、結構壮麗、七堂の伽藍と多宝塔の美は翠色に映え、七百の出家たちの上にある碩学は智真長老といって、私とは兄弟分ともいえる仲でして」

「ほ。なんだか悪くない気もしてくるな」

「しかも、父祖代々からの大檀越でもあり、寺の造立や行事には、寄進はもちろん、なにごとにも座主の相談にあずかっておる次第。ただひとつ、願望として欠けているのは、わが家から有縁の一僧も寺籍に加わっていないことだけです。どうでしょうな、魯達どの」

「やってみるか、ひとつ」

「ははは。やってみるでは困りますがね」

「いや、発心しよう。この辺で魯達も大人しく人なみに返れという亡母亡父のおさとしかも知れん。お願い申すといたしましょう」

彼にとっては一大転機にちがいない。ちょっと淋しげな顔もしたが、話はきまった。

なにかの準備に、数日は要した。さて入寺登山の日となれば、二挺の山轎の荷持ちの男どもが五台山へさしていった。すでに一山の長老や僧衆とも、得度の式、贈物の施入、あとの祝いなど、諸事しめし合せはついている。

轎は山僧大列の中を通って、方丈の前で降り、まず、喫茶一碗の施を拝し裏の井泉で垢穢を洗う。……ほどなく梵鐘いんいんと鳴る中を導師に引かれて、長い廊をうねり曲がり、三尊の灯華おごそかな本堂へ進む。

見ると、一つの禅椅（寺椅子）が空いていたので、魯達は澄ましこんでそれに腰かけた。すると趙の長者は、大いにまごついて、坐りかけた身を起し、禅椅に倚っている魯達のそばへきて、彼の耳へ口をよせてささやいた。

「あなたは、ここへきて出家を願う身、一山の長老と差し向って腰かけたりしてはなりませんよ」

「あ。なるほど」

魯達は後へ退がって、長者の趙とともに、新入生のように立った。

正面には長老、首座、以下順に東西二列となって、紫金紅金の袈裟光りもまばゆく立ち流れて見えたのは、維那、侍者、監寺、都寺、知客、書記らの役僧たちか。――いずれも大きく口を結び、眸を澄まし、見るがごとく、見ぬがごとく、新入りの魯達をひそかに凝視の態だったが、どの顔つきにも「……はてな？」と、いいたげな怪訝りが甲乙なく漂っていた。

そうした心のうちで、誰も彼もが密かに思うらく。「……ど

う眺めても、いかにもぶっそうな人相だな」「あれで出家発心とは？」「……趙檀越のご推薦だが、あの気味わるい居ずまいの不遜さといったらない」「……だが、長老もおひきうけとあれば」などと、声なきものも、自然、並いる姿の目鼻には妙な微風となって現われずにいなかった。だが、どこ風吹くかの魯達は、この森厳さと山冷えに、嚏でも覚えてきたか、しきりと鼻に皺をよせて、鼻をもぐもぐさせていた。

なにを感じ入ってしまったのか、まるで棒を呑んだように魯達は直立のままでいる。趙の長者はふと気づいて、また隣の袂をそッと引っ張って注意をあたえた。

「合掌です……合掌作礼しなければいけませんよ。あなたのために、いよいよ上人さまが、お剃刀の式をとるのですから」

「あ、そうなんで？」

魯達も慌てて掌を合せる。――見れば長老の上人は、払子を払って、やおら禅椅に倚った様子。大香炉は薫々たる龍煙を吐き、この日長者が供えたお香料の銀子、織物、その他の目録にまずうやうやしく敬礼をほどこす。そこで咳一声、魯達が発心による出家得度の願文を高々と読む。

……終ると、香煙の渦の中にある上人の顔は、そのままいつのまにやら定に入ったすがただった。膝に印を結び、趺坐瞑目することしばらく、やがてのこと、何かが憑り移ったようにこういった。

「――善哉、善哉。この漢はこれ、天の一星につらなる宿性。元の心は剛にして直なり。粗暴乱行はしばし軌道を得ざるがためのみ。ゆくゆくは悟りに会って、非凡の往生、必ずや待つあらん。……喝ッ」

とたんに、法鼓がとどろき、再びの梵鐘が鳴ると、二人の稚子僧が進んできて、魯達のかぶっている帽子をとらせ、彼の手をとって上人の法座の下へ、ひざまずかせた。

役僧の維那が、お剃刀を持って立つ。侍者は耳盥を捧げ、都寺は櫛をとって、魯達の髪の毛を九筋に梳いて束ね分ける。……剃刀はジャリジャリと、彼の横びんから頂天の方へお月さまでも描くように剃り上げてゆく。

「……？」

魯達はへんな気持ちである。自分の容貌がどんな珍しいものに変ったろうかと気味わるかった。が、頭が急に寒々と剃り終って、その剃刀が髯のところへくると、彼は慌てた。

「あ。待ってくれい。ここらは、ちッとぐらい残しといておくんなさいよ」

衆僧は、どっと笑う。――それを鎮めるように、法座の智真上人が、大喝で偈をとなえた。

「――寸草留メズ、六根清浄ナリ。汝ノタメ剃ッテ除キ、争競ヲ免ガレ得セシム。……咄ツ、ミナ剃リ落セ」

魯達はもうベソもかけない。ここで首座は、長者に代って九花の度牒を法座にささげ、新発意魯達のために、願わくば〝法名〟を与えたまえと請う。

上人は、おごそかにまた、次の一偈をくだして、度牒を書記にわたし、書記は筆を取って「法名」をそれに書きこむ。偈にいわく。

霊光一点　価値千金
仏法広大　賜名智深

すなわち、新発意の僧名は〝智深〟と名づけられたのだ。
――書記からその度牒を手渡されると、これで彼も形だけは出家並の一人となったわけである。それから、長老は、彼の青いテラテラな頭上へ手をのせて〝戒〟を授けた。
「一に仏法に帰依、二に正法に帰奉、三に師友に帰敬。これを三帰という。……次の五戒とは、殺生、偸盗、邪淫、貪酒、妄語のことじゃ。守るか」
「はい。守ります」
魯智深が答えると、なぜかまわりでまた笑った。禅の宗門では、ただ「応」とか「否」とか一語で答えるのが作法だからで、智深はことごとに顔を赤くするばかりだった。
晩には雲堂で大饗（斎の馳走）が行われた。趙の長者から祝いの品々や心づけが端から端まで配られた。――こうして長者は、翌日、下山にさいして、魯智深を一人、選仏場の木蔭へ呼んで、しんみりと言い残した。
「馴れぬ生活で、初めのほどはお辛いでしょうが、どうかみッしり修行して下さいよ。長老にも、くれぐれお願いしてありますから」
「どうも、えらい厄介になりましたな。が、ご安心してください。もうこの頭では、生れ変って大人しくなるしかありません」
と、彼は青い頭を叩いてみせた。
だが、趙の山轎を見送って、叢林の一房に帰ってくると、彼はもう長者の言も忘れ顔に、ごろりと仰向けに寝ころんでいた。
すると、禅床で修行中の二、三名が覗きにきて。
「おい、新発意。なぜ坐禅でもしないのか」
むくむくと身をもたげると、魯智深の方こそ、なんとも不審そうに、両手で頬杖したままいう。
「三帰のうちにも、五戒の中にも、寝ころんじゃいけないという〝戒〟はなかったぜ」
修行僧は呆れて、首座に訴えたが、首座も手がつけられないとみたか。
「いや、あの方外人は、長老にいわせると、なんでも天の一星の宿性をうけた者とかであるそうな。当分はまあ放ッといてみるしかあるまい」
智深の起居は、まるでところを得た猛獣のようなものである。誰も干渉の仕手がないのをいい気にして、眠れば雷のごときいびき、醒むれば、仏殿の裏、浄林の蔭、ところ嫌わず放尿もするといった態たらく。
――かくて早くも五台山の夏から秋の四、五ヵ月も過ぎ、季は紅葉の燃ゆる晩秋の頃となった。
なんとなく里恋しく、魯智深は墨染の衣に紺の腰帯をむすび、僧鞋を新たにして、ぶらと文殊院から麓道のほうへ降りていった。
「……はてな。こいつはたまらぬぞ。ぷウんと、久しく忘れていた香が、どこからともなく風にのってくるが？」
それは秋草の花の香ならぬ酒の匂いだった。
数歩のうちに、下のほうから一荷の酒桶をかついで登ってくる男が見えた。魯智深は、はからずも巡り会った恋人にでも引かれるように、
「おい、ちょっと待った」

と、男の担い棒へ手をかけて押しとどめた。

八　百花の刺青は紅の肌に燃え、魯和尚の大酔に一山もゆるぐ事

荷担棒の酒桶は、男の肩の両端でブランと揺れた。もちろんフタの隙からこぼれ出た少しの酒が男の膝や地へ沁みこんで芳醇な香をふんだんに放ったのはいうまでもない。

「あっ。も、もったいねえ」

抑えていた棒先の片手をそのままに、魯智深がこぼれた酒を鼻で追っていくような恰好を見せたので、酒屋男はなおぎょっとして怪しんだ。

「な、なんでござんすか、お坊さま。いったいなんの御用でてまえをお留めなすッたんで？」

「酒だろう桶の中は。どうも、たいした酒だな。どこへ持っていくんだ」

「山上の仁王門にご修理がございますので、そこに泊りこみで働いている塗師、瓦師、仏師などの職人方へ売りにいきますんで」

「ふウむ……」と、智深は絶えず鼻うごめかせながら「畜生。うまくやってやがるなあ」

――そこで彼はもう一言、おれにもそれを売ってくれい、と喉の辺までは出しかけたが、ぐっと唾をのむ音をさせて。

「どうも坊主はまことに不便だな。が、まあ……出家の身だ、死んだと思ってあきらめようかい。……やい酒屋」

「へい」

「こぼさずに担いでいけよ。石コロ坂に飲ませたって、坂道がいい色になって嬉しがりはせんぜ」

「どうもご親切さまに」

「ふざけるな、わが輩は泣きてえんだ。いまいましい奴に出ッくわしたわえ。早く行ッちまえ」

眼をつむって、そこは大股に馳け去った。そしてやがてのこと。麓の明媚な風光が展かれてきたと思うと、また下のほうから、いとものどかな鼻唄調子が聞えてきた。

この辺は、漢の高祖が楚の大軍をやぶった古戦場である。またかの有名な項羽と虞美人が最期の悲涙を濡らして相擁した烏江の夜陣のあとも近い。だから附近の牧童や里人も今にそれを俚謡として歌う。

九里山の草木は知ってるとサ、戦場のあとだとサ
おらも拾ったよ、サビ刀、土になった槍
烏江の水は風に捲かれて、アレ見せる
虞姫と項羽の、別れともない身もだえを

「おや、また何か担いできやがったぞ。ほほう。やってくるのはまたぞろ酒屋男だわえ。どうも今日はよくよく運の悪い日とみえるな」

おそらく、うさん臭い大坊主と先に恐れたのだろう、酒屋男は鼻唄をぷつんとやめた。そっとスレ違おうとしたのである。だが、あいにくな山坂である。ばしゃッと桶のうちから少し揺りこぼしたからたまらない。魯智深はぐらっと目眩にくるまれて。

「おッと、と、と、と。……こら待て酒屋、どうも貴様は不量見なやつだな。なぜこぼす」

「ど、どうかご勘弁のほどを。……お法衣でも穢しましたか」
「うんにゃ、さに非ず。穢されたいのだ。その桶の酒をわが輩に売れい」
「めッそうもない。沙門のお方に酒を売るのは御本山の法度なんで、そんなことしたら、てまえはこの土地に住めなくなります」
「かまわん。もう我慢ならぬ」
「かまわんたって、こっちには妻子もおりまする。お売りするわけにゆきません」
「えい、七面倒な」
「あ痛ッ」
軽くやったつもりだが、酒屋男は天秤棒から肩をはずして、もんどり打ッた。
一荷は倒れ、一荷は無事だった。――智深はあわてて倒れた桶から先に救いあげ、また一方も持って、軽いのと重い桶とを、両手に引ッ提げたまま彼方の見晴し台の亭へ走りこんだ。
「ほうれ、値はとらすぞ」
何を投げたのか、腰をさすッている酒屋男のほうへ、物代をほうるが早いか、彼はもう桶のフタをとっていた。そして渇いた巨獣が流れに鼻を沈めるような姿で、がぼ……がぼ……がぼ……。
ぷるん、と時折、首を上げて舌なめずりをし、顔を横に顎の雫を振って切る。
「う、うっ。たまらぬ」
重いほうの桶は、まず片づけた。さすがに少し骨が折れるらしい。
「てへへへ。まだ底に残っておるな。ようしっ」
墨染の法衣を刎ねて、諸肌ぬげば、ぱッと酒気に紅を染めた智深が七尺のりゅうりゅうたる筋肉の背には、渭水の刺青師が百日かけて彫ったという百花鳥のいれずみが、春らんまんを、ここに集めたかのように燃えていた。
「……ううい。ああ、なんとよい眺めだ、絶景絶景。腹の虫も雀踊りしおるわ。……待て待て、まだまいるぞ」
軽いほうの桶の耳を両手でつかんだ。毛の生えている丹田（下腹）がぐうっとそッくり返ったと思うと、桶の中から滝を呑むように飲みだした。もちろん、その何分の一かは、あだかも岩肌を伝う小さい渓水みたいに彼の胸毛や法衣をビシャビシャにして地に吸われている。
「むむ、これで、まずご満足、ご満足――」と、智深はたちまち混沌たる愉快にくるまれてきたらしい。天地万物、すべて我れのためにあるかのような心地とみえる。ふと、ころがッている足もとの酒桶を、つくづくと見すえて、
「……はてさて、貴さまも空ッぽになってみるとつまらんやつだな。智深和尚の引導を、せめてこの世の冥加と思えや。喝ッ」
と、麓へ向って二つとも蹴放った。一個は空天に躍って森へ沈み、一個はすぐ下にいた牛の群れの中に落ちた。びっくりした牛が跳び別れて、やがて後から、のろまな啼き声が長く聞えた。智深は手をたたいてうち笑い、蹌々踉々、どろんこになって、ほどなく五台山へもどってきた。

「ちイ、このなめくじ野郎め、な、な、なんでこの魯智深を、通さんとぬかすのか」
「とんでもない仏弟子だ。こら智深、ここは山門だぞ、山門だぞよ」
「なアるほど、文殊院五台山の山門らしい」
「葷酒山門ニ入ルヲ許サズ。とそこにそんな大きな制札も立ってある。もし破戒飲酒の僧あらば、青竹で四十打ッ叩いて寺域追放の掟だぞ」
「おもしれえ。ちょうど按摩代りになる。おい番僧、いっちょうやってくれい」
ところへ、騒ぎを聞きつけて、監寺、提点、蔵主、浴主などの役僧などから、工事場の諸職まで、まっ黒になって様子を見にきた。たちまち門の番僧らと一つになって、
「やあ言語道断。破戒堕落の外道など、一歩も不浄者を入れることはならんぞ、水でも浴びせろ」
とばかり智深を拒んで、その大きな図ウ体を突きもどし、さらに山門前の石段へ突きころがした。
さあたまらない。「――やったな」と智深は四つン這いになって上を睨めあげた。一段一段、大象のようにゆっくり登ってくる。恐ろしさに役僧どもも職人もタジタジと後退さりした。智深はいよいよおもしろくなった。まるで彼の遊戯のお相手のために大勢そこへ出揃ってきたようなものだった。
「そうれっ。片っ端から摘ンで捨てるぞ」
躍り立つやいな、事実、彼の左右の腕、両の足から、さながら塵芥みたいに人間が刎ね飛んだ。――わあっと逃げるを追って、彼はなお、伽藍、堂院、いたるところで地震のような音響と悲鳴をまき起し、あげくのはて蔵殿の一室へ入ると、大の字なりに寝てしまった。その鼾たるやまた山谷を揺するがごときものであった。
それに呆れているどころか、後の始末やら物議こそまた一と揉めだった。番僧たちは、監寺、提点などを先に立てて、智真長老の座下へ迫った。
「かかる例は、わが文殊院五台山の開山以来ありますまい。霊域に魔獣を飼えとは釈尊の法にも聞きおぼえぬところ。よろしく即時ご追放あッてしかるべょう存じまする」
「まあ、まあ。そういわんで、こんどだけは慈悲の眼で見てやれんかのう」と、智真長老は慰撫一方のていで努めていう。
「――大檀家の趙大人のお顔もあることじゃし、明日ともなれば、わしから智深にきびしく諭戒を加えて、以後きっと、慎ませようで」
囂々たる不平はたいへんなものだったが、長老の鶴の一と声。ぶつぶつ引き退がるしかなかった。
翌朝。――智深はむっくり起きに、蔵堂裏の竹林へ出て、こころよげに放尿していた。そこへ上人のお召しときたので、彼は大慌てに後へついていき、畏る畏るその座下にうずくまった。
「これっ智深。おまえはどうも困ったやつ。察するに病持ちだな」
「いいえ、体はこの通り人一倍丈夫ですが」
「何をいうぞ忘れッぽいという一病があると申すのじゃ。得度のさい授けた五つの戒と、三帰を忘れたの」
「あ。病とはそのことで」

「されば じゃ。昨夜の大酒乱行はそも何事ぞ。山門の清規を破って、あのざまは」
「もう、しません」
「きっとか。以後忘れないか」
「つつしみまする。はい。きっと、つつしみまする」
しおしおと、智深は禅床へ引き退がった。もう人の耳こすりや潮笑にも、めったには怒らないぞと、顔に錠前をかけたような無口に変った。
だが、その年も暮れて、待つに長い山上の春がやっと訪れ初めた翌年の三月初めの頃、智深はぽかんと麓の空を眺めやっていたが、そのうちにふと、トンカン、トンカン、鍛冶屋の鎚音が風にのって聞えてきた。――と、なに思ったか、ありあう銀子をふところにねじこんで、ぷいと僧堂をとびだし、今日は少し道をかえて〝五大福地〟と額にみえる大鳥居をくぐり、東の参道坂をどんどん降りていった。
「おや、こりゃあ何とも賑やかだわえ。こんな聚落があったとは今日までまったく気もつかなかったぞ。あほう、どうしてわが輩はいままで五台山下に門前町があるべきことを思わなかったのか。だがまアいいや、遅いにしても帰命頂礼――」
彼は、にわかにうきうきとあるいた。眼もキョトキョトとせわしなかった。肉屋がある、酒屋がある、女の嬌声、赤ン坊の泣き声、さてはなつかしい大道芸人の音楽だの、古着屋、八百屋、旅人宿、うどん屋の婆アさんまで、かつての日の渭水の場末も思い出されて、どれもこれも悪くない。
「ああやっぱり人間界はいいなあ」
その人間臭い街のなま温いものに久々でくるまれながら、ぼんやり通り過ぎかけて、
「おっと。ここだっけ」
と、一軒の鍛冶屋の土場へのっそりと入った。
山上にまで、テンカン、テンカン、研してきたのはここの鎚音と鉄台の響きにちがいない。手を休めた三人の鍛冶工は、鼻の穴から目ヤニまで炭にした真っ黒けな顔を揃えて、智深の姿を見まもった。いや見上げたというほうが当っている。
「やあ親方、こんちわ。……どうだね、極く質のいいはがねはあるかい」
「へえ、お坊さまに、はがねの御用がございますかね」
「ばかにするな。坊主とはがねと、無縁という法もあるまい。錫杖を一本鍛えてもらいたいんだ。ちょっと、手ごろのな」
「なるほど。ですがお坊ンさん、誂えちゃあお高くつきますぜ。出来合いじゃいかがです」
「ところがわが輩の手に合う出来合い物なんて見たことないので持たなかったのだ。ひとつ急いでこさえてくない。重サ百斤ほどなのを」
「冗談じゃない。百斤なんて錫杖は人間の持ち物にゃありませんぜ。三国時代の豪傑関羽さまの偃月刀だって八十一斤でさ」
「では、関羽公と同格の八十一斤としておこうか」
「へへへへ。無理するこたアありませんぜ。なにもお坊ンさんは、三国の劉備玄徳の忠臣でも親類でもねえんでしょ。およしなさいよ不恰好だから。それより飛びきり上等のはがねがございますから、水磨仕立てで六十二斤ぐらいなところはどうです」

「むむ、その辺で折り合ってやるか。相談はついた。おいいっしょにこんか、親方」
「へ。どちらへでござんす」
「鞴火祝いに、一杯飲ませてやる。どこか馴じみの家へ案内しなよ」
「ま、どうかお気楽にお一人で。――それよりはお坊ンさん。錫杖は五両かかります。どうかお手付の銀でも、ひとつ」
「け。ケチなことをいうな」
なにがしかの小粒銀を投げ与えて、智深はゆらりと鍛冶の軒を煙といっしょに外へでてくる。そして街をぎょろぎょろ見廻した。
酒屋の軒を覗き廻ること二、三軒。どこでも例外なくお断りを食った。そこでついに街はずれまでででてしまい、ふと見ると破れ廂から、酒と書いた旗をだしている一軒がまたあった。立ち寄れば、牛の屎まじりの土墻に、誰のいたずらか〝李白泥酔ノ図〟といったような釘描きの落書がしてある。
「……いや、おもしろい絵だな。いや、おれも一つ、あれくらい酔ってみたい」と、智深は独りごとをもらしながら、内へ入った。
「こら亭主。わが輩は五台山の坊主ではないぞ。だから心配はいらん。酒を一ぱい飲ませてくれ」
「へいへい。どちらからお越しで」
「廻国行脚の途次で通りかけた者。といって乞食坊主でもない。ほうら銀子もある。それ、そこの大碗で早くよこせ」
むさぼるごとくがぶがぶ飲んで、たちまち碗を代えること十数杯。こんどは自分から立っていって薄暗い厨房の調理台にあった兎の股みたいな烙り肉を右手に一本つかみ、それを横へ咥えかけた。
「あっ、雲水さん。そいつあだめです。坊さま向きじゃございませんよ」
「亭主。なぜ止めるのか」
「犬の肉でございますよ。なんぼなんでも」
「なに犬肉だと。いや、よろしい。犬だからとて賤しむことはない。わが輩の腹中はすなわち弥勒だ、猿であろうが鹿であろうが一視平等。豈、差別すべけんやだ、けっこう。いけるじゃないか、おやじ」
にんにく味噌を付けてたちまち骨だけを足もとへ投げ捨て、さらに次の一本を持って、
「肴ばかりじゃしようがないな。おい、そこの瓶ぐるみ持ってきてここへおけ。そいつあ黄米酒だろう。むむ、珍重珍重」
――やがて。陽もすでに黄昏れごろ、智深は、天雲を降りて天雲へ帰るがごとく飄々とひょろけつつ五台山へもどっていく。途中でぶつかりかける男女を見ると、彼らの逃げまどう姿へ、哄笑を撒きちらして。
「わはははは。さあ、智深さまのお通りだぞお通りだぞ。酔いどれには天子さまも道を避けるという諺があるのを知らんか。さあ、退いたり退いたり」

翌朝のことである。――といっても、五台山五峰の西にはまだ影淡き残月が見え、地には颯々の松原がやっと辺りを明るみかけさせて来た頃だった。
「うう寒い。……おや、おやおや。わが輩はどうしてこんな

ところに眠っていたのか」
智深はわれを疑って、むっくりと起きた。寒いはず、石だたみの上で寝ていたらしい。しかも自分が抱いて眠っていたのは、自分の二倍もある巨きな仁王像だった。山門の仁王様に相違ない。
ふと仰ぐと、日ごろ見なれたそこの仁王門は颱風の跡みたいに、見るも無残に破壊されており、もう一体の仁王像も、常に居るところには見えなかった。だんだんそこらが白んでくるにつれて、仁王の手やら首やらまた瓦だの玉垣の破片などが、惨として、智深をつつんでいることがわかった。
すると、そこへ、番僧の一人がきて叫んだ。
「おう智深。やっと眼がさめたか。長老以下が待っておられる。すぐ大講堂の廊までまいれ」
彼はまだ頭がはっきりしないらしい。ふらふらと歩いていった。見ると智真上人以下、大講堂の廊には、常ならぬ威儀で役僧全部で並んでいた。彼を見るやいな、まず都寺が起坐して、
「こら智深、よくうけたまわれ。なんじ、昨夜は、またもや麓にでて飲酒の戒を破って大酔のまま帰山せしのみならず、山門において、例のごとく暴勇をふるい、番僧雑人十数名を殺傷し、あまっさえわが文殊院の至宝たる仁王像を引きずり下ろして微塵となし、それに尿を放って、快を叫ぶなど、沙汰の限りな狼藉の果て、今暁までその場に眠りおったとのこと。――すべて言語道断な次第じゃ。じゃによって、一山大衆の名をもって、上人の裁可を仰ぎ、即刻、わが浄域より追放を申しつくるものである」
と、怒りをふくんで申し渡した。
智深は、半分ぐらいまで、他人事みたいに聞いていたが、自分が当人かと、やっと気づいて、
「えっ。そんなことをしましたか。この智深が」
すると監寺、書記、首座、提点らの役僧も一せいに口を揃えて罵った。
「ぬけぬけと、ようそんな顔ができたものだ。彼方の僧房を覗いてみよ、汝のために手足を挫かれた怪我人が、枕を並べて呻いておるわ」
「それのみか、門前町から山上の途中でも、見晴らしの亭を打ちこわし、附近の娘どもを見れば、狼が鶏でも追うように、追っかけ廻して歩いてきたとか」
「いちいち挙げればきりがない。さほどな痴態悪業におよびながら、いまさらなんぞ、その白々しさは」
智深は二の句も出なかった。やがて悄々とその場を退がると、智真長老から再度よばれて、
「さても是非ない仕儀。このうえ、当山にとどめおかば、そちの恩人たる趙の長者にもいっそうご迷惑をかけることになろう。そこ思って神妙に退散せよ」
藍の脚絆手甲、一重の僧衣、それに鞋一足、銀子十両ほどの恩施が、前におかれていた。
智深は、ぽろりと涙をこぼした。そして、猫のように。
「どうも、なんともかとも、申しわけございません。われながら今はわが身を持てあましまする。といって首を縊る気にもなりませんが、いったい、この魯智深はどう生きていったらいいんでしょうか。ね、お上人さま」

智真長老は、胸のうちで、心易でも立てているのか瞑目久しゅうして、一偈をつぶやいた。
「……林ニ遇ウテ起リ、山ニ遇ウテ富ミ、水ニ遇ウテ興リ、江ニ遇ウテ止マラム。……四遇ノ変転ハ身ニ持テル宿星ノ業ナリ。魯智深、まずは生きるままに生き、行くがままに行け」
「はい。じゃあ、そういたしましょう」
「さし当って、身の落ちつく先もなくては困ろう。わしの弟弟子は昨今、開封東京の大相国寺にあって、智清禅師と衆人にあがめられておる。この添書をたずさえて、大相国寺へまいり、よう禅師にすがってみるがよい」
「どうも何からなにまで、ありがとうぞんじます。……ではお名残り惜しゅうございますが」
と、彼が神妙に頭をさげると、侍座の役僧たちはみな笑った。「……なにがお名残り惜しいものか」と、彼の退散に、胸撫で下ろしていたからだろう。
さて。――その日。智深は悄然と麓町へ降りていった。そして、鍛冶屋の隣の旅人宿へ泊りこんだ。さきに鍛冶屋へ誂えておいた錫杖が出来上るのを待ったのだ。そしてやがて半月ほど後に、その出来栄えが見られた。重さ六十二斤水磨作りの錫杖は上々なものだった。
「ようし、この一杖さえあれば、天下の山川草木は、みなわが従者」
彼はたちまち、ここ数日の鬱を眉に払って、大満悦な態となり、すぐさま開封東京へさして出立した。

九　花嫁の臍に毛のある桃花の郷を立ち、枯林瓦罐寺に九紋龍と出会いのこと

奇異なる旅の子魯智深は、幾度も山に臥し、野に枕したが、野獣猛禽も恐れをなしてか、彼の寝姿と鼾声のあるところは、自然一夜の楽園と化し、なんの禍いも起らなかった。
もっとも智深は身に一トかたきの食糧を持つではなし、金銀は元より帯ぶるところにあらずだから、これを襲ってみたところで、得るものは何もありはしない。――その夕べも、腹をぺこぺこにして、やっと山中の一村に辿りついた彼だった。
「おうこの辺は、たいそう桃の多いところだな。今や桃の花ざかり。そうだ、今夜は一つそこらの桃林に寝て、武陵桃源の夢とでも洒落ようか」
――すると、鶴のごとき一人の老人。彼が立ち入りかけた桃林の傍らから出てきて。
「もしもし、お旅僧。こよいは当家にちと取り混み事がございますし、それに不慮のお怪我でもなさるといけませんから、ほかへ行ってお休みくださらんか」
「おぬしは誰だ」
「この桃花村の旧家で、劉家のあるじでございますが」
「……どうしたのだ、いくら老人にせよ、まるで粘土のような顔いろをして、いまにも泣きだしそうなその容子は」
問われると劉老人は、もうさめざめと本当に泣き出していた。「……じつは」と打ち明けるのを聞いてみると、今夜は愛娘

の婚礼の晩だという。
「なに、一人娘の婚礼だと？」
いよいよ、おかしい。好奇心も手つだって、なお仔細を聞きほじってみた。
そこで老翁が語り出すのを聞けば、この地方の青州の県軍でも手を焼いている匪賊の一団がこれから奥の桃花山に住んでいる。
愛娘の聟というのは、その賊将の弟分と称する周通という者で、もとよりこっちから、嫁るといったわけではない。
「桃の花が咲いたら、聟入りにいくぜ。前もって、山から使いを出しておくが、聟入りの夜には、花嫁を磨いて、酒肴の支度はいうまでもなく、万端、華やかにしておきねえ」
と、すでに周通の前ぶれを受けていたものだとある。そしてもし、それに逆らえば、桃花村は一夜に焼き払われるか、みなごろしの目に遭うであろうと顫くのだった。
「あはははは、いまどき、古手なやつもあるもんだ。よろしい。じゃあ真夜半に、その桃花山の賊が押しかけ聟に来るんだな。劉じいさん、心配するな」
「……と、仰っしゃってくだすっても」
「じつは、わが輩はもと渭水で提轄（憲兵）をしておった魯という者だ。そういう裁きには手馴れている。わが輩を娘御の部屋へ案内するがいい」
「娘は昨日から泣き沈んでいて、人さまにお会いするどころではございません」
「会わんでもいいよ。娘御は早くどこかへ隠してしまえ。そしてわが輩が花嫁になり代って、寝台の帳を垂れて寝ておるから、賊の周通がきたら、盛大な祝宴と見せて、たっぷり酒を飲ましてしまえ。……いや、それまでの間、わが輩も独りで閨に待つのは退屈で堪らん。花嫁の部屋にも酒を忘れるなよ」
劉老人は、ためらうより恐れ気味だった。しかし、一族大勢がやってきて、だんだんに智深の説得を聞き、盲亀の浮木で、ついに彼の策にすがった。
そこで智深は、宵のまに、花嫁の部屋に隠れこみ、そこの帳を垂れて、寝台に横たわった。もちろん彼にも饗膳と酒が供されたので、鱈腹たべて、寝こんでいる……。
が、ときどき眼がさめた。もう何刻ごろか。表の方では、花聟の列でも着いたのか、銅鑼や太鼓の音。そして〝聟迎えの俚歌〟などが賑やかに聞えだしている。
「……ははあ、そろそろ祝宴が始まったな」
その辺までは知っていたが、またいつかぐっすり寝入ってしまったらしい。夜は森沈と更け沈み、赤い蝋燭の灯にみちびかれて、魔王のごとき影がゆらゆら室の外まできたらしいのも、彼は全然知らなかった。
劉老人らしいのが、そこで声をひそめて、
「……では花聟さま。てまえは、ここで失礼を」
やがてコトコト戻っていった。遠ざかるその跫音をたしかめてから、賊の周通は、すうっと部屋へ入ってきた。
「おや、真っ暗じゃねえか。……ははあん、さては羞かしがっているのか」
独りごとをもらしながら、周通は手さぐりで花嫁の寝台へ近づいてきた。そしてまた、おや？　とでも思ったのか。

「ひどく酒臭えなあ。むむそうか。花嫁の部屋でも、身内の宵酒盛りとかやるのが慣いだからそのせいだな。……これよ、娘、いや嫁御。なにもそう羞かしがるにはおよばぬよ」

じつは、周通のほうこそ少してれ気味である。柄にもなく、そろっと、帳の内へもぐり込んで、花嫁の衣裳の下へ手を入れた。すると、ヘンなものが彼の手にジャリッとした。どうも臍らしいが毛が生えていた。

「あっ。代え玉を食わせやがったな」

どたんと、彼が寝台から転び落ちたので、智深は初めて眼をさました。ばっと刎ね起きざま、花嫁衣裳を被いたまま、

「待てっ、聟どの。逃げるとは薄情な」と裏手の桃林へと追ッかけた。

周通は柳の木につないであった馬を解くやいな、柳の枝をムチにして一散に逃げだした。智深もまた、手下の馬の一頭に跳び乗って追ッかけていく。――それはいいが、さあ、劉家の後の騒動といったらない。

残された手下どもは、変だと知って、劉老人を縛りあげ、これを曳いて、翌朝、桃花山の匪賊の木戸へ帰ってきた。

ところが、なんぞはからん、そこでは、賊の頭目と魯智深とが、仲よく笑いながら酒酌みかわしている。そしてまた、昨夜の押しかけ聟――すなわち頭目の弟分の周通は、悄れ返って、そのそばで首うなだれている始末ではないか。

「やあ、劉じいさん、可哀そうに、捕まってきたのかい。おい花聟、早く縄を解いてあげろ」

魯智深はげらげら笑って、仔細を話した。

昨夜、相手を追いつめて、この木戸まできてみると。弟分の助太刀に出てきた頭目というやつは、なんと、渭水の街の膏薬売り――あの打虎将ノ李忠であった。

「……ばかなやつらだ、こんなところでケチな山賊などしてやがって。まだ、膏薬売りのほうが、どれほどましな商売か知れめえに」

と、今も、意見していたところだとある。

だが、打虎将李忠も、その弟分の周通と名のる男も、これが天性彼らには性にあっている生態なのかも知れなかった。表面は神妙に服して。「……いやもう、以後は決して、劉の娘になぞ手出しはしません」

と、誓っていたが、どうも本気とは思われない。

智深が少し白い歯を見せると、李忠は図にのッて言った。

「おれが渭水の土地を売って旅へでたのも、智深、ほんとは、おぬしのせいだぞ。おぬしが関西五路の顔役鄭をなぐり殺したため、おれたちにまで、役人の手が伸びて、片っぱしから牢へぶちこみ始めやがった。そのため、おればかりでなく史進も渭水を捨てて、どこへともなく姿を消してしまったじゃねえか」

「そうか。いわれてみれば、わが輩にも責任があったことか。だがもう古手な素人脅しの生娘漁りやケチな悪事はよしたがいいぜ。やるなら男らしい大望を持ったがいいよ。でっかい夢をよ」

とはいえ、智深も長居は無用と見たのであろう。ふたたび劉家や桃花村には仇をしないという誓いを二人に立てさせ、二人が矢を折ッて、悪党仁義の金打をしたのを見ると、劉老人を里へ帰し、自分もまた、飄としてここを立ち去ってし

まった。
そしてふたたび、東京さしての旅また旅をかさねてゆくうち、はからずも、ここ瓦罐寺と呼ぶ奇峭怪峰の荒れ寺に、一夜の雨露を凌がんと立ち寄って、彼は、世にあるまじき人間のすがたを見た。

「はあて……。これが建立された時代は、天子の勅使、一山の僧衆、香煙、金襴、さぞ目ざましいものだったろうに。よくもこうまで、荒れ果てたものだ」
瓦罐寺の地内へ、一歩入った智深は、その荒涼たる景に、さしもの彼も、唖然とした。
鐘楼や堂宇は崩れ放題、本堂のうちも雀羅の巣らしい。覗いてみれば、観音像はツル草にからまれ、屋根には大穴があいている。そこらの足痕は、狐のか狸のか、鳥糞獣糞、すべて異界のものだった。
「おういっ。人間はいねえのか。だれか住んでる奴はいないのか」
すると奥のほうから骨と皮ばかりな老僧が、ひょろりと立ち現われて、
「おお……お旅僧か。ここには人をお泊めする糧もないぞよ。早う行かっしゃれ、行かっしゃれ」
「なに、糧もないと。あの庫裡で炊いている煙はなんだ。どうせ貴様たちの食物も里で貰ってきたお布施だろう。おれも腹が減っている。お斎にあずかりたいものだ」
「めっそうもない。わしたちですら、露命をつなぎかねているのじゃ。そんな大声だしているとご僧の身の皮も剥がれちまうぞよ。さ、早く立ち退きなされ」
「ていよく追っ払おうというのか。それとも誰かに気がねしてそういうのか」
「ここには、崔道成という悪僧と、丘小一という行者の悪いのが、わがもの顔に住んでおる。……わしらはその二人に寺を奪われて、やっと粟粥をすすって生きているばかりなのじゃ」
「ふウむ。崔と丘。そんなものが恐ろしいのか。とにかく、もうすこし話をきかせてくれ。その代りあっちで粟粥を一杯ご馳走になるぜ」
庫裡へ廻ってみると、まるで隠亡窯みたいな赤い火を薄暗い中に囲んで、ここにも骸骨みたいな痩せ法師が、がつがつ粥を喰べあっているところだった。
智深が鍋へ手を出したので、彼らは隅へ竦んでしまった。そして智深が二、三杯もすすりかけると、恨めしそうに、ぽろぽろ涙をこぼしては見つめている。いかな智深も、これでは喉に通らない。腹は減っていたが、いまいましげに、中途で欠け碗をほうりだした。
――と、外の方で、田舎唄だが、粋な声がふと聞えた。見ると、行者ていの若い男が、天秤で一荷の荷をかついで通った。その竹籠の中には、蓮の葉にのせた桃色の牛肉や酒や野菜などをのせている。智深は眼を光らせた。
「あいつか。この寺に巣を作って、おまえらには物も食わせないというやつは」
「そうです、あれが飛天夜叉とアダ名のある丘小一で」
「ほかにもう一匹、崔道成とかいう化道がいるわけだな。よ

うし、いま見た牛肉はわが輩が食ってやるぞ」
「およしなさい。そ、そんな真似をなすったら、すぐご一命はありませぬ。のみならず、私たちまでどんな目にあうか知れません」
「わはははは。なにをガタガタ慄えるのだ。まア見ておれ。おまえらにも、今夜は肉の一片ずつをお布施してやるから」
豹のごとく、智深は跳びだして行った。手には鍛えてまだ日の浅い錫杖が、はがねの匂いも立つばかり光っていた。
とも知らず行者の丘小一は、むかし方丈の庭でもあったらしいところまでくると、荷を下ろして、待っていた二人の者と、なにか笑って話している。――見れば、大きな槐の下に、一卓をすえ、崔坊主は、一人の若い女を擁して腰かけていた。
女を中に挟んで、すぐ酒もりにでもかかるつもりか。陶の器、杯などを、卓の上へ並べだした。ところへ、のっそり魯智深が近づいてきたので。
「やっ。雲水じゃねえか、てめえは。誰に断わってここへ来た」
「来てはいけないのか。あっ待った。そこの女子。いずれおまえは、里から攫われてきた人妻か娘だろう。あぶないよ、退いていな」
「なに、あぶねえと」
そこは悪と悪。眼を読むのは迅かった。
崔が起ったと見えたとたんに、その手から水の走るような一刀が智深の胸先三寸の辺を横に通った。かわすまでのことはない。智深の錫杖は傍らの丘小一へ向って一つぶんと旋る。丘は退がって、これも腰の一刀を見事に抜いた。気合い、眼光、いずれも智深に劣る者とは見えない。
だが、恐いもの知らずの智深である。また、かつて一度でも不覚をとったためしはない。「おううっ」と彼の満身が吠えたのも久しぶりだ。――ござんなれという構え。
じりじり、その彼を挟んで、二刀の切ッ先は寸地を詰めつつ迫ってくる。まるで刀の先に眼がついているかのごとく、智深の毛ほどな動きも見のがさない。「……はてな？」智深は少し汗を吹きはじめた。「腹のへッているせいか？」いや、そうでもなかった。剣気というのか、一種の精気が呪縛をかけてくるのだった。智深はやっと自重しだした。
「南無三、こいつは、いけねえ。めずらしく手強いらしいぞ」
破陣の勢いで錫杖を一振すれば、丘小一の影は宙へ躍って新月の刃をかざし、崔道成は低く泳いで颯地の剣を横に払う。一上一下、叫喚数十合、まだ相互とも一滴の血を見るなく、ただ真っ黒な旋風をえがいては、またたちまちもとの三すくみの睨め合いとなった。
やがて疲れたのは、魯智深のほうである。事実、腹もへっていたが、しかし、かつて出会ったことのない強敵にも違いなかった。たじたじと押されつつある。そのうちさすがの彼も、今は自己の限界を知ったとみえる。やにわに後ろを見せて逃げだした。その図ウ体が大きいだけに、その逃げざまこそおかしかった。
まるで転がりやまぬ火達磨みたいに、山門を跳びだし、道を走り、石橋を渡って、ほっと大息ついて振り向くと、そこを関門としてか、追って来た崔と丘の二人は、石橋の欄干

に腰をかけて、
「さあ雲水。ひと息いれたら、もいちどおいで」
と、いわぬばかりに涼しい顔で休んでいる。
智深は物蔭からそれを眺めて、
「さて世の中は広いもんだな。あんな化け物もいるからには、わが輩もちと反省せねばなるまいて。残念だがここはまア負けておけ。戻ってゆけば犬死にだ。……だが、待てよ。これはしまった」
わが姿に気づいてみると、大事な頭陀袋を掛けていない。落したかと慌てたが、よくよく考えてみると、さっきの庫裡で、粟粥をふうふう吹いて食ううちに、粥をこぼしたので、脱いでおいた覚えがある。
「こいつは困った。あの中には大相国寺の智清禅師へ宛てた智真長老のお手紙が入っている。取りに帰れば、石橋でふんづかまるし。……といって、あれ持たずには東京へ行く意味もない」
彼は石橋を渡らずに戻れる道はないかとうろつきだした。すると渓谷へ降りる道があった。そこを沈んで彼方へ登ると、瓦罐寺の北へ出た。あたりは赤松林である。行けども行けども赤松ばかりと思われた。ところがやがて忽然と、こんどは死の林みたいなところへ出た。おそらく一院の古い焼け跡でもあろうか。見みかぎり一点の緑もない枯れ木林だ。しかも今、彼の跫音に、ふとその辺の岩蔭から、すっと起って、こっちを振り向いた白衣の人影があった。人馴っこく智深のほうへ近づいてでもくるのかと思うと、白い人影は、彼を見て、
「ちっ。くそ坊主か」
唾でもするような舌打ちして、後も見ずに、枯れ木の間を縫い去ってゆく。智深は彼の「……べっ」と唾を吐いた唇鳴らしが気にくわなかった。一跳足に追いすがって、錫杖を横構えに。
「やいっ、待て。なんでいま、きさまアおれをあざ笑ったか」
「笑いはしない、くそ坊主かといったまでだ」
「ここには、ほかに人間はいない。おれのことをいったと思う」
「思うように思っておけ。たぶん当っているだろう。ほんとの坊主なんてものは、近ごろ世間に見たこともないからなあ」
言語は爽やかだし、姿もすっきりした男である。白衣は行者姿のもの。或いは、丘小一の仲間かもしれない。
陽は沈みかけている。男は彼方の廃院へでも急ぐのか、ふンとまた、鼻で笑いすてて歩き出した。その虚や狙うべしと思ったか、智深は突嗟に、
「かッ」
丹のごとき口を開いた。振り込んだ錫杖の下、白衣は朱と思いこんだ。ところが男は、ついと、横に移っていた。静かに腰の戒刀へ手をかけて、
「坊主、見違えるな。おれはなにも死神じゃねえぜ。命をもらっても仕方がない」
「な、なにを、生意気な」
相手も次の錫杖は待たなかった。抜く手も見せぬ迅さである。振りかけた錫杖がもし斜めに魯智深の眉間を防がずにいたら、彼はきれいに割られた瓜みたいになっていたかもしれない。智深は跳び退いて、錫杖を持ち直した。

すると、夕闇を透かしていた眼と、キラとも動かない戒刀のみねから、落ちついた声が通ってきた。
「おいっ、待った。ちょっと待て」
「怯んだか行者」
「いや、さっきから少し考えていたことがある。もしやあんたは魯提轄じゃあるまいか」
「えっ。わが輩の前身を知っているおぬしは誰だ」
「やれ、あぶないところ……」
行者はすぐ戒刀を鞘にして、つかつかとその顔を近づけてきた。
「史進ですよ。渭水でお別れした九紋龍史進でさ。てまえもこんな風態だが、いや、あんたの変りようではぶつかっても分りッこはない。提轄から坊主とは、どうもえらい化けかたですな」

十　菜園番は愛す、同類の虫ケラを。
柳蔭の酒莚は呼ぶ禁軍の通り客

「やあ、これは奇遇だった。さても人間てやつ、どこで別れ、どこで会うやら知れぬものだな」
魯智深はいった。――九紋龍史進もまたこの奇遇を尽きない縁と興じてやまない。そして相携えつつ、もとの瓦罐寺のほうへ歩きだした。
――途々、智深は、にわか出家の花和尚となった身のいきさつを友に語り、九紋龍は渭水を去ってのち、延安や北京をさまよい、いまだに尋ねる師の王進先生にも巡り会えず、こうして枯林の廃寺に一時雨露を凌いでいたわけだ、と話す。
「そうか。お互いどッちも、風の間に間に、浪の間に間に、まア似たり寄ッたりの身の上だな。しかしわが輩はこれから、東京の大相国寺へ行くんだが、史進、あんたはどうする？」
「こんなところで行者めかしていたのも、いわば一時の身過ぎ世過ぎ、当座のあてもないから、少華山にいると聞く、朱武のところでも訪ねていこうかと考えていたところだが」
「それもいいかもしれぬ。どっちみち、今のような腐爛した末期の世では、もともと、旋毛まがりにできているお互いは、真面目にもなれず、いよいよ住みにくくなるばかりだろうし……。や、や、ちょっと待ってくれ。まだいやがる」
「なんだ花和尚」
「あれ、あの石橋の欄干に腰かけて、さっき散々、わが輩を苦しめやがった崔坊主と行者の丘小一が、まだ執念ぶかく見張っている」
「ははは。瓦罐寺に住むあの悪党か。和尚、こんどは何も怯むことはあるまい。ここに九紋龍という助太刀がいるからには」
いううちにも、すでに彼方の石橋の上では、丘行者と崔坊主が、こなたの二人を見つけたか、遠目にも巨眼熒々、いまにも斬ッてかかってきそうな構えを示していた。
しかしこんどは、前に智深一人が相手だった場合とはわけが違う。あわれ浅慮にも、やがて、われから挑みかかッて来た彼らは、たちまち逆に、九紋龍の戒刀と、智深の錫杖の下に、お粗末な命の落し方を遂げてしまった。
「さあ、こいつらを片づけたら、さっそく、庫裡におき忘れ

た大事な頭陀袋を取りにいかねばならん。史進、ここで待っていてくれるか」
「いや、おれも一しょにいく」
――戻ってみると、幸いに頭陀袋はそのままあった。けれど、ここに細々露命をつないでいた老僧らも、身の上の分らぬ一人の女も、みな梁に首を縊って死んでいた。おそらく先刻、智深が崔と丘に追われて、いちど負けて逃げたのを知り、次には自分たちが、どんな目に遭わされるやらと、恐怖の余り、また今のような世を生きるにも絶望して、死をえらんだものかと思われる。
「ああ揃いも揃って。……こいつは何とも不愍なことをした。だが仏さんたち、迷うなよ、これはわが輩のせいでないぞ」
めずらしく智深は奇特な合掌をして、うろ覚えなお経をとなえた。それを見て、九紋龍もそばからいう。「――寺院が寺院の役を果しえず、悪党ばらの巣に恰好な魔所となっているからこんなことにもなる。いッそのこと、焼いてしまったほうが後々のためであろう」と。
「そうだ、一切を荼毘に附して、亡者の霊をなぐさめ、おれたちは、ここを下山としよう」
つい先刻、亡者どもがあばき合っていた粥鍋の窯には、まだ鬼火のようなトロトロ火が残っていた。智深はその薪の火を持って、庫裡に火を放った。――そして両人、宵の山路を、どんどん麓へ降りていった。
「おお花和尚。あの山上の紅蓮を見ないか」
二人は振り向いた。――満天は美しい焔の傘から火の星を降らせている。宋朝初期のころには、紫雲の薫香、精舎の鐘、とまれまだ人界の礼拝の上に燦いていた名刹瓦罐寺も、雨露百余年、いまは政廟のみだれとともに法灯もまた到るところ滅びんとするものか、惜しげもない末期の光芒を世の闇に染めだしていた。
智深と九紋龍は、それから二日路ほどの旅をともにし、やがて華州と開封路の追分けにかかるや、再会を契って、袂を別った。
――さて。一方は日ならずして、時の花の都、開封東京にたどり着き、さっそく大相国寺の智清大禅師をその山門に訪うて、
「拙僧は智深と申す五台山の一弟子ですが、当山の禅師がおんもとにて修行を積めいと、師よりお添状をいただいてまいった者。よろしくお取次のほどを」
と、頭陀袋から智真長老の手紙を取出して、役僧に渡し、一堂に座してその沙汰を待った。
「はて。五台山の智真長老も、えらい者を、当山へさし向けてきたもんじゃな」
大相国寺の智清は、手紙の中にある智深の経歴を読んで、ちょっと、うんざり顔だったが、また禅家特有なとでもいうか、へんな興味も覚えぬではなかった。
坊主の前身には、ずいぶん変ったのもあるが、智深のごときはまず珍らしい。――渭州経略府の憲兵あがり。侠気はあるが、喧嘩好き、酒好き。しかも人殺しの前科のため、剃髪した男だとある。
「おそらくは、五台山でも持て余した者だろうが、智真はわしの昔からの道友、置けぬといったら、気が小さい禅家よと、嘲

うであろうし。……さて、どうしたものか」
全役僧を集めて、衆議にかけると。
「来訪の一行脚は、どう見ても出家とは受けとれません。なんとも魁偉な人物です」
「第一人相もよろしくない。どことなく凄味がある。また、知客が迎えたとき、禅家の作法もよくわきまえぬものか、たずさえている香具、座具、袈裟などの使い方にも、まごまごしおった」
「ていよく、お断りあったほうが、当山のためかと存じますが」
衆口紛々である。一人も歓迎はしていない。智清禅師は、ほとほと困った。――すると、都寺（僧職）が、うまい一案を提出した。
「馬鹿と鋏はなんとやら、そのような人物も、当山附属の野菜畑の管理所へやっておくには、案外、適任ではおざるまいかの」
「なるほど、なるほど。野菜畑の目付ならいいかもしれぬ」
「なにせい、あの酸棗門外の菜園ときては恐ろしく広い。のみならず、附近の兵営からは兵隊どもが荒らしに入るし、もっと厄介なのは、門外にある無頼漢街じゃ。年中、墻を破ッて、瓜や菜根は大びらに盗んでゆくし、農耕の馬や牛も、いつのまにか食ってしまう。……といって、番人も山僧どもも、なにもいえん。なにしろ奴らは凶悪なので」
「それや妙案。いかがでしょう禅師。風来の魯智深とやらには、試みにまず、その菜園目付役でもやらせて御覧じあっては」
「むむ、衆意同案とあれば」
一山の断により、さっそく首座（僧職）がその旨を、智深にいいわたす。智深は、ふくれ面だった。たとえ、化主、浴主の末僧でも、なにか僧職の端にはと期待していたらしい。
「まあまあ、やがてはだんだんに、茶頭、殿主、蔵主、監寺などの上職にも、修行次第でと申すもの。が、当座はひとまず菜園のほうで」
おだてられて不承不承、智深は酸棗門外の畑へ移されていった。管理所だの菜園目付のといえば聞えはいいが、来てみればただの大きな畑番の番小屋。「……ふざけやがって。ようし、わが輩をこんな所の案山子に使おうというなら、おれの起居にも干渉はさせんぞ。そんなら、いッそ気楽でいいが」と、ここに花和尚魯智深は、ここの大地主にでもなったような気で持ち前の〝野性の自適〟をきめこみだした。
日ならずして、近所のごろつき街の空気には異変が起っていた。いつもの調子で畑荒らしに入った奴が、巣へ帰って言いふらしたのだ。
「おいおい、行ってみや。番人が代ったぜ。こんどの奴ア八頭芋みてえな面をした凄え坊主だ。おまけに、墻門に何やらむつかしい掲示なんぞ貼りだしやがる」
「なに代ったって。どれどれ、どんな野郎か、面を見ようぜ。それに掲示たあ何だい？」
与太もンどもはつながって、掲示の杭を取り巻いた。文にいわく。
――爾今、当山ノ僧人魯智深ヲシテ菜園ヲ管理セシム。耕夫ノ令、厨入ノ百菜、スベテ右ノ者ニ任ズ。

猶又、無用ノ者、入ルベカラザル事。犯サバ、懲シメニ会ワン。悔ユル勿レ。

大相国寺宗務所

「なンでえ、きまり文句じゃねえか。ひとつその、魯智深て野郎のほうへ、見参におよぼうじゃねえか。……いるかい、番屋の中に」

「いるいる。なにしてやがるんだろう、臍を出して、ぼやっと、嘯いている面つきだぜ」

「ふ、ふ、ふ。野郎、恐いンだよ俺たちがね。こうして、ぞろぞろ、いやに静かに近づいていくもんだから、わざと知らん顔しているに違えねえ」

「だが、一度はお土砂をかけておかねえと、俺ッちを甘く見損なうッてこともあらあ。どうだい、番人の代るたびにやる、あの手を野郎にも食わせておいちゃあ」

「むむ肥溜の行水か。あの手を一ぺんご馳走申しておきゃあ、どんな奴も毒ッ気を抜かれてしまうからな。よし、やろう。みんなぬかるな」

ごろつきたちが、胸に一物の揉ミ手腰で、うようよ近づいてきたのを、知るか知らぬか、智深は大欠伸をして、床の高い番所の梯子段を降りたと思うと、のっそり畑のほうへ歩いてきた。

「あっ、もしもし。こんどお代りになったご番僧さんじゃござんせんか」

青草蛇ノ李四と、迂路鼠ノ張三は、二、三十人の仲間を後ろに控えさせて、智深の前に小腰をかがめた。そして凄味をきかすため、相手かまわぬ博奕渡世の仁義をきって。

「ええ、てまえどもは皆、ついご近所に住む気のいい野郎どもでございますが、ご掲示を拝見するッてえと、番所の和尚さんがお代ンなすったとのことで、お顔つなぎに伺いました。どうか、ひとつ、よろしくご懇意に」

「なんだい、まア」と、智深は眼をまろくして。

「おれはまた、どこか裏店の葬式が、道を間違えて入ってきたのかと思ったよ」

「へッ、へへへ。おもしろいことを仰っしゃるなあ。おいみんな。こんどのご番僧さんは話せそうだぜ。さ、こっちへ出て、ご挨拶をしろ、ご挨拶をよ」

「いらん、いらん。そう安ッぽいお辞儀などはいらん。が、顔つなぎなら、酒でも提げてきたろうな」

「こいつア恐れいりやした。渡りをつけるってえご定例は、ほんとのとこは、そちらから、こち徒らへしていただくのが作法でござんすがね。野暮をいうなあ止しやしょう。――おいっ、眼ッ跛」と、張は仲間の一人へどなって。「――どうでえ、粋な和尚さんじゃねえか。さっそく一しょに飲んでくださるってんだ。一ッ走り飛んでいって、街の酒屋と肉屋へ、御用を仰せつけてこねえか」

「あいよ」と、すぐ二、三人は飛んでいった。

それを合図に、眼くばせ交わしたごろつき連は、智深をとり囲んで、なんのかんのと、次第に彼を大きな肥溜のある畦のはずれへ誘いだした。――智深は、これが彼らの計略だとも、また、自分の立ったすぐ後ろが糞の池とも気づかなかった。また、ちょっと見たのでは溜の表皮一面、蠅の上に蠅が

たかって、まるで黒大豆でも厚く敷いたような密度だから糞色も見えず肥の匂いもしないのである。で智深はただ、彼らの愛相や馬鹿ばなしに退屈を忘れ、他愛もなく一しょに興じあっていた。

すると、与太もンの一人が、すッ頓狂な声を発して、

「あッ、和尚さんのくろぶしに、大きな虻が」

と、いきなり彼の脚元へ身を這わせ、虻を打つと見せて、片脚を拯いかけた。拯われたら後ろの溜へもんどりは知れたこと。智深は無意識に体をねじッた。そして、そいつをぽんと蹴放し、また、とたんに、も一つの脚へ搦んできたチンピラの横びんたへ向っては、

「ちょめ！」

と、童の頬でも撲るような平手の一擲を食らわせた。なんでたまろう、二つの体は仲よく躍ッて溜りの中へ飛んでいった。刹那。うわあん……鐘の鳴るような唸りが起って、満天満地に蠅が舞い立ち、ために、一天の陽もなお晦いほどだった。

「それっ、たたんじまえッ」

とは声ばかり。智深の体にたかッたと見えたものは、みなそれ、一颯に目を眩す蠅の旋舞といささかの違いもない。

――智深は早くも番所小屋の高床に戻って、

「あはははは、わはははは」

と、独りで腹を抱えている。

溜に沈没した仲間のチンピラを、どうやって救いあげて帰ったろうか。想像してみるだけでも智深にはおかしい。どうもこの畑番、至極退屈な役と思っていたが、とんだよい景物が近所に見つかった。愉しい哉、世の生きものども。ちょいちょい野菜泥棒にも這い込むがいい。時により、智深にも仏心なきに非ずだぞ――と、彼はそれからというもの毎日、むしろ彼らの現われるのが、心待ちに待たれた。

だが、ごろつき街の連中にすれば、それどころかは、額を集めての、薄暗い密議まちまち。

「さあ、みんな、しッかりしろやい。こんどの番所坊主は、いままでの瓜頭とは瓜の恰好も違うと思ったら、ちょっと中身も違うらしいぜ。なんとか一度、ぶッ砕いてやる思案はねえか」

十数日の後である。練りに練った一計を秘したものか、蛇李と鼠張の二人が、番所の小屋に謝罪りにやってきた。「……先日は乾分どもの悪戯。なんとも、お見それ申しやして」と、いとも神妙に、三拝九拝して、一献差し上げたいという申しいでなのである。

下地はよし、折ふしの炎暑に、智深も茹ッていたところであるから、一も二もなく、誘いにまかせた。そして彼らについて出て見ると、園の蓄水池の畔り、涼しげな楊柳の木蔭に、莚をのべ、酒壺を備え、籃には肉の料理やら果物を盛って、例の与太もン二、三十が恐れ畏んで待っている。彼らは頭を揃えて、

「へえい。以後は決して、こち徒ら一同、畑荒らしはいたしませんし、ご菜園の御用とならば、どんなことでもいたしますから、どうかひとつ、今後はお手下の耕夫同様におぼしめして」

「えらく今日は行儀がいいなあ。なあに、寺でも食いきれな

い菜園だ。適度には持ってゆけ、持ってゆけ。その代りちょいちょい、わが輩へのお年貢を忘れるなよ」
智深は遠慮なく飲み大いに食らった。ちんぴらどもは彼の酒量に驚き呆れ、三度も酒屋へ馳けつけた。
「……おや、なんだこれは？」
彼はやっと気がついた。彼の肩や頭へ何か時々、楊柳の上からポトと落ちてくるものがあった。手で撫で廻したのは不覚である。鷺やら烏やら、とにかく鳥の糞にはちがいない。
「ちイっ……。対手にならぬやつほど恐い対手はないぞ」
智深は呟いて少し座の位置をかえた。歌う者、手拍子を叩く者、与太もンどもは、浮かれ騒ぐ。するとまた、頭上の柳の葉隠れでも、烏がガアガア啼き騒いだ。のみならず、智深の襟くびから杯の手に、またぞろ、ワラ屑みたいなものがこぼれた。
智深は癇癪をおこして、突っ立った。
「ええい、やかましいっ。この化けもの柳には、烏の巣があるとみえるな」
「相すみません。和尚さん、いま梯子を持ってきて、巣を落しますから、お待ちなすって」
「そんな手間暇がいるもんか。ここの烏も畑荒らしの一族だ。こうしてやる」
あっと、ごろつきどもは思わず嘆声をあげた。智深が法衣の諸肌を脱いだからだ。そしてその酒身いっぱいに繚乱と見られた百花の刺青へ、思わず惚々した眼を吸いつけられたことであろう。
いや、驚倒したのは、それだけではない。智深が大きな柳の幹を抱くようにして、半身をやや逆さにしたと思うと、むくりと根廻りの土が揺るぎだした。ううむっ、と智深の半裸から陽炎が立ち、大樹の親根が見え、毛根が地上にあらわれ、どうっと、大樹は根コギになって仆れた。
「……どうだ、拙僧の余興は」
智深は洒落のつもりらしい。だが彼はがっかりした。気がついてみると、あたりのチンピラは、烏の群れより迅く、逃げ散っていた。舌を巻いたどころの驚きでなく、恐怖に駆られ、その日の計略も忘れて街へ逃げ去ってしまったものらしい。
さすが、それからは仕返しも断念し、腹の底から慴伏したものに相違ない。以後はコソコソ影を見せても、花和尚さまだの、花羅漢さまのと、遠くから平蜘蛛になって、めったに側へ近づこうともしなかった。
「こりゃ、淋しい」と、彼は喞った。
「それに、やつらの馳走になりっ放しなのも心苦しい。よし、こんどはこっちで招いてやろう」
或る日、彼は酒肉を調えて、逆に彼らを園の一莚に招いた。大よろこびで、彼らはやってきた。こうなると、日ごろのゲジゲジも迂路鼠も青草蛇も、案外、天真爛漫なもので、飲む、踊る、唄うなど、百芸の歓を尽して飽くるを知らない。
「ところで、花羅漢さま。今日は一つ、一同におねだりがござんすが、お聞き届けくださいましょうか」
「なんだ貧乏人の拙僧に」
「たいそうお見事な錫杖をお持ちでござんすが、いかがなもンで、ひとつその、花和尚さんのお腕前を一度拝見したい

って、みんなが申しておりますが」
「なに。おれの武芸をみせろというのか。そんなことなら無料ですむ。おやすい頼みだ」
さらぬだに、久しく振ってみなかったかの鋼鍛え重さ六十二斤の鉄の愛杖。それを取るや、酒の莚を離れていった。まず片手振りを試み、また八相、青眼、刺戟の構えを見せ、さらに露砕、旋風破、搏浪、直天、直地の秘術など、果ては、そこに人なく、一杖なく、ただ風車の如き唸りと、円をなす光芒がぶんぶん聞えるだけだった。
すると何者か。近くの破れ土塀の崩れの辺で、
「ああ、見事。……すばらしい！」
とわれを忘れて、つい発したような声がした。
その声に、智深はつい気合いを外してしまい、しんとしていた与太もンたちの群れへ。
「誰だい？　あんなところから覗いて、いま妙な気合いをかけおったのは」
「お。……ありゃあ花羅漢さま。武芸のほうじゃあ、たいしたお方でござんすよ。汴城八十万の禁軍ご指南役の一人、林冲と仰っしゃるお武家で」
「なに、林師範だって。そいつあ、えらいもンに見物されたな。ごあいさつせずばなるまい。おい、誰か行って、丁重にお呼びしてこい」

十一

鴛鴦の巣は風騒にやぶられ、
濁世の波にも仏心の良吏はある事

林冲には、通り名がある。豹子頭といい、あわせて豹子頭林冲とよぶ。
生れつきなる豹のごとき狭い額、琥珀いろの眸、また顎の鋭さは燕のようなので、そんな綽名がつけられたものか。
見るからに都の武人風。装いは洒落ていた。緑紗の武者羽織は花団模様の散らし、銀帯には見事な太刀。また、靴も宮廷ごのみな粋なのを履いていた。年ごろは三十四、五か。……やがて、こなたへ歩いてくる背丈もまた抜群といっていい。
智深は、その人を莚に迎え、名乗りあってから、一盞を献じた。漢は漢を知り、道は道に通ずとか。二人はたちどころに、肝胆相照らして、
「花和尚、以後はあんたを義の兄と敬おう。武芸からも、年齢の順からいっても、あんたが上だ」
と林冲がいえば、智深もまた、
「この魯智深には、ちともったいない弟だが、そういってくれるなら、ここで義兄弟の杯を」
といったわけで、時のたつのも忘れ顔に、緑蔭の清風は、この二人のためにそよめくかとばかり爽やかだった。
するとどこかで「――旦那さま、旦那さま」と、しきりに林冲を探すらしい女の声がする。彼はすぐ莚をつっ立ち、そしてさっきの崩れ土塀の辺に、チラと見えた小間使い風の女の姿へ、

「おうい、錦児。拙者はここだここだ。なにか急用でも起ったのか」
「……あっ、だ、だんなさま、たいへんでございますよ、奥さまが」
侍女の錦児は、心も空な口走りをつづけ、馳け寄りざま何ごとかを、泣き泣き主人に告げだした。――聞くうちにも、林冲はその豹額にするどい敵意と不安を掻き曇らせていたが。
「……ま、泣くな。よしっ」と錦児をなだめてから、酒もりの莚のほうへ。
「妻の身にちと心配が起ったので、今日はこれで失礼する。花和尚、いずれまた会おう」
「やあ豹子頭。俄に酒もさめた顔いろじゃあないか。御夫人がどうかしたのか」
「いや、侍女の錦児をつれて、この先の東岳廟へ参詣にいった帰り途、なにか殿帥府の若い武士どもに搦まれて悪戯に困っているとのこと。捨ててはおけぬ。――ご免！」
いうやいな林冲の姿は、もう彼方の崩れ土塀を跳び越えていた。なにさま、豹身が風をきって跳ぶかの如く、それは見えた。
無理はない。林冲にとっては、多年の恋が結ばれて、つい先ごろ、家庭を持ったばかりの新妻なのだ。――来てみれば、東岳廟と並ぶ五岳楼の廻廊の欄干に、それらしき武家風の若者十人ばかりが、腰かけている。手に手に吹矢の筒、弾弓、鳥笛などをもてあそび、べつの一組は、階の口を立ちふさいで、通せンぼをしているとしか思われない群れである。
「や、や。あれや高俅の養子、高御曹司の近侍たちだな」
よもやと思ったが、やはりそれだった。廻廊の下には、日ごろ見覚えのある白馬に見事な金鞍がすえてある。――そもそも、現宋朝の徽宗皇帝のもとに、いまや禁門汴城における勢威第一の寵臣は誰なりやといえば、馬寮の走卒でもすぐ
「――それは殿帥府ノ大尉（近衛大将）高俅さまだ」と答えるであろう。――高ノ御曹司とは、つまりその人の養子なのだ。もとは高家の叔父、高三郎の子であるが、貰われて、時めく近衛大将軍家の公達とはなったのである。
ところが、この御曹司、養父の権力をかさにきて、ろくなことはして遊んでいない。取巻きの近侍たちも皆、上流子弟の愚連隊といったような連中で、街の人々もこの悪貴公子の群れを〝花花猟人〟などと称していた。また中には「……血筋はあらそえないもの……」と、いう蔭口もなくはない。
都民のうちには、現朝廷の寵臣高俅も、むかしは、無頼な一遊民にすぎず、喧嘩、賭けごと、書画、遊芸、何にでも通達していて、いつか権門に取入り、蹴毬の妙技から、ついに、徽宗帝に知られ、鰻のぼりの出世をとげた法外な成上がり者なることを今でも覚えている者が少なくなかった。――だから養子の高御曹司が、よその娘、人の女房にもすぐ眼をつけての女狩りなどと、高家のお家芸よと、怪しみもしないわけかと思われる。
が、それはさておき。
林冲の新妻はいま、五岳楼の御堂扉にしがみついて、執拗な高御曹司と、争っていた。
「いやですっ。私は人妻です。見ず知らずのあなた方に誘わ

れて、そんな御堂内などへはいかれません。お放しくださいませ。放してッ」
「まあ、いいじゃないですか。あなたは見ず知らずというが、麿はもう夢に見るまであなたを前々から恋していた。ここでお会いしたのは、東岳廟のおひきあわせだ。ああ、そのお唇、そのおん眼」
「ええ、けがらわしい。何をなさるンですかっ」
「女はみんな、初めは柳眉を逆だてて、そういうが、ひとたび、ほかの男を知ってごらんなさい。わが身のうちに潜んでいた泉の甘美に驚きますから」
「ばかっ。色きちがい」
「あ痛ッ。よろしい。あなたはその美しい繊手で、麿の頬を打った。麿も暴力をもって報いますよ。火のごとき愛情の暴力で」
「あれッ。……たれか、助けてっ」
そのとき階の口に通せんぼしていた高の近侍たちを刎ねとばして、馳け上がってきた林冲が、
「悪戯者。人の妻へ、なんの真似だ」
と、いきなり高御曹司を突き飛ばした。そして、彼らが呆っ気にとられた刹那に、妻の体を引っ抱えて、さっと廻廊の角まで身を避け、次に彼らがどんな陣容を盛り返してかかってくるかと、身構えをとって睨んでいた。
しかし、相手の群れは、事の不意に度胆を抜かれてしまッたか、ただちに復讐に出てきそうもない。
「……や。林師範だぞ」「豹子頭か」と、小声をかわしていたと思うと、たちまち、どどどっと階段を降りて、高御曹司を、白馬金鞍の上に奉じ、まるで落花を捲いた埃のように逃げ去った。
新家庭の林家には、あれからというもの、何か気味のよくない暗影に忍び入られて、あわれ鴛鴦の夢も、しばしば姿の見えぬ魔手に脅かされ通していた。
それみな、高御曹司の陰険な迫害と、執拗な横恋慕とはわかっている。が、わかっているだけになお恐ろしい。相手は殿帥府の最高官の部屋住み。こちらは軍の一師範。どうにもならぬ。
「女房。気をつけてくれよ、わしの留守にも、外出にも」
「いいえ、この頃はもう、買物にも錦児ばかりやって、私は外へも出たことはありません」
林冲とその若き妻は、家にあっても声をひそませ、垣の物音にも、すぐ心を研ぐような習性にまでなっていた。というのも、しばしば妻の身が襲われかけたり、林冲が友人の家で酔っている間に、不慮な事件が留守中に起ったり、何度となく、謎のごとき怪に呪われていたからだった。
「……狙われているのは、私の身だけではございませぬ。私を愛してくださるなら、あなたもご自身に気をつけてくださいませ。禁軍へご出仕の行き帰りにも」
彼の妻は、林冲が門を出てゆくたびに、うるんだ眼で、良人に言った。男は出ないわけにはゆかない。林冲は笑ってみせる。
「案じるな、おれは大丈夫だよ。こう見えても、武術では豹子頭の前に立ちうるほどな敵はない」

――が、或る日、閲武坊の辻で、ひょっこり魯智深と行き会った。彼とは、あれからも数回飲みあって、いよいよ交友密なるものがあったが、

「どうしたんだ豹子頭、会うたび顔いろがよくないぜ。そろそろ秋風に枯葉は舞うし、拙僧もなんだか淋しい。ひとつそこらで飲ろうじゃないか」

と、その日も誘わるるまま、居酒屋の軒をくぐった。

花和尚と語っていると、彼は何もかも忘れえた。しかし、妻のことなどは、話もしないし、相手も訊こうとはしない。

二人は、夕明りのころ、閲武坊の酒屋を出て、ぶらぶら街を歩いた。――すると誰やら後ろのほうから、妙な売り声で、呼ばわるともなく、呟くともなく、ぼそぼそ言いながら、くッついてくる男があった。

「――ああ狭い狭い、世間は狭い。この都に人間は多いが、眼のある人間は一匹もおらんじゃないか。……こんなすばらしい銘刀を見てくれる者もないとは情けなや」

先に行く智深と林冲は、ちょっと、耳うるさげに振り向いたが、すぐ話に夢中な様子だった。

するとまた、後ろで。

「大道商人の刀売りとは、わけが違う。仔細あってぜひなく手放す物。買い逃がしたら二度とかかる宝刀には、生涯出会うことはあるまいに」

――そのとき、先の二人は、いつもの四つ角で袂をわかっていた。「……また会おう。近いうちに」といって去る魯智深の後ろ姿を見送って、林冲はふと呟きをもらしていた。

「いいもんだなあ。真の友達というものは」

そしてふとまた、歩きかけると、藍木綿の浪人服に、角頭巾をかぶった四十がらみの男が、手に見事な宝刀を捧げ、それに〝売り物〟とわかる草標示を提げ、つと、林冲のそばへきて。

「どうです、安いもんでしょう。三千貫とは」

「刀か。刀は腰にもある、家にもある。いらないよ」

「そうか。お武家もお盲さんか」

「なに」

「そんな、ざらにある駄刀とはちと違う。眼があるなら、抜いて見さッせ」

「なるほど、拵えは良さそうだな」

「ちっ。素人くさい。柄拵えや鞘作りを売るんじゃねえぜ。いらんか」

「まア、待て」――つい好きなので手をのばし、刀の鯉口下三寸の辺をぐっと握ってみた。男は手を放す。林冲は思わず、むむと心で唸った。

持ち味、たまらない触感と重みである。鞘を払ってみれば、夕星の下、柄手に露もこぼるるばかり。

ためつ……すがめつ……彼の眸は稀代な銘刀の精に吸いつけられ、次第に放しともない誘惑に駆られていた。

「浪人、どうしてこんな神品を手放す気になったのか」

「どうしてって。……この襤褸姿を見てくれればわかるだろう。飢えた妻子が待っている。それ以上、訊くのは罪だ」

「訊くまい。いくらだ」

「昨日今日、三千貫とわめいてみたが、売れない。御辺を眼のあるお人と見て、半分に負けてやる」

「欲しい。だが少々、金が足らん」
「一千貫。あとはビタ一文も引けない。それでよければ」
「よし、わが家の門まできてくれい」
ついに林冲は手に入れた。妻もよろこんだ。
――単に家宝を得ただけでなく、銘刀は魑魅魍魎も払うという。そんな心づよさも抱いたのである。
――と。三日ほどたって。
殿帥府の副官陸謙から使者が来た。その書面をひらいてみると、

聞説。貴下ハ先頃、稀代ナ宝刀ヲ入手セラレシ由。武人ノ御心ガケ神妙ナリト、高大尉閣下ニオカセラレテモ、御感斜メナラズ、マコトニ御同慶ニ堪エナイ。

という祝辞の次に、こう結んである。

……ツイテハ、高家御秘蔵ノ宝刀ト、貴下ノ愛刀トヲ、一夕、較べ合ッテ鑑賞ヲ共ニシタシトノ高閣下ノ御希望デアル。依ッテ、明日改メテ迎エノ使者ヲ出ス故、御携来ヲ希ウ。

虞候陸　百拝

「……はアて。誰が、いつのまに刀のことなど知って、喋ったのか。もっとも大道で買った物。誰も見ていなかったとは限らないが」
林冲も、ちょっと怪しみ、妻もなにか動悸を感じたが、しかし、殿帥府副官の名では、公式な召しも同様で応じぬわけにもゆかない。もしまた、文面の通りなら光栄とも考えられる。何が待つか、ともかくもとその翌日、林冲は正装して宝刀をたずさえ、迎えの者とともに、大尉の公邸に出向いた。
衛兵の見える公邸の門を入ると、林冲を伴った迎えの者は、
「あれなる中門を通って、東の殿廊を進んでいかれい。そこの階に、召次の者か副官がお越しを待っておいでになろう」
教えられるまま、彼は奥へ進んだ。けれどそこには誰も立ち迎えていない。
「はてな？」
振り返ると、彼方で見知らぬ衛兵が、黙って、北廊を指さしている。さては教え違いか聞き違いかと、北へ進むとまた一門があった。すでに禁苑の一劃とおぼしく、美々しい軍装の近衛兵が戟を持って佇立していたが、林冲を見ると、唖のごとく黙礼した。禁軍師範の林冲も、まだかつて、こんなところまでは来たこともない。
だが弱った。いったいどこを訪うたらよいのか。壮麗なる一閣の階を上って、内を窺うと、さらに中庭が見え、彼方に緑欄をめぐらした一堂があるのみだった。
「……あれかな？　なにやら人の気配もするが」
橋廊を渡って、一房の珠簾内をそっと覗いてみた。すると、正面の欄間の額に、墨の香も濃く読まれたのは、
白虎節堂
とある四大字。林冲はぎょッと、立ち竦んで、
「や。これはいかん。節堂は軍の機密を議するところで、枢機に参ずる高官のほか立入りならぬところと聞いておる。えらいところへ迷い込んだもの」
慌てて後へ戻ろうとしたのである。が、時すでに遅かった。靴音たかく、さっと一方の扉を排して現われた将軍がある。

これなん、かつての毬使い高毬、いまでは殿帥府ノ大尉にして徽宗の朝廷に飛ぶ鳥落す勢いの高俅であった。
「こらっ、なにやつだ。節堂を窺う曲者は」
「あ。高閣下ですか。お召しによって伺うた師範林冲にございますが」
「なに、お召しによってだと。いつ汝を呼んだか。そんな覚えはないッ。怪しい言い抜けを」
「いや、いや。確かに陸副官のお使いをうけ申して」
「陸謙、居るかっ。この者を召捕れっ。わしを暗殺せんと近づいた者があるぞ」
「あっ！　なんで拙者が」
すでに彼の四方は鉄桶のごとき兵士で取り囲まれていた。その中には、顔もよく知っている副官陸謙の姿も見える。林冲は、それへ向って、
「使いをよこしたのは、貴公じゃあないか。家にある貴公の手紙が何よりの証拠だ。なんで拙者をこんな目に会わすのか。おいっ、笑いごとじゃあない。返事をしたまえ」
怒りをこめて叫んだものの、陸謙はてんで受けつけない。
「はははは。ばかな血迷い言を。……なんで一師範の汝を、高閣下がお召しになろうぞ。敵国のため、軍の機密を盗みに忍び込んだか、または、高閣下に怨みをふくんで、お命を窺いおったか。いずれかに相違あるまい。――それっ、あの手に持っている宝剣を用いさせるな」
兵士らは、どっと喚きかかり、林冲の体を圧ッ伏せ、高手小手に縛り上げて、その日のうち獄へ下げてしまった。
獄は、開封奉行所の構内にある。時めく高家から下げられた罪人だし、罪状云々とあっては、ただ、首斬れといわぬばかりな囚人だ。しかし府尹の職として、そうもならない。奉行はこれの調べを、与力役の孫に命じた。そして、一応の証拠固めをなすまでの時日を藉した。
これは、林冲にとって、受難中にも一つの幸いだったといえよう。はたまた、彼がこの世に果すべき人間業のいまだつきざるところだったか。
与力の孫は、名を定といい、囚人からも世間からも、慈悲心のある良吏として、慕われていた。綽名といえば良いほうにはつけないものだが〝仏孫子〟といえば知らぬものはない。
孫は、日ごろから林冲の人となりを知っているし、また、節堂事件が、高家の捏ッち上げくさいことは、すぐ感づいたので、われから進んで、いきさつを洗ってみた。
その結果、高御曹司の横恋慕が泛かびあがった。そして彼をめぐる取巻き連の陸謙、富安などという阿諛佞奸な輩が、巧みに林冲を陥穽に落したものとわかってきた。――またそれは林冲が奉行白洲で訴えた冤罪のさけびとも合致していた。
「これまでの謎も、すべて私には解けています。この林冲をなきものとし、私の妻を奪わんとする高御曹司の執拗な呪咀が、さまざまな形となって、わが妻と家庭を悩まし脅かし通してきたものに違いありませぬ」
――それは主席の奉行も認めた。けれど、奉行にしろ高家の睨みは恐い。たとえ冤罪の証拠証人をならべ得ても、無罪にするわけにゆかず、死罪以外の処刑もどうかと、ためらわれた。

「じゃあ、お奉行に伺いますが……」
と、孫与力は、処刑判決のさい、日ごろの仏の孫さんにも似ず、色をなして詰めよった。
「この奉行所は、朝廷と民とのためにあるのでなく、高大将家のためにあるものでしょうか」
「孫定、なにを申すか。それはちと過言だろうが」
「でも、お奉行のごとき憚りをもてば、あだかも、高家の私設奉行所のごとき観を、庶民に与えるのではございませんか。……さなきだに、高家の専横と、高御曹司の非行などは、口には出さねど、開封の都民はみな見て知っておりますからな」
「では、林冲の処刑は、どう裁いたらいいと申すのか」
「とにかく、死刑はいけません。死罪だけは、断じていけない。といって、軽罪では、高家の父子もおさまりますまい。死一等を減じて、辺疆の地へ流刑にされてはいかがでしょう」
「さ。どうだろう、そんな処分では」
「大丈夫です。高家の側にも、手ぬかりがありました。副官陸謙の手紙が林家にあったのを、てまえが握っています。あれを陽なたに出せば、奸策歴然ですから、いかに高家たりとも文句は噫にも出せないはずと、てまえは固く信じまする」
末期宋朝の濁世にも、なおこの一良吏があったのである。即日、流刑と決まり、林冲は白洲で宣告をうけた。
当時の慣わし、半裸にして、二十ぺんの棒打ちを背に食らわせ、その顔に刺青する。また、護送となっては、鉄貼りの板の枷が首にはめられ、その錠前に封印がほどこされた。
流刑先は、滄州（河北省）の牢城だった。――牢城とはつまり諸州から集まる罪囚の大苦役場の名。
また、その聴許を要請された殿帥府の高家でも、司法法廷の裁判には抗いかねたものだろう。だまって、その公文書に裁可の官印を捺して下げてきた。
さて。いよいよ罪人押送の日となって、開封奉行所の門を一歩出てきた林冲の姿は、もうこの一と月ほどで肉落ち頬骨あらわれて、足もとすらもなよなよしていた。その日、往来に群れなしていた街の男女や縁故の見送り人たちも。「……これが昨日までの林師範か」と、涙を催さずにいられなかった。
人目を浴びつつ、やがて州橋を越え、都関も出ると、また一群れの人々が待っていた。すると中から林冲の妻と、妻の父が走り出てきて、
「おお聟どの。……待っていた。しばしの別れを、あすこの酒店で」
と、馬子茶屋みたいな店の奥へみちびいた。もちろん、これにはお定まりの賄賂が充分とどいていること。で。そこでの限られた寸時の別れをお互いに泣いて惜しみあう機会はえたが、しかし、妻は身も世もなく、林冲の胸に涙の顔を埋めて離れない。すでに「――時刻、時刻」と、戸外の護送役人が喚き立てても、離れようともしなかった。
林冲は、眦をふさぎ、ここに観念の臍をきめて、わざと酷くいった。
「いつまで、嘆きあっていても、別れはつきない。また、深く考えてみれば、恋々と泣き濡れているだけが愛情でもない。おそらく、この林冲がいなくなれば、高御曹司が、そなたの身や、お舅の上に、またあらゆる毒手を加えてくるだろう。……早くどこかへ身を隠せ。そして、そなたはまだ若い身そ

ら、良縁があったら他家へ縁づいて、わしのことは忘れて幸福に暮しなさい」
彼は即座に、酒店の老爺から、筆と硯を借りうけ、離縁状を書いて、岳父にあずけた。
「お情けないっ。……あなたは私を、そんな女と思っていらっしゃるんですか。いやですっ。……死んでもそんなことは」
妻は悶絶せんばかり、なお良人の膝にしがみついて慟哭する。その間にも、護送の役人は、軒を叩いて、
「早くしろ、早く」
と急く。ついに舅は泣き狂うむすめを無理にもぎ離し、ともに擁して泣き死んだように丸まってしまった。それを見捨てて、林冲の姿を急く腰鎖は、遠い流刑地の途へ仮借なく彼を追いたてていった。
押送役の刑吏は、端公（端役人のこと）の董超と薛覇という男だった。当時、宋代の習慣では、囚人をつれた端公の泊りには、道中の旅籠屋でも部屋代無料の定めだった。だから彼ら小役人は、旅籠へつくなり自身で火をおこし、粟を炊き、出張費稼ぎの小金を浮かせるのを役得としていたから、囚人の食物などは、ただ露命を保たせておけばいいとしているに過ぎない。
東京城の関外へ出てから二日目、小さな宿場町へ黄昏れ頃つくと、とある田舎酒館の前に馬を駐めて、彼らを待っていた男がある。黒紗の袍を着て、卍頭巾、黄革の膝行袴ばきに、馬乗り靴という扮装。そして鞭を逆手に、
「おお端公たち、いまついたか、ご苦労ご苦労」
と、何かすでに、ここでの会合を東京で諜し合せておいたことらしく、眼くばせくれると、端公らは、ただちに附近の旅籠へいって、林冲の腰鎖を部屋の柱に縛りつけ、そして早速、以前の田舎酒館へ引っ返してきた。
卍頭巾の男はもう、卓に酒肴を並べさせて待っていた。そして、銀子二十両ずつ、二た山にして、彼らの卓の鼻先においてある。
「さあ、遠慮なく飲まんか。これから滄州まで何百里の道のりだが、途中にはもうろくな酒肴には出会わんぞ」
「へい。どうも恐れいります。……が、なんともはや、殿帥府副官ってえお偉い方の前じゃ、ついその、かたくなっちまいやしてね」
「なにも公ではなし、そう恐れいらんでもいい。こちらも人目をはばかることだからな。そこで開封奉行所を立つ前日、そのほうどもの私宅へ、そっと使いをやっといた例の件だが、心得たろうな」
「……そ、それがですよ旦那。弱りやしたな。こう二人で、首つき合せて相談してみたんですが、なにしろ奉行所のほうじゃ、必ず囚人の生命だけは無事流刑地まで押送せよ、万一あらば端公もまた、罰せらるべし……とございますんでね」
「そんなことはわかっとる。わかっとるからこそ貴様たちに密々こうして高家よりお頼みとしてお吩咐がくだったのじゃないか。それができんとあっては、この副官陸謙もただでは帰れん。いやか」
「と、とんでもない。てまえどもみたいな端役人に、ご大官さまから内々のお頼みときちゃあ、是も非もなく、お引受けは否めませんが、なにしろ、日ごろは薄給な身分ですし、家

には女房子年寄まで、うようよ腹を空かしているような暮しなのでもし職にでも離れますと、その、その日から」
「だから申しておるじゃないか。……そのほうたちの手で、滄州までの途中において、あの林冲をうまく殺しおおせたら、褒美の金はもちろん、生涯、高家の庭番にでも何にでも使って面倒はみてやる、食うには困らせはせんと……」
「へい。そこはまことに、ありがたいお話で、一生仕事だぜと、こいつにも言ったんですが」
「どうも煮えきらんやつらだな。何をまだ、そんなに思案投げ首をしているのか」
「ただの囚人なら、一も二もござんせんがね、なにしろ豹子頭林冲といっちゃ、禁軍のご師範、やり損なったら」
「たわけめ。なんのための首カセや腰グサリだ。人なき山中で一棒をくれてもよし、谷添い道で突き落し、あとから息の根とめてもいいではないか。……ただしだぞ、林冲を殺したという証拠には、彼の顔から金印（いれずみ）の皮膚をはがし、それを証拠に持ち帰れよ。よろしいか。さあ合点がついたら、元気をだして大いに飲め。――そしてそれなる銀子二十両は、当座の手付け金として渡しておくから収めておくがいい」
賄賂は彼ら端役人の端公には、日ごろも収入に数えている常習のものだが、こんどのことは相手も違うし、ケタも違う。一生涯の運のつかみどころかとも思われた。
そこで、陸謙と別れた翌朝、彼ら端公二人は、またも片手に水火棍（三尺の警棒）をひッ提げ、林冲の背をしッぱだき、しッぱだき、峨々たる山影の遠き滄州の長途へ、いよいよ腹をきめて立っていった。

十二　世路は似たり、人生の起伏と。流刑の道にも侠大尽の門もある事

俗に、滄州までの道は二千里（一里ヲ六町ノ支那里）といわれている。
道々は難所折所。護送役の端公（獄役人）二人は、毎日林冲の縄ジリをとって追いたてながら、
「さて、どこでこいつを殺したもんだろう。ただの囚人なら雑作もねえが、なにしろ禁軍八十万の師範だ。いくら首枷がはめてあるからって、もしやり損なったらこっちの首がすぐ失くなる」
ついつい、十数日はいつか歩いてしまった。殺意もこう念入りでは、機会もなかなかつかめない。
「オイ、薛」と、端公の一人が、もう一人の董へささやいた。
「毎日毎日、これじゃあ容易にラチはあかねえぜ。なんとか、そろそろ手を下さねえと」
「わかったよ。いちどに息の根をとめようとするから難しいんだ。あしたからは、林冲の足をあの世へ向けて、冥途の旅の一里塚を一ツ一ツ踏ませてくれる。そのあげく、ばッさりやりゃあ、なんの仕損じることがあるもんか」
その晩。――山の旅籠につくと、端公の薛は、いち早く、裏口へ廻って湯玉のたぎるような熱湯をたたえた洗足盥を抱えてきた。
「おい、林師範、これで足を洗うがいいぜ。疲れた足は、よく湯に浸すに限るんだ。夜もよく眠れるからな」

「や。これはどうも」
「なんだい。ははあ、首カセが邪魔になって、うまく体が屈めねえんだな。よしよし、おれが草鞋を解いてやる」
「とんでもない。お役人が囚人の足の世話なんぞを」
「いいってことさ。まア出せよ足を。……都じゃそうもいかねえが、長途の道づれ、なんの遠慮がいるもんかね」
親切ごかしについ乗って、林冲は、それが熱湯とも知らず、うッかり盥のなかに足を突っこんだ。あッ――と退くまもおそし、足くびはやけただれ、彼は足くびを抱えて、悶絶せんばかり転がった。
「てへッ、なんでえ、大げさな」
端公二人は、見向きもしない。彼らは、木賃の定例どおり、例の自炊にとりかかり、寝酒を飲んではしゃぎ合った。もちろん林冲へも馬の飼料でもくれるように木鉢に盛った黄粱飯が、首カセの前に置かれはしたが……。
けれど火傷のくるしさ、食欲も出ず、夜すがら彼は眠れもしなかった。あげくに、翌朝は新しい草鞋を穿かせられたので、数里も行くと、草鞋の緒は血にまみれ、乾いた血と土とが、終日、足の皮膚を破った。
「おいおい林師範。どうしたんだい。そんな足つきじゃ滄州までは半年もかかっちまうぜ。早く歩けよ、早くよ」
「むむ、どうにも歩けぬ。これでもあぶら汗なのだ」
「なに、歩けねえと」
薛が、水火棍（獄卒棒）を振り上げるのを、董は止めて、
「まあまあ、そう短気を起すなよ。そのうち足も癒るだろう。さあ、歩いたり歩いたり」
棒の先で、軽く林冲の背や腰を小突いてゆく。撲られるより、このほうがはるか辛い。
それから三日目。有名な野猪林という原始林へかかった。夜ごとの睡眠不足と疲労に、さしもの林冲も、折々、立ち居眠りをもよおすらしく、混沌とよろめいていた。眼顔を見合せた端公の二人は。
「ああ、くたびれたな。どうだい、ちょっと一と昼寝していこうじゃないか」
「よかろう。だが、縄ジリをどうする？　おれたちがとろりとしている間に、もしや林師範に逃げられちゃあ大変だが」
林冲も休みたかったので、つい言った。
「どうか、ご心配のないように、拙者の体を、木の根へ、厳重に縛って下さい」
「いいかい。じゃあ、すまねえが、ちょんの間、そうしてもらおうか」
林冲は、彼らのなすままに委せていた。彼らは、その手頸足頸まで、がんじがらみにして、林冲を大樹の幹に縛し終ると、やにわに、
「よしっ。もう、こッちのもんだ」
と、躍り上がった。その打って変った形相に、
「あっ。なにをなさる」と、林冲は叫んだものの、もう遅い。彼らは左右から水火棍を振り上げて、
「やい林冲、おれたちを恨むなよ。おめえにとっては、ここまでがこの世の定命。また、おれたちには出世の門だ。――林冲を殺して面皮の金印（刺青）をはぎ取って帰れば、生涯安楽にしてやるとは高大将軍家のおさしがね。あの陸謙っ

ていう副官の命令さ。恨むなら、そっちを恨め」
いうやいな、林冲の頭蓋骨もくだけろとばかり、二つの棒が風を呼んだ。ところが、一棒はカンと異様な響きを発して宙天に飛び、一棒は腕ぐるみ捻じ曲げられて、とたんに端公二人は大地へ叩きつけられていた。

ここに現われた者は、林冲の難を聞いて、都門開封から後を追ってきた花和尚の魯智深だった。
「さあ、わが輩が追っついたからには、もう、てめえたち邏卒は、召使いも同然だぞ」
智深はそこらの立ち木へ向って、禅杖を振るい、一撃二撃してみせた。およそ、どんな生木も巨象にヘシ折られたように肌を裂いて砕けた。端公二人は、慄えあがって声も出ない。
「師範。情けないお姿になられたなあ」
花和尚は涙もろい。こう労わりつつ、林冲を木の根から解いて、さて。
「……どうする豹子頭（林冲）。おぬしはここで逃げたいか。それとも滄州の流刑地まで曳かれてゆく気か」
「おお花和尚……」と、林冲は再会のよろこびに咽びながら
「拙者も男だ。おのれ一人助かってはいられない。逃げれば、東京に在るいとしい妻や舅などに、この大難の身代りをさせるような結果になろう。やはり拙者は刑地にいって、苦役に服すよ」
「そうか。……ぜひもないなあ。ならばせめて、滄州の近くまで、わが輩が送っていこう。さあ、この和尚の背に、おんぶするがいい」
「冗談じゃない。囚人の身が」
「なんの遠慮だ。大相国寺の菜園で、おたがいは義の杯を交わした仲じゃないか。きさまはわが輩の弟分だぞ。さあ兄貴のいうことをきけ」
こうして、数日の旅は、花和尚が彼を背に負って歩き、端公らは、荷持ち、走り使い。また旅籠旅籠では、下男のごとく、追い使われた。
おかげで林冲の足はすっかり癒え、毎日の食養も充分にとられたから、以前にもます健康に復してきた。しかも道づれは刎頸の友、端公は従者のかたち。――行くてに待つ運命も長途の苦も忘れて、思わず数十日は愉しく歩いた。
「兄弟。名残りは尽きないが、明日はもう滄州でまえの近県に入るそうだ。今夜はひとつ、別れの思いを酌み合おう」
花和尚は、その夜の木賃宿で、鄙びた別宴を設けさせた。お互い心ゆくまでと、酌しつ酌されつはしていたが、さて離愁の腸、酔いもえず、
「……豹子頭。おぬしの心がかりは、おそらく都にある愛妻や舅の身の上だろうが、智深はまだ当分、大相国寺の菜園にいるつもりだ。よそながら見ているから案じなさんなよ。それとここに持ち合せの銀子がある。地獄の沙汰もなんとやら、これを持って」と、二十両ほど、彼に渡し、また傍らの端公たちにも、小粒の銀子を投げ与えて、
「やい、牛頭馬頭」
「へい」
「あしたから、この花和尚がいねえからって、またぞろ師範に酷いまねをしやがると、きかねえぞ。どうせてめえたちも、

お役がすめばすぐ開封東京へ帰るンだろう。よくわが輩の顔を覚えておけよ」
「わ、わかり過ぎるほど、わかっております」
翌朝、木賃の軒を出ると、智深はかさねて、林冲に別れをのべ、風のごとく、開封東京の空へ引っ返していった。
その日、一行は滄州の県内に入った。
次の日である。はや何となく、部落も郊外のさまを思わせ、道に見る村娘の姿やら童の群れも、人里くさい賑わいが濃くなっていたが、やがて、村の用水川らしい石橋の附近まで来ると、
「おお、おお。柴家の大旦那が、狩猟からお帰りとみえる」
と、そこらの河畔で川魚をとっていた男女も、畑の物を手車に積んでいた百姓も、みな道の端によって、なにやら地頭の行列でも迎えるようなさまだった。
端公の一人が、土地の者に訊いていた。
「そこの石橋の彼方に、豪勢な長者屋敷の門が見えるが、あれが柴家というのかね」
「へえ。おまえさん、柴進さまを知らないのかい。滄州通いの囚人送りの役人がよ」
「つい、聞いていないが、この界隈で、そんな有名なお人なのかね」
「この界隈だけじゃないよ、柴進はお名だが、通り名は小旋風、貧乏人にはお慈悲ぶかく、浪人無宿者なども、何十人となく、いつも食客として置いているほどでさ。たとえば、お前さんたちみたいな流刑者でも、ご門前へ寄れば、きっと施し物をくださるか、一晩泊めて、労わってやるとか、とにかく、たいそうな侠客大尽さまなのさ」
「ああ、思い出した。それじゃあ、なんでも滄州の近郊には、宋の太祖武徳皇帝のお墨付を伝来の家宝に持っているどえらい名家があると聞いたが」
「それさ。それが今いった、小旋風柴進さまというこの土地の侠客お大尽。……あっ、もうおいでなすった。あのお馬の上のお方がそうだよ」
――見ればなるほど、一団の人馬が、上流の川添い道から下ってくる。
狩猟の帰りとは、ひと目でわかった。大勢の従者のうちには獲物の猪、鹿、尾長鳥などを担っている小者もある。さらに柴進その人は、巻毛の白馬に覆輪の鞍をすえて跨がり、かしらには紗の簇花巾、袍（上着）はむらさき地に花の丸紋、宝石入りの帯、みどり縞の短袴に朱革の馬上靴といういでたち。
年ごろは三十四、五か。龍眉鳳目、唇あかく、いかにも洒々たる侠骨の美丈夫。背には一壺の狩矢、手に籐巻の弓をかいこんでいた。
「やっ。……ちょっと待て」
すでに行き過ぎんとしたせつな、柴進は急に振り向いて、従者の一人に、こういった。
「――あの道端に見える滄州行きの首枷人を、護送の端公に断って、ちょっとこれへ呼んでみい。……どうも、ただ人とも思われぬ骨柄だ。日々、滄州送りの囚人を見ぬ日はないが、あれなる男のような人態は見たことがない」
従者はすぐ走って、林冲と端公を、彼の前に連れてきた。
この一機縁が、やがて豹子頭林冲の運命を大きく変えたも

のとは、後にこそ知られる。――しかしその場では、名乗り合ったすえ、
「さては、わが目にたがわず、あなたは先ごろまで、禁軍ご師範役として、武林に名の高い林冲どのでおざったか。――わしのもとにいる食客や若い者でも、都にありし日、あなたの教導を受けたという話はかねがね何度も聞いている。……ともあれ、ぜひ今夜は、てまえの屋敷に一泊していただきたい」
と、伴われて、柴家の門を、何気なく潜ったまでのことにすぎない。
いや、その夜の歓待の宴でも、一挿話はある。
大勢の家人食客の中で、皆から「洪先生、洪先生」と呼ばれていた傲岸な一武芸者があった。
彼もしきりに、飲んではいたが、柴進がひたすら礼をつくして、林冲を敬い、その骨柄を賞め、あまっさえ洪より上席にすえているので、洪先生たるもの、内心甚だよろこばない風なのである。
とも気づかず、柴進は上機嫌で、
「これこれ、二人の端公にも、杯をやれ。そして銀子、反物など、なんでも欲しい物を与えるがいい。その代り、こよい一夜は、柴進の責任において林冲どのの身はあずかる」
などといっている。もちろん、それらの賄賂は、首枷を脱らせる鍵代なのだ。端公にしても、恐い眼にあうよりは、ふところに実入りのあるほうがいいのはいうまでもない。
だからこの夜ばかりは、林冲も首枷なく、心から馳走になった。ところが、それも、洪先生にはおもしろくない。「……林冲の武芸とて何ほどのことやあろう。しかも流刑の囚人ではないか」と、蔑みきッている眼ざしだ。
「……ははあ。洪先生、ひがんでいるな」
宴も酣となるにつれ、柴進もやっと気づいた。折ふし庭上には、冬の月が鏡のごとく冴えていた。彼はそこに壮烈な一図を描きだしてみたい思いにそそられだしたらしい。
「――どうです洪先生。日ごろは宅の若いもんや田舎剣者ばかりがお相手で、せっかくの神技も振う折はありますまい。ここに禁軍の前師範林冲どのが見えられたこそ、もっけの倖せ、一手の試合をおためしあってはいかがです」
「むむ。それは面白そうな」
待ってましたと言いたいところらしいが、洪先生は重々しく構えこんで、じろと林冲のほうを見た。
「異存はござらんが、なにぶん、それがしの剣たるや、仮借の相成らぬ強剣だ。それご承知の上なれば」
「林冲どの。洪先生はああいうが、あなたの方は」
「さ。拙者の棒術は、お見せするほどの妙技ではありませんが」
「では、庭上に出て、願おうか」
ここで、よろこんだのは、二人の端公だった。洪先生が大剣を払って、月下の庭に立ったのを見たからである。もしその大剣の一颯の下に林冲が敗れ去れば、手濡らさずで自分たちの目的も達しられる。――そう考えて、満場の人々の興味とはべつな固唾をのんでいるていだった。
ところが、月下の試合は、一瞬にして、林冲の勝利に帰してしまった。

彼は、棒をとって、立ち向ったのだが、戛然、白刃と棒が相搏ッたと思うやいな、どこをどうして打ち込んでいたのか、誰の眼にもとまらなかった。明白なのは、腕を折られた洪先生が、地にヘタ這っていた姿だけである。

「いや、さすがさすが。聞きしにまさる見事さではある。かかる技をお持ちしていながら、牢城の苦役につかれねばならぬとは、さても何たる運命のいたずらか」

柴進はひとしお同情を深めたらしい。――次の日、彼が立つ折には、日ごろ親しくつきあっている滄州の長官、牢城の管営（獄営奉行）、また差撥（牢番頭）などへ宛てて、それぞれ添書を書いた上、大銀二十五両二封をも、あわせ贈って、

「まあ、おからだを大事に勤めてください。いずれ冬着も届けさせましょう」

と、力づけた。さらに、また、二人の若者を付けて、牢城門外まで送らせるという親切気のかぎりであった。

十三　氷雪の苦役も九死に一生を得、獄関一路、梁山泊へ通じること

「……ああ、ここが以前からよく、この世の外のように聞いていた滄州牢城の大苦役地か」

死者の肌を思わす凍てきッた大陸の線。飛んでゆく鴻の影も、それの生きていることが、不思議に見える。

「こんなところで、苦役につこうとは」

林冲は、いくたびも憮然とした。

それにしても、柴進の添書や銀が、ここでは、どんなにものをいったかしれない。就役者はまず、百ぺんの殺威棒で打ちのめされ、いちどは気絶して〝地獄への生れ代り〟をやらせられるのが掟だったが、それものがれた。

また、管営の面前で裸体にされ、四つン這いにされ、肛門を金棒でほじられ、やれ舌を出せの、前の物の毛を剃れのと、あらゆる非人間的な侮辱と翻弄に会うものが通例なのだが、それもまずお目こぼしにあずかった。

そして、登簿、金印調べまで、すっかり終って、これで労役につく仕事場がきまれば、まず地獄人口の一員に数えられて、果て知れぬ苦役生活が始まるわけだ。

「おい新入り、こっちへきな。――てめえの仕事は、獄神堂の番人ときまった。おなさけだぞ。ありがたいと思いねえ」

差撥は彼を拉して、途方もなく広い刑務区域をぐんぐん歩いていき、やがて閻魔大王の祠ってある古い一堂を指さした。

「ここはな、おい。天王堂ともいうが、掟に服さねえ獄囚は、片ッぱしから、しょッ曳いてきて、この前で土埋め、のこぎり引き、耳削ぎ鼻削ぎ、いろんな重刑に処す流刑地の内の死刑場だ。だがよ、おめえは朝晩、線香を上げ、掃除などして、番人役を勤めていればいいわけだ」

「それは、何とも倖せでした。他の服役者にくらべれば」

「そうよ。よっぽど恩にきなくては罰が当るぜ」

「その上にもですが、なんとか、お計らいをもって、首枷をおゆるし願われませぬかなあ」

「除ってくれというのか。ふふん、そりゃあ、だいぶ物費りになるがね」

「銀子なら、なおこれに所持する限りのものは、いといませ

んが」
「そうかい。もっとも、おめえのところには、まだ柴家からの差入れもあるだろうしな。むむ、まかしておきな」
差撥は、銀をうけとって戻ったが、やがてその夕きて、首枷をはずしてくれた。
冬は深まる。
大陸の氷地はかんかんに凍てきても、数万の服役者には一日の休みもない。ボロ布と垢と水洟と眼ヤニにまみれた骨ばかりの人々が、朝は暁天から蟻のごとくゾロゾロ出てゆき、夕には疲れた煙のように、どんよりと簇り戻ってきて、やがて眠る。
苦役場は三十里四方もあろうか。農耕、土木、鍛冶、木工、染色、皮革なめし、車輛作り、牧畜、酪農、機織など、その生産は、あらゆる部門にわたっている。だが、ここでの消費物資ではない。ほとんどが都へ輸送され、宋朝の贅と権門の奢りと、軍事面に費やされる。
が、林冲は、柴進のおかげで、苦役だけは舐めずにすんだ。柴進からの差入れ物はすべて、獄吏たちに分け与えていたから、彼だけには、別扱いの自由が黙許されていたわけだった。
時折、買物などしに、街へも出かける。
すると、ある日である。後ろのほうから「……もし、もし」としきりに呼ぶ声がする。そして、ひょいと振り返った彼の前へ、
「おっ、やっぱりそうだった。林師範さま、李小二でございますよ。……いったいまあ、どうしたわけで、こんなところへ」
飛びつくように寄ってきた町人姿の男があった。
「やあ、これは恥かしい。そちは以前、開封の家の近所にいた酒屋の手代ではないか」
「どうも、あのせつは、まことにご恩にあずかりました。今もって、女房ともよくお噂などして、忘れてはおりません」
「はて。なにか世話でもしたことがあったかなあ」
「若気とは申しながら、とんだ費いこみをやりまして、あぶなく主人から役所へ突き出されるところを、お助けいただいたことがございます。そのせつお立て替えくだすったお金すらまだお返ししてもおりませんで」
「なんだい、ずいぶん古い話じゃないか」
「まあ、それはともあれ、ちょっと手前どもまでお越しくださいませんか。その後、面目なさに、主家を離れ、流れ流れて、この滄州くんだりまで来てやっと落ちつき、いまでは、小さい飲み屋をやっておりますんで。へい、きっと女房も、びっくりするに相違ございません」
これが縁で、その日を皮きりに、彼は街へ出るごとに、李小二の店へもよく立ち寄った。
裏街の小料理屋で、女房と小僕を使って、李小二は厨房も自分でやっている。牢役所の獄吏にも馴じみが多いので、役所へきたついでには、天王堂へもきて、林冲の洗濯物や縫物を見てくれたり、肉饅頭をおいていったり、とにかく気心のいい夫婦なので、林冲もとんだいい知人をえたと、よろこんでいた。
すると、その年も越えて、或る日のこと。
「た、たいへんですぜ、林冲さま」

「なんじゃ李小二。顔色を変えて」
箒を手に、そこらを掃いていた林冲は、彼があたふたと求めるまま、急いで、堂内に入り、そこの一房の扉を、内からぴったりと閉めた。

李小二が店をすてて告げにきたのを聞けば、なるほどこれは、林冲の身にとって、容易ならぬ凶変を思わす予報にちがいなかった。
今日の午下がり頃だという。
ぶらりと、彼の店へ入ってきた二人づれの横柄な来客があった。
一人は、色の生ッ白い小づくりなにやけ男。もう一人は軍人らしい体つきの赤っ面。ともに、年は三十がらみだ。何気なく「いらっしゃいまし……」といったとたんに、李小二はぎょっとした。どうも都で見た顔だと思ったら、その赤っ面のほうは、たしかに高大将軍家の副官陸謙。
はて、こいつア何か？　――と直感したので、女房を客のおあいそに出し、酒、料理などの註文を聞いたり、それとない雑談を、厨房窓からきき耳たてて窺っていると、やっぱり開封弁だし、またしきりに高将軍だの、高家だのという囁きが飛びだしてくる。
それはまだいい。ところが、そのうちにだ、
「――おい、店のおやじ、途中から使いは出してあるが、やがてほどなく、牢城営の管営（奉行）と差撥（牢番長）がこれへ見えるんだ。そしたら、後の客は、入れてはならんぞ。店は買切りにしてやるからな」というご託宣。
果して、まもなく、管営と差撥がやってきた。
料理を増し、酒を加え、しばらくは、さり気なく飲んでいる様子だったが、そのうち笑い声もやみ、急に、ひっそりしてしまった。
李小二は、女房の尻を突ッついて、耳打ちした。彼女は眼でうなずいて、そっと、料理場と店の境にたたずんで、聞き耳を澄ました。奥では李小二が、眼を凝らしている。そのうちに、女房の腰から足の辺がわなわな慄えだしてきた……。なにかよほど恐ろしいことでも聞いたに違いない。
卓に首をよせあっていた四つの顔は、胸を上げて笑い合っていた。陸謙の手から、管営と差撥の両名へ、莫大な銀が手渡された。
――そしてまた、酒飯に移り、やがて帰り去ったのは、ついさっきで、まだ街の屋根を夕陽が赤く染めていたころだった――とある。
ここまでの話を聞いて、林冲も驚いた。
「では、陸謙と一しょのにやけ男は、富安という野幇間だろう。やつは、高家の御曹司の腰巾着といわれている佞物。だがその二人が遥々、なにしにこの滄州へやってきたのか」
「あなたを殺しにきたんですよ。……と聞いたんで、女房のやつは、ぞうッと、背すじが寒くなって、竦ンじまったわけなんで」
「銀と権力で、ここの管営と差撥を、買収しにきたわけなんだな」
「そうでしょう。なにしろ、大変なことになりましたぜ。なんとか、ご要心をなさらなくっちゃあ」

「まあいいよ。どっちみち凶状持ちとなった身だ。李小二、女房にもいってくれ、心配するなと」
しかし、さすがに、李小二が帰った後は、なんとなく安からぬものがある。その夜の夢見もよくはなかった。
「ようし。それほどまで、執念ぶかく、この林冲の一命を狙うとあるならば、いっそ、それもおもしろい。この命、こっちもただではくれてやれん」
かねて何ぞの場合にはと、ひそかに買い求めて閻王像の壇下に隠しておいた朱房のついた短槍と短剣。その短剣だけをふところに呑むと、彼は用事をよそおって、ぷいと街へ出ていった。
そして、広くもない滄州の街、やつらの姿を見かけたらただ一突きにと、逆に刺客を狙って、その影を探し求めていた。
数日は、何事もない。相手の危害が見えないのと同時に、彼らの姿にも出会えなかった。
妙なもので、自然、研げていた気もゆるむ。しばらく李小二の店へも寄らなかったが、十日目ごろの午後、ちょっと覗いて、
「変だなあ、あれきりだが？」
と囁くと、夫婦とも、ほっとした顔で、
「それはまあ、なによりでございますよ。このままで何事もなければ……。ま、ひと口、召しあがっていらっしゃいませな」
「そうしようか」
と、久しぶり、一酌して、夕刻前に、営へ帰っていった。
――すると、点視庁からの呼び出しで、
「明日から、刑務場十五里先の東門外にある馬糧廠へ転務を命ずる。起居は中央の飼糧小屋の一つにとること」
という職場がえの命令である。
そこも割りのいい役らしい。飼料の出し入れには袖の下も多いとかで、囚人仲間では、羨望の職場だ。
「承知しました。さっそくに移ります」
多くもない荷物を持ち、彼はその夜のうちに、東門外へ引っ越した。折から飈々たる朔風の唸りが厳冬の闇を翔け、空には白いものが魔の息吹きみたいにちらつきだしていた。
――見れば、荒れ崩れた長い黄土の土塀、曲がりかけた観音開きの木戸。入って、まん中の一番大きなまぐさ小屋が、番人の住む台所付きの建物らしい。
黄ばんだ寒灯の洩れてくるところから、先任の老番人が、彼の跫音に首を出した。
「ほう、おまえかね、こんどのまぐさ番は。昼、わしのほうへも、天王堂の者と入れ代れというお差紙がきていたが」
「やあ、遅く来て申しわけない。食器や雑器など、天王堂へ置き残してきたがらくたもあるが、よかったら使ってください」
「そうかい。ここにも、おらの使っていた酒瓢箪やら、鍋や欠け茶碗なぞもころがってるよ。よかったら使うがいいぜ。それとな、夜具はこの隅に。もっと奥には、あんなに炭俵が山と積んである。なにしろ寒いから、冬中は炉に火は絶やされねえでの」
「買物はどこへ出ますか」
「そうそう、西の藪道を二、三里行くとな、ちょっとした酒

屋や肉屋の用は足りる。ただ、馬糧廠は、まぐさ盗ッ人がよく狙うところだから、それだけは用心しなよ」
小屋の家主は、かんたんに入れ代った。
天王堂とちがって、板屋葺の古い建物。寒いことおびただしい。なるほど、大きな炉やら炭俵の山があるわけだとうなずかれる。
馴れぬせいか、最初の一夜は、寒さでガクガクと熟睡もできなかった。
明けてみると、外は大雪。しかも終日降りやむ気色もない。
林冲は退屈をおぼえた。
すると夕方。差撥の部下らしい巡邏が、小屋の隙間から内を覗いていった。その跫音も、吹雪の吠えにすぐ掻き消え、小屋の灯はまたすぐもとの寂寞に返ってゆく。
「ああこんなとき、酒の買い置きでもあれば少しは愉しめるんだが」
味気ない炉に、しきりと、李小二の店が恋しくなる。だが街は遠すぎるし……と、ふと壁を見ると、風流な恰好をした酒瓢箪がかかっている。
「そうだ、西の藪道を二、三里行けば酒屋もあるとかいっていたな。どれ、一と走り行ってくるか」
その瓢箪を、朱房のついた短槍の先にくくりつけ、羅紗張りの笠に、蓑を着込み、がらと吹雪の戸をあけて外へ出た。
――が、気にかかったらしく、また内へ戻って炉の火へ厚く灰をかぶせ、灯を消し、洞然たる屋根裏まで見通して、
「まず、こうしておけば、間違いなかろう?」
呟きながら、小屋の錠をおろして出ていった。

大陸特有な魔の白夜。
積雪は沓をうずめ、朔風は横なぐりに地を掃いて、咫尺もわからない。息はつまるし、睫毛には雪片が氷りつく。
「おや、何の古廟だろう?」
半里ほどきて、ふと息を休めた道の傍ら。道祖神やら何の廟やら知れないが、林冲の心に、ふと仏心でもうごいたのだろうか。ひたと、雪中に額ずいて、
「そも前世の宿業にや、林冲、罪のおぼえもなきに、この獄地に流され、かくのごとき、生ける醜骸となっております。あわれ、なにとぞご加護あらしめたまえ。遠き都にあるわが妻をも護らせたまえ」
と、口のうちで祈念して、やがてまた、歩きだした。
やっと辿りついた小部落の酒屋で一ぱいひっかけ、さらに瓢箪には酒、ふところには焼肉の包みを抱き、やがて帰り道についたころは夜も更けていた。雪はいよいよ烈しく、風は足に逆らい、満身これ飛雪の姿で、笠のつばを抑えつつ、もとの馬糧廠まで馳けもどってきた。
そして何気なく、例の観音開きの木戸口を蹴開き、内へ入ってみると、こはいかに、他のまぐさ小屋は無事なのに、自分の寝小屋の一棟は、雪の重さに圧し潰されたのか、見事、ぺしゃんこになっている。
「はアて。これは弱った。……これじゃあ、飯も炊けねば、寝場所もない」
途方に暮れたとはこのことか。
「こうしていては、この身まで、雪の中に埋められてしまう。

そうだ、今夜はさっきの古廟に寝て、夜が明けてからの思案としよう」
板屋根の一部をめくッて、心覚えのところから蒲団だけを引っ張り出し、それを担いで、村道の古廟まで返ってきた。
廟の中は案外広い。ひょいと見ると、金色の鎧甲をつけた恐ろしい武神像と、二匹の小鬼が祠ってある。また壇には、供物だの蝋燭の燃え残りだのたくさんな色紙などが散らばっていた。彼は、その前に夜具をのべて、
「やれ、一寸先はわからぬもの。妙なところで夜を明かすことになったもんだな。だがまあ、瓢箪に酒のあるのが何よりの倖せ」
さっそく焼肉の包みを解いて肴とし、瓢の口から冷や酒を仰飲っていた。
「ああ、いいあんばいに酔ってきた。これでぐッすりできれば」
ごろと、身を横ざまに、手枕となったが、やはりいけない。着ている白木綿の服や肌着を透して雪水がジミジミと沁みてくる。――のみならず、どこか遠くで、バチバチと妙な響きが、雪風にまじって聞えてくる。それがまた耳について、寝つかれなかった。
「や、や。変に明るいぞ」
ぎょっとして、彼は飛び起きた。廟の破れ壁の隙間から、赤い夜空が見えたのだ。
「しまった！　まぐさ小屋の方角だ」
彼のあたまには、すぐ小屋の炉の火がその原因と考えられていた。まぐさ小屋は一棟ではない。たちまち馬糧廠一面の火の海となるやもわからない。
「すわ、こうしては居られぬわえ」
枕もとに立てかけておいた朱房の槍を持ち、すぐその消火のために馳け向おうとしたときである。彼はギクと足を立ち恟めた。
廟のすぐ前で、なにやら人声がしているのだ。聞くともなく、耳をすましていると。
「うまくいったなあ、管営。……やあ、差撥もご苦労だった。これで林冲も、こんがりと、黒こげになったろう」
――声には都で覚えがある。高大将家の副官、陸謙にちがいない。
それに答えているのは、これも紛れない管営と差撥だ。もう一人いるのは、陸謙の連れの富安だろう、かなたの猛火を眺めあいながら、しきりにげらげら笑っている。
「まったく、管営さんや差撥さんの大手柄でしたな。この大雪を幸いに、部下に命じて、林冲の寝込みを計り、小屋の腐れ柱を一気に除らせたというんだから堪りませんや。大雪の重さはあるし、やつは、屋根裏の梁に圧されて、寝たまんまのお陀仏となったに相違ありません。林冲にとれば、まあいい往生でさあね」
「いやいや、それだけではまだ、完全とは思われんので、われわれ両名が、ここへ来がけに、あの潰れた屋根へ、さらに松明十本ばかり投げ捨ててきたのでござる。これならばもう万に一つも彼奴の生きのびるおそれはない」
「さすが管営。ご念の入ったことだ」
ほめそやしている陸謙の声はつづいて。

「――これで、身どもも主家の使命を見事仕遂げ、面目をもって都へ帰ることができる。いずれ帰府のうえは、高家より足下たちへご褒美の沙汰もあろうが、では、これで」
「はや、お立ち帰りで」
「むむ、人目については、相互のためによくないからな。旅舎へ戻って、早暁に出立しよう。富安、まいろうか」
別れ去ろうとする刹那。――林冲は、内から廟の扉を蹴開いて、
「待てっ、下種ども！」
いきなりまず、手近にあった差撥を短槍の先に引ッかけて、びゅっと、黒い血しぶきとともに刎ね飛ばした。
「や、や、や。なんじは？」
「腰が抜けたか。林冲はここにいる」
「ぎゃっ。た、たすけろ。助けてくれ」
「卑怯者っ。なにをほざくか」
すでに、林冲の豹眉は、彼本来のものに返っている。豹身低く、短槍の一閃また一閃、富安を突き刺し、あっというまに管営の大きな図う体も串刺にしてしまい、つづいて雪の中を逃げまろぶ陸謙の影へ向って、
「佞物。どこへ行く気か」
びゅんと、手の槍を征矢のように投げつけた。槍は彼方の背に立ち、異様な絶叫をツンざいて、夜目にも鮮らかな血の色がぱッと四方を大きく染めた。
「ああ、ついにおれは四人の軍官吏を殺した。宋朝のもとでは、いまは身を容るるところもない犯人となった」――林冲はみずから慄然としたが、身を翻して廟の前に額ずき、武神の像に礼拝して独り何度もいっていた。
「思うに、もう宵のうち、まぐさ小屋が仆れていなかったら、この林冲は彼らの悪計どおり、梁の下に圧し殺され、さらに焙り殺されていたかもしれません。それが助かったのは、廟の神意と存ぜられる。まさに、天のお助けだ。この先とも、林冲を護らせたまえ」
そして、朱房の短槍を持ち直すやいな、夜の明けぬまにと、雪を蹴立てて、その場から姿をくらました。

馬糧廠の火の手も、この積雪で、まもなく下火にはなったらしい。しかし一時は、警板や警鐘の乱打に、刑務場から附近の村々でも、みな起き騒いで、非常の夜警についていた。
そのため、林冲はまったく逃げ道を封じられ、あっちこっちを、袋の鼠のように走り廻ったが、ままよとばかり、ついに街道口の大焚火を見て、その仲間へ割りこんでいった。
「うう寒い。すみませんが、すこし焙らせておくんなさい。皆さんも、ご苦労さまで」
「さあさあ、ぬくもるがいい」と、四、五十人の村民たちは、何気なく譲ってくれたが「――おや、おめえは村の者じゃあないな。面に刺青があるじゃねえか？」
「へい、牢城営の使いのもんでございますよ」
「牢営のお使いだって、おいおい、いやだぜ、そう側へ寄ッてくれるなよ。おめえの着物は血だらけじゃないか」
「あ、この血ですか。なあにこれは牛を屠殺したときの汚れでさあ。じつあ昨晩、管営さまと差撥さんの官邸でお客のご招待があったんで、牛やら羊やらの屠殺をいいつけられたも

のでございますから」
「そうかね。それにしちゃあ、いやに生々しいが」
大勢の村民たちはみな、不気味な顔をしあったものの、流刑囚の兇悪さは日ごろ見ているので、それ以上は何も問わない……。また林冲も、ひそかにこれはまずいと警戒しだしたが、ふと見ると、大焚火のそばには、村民たちが寒さしのぎに飲んでいた酒瓶が幾つも開けてある。それを見てはもう矢もたてもなかった。
「すみませんが、そいつを一杯、振舞ってくれませんか」
――しかし、誰も黙っている。うんともいわず、すんともいわない。
林冲は「えい、面倒な」と勝手にそこらの器を取って二、三杯飲んでいた。
ところが、その間に、古廟の方から走ってきた者が、後ろの方で、なにやらコソコソ耳打ちし合っていたのだった。やがて林冲のそばへ来て、
「おまえさん、よっぽど酒に渇えていなさるんだろう。さあ、こんなときだ、飲むさ。存分、飲んでいくがいいや」
と、こんどは頻りにすすめだした。
もうこの辺でと、酒の碗をおきかけていたが、つい林冲はまた手に取った。そしてたちまち半壺を飲みほし、さて、礼を言いながら起ちかけようとしたときである。向う側にいた一人の男が、ぱっと林冲の頭から投網をかぶせた。
「それっ獲ったぞ」
とたんに、彼の上へ、棍棒、鈎棒、鳶口、刺叉、あらゆる得物の乱打が降った。そして、猪の亡骸でも担ぐように、部落の内の籾干場へかつぎ入れ、
「こいつはおそらくただものじゃねえぞ。夜明け次第、管営さまのお役所へ届け出ろ。ひょっとしたら、ご褒美ものかもしれねえぞ」
と、わいわい、どよめき合っていた。
するとほどなく、村長が飛んできて、
「たいへんだぞ皆の衆、たったいま、柴進さまのお屋敷の壮丁が飛んできて、捕まえた男は、手荒にするな、侠客大尽の柴進さまが、以前、世話をなすった男だというこった。――いますぐこれへ、柴家の衆が引き取りにくるそうだ」
「えっ、柴の大旦那の知り人だって。そ、そいつは飛んでもないことをしてしまったわい」
「いや、何もお叱りはねえよ。だが決してこのことは口外するな、もし口外したやつは、村にはおかぬぞというお達しだぞ。村長のわしの立場もなくなる。みなの衆、頼んだぞ。牢城営へはいっさい唖になっててくれよ」
――さて。この夜の騒ぎも七日、十日と過ぎていつか噂も下火となっていたころ。
村の名望家、例の小旋風柴進のやしきの奥まった一室で、あるじの柴進の前に、その懇情にたいし、心からな礼と、別れの辞をのべていたのは、余人ならぬ豹子頭林冲であった。
あの夜。この柴家の内へ、助けられてきて、さまざまな手当をうけたことも、そのときは全く覚えもなく、翌日、聞かされたことだった。
ここには、数十人の屈強な壮丁や食客もたくさんにいる。だから馬糧廠の火災と同時に、古廟の前の兇変も、たちどこ

ろに柴進の耳へ聞えてきたし、柴進もそれを知るやいな、
「さては、林師範へ何か危害がかかったところを、逆に師範のため、都の刺客も管営も差撥も刺し殺されたにちがいない。日ごろから悪評しきりな管営や差撥だった。命を落したのもいわば天罰……。ただ、林師範こそお気のどくな身の上だ。あの人を見殺しにしてはならぬ」
と、たちどころに手分けを命じて、その結果、瞬時に、邸内へ助け入れたものだった。

――その柴進は今、すっかり体も恢復した林冲を見て、いとも満足そうに、また、名残り惜しげにこう告げていた。
「できることなら、長くわが家にいていただきたいが、いまはそうもなりません。といって、あれ以来牢城役所では四道の街道口に関所を結び、蟻も通さぬ検問のきびしさとか。しかしまあ私にまかせて、ひとまず山東のほうへ落ちのびてください。計略はこの柴進の胸にありますから」
「まこと親身もおよばぬお情け、生涯忘れはいたしません。すでになかったはずの後半生、いかようとも、おさしずに任せまする」
「では、これに紹介状をしたためておきましたから、山東の梁山泊へ行って、よい時節をお待ちなされるがいい」
「ほ。……梁山泊とは」
「まだご存知ないか。――山東は済州の江に臨んだ水郷で、周り八百里の芦荻のなかに砦をむすぶ三人の男がいます。――頭目を王倫といい、その下には宋万、杜選と申して、いずれも傑物。部下、七、八百をもち世に容れられぬ輩ばかり。また伝え聞いて、宋朝治下の世に、身のおき場のないような者どもも、次第にそこへ難を避けていくというありさまで、いわば自然にできた日蔭者の別天地でもある。……その首領三名とは、てまえもよく知っている間柄。あなたがお越しあれば、粗略にはいたしますまい」
「それは、願ってもない場所。ぜひ行ってみたいが、しかしどうして、滄州の街道口をうまく脱出できましょうか」
「ご心配あるな。今日はもうその手筈もできていますから、途中までこの柴進もお送り申しあげる。いざ、お身支度を」
促されて彼は柴家から贈られた衣服に着かえ、また餞別の銀子、旅の用具なども、肌身に持った。
柴進みずからは、華奢な狩猟扮装を、この日は一ばい派手やかに、馬上となって、門前に出る。そこには、すでに従者食客など数十人が、旗をささげ、鷹をすえ、また狩犬をつれ、手には槍、勢子棒などを持って勢揃いしていた。
林冲の身は、巧みにこの中の同勢の一人に偽装されたのだった。――かくて堂々と、滄州の街道はずれを行けば、路傍の土壁には、林冲の人相書が貼ってあるのが、しばしば見えたし、辻には〝林獄囚逮捕令〟の立て札が、いたるところで眼についた。
「見ましたか？」
柴進が馬の上から、後ろの林冲を見て笑えば、林冲もまた、無言のままニヤリと笑う。
まもなく、東街道口の新関の柵門と番所小屋が見えてきた。たたたたと、同勢小早めに足なみを迅めて、そこの前にさしかかると、

「待て、待てっ」わらわらと躍り出してきた関守の番将、番卒たちが、
「おう、これは柴家の大旦那でしたか。今日もまた、狩猟へおでまして」
と、俄に態度をかえて、お愛相を言い囃した。
柴進も、うららかな顔をして。
「やあ、牢城の兵隊さんたちか。先頃からどうもご苦労なこったなあ。まだ捕まらんかね、人相書の野郎は」
「かいもく手懸りがねえんですよ。災難なのはわれわれで、夜も日も番屋に常詰で、ここんとこ街の灯も見ておりませんやね」
「そうだろう。だが夕方の帰りがけには、しこたま猪の肉や鳥を土産に置いてくからな。酒も届けさせておこうよ」
「そいつは愉しみだ。お願いしますよ旦那」
「心得た。だが役目は役目だ。一応、供の連中を一人一人調べてくれ」
「御法度の明るい旦那のこと。そんな必要はありませんや。さあお通ンなすって」
「でも、万一お供の中に、お尋ね者の人間が紛れこんでいたらどうする」
「わはははは。ご冗談を」
「はははは。じゃあ、ご免っ――」
同勢三十余人。まんまと、こうして馳け通ってしまったのだった。
やがて十里も行ったところで、林冲一人が、その中から途をかえて別れ去ったのはいうまでもない。以後、彼の旅路は二十日あまりの山野をいそぎ、やがて朔風肌を切るような雪もよいの或る日、見わたす限り蕭条として葭や枯れ芦の江岸にたどり着いていた。
渡船場らしい水際に、酒屋の旗をかかげた茶店が見える。そこで、一杯ひっかけているうちに、一と癖ありげな茶店のおやじが、じろと林冲を眼で撫でまわして。
「旅人。あんたアこれから、山東のどこへ行こうって、おつもりだね」
「そいつアこっちから聞きたいところさ。亭主、ここの渡舟はどこへ行くのか」
「ここは渡し場じゃねえわさ。たまに魚を漁りに出る舟が着くだけでね」
「では、梁山泊へ渡してもらうわけにもゆかんか。はて、弱ったな」
「梁山泊へおいでのつもりかい」
「そうだ」
「ふうん……？」と、おやじはいよいようさんな眼をして。
「どこで聞いたか知らねえが、梁山泊へというからにゃあ、おめえはお上の目明しか、それとも何かべつな目あてでもあってのことか。あそこへ渡ったがさいご、ただごとじゃあ帰られねえぜ」
「そこは合点だ。じつはな亭主。その梁山泊の頭領あてに、こんな添え状をもらってきた者なんだが……」と、柴進の手紙を示すと、おやじはその上わ書と彼の姿をじっと見くらべ、急に物腰をあらためてこう言いだした。
「いや、お見それ申しやした。滄州の柴旦那のご手蹟に間違

いはねえ。どうもとんだご無礼を。……ようがす、いますぐ迎えの舟を呼びますから、もう一杯、そこで寒さ凌ぎを飲っていておくんなさい」

茶店の亭主とは、そも何者ぞ。これもまた山東梁山泊の耳目として、ここに仮の生業をしている手下の一員には相違あるまい。

小屋の奥へ隠れたと思うと、彼は一張りの弓を持って現われ、大きな鏑矢をつがえて、はるか水面遠き芦荻の彼方へ向って、びゅっんと、弦をきった。矢うなりは水に響いて長い尾を曳き、その行方に、一群の鴻がバッと舞い立ったと思うと、やがて一艘の早舟が、芦荻の波間をきって、こなたへ漕ぎすすんでくるのが見えた。

十四　無法者のとりで梁山泊の事。ならびに吹毛剣を巷に売る浪人のこと

梁山泊は正確に周り何百里とも見きれず、号して当時八百里（支那里）といわれている。風浪の日はおそろしいが、晴れた日は、山をめぐる白雲、太古の密林、そして、目路のかぎりな芦の州から葭の汀とつづいて、まるで唐画の〝芦荻山水〟でも見るような風光だった。

ところが、ここには、宋朝の世に容れられぬ反骨の徒、不平の輩などいつか何百人群れよって山寨をきずき、公然、時の政府に抗して義盗ととなえ、舟行や陸の旅人などをなやましていた。従来しばしば取潰しにかかった官軍といえど、生きて還った例がない――と、までいわれている巨大な〝無法者地帯の浮巣〟だったのだ。

「――なるほど、これでは」

その日、朱貴（茶亭の亭主、実は山寨の一員）が呼んだ早舟に乗せられて、対岸の金沙灘で舟を下りた林冲は、行く行く、その要害には舌を巻いた。

芦荻と芦荻の間は舟の迷路をなし、陸の道は迷宮を行くにひとしい。賽の河原にも似て、蕭条たる水辺、幾ツもの洞門、谷道、また密林の中など、忽ち帰る方角もわからなくなる。

かくて、山腹の断金亭までたどりつくと、そこで彼は、首領の王倫に会った。

王倫はもと、都でまじめに学問を志し、進士の試験勉強に励んでいたが、官府の腐敗を見たり、世間の裏表を知ると、勉学が馬鹿らしくなった結果、試験にも落第してしまったので、ついに自暴ッぱちの放浪をつづけたあげく、この梁山泊へ来て宋万、杜選、朱貴などの仲間を得、いつか七、八百人の頭目にまつりあげられていた者だった。

「おう、滄州から柴進どのの添え状を持ってきたという豹子頭林冲とは、あんたのことか。まあ、おかけなさい」

「これは王倫どのですか。それがしは、もと禁軍の師範、林冲という者、天地、身の容れるところなき人間です。ここに置いてはくださるまいか」

「ご事情は、柴進どのの添え状にも、つぶさに見える。あの方には、以前、恩義をうけているので、お身柄は万々ひきうけた――と申しあげたいところだが、実はだナ」

王倫は、ちょっと、左右にいる宋万や杜選の顔を憚りつつ、

「……正直にいうと、この梁山泊には、現在でも、七、八百人もいるので、いつも食糧が不足がちなのだ。申し難いが、銀子十両を、草鞋銭にさしあげる。身の振り方は、ほかへ行って考えてくれないか」

林冲は、憤然として、断わった。

「せっかくだが、物乞いに来たわけではない。では柴旦那の手紙を返してくれ。引き退がろう」

すると、宋万と杜選の両名は、あわてて彼を引き止め、また一方の王倫を説き始めた。

「頭目。その扱いは、ちとどうかと思うぞ。第一には、柴の大旦那の顔をつぶすし、第二には、梁山泊の人間は、義を知らぬ忘恩の徒だといわれるだろう。おれたちの仲間は、恩と義でもっている世界だ。それでいいのか」

「でも、山寨の仲間には、めったな者は加盟させられない。万一という惧れもある」

「それは口実にすぎまい。疑わしく思うなら、仲間の誓約を立てさせればよかろう」

「誓約。ふウむ……じゃあ、やらせてみようか。おい林冲とやら、誓文なんざ、書けとはいわんよ。その代りに、この王倫の命じることを、三日のうちに、きっとやってみせられるか」

「ここへ置いてくださるなら、いかなることでも」

「よし。じゃあ、もいちど梁山泊を出て、対岸の山東街道に潜み、三日以内に、人間の首を一つ取ってきて、これへ見せてもらおうか。――それも百姓漁夫の首ではいけない。役人なり然るべき武士の首だぜ」

「心得た」

夜は山寨の宛子城で、彼は客としての歓宴に囲まれた。けれどその酒宴中でも、王倫の態度はどこかよそよそしい。林冲も彼の人物を観て「……ははあ、この人は嫉妬ぶかくて、狭量らしい。自分のごとき前歴の人間をここに置いて、将来、首領のお株を奪られでもしてはと、惧れているに相違ない。そんな小人の下にはいたくもないが、さて、天下ほかに身のおくところもない身だし……」と、独り愉しまぬ色をつつんで、三日以内の約束を、観念していた。

次の日、彼は身仕度して、長巻の野太刀を一本ひッ提げ、道案内の雑兵に舟を漕がせて、山東済州街道に渡った。

第一日は、人にも会わなかった。

二日目は雪晴れの好晴で、「――今日こそは」と、路傍に潜んだり、林の中をカソコソと彷徨っていたが、見かけたのは、黄昏れごろ、家路へ帰ってゆく貧しげな漁夫と、子供づれの百姓夫婦だけだった。

「限られた日は、あと一日きりだが」

疲労と焦躁に、林冲の眼は、すっかり獣じみていた。すると昼少し過ぎ、その眼にとまった一個の旅人がある。――やや勾配の急な雑木山の道を、大きな旅梱を担いで、こなたに降りてくる人影なのだ。「しめたッ」とばかり、よくも見さだめず、走り寄って、その眼の前へ、

「待てっ、旅の者」

長巻の石ヅキを、とんと地に突いて見せた。すると、相手の男は、仰天して、荷物もそこへうッちゃッたまま、

「ひっ、人殺しっ」

と、盲滅法、谷そこ目がけて逃げ転げていった。その悲鳴といい逃げる恰好も、役人でもなし、武士でもない。林冲はがっかりして、
「ちいっ。もう三日目は暮れそうだし。……はアて、よくよく運のない俺だとみえる」
そして、何気なく、道に捨てられてある荷物へ眼を落していると、どこからともなく、一陣の殺気が、さっと彼のその横顔を吹いてきた。

はっと、振り向くと、
「盗賊っ。その荷を拾って、生命は落してもいいつもりか」
怒気と嘲笑をまぜて、言葉そのものが、すでに刃のような声だった。
見れば、先に逃げた荷持ちの男の主だろうか。
まだ三十がらみの壮者だが、顔いちめんの青痣へもってきて赤いまだら髯を無性に生やし、房付きの范陽笠を背にかけて、地色もわからぬ旅袍。それへ白と青との縞短袴をはき、牛皮の毛靴を深々と穿って、腰には、業刀らしい見事な一振りを横たえてもいる。
「あははは」と、男は林冲が、硬直したのを見て笑った――
「生命は惜しいし、荷は欲ししか。やい盗賊、荷物の男に代ってその荷を担ぎ、町のあるところまで、身どものお供をして行くなら、そこは人情、酒の一杯ぐらい、飲ませてやらぬ限りもないぞ。ばかめ、どっちを撰ぶのだ」
「むむ、見受けるところ、貴様はただの素町人ではないな。武士だな」

「おおさ、いまでこそ浪々の身だが、昨日までは、五侯の一人楊令公の末裔として、徽宗現皇帝の旗本にも列せられた武士中の武士だ。もしそれだったら、どうだというのか」
「よしっ、その首、もらった」
「なにッ。ふざけるな」
ほとんど同時。白光を噴いた双龍にも似る二人のあいだに、鏘々として、火花が散った。しかし彼の長剣も、林冲の長巻も、幾十合となくその秘術を尽しあったが、どっちも、相手の一髪すら斬ってはいない。果ては鍔ゼリとなり、相互ともに息あらく、ただ鬢の毛を汗にするばかりだった。
すると小高い所から、突然、声がかかった。
「やあ、待ち給え。林冲の三日の約はそれでいい。旅のお武家にも、どうぞ刃をお引きください」
誰かと見れば、日限切ッての約束した林冲の様子いかにと、それとなく見にきた白衣秀士王倫、杜選、宋万、そのほか梁山泊の手下数十人の群れだった。
「豪傑、ぜひ今夕は、われわれの寨まで来てくださらんか。仔細はその上でお詫びするし、また、お身の上も伺いたい」
たって、梁山泊の寨、聚議庁までつれてきて、その夜、盛大な宴を設けた。
王倫の考えでは、林冲一人を置くのでは、自分の地位も惧れられるが、彼に対して、もう一名の互角な人物を配下におけば、自然、相互が牽制し合う形になり、御すには御しやすいし、わが将来も安泰なものと、すぐ胸算用してのことだった。
で、しきりに、酒をすすめ、礼を低くして、

「どうです、浪々のお身の上と伺いましたが、ひとつここに足を留めて、存分、男の一生を愉しんでみる気はありませんか」

それとなく、水を向けてみた。

「いや、お志はかたじけないが、じつはまだ開封の都には、屋敷もあり、身寄り一族も残してあるんで、どうしても一度は立ち帰らねばなりません。――その身が、何故、かかる浪々にあるかといえば、じつは面目ない次第だが」

彼は、ぐっと杯を干して、自嘲をうかべた。その青痣のような顔面は、酔うほど一そう青く見える。

「――わが家は代々、宋朝の旗本なので、殿司制使の役にあり、かねてまた、高大将軍閣下直属の親衛軍の一将校でもあった。……ところが昨年のこと、徽宗皇帝が、万歳山の離宮にお庭作りを営まれるに当って、制使十名を、西湖へご派遣になり、西湖の名石をたくさん、都へ運ばせることになった」

「なるほど……」

「拙者も制使の一人だった。そこで西湖の花木竹石の珍を大船に積み、黄河を下ってきたところが、運悪く、途中でひどい暴風に遭い、ついに役目も果し得ず、面目なさに、そのまま田舎に身を隠しておるうち、やっとこのたび赦免の令が出たというわけでな……」

「いや分った。それで都へ帰る途中でしたか」

「いかにも、都へ帰って、もいちど以前の官職につき、家名を復さなければ先祖にすまん……と思って、要路の大官どもに贈る賄賂の品々を荷物となし、これまで来ると、いきなりそれに居る林冲とやらに斬りつけられ、二つとない首を、あぶなく進上してしまうところであった。はははは」

聞いて、林冲も初めて、口を開いた。

「申しおくれたが、自分も以前は、近衛ノ将軍高俅の下にいて、禁軍師範の職にあった豹子頭林冲と申す者。……だんだん伺ってみれば、貴公とは、以前の同僚のようなものだが、もしや御辺は、あだ名を〝青面獣〟と呼ばれていた楊志殿ではないのか」

「おお、いかにも手前はその、青面獣楊志だが、林師範ともいわれたお方が、どうしてかかるところに居られるのか」

「ま。この刺青を見てください……」と、林冲は、わが額の刺青を指して、苦々と笑いながら、逐一、都から滄州の流刑地に追われた仔細や、またその大苦役場からのがれて、ここへ落ちて来たまでのいきさつを語って――

「悪いことは申さぬ。この林冲の例を見てもわかること。しょせん、高俅将軍はあてにならぬ佞奸なお人だし、またそれをめぐる軍人、役人、徽宗朝廷のすべても、腐敗堕落している現状では、たとえ貴公が都へ帰ったところで、とても長く安穏に暮すことはできますまい。……それよりは、頭領王倫のおすすめにまかせ、われらとともに、この別天地で、男と男の義を生きがいに、存分生きてみる気はありませんか」

「どうも何やら心も惹かれるが、先にも言ったような次第で」

「いや、それまでに仰っしゃるなら、無理にお引き止めもいたすまい」

王倫もあきらめたが、

「……では今夜は、歓を尽して、青面獣楊志の前途を祝うとしよう。ただ、他日でもよい。梁山泊の一天地には、かかる

男どもが集まって、宋朝の腐敗に抗し、こんな生き方をしているということは記憶にとどめておいてください。そして何かの時は、お力になっていただければ倖せというもの」
「一河の流れ、一樹の縁。それはいうまでもありません」
あくる朝も、楊志は山寨から餞別を貰うやら、また、王倫以下の盛大な見送りを受けなどして、一舟の上から手を振りつつ、梁山泊を離れて行った。
――さて、ここで物語は、長身青面の壮士、楊志の旅とともに、開封東京の都へ移って行くことになる。

都へ移った楊志は、さっそく持ち帰った荷を解いて、地方で蒐めた珠玉、名硯、金銀の細工物など、とにかく金目な物を惜しみなく、大官たちへの賄賂に使った。そしてようやく、復職のめどもつき、あとは殿帥府最高の大官、高大将の一印が書類に捺されれば……というところまで漕ぎつけて、
「まずは、これでつつがなく、家名を持ち直すことができたわ」
と、希望のその日を待ちぬいていた。
やがて数日の後、殿帥府から「――出頭せよ」との達しが届いた。晴れの日なので、殊に身ぎれいに慎み、府の一閣に控えていると、やがて帳を払って現われた近衛ノ大将軍高俅が、椅子に倚るやいな、傲然とこういった。
「楊志とは、そのほうか」
「はっ、前の制使十名の一人楊志にござりまする」
「どの面さげて、これへ来たか。履歴、上申の書などを一眄するに、汝は元来、宋家代々の重恩をうけたる家柄の身でありながら、昨年、帝の御命にて、西湖石の運搬にあたった折には、途中、船を難破させたのみか、そのまま行方をくらまして、自首もせず、今日まで隠れおった不届き者ではないか」
「あいや、事情は、上申書にも逐一したためた通りでござりまする。かつはまた、ご赦免の沙汰も聞えましたので、出府いたした次第、なにとぞご寛大をもちまして」
「ばか者、黙れっ。――赦免の令は、汝のために出したものではない。十名の制使中、あらましは任務を全うしているが、なお二、三西湖に戻って、罪を待つ者もあるゆえ、それへ赦免を申しつかわしたまでだ。汝のごときは、その場から逐電して今日にいたった不届き者、復職などは罷りならん。もってのほかな願い。とっとと退がりおろう」
楊志は暗憺となった。絶望に打ちのめされて、以来、快々の悶えを独り抱きつづけた。
「……いまにして、林冲のことばも思い当ってくる。先祖からの家名、父母の形見といえるこの体、それらを汚すに忍びぬまま、王倫が引き止めるのも断って、なお夢を都につないで帰ってきたが……、ああ、やはり高俅が権を振うこの都府は、俺のような人間の住めるところではない」
今はなすこともなし、ほかに職を探す意志も出ない。すでに復職の運動や賄賂のため、売る物は売りつくしていたし、明日の食にも困る窮状に追われてきた。
「そうだ、ここに祖先から伝わる一腰の名刀だけが残っている。これを売って、身寄りの老幼に頒け与え、あとを路銀として、どこか遠い他県へ行って、身の振り方でもつけようか」
その日。――彼は一剣を持ち出して、それに売り物の〃

草標児”をさげ、馬行街の四ツ辻に立っていた。
　しかし、なかなか値段を訊いてくれる者さえない。そこで楊志は、午過ぎから天漢州橋のにぎやかな橋袂に河岸を変え、
「名刀の売り物だ。この稀代な宝刀。たれか眼のある人に譲りたいが」
　と、道行く人々に、呼びかけていた。
　すると、胸毛もあらわな大男が、ずかずかと彼の前へ近づいてきた。ぷウんと、酒気と油を交ぜたような体臭が鼻を衝く。――それを見るや往来の者はすぐ、
「そら、無毛虎が何か刀売りへ突っかかっていったぞ」
「毛無シ虎の牛二が、またなにか、因縁を付けるんじゃねえか」
　と、囁き合って、もう辺りは人立ちの様子だった。
　案の定。――無毛虎の牛二といわれる街の悪は、のッけから、楊志を見くびッて、からみ始めた。
「なに。こんな古刀が三千貫だと。……やいやい人を盲にするのもいい加減にしろよ、いい加減に」
「ははは。酔っているな。おぬしに買ってくれとはいわぬ。退いてくれ。さあ、通ってくれ」
「大きなお世話だ。おれには買う力がねえとでもぬかすのか」
「弱るなア、どうも。刀はわが家の宝刀なので、子供に別れるような気持ちなのだ。お前さん方の持ち物にはさせたくない」
「よしっ、買ッた。そう見くびられちゃあ、こッちも意地だ。買わずにゃおかねえ。だがよ、おい。まさか鈍刀じゃアあるめえな」
「しつこいなア。お前さんには売らないと申すのに」
「ふざけるな、売り物の”草標児”を下げてるじゃねえか。さあ、買ってやるから、切れ味を見せろ。それとも、尻込みする気かよ、ええおいっ。……さては、汝ア騙りだな」
「この人なかで、騙りとは聞きずてならん」
「そうよ、三十文の刀だって、豆腐や蓮根ぐらいは切れらア。三千貫の宝刀なら、いったい何が斬れるというのだ」
「聞くがいい。銅や鉄を斬っても刃こぼれ一つしない」
「ふん。それだけか」
「髪の毛を吹きかければ、毛も斬れる。――名づけて吹毛ノ剣という」
「洒落たことを言やアがる。それで生きた人間は斬れねえときては、なンにもなるめえ」
「斬ッても、刃の肌に血の痕をとどめぬというのが、この宝刀の鍛えだ。さあ、それだけの説明で充分だろう。退いてくれい」
「いや、おもしれえ。そんならこれを斬ッてみろ」
　牛二は、一トつかみの銅貨を、州橋の欄干の上に、塔みたいに積み重ねて。
「さあ、そこの騙り野郎。ここへきて、この銭を見事斬ッてみろ。斬ッたら、三千貫くれてやるが、斬れなかったら、ただではおかねえぞ」
　群集はわッと輪をひらいた。名うてな街のゲジゲジと、刀売りの大言壮語。どうなるやらと、往来はいよいよ山をなすばかりである。

「……よしッ、見せてやる」
楊志はついに欄干の前へ寄っていった。じっと、銭の一点を見ていることしばし、抜く手を見せずとは、その間髪のことか。――二つに斬れた銭の数枚が、刃の両側へバッと飛び、しかも欄干には傷痕も残さなかった。
「やあ、斬れたっ。ほんとに、斬れたわ」
どよめく見物人の喝采を尻目に、毛無シ虎は、なお躍起だった。いきなり自分の髪の毛を一とつかみほど、搔り抜いて、
「おッと、待ちねえ浪人。そんな手品は、大道芸人もやるこッた。さア、これをいう通りに斬ってみろ」
いよいよ、かさにかかって吠えかかった。
「おおさ。性根をすえて見るがいい」
楊志は左の手に、それを受けた。そして晃々たる宝刀の刃に向って、掌の髪の毛を、ふッと静かな息で吹き起すと、
「あら、見事……」
見物たちは一瞬に、うつつを抜かした。――見れば楊志の息にかかった髪の毛は、あたかも宝刀の精に吸いついてゆくように、彼の掌を離れるや飛毛の舞を描きながら、ハラリ、ハラリ、みな二つに斬れて落ちるのだった。
眼をすえていた毛無シ虎は、
「うるせえや、見物人めら。まだまだ、おれの負けじゃアねえ。第三には、人を斬っても、刃の肌に血の痕を残さねえと、吐ざいたはずだ。さあ浪人、証拠を見せろ」
「見せてやる。犬を曳いてこい」
「犬をどうするッてんだ?」
「いわれなく、人は斬れぬ」
「たいがい、そういうだろうと思った。騙り者の逃げ口上はきまっていらア。出来ねえなら出来ねえと、ご見物に向って謝罪れ」
「おぬしに刀は売らぬのだ。まアこのくらいで勘弁せい」
「いや、ならぬ」と毛無シ虎は、楊志の手頸をムズとつかんで、
「――この刀は、おれが買う。買主との約束どおり、人間を斬っても血の曇りを残さぬといった証を立てろ」
「それほどいうならば、金を出せ」
「金はいまねえが、後金ということもあるんだ。とにかく生きた人間を斬ッて、この通りだという値打ちを先に見せるがいいや。それとも、四つン這いに手をついて謝罪るか」
ほとほと持て余した楊志は、ここにいたって、ついに堪忍の緒を破ったらしい。しかしその青い面色に一抹の凄気は見せたものの、依然、言葉はしずかに。
「……さて、お立会い」
と見物人へ向って言った。
「ごらんの通り、この無頼者めが、先刻より私にさまざまな難癖をつけ、なんとなだめても収りがつきません。その上にも、生きた人間を斬って見せろと申してきき入れませんが、いったい、どうしたものでございましょうか」
すると、見物の群れから、弥次馬が、
「斬ッちまえ! 斬ッちまえ。――そういう毛無シ虎に、斬れ味を見せてやるがいい」
「その野郎がいなくなれば、第一、街が明るくならあ。よろ

こぶ者はあっても、悲しむ奴はたれもねえよ」
「ご浪人、頼むから、やッてくれい」
わいわいと、四方から声の礫だった。
こう聞いては堪らない。毛無シ虎は、その本性をなお剥き出しにいきまいた。いきなり楊志の胸いたを、どんと一ト突きして、その手にある宝刀をつかみとろうとかかったらしい。
――が、彼の上半身は、ひょろと、空を泳いでいた。と見えたのも一瞬である。見物人の眼には、一朶の血の霧が、バッと、大輪の花みたいにそこで開いたかのように映った。
「わああっ……。やった！」
まさかと思っていたのだ。呻きに似た群集の声には戦慄がこもッていた。すでに見る楊志の足もとには、真二つとなった毛無シ虎の巨体がピクともせずぶっ仆れている。そして彼が垂直にして持ち捧げていた長剣には、なるほど、血脂の曇りもとどめていなかった。
「街のみなさん」
彼はそのままな姿勢で群集へ向って告げた。
「――おしずまりください。あなた方にご迷惑はおかけしません。見られたような仔細で、てまえはついに白昼、この天漢州橋の大道で人を殺めました。法罰、のがれ得るところでない。あなた方が生き証人だ。これから奉行所へ自首して出ます。そこを開いてお通しください」
彼の態度は立派だった。群集はそれにも感動をうけたらしい。聞き伝えて、彼が入った奉行所の門前には、庶民が群れをなして、
「毛無シ虎が悪いんだ。牛二はふだんから街の者を泣かせ、なに一つろくな真似はしていない。刀売りを助けてください」
と、口々に叫んだ。――以来、毎日のように、嘆願書やら差入れ物やら、楊志のためにはと、義金まで募ッて、あらゆる助命運動が、街の有志によってつづけられた。
六十日間の留置期間に、彼の処分もほぼきまった。官辺でも、折紙付きの毛無シ虎には、手を焼いていたところだし、吟味役人から牢番にいたるまでが、ことごとく楊志の同情者であったことも、情状の酌量を容易にしたらしく、
「――北京ノ地へ流罪トナシ、大名府留守司ノ軍卒ニ貶スモノ也」
これが、罪の判決であった。同時にまた、
「所持ノ宝刀ハ、是ヲ官ニ没取ス」
とも、言い渡された。
定法どおりに、額に金印（刺青）を打たれたのはやむをえない。だが、追ッ払いの背打ちの棒もかろく、やがて護送使の手で、はるか北京の空へ差し立てられていった。

十五　青面獣の楊志、知己にこたえて神技の武を現すこと

北京は、当時、大名府ともいい、五代各国の首府としても名高い。
〝河北、治レバ天下治リ。河北、乱ルレバ天下乱ル〟
唐の世代から、すでにそんな言葉があるとおり、西に太行山脈、東に遠く渤海をひかえ、北方に負う万里ノ長城は、北夷の襲攻にそなえ、不落の名がある。

しかし、近年では、満州の女真（金）や遼の侵攻も油断がならぬため、徽宗の宋朝廷でも、ここを重視して、その留守司（北京軍司令官、兼、守護職）には、特に大物の人物を配していた。

世傑梁中書は、その人である。

彼は、都の太師（太政大臣）蔡京閣下の女婿であり、この北京では、軍権、民政、その一手にゆだねられている留守司の重職なので、その羽振りのよさは、言をまたない。

「おや、東京の楊志が、平軍卒に貶されてきたのか」

或る日、梁中書は、護送者から届け出ていた書類の一片を見て、こう呟いた。

楊志ももとは名家の出なので、その人柄も薄々は知っていた。――で、護送使の者に、身柄受取りの官印をあたえて帰すと、さっそく、自邸に楊志を呼んで、

「そちはいったい、どんな罪を犯して、平の軍卒などに貶されてきたのか」

と、事情を問いただした。そして、彼の口から委細を聞くと、

「なあんだ、そんなわけだったのか。よろしい、折を待ちたまえ。君ほどな人物、いつまで、一兵卒にはしておかん」

大いに慰めて、当座は梁中書の邸内の兵卒に飼われていた。

だが、いかに彼の権威でも、理由なく楊志を取り立てるわけにはゆかない。そこで、城外の大練武場で、一日、北京総軍の大演習が行われるときを待って、楊志の武技を試し、もし彼に抜群の業があったら、それを称えて、大いに登用してやろうと考えた。

頃は、春めき始めた二月の頃。

大演武場は、北京三軍の旗と兵馬で埋まった。時刻となれば、貝が鳴り、鉦鼓がとどろき、軍楽隊の演奏とともに、梁中書は副官その他、大勢の軍兵をしたがえて、式場へ臨んだ。

厳かな閲兵の後、李天王李成、聞大刀聞達、二将の号令のもとに、全軍、中書台に向って、最敬礼をささげ、また、三たびの諸声を、天地にとどろかせた。

たちまち、全軍は二陣にわかれ、紅旗、白旗が打ち振られる。鼓を合図に、両軍それぞれの大兵が、鶴翼、鳥雲、水流、車輪、陰陽三十六変の陣形さまざまに描いてみせ、最後にはわあああっ……と双方起って乱軍となり、そこかしこで、凄まじい一騎討の競武が展開された。

中でも、紅軍の副牌（部将）周謹の働きは目ざましく、彼の槍の前に立ちうる者はなかった。

「周謹。日ごろの猛練習も思われて、今日の働き、見事だったぞ」

梁中書は、輝くばかりな銀色の椅子から、彼を賞めて、また言った。

「ところで、もと東京の殿司制使楊志が、流されて一兵卒に落され、今日も余の供として後に来ておる。彼は近衛の一将として、武芸十八般に秀でた男。――彼とここにて、槍術を競べてみせい」

「おそれながら……」と、周謹は口をとがらせた。

「流され者の一兵卒と、試合せよとは、余りにも」

「なにをいうか」梁中書は、わざと、声を高めて一喝した。

「いまや諸国に盗賊はびこり、国境には、遼族、女真の賊の窺

うもあって、今日ほど国家が人材を求めているときはない。まこと神技の武術を身に持つ者なら、一兵卒たりとも、これを用いぬは、国家への不忠である。それを周謹は不服だというのか」

「いや、決して、さような意味では」

「なればこれへ、楊志を呼べ」

召し出された楊志は、かねがね梁中書の好意のあるところを覚っている。もとより異存のあろうはずもない。

両人は、黒ずくめの戦袍（よろい）と黒駒を与えられた。使用の武器は、たんぽ槍（穂先を羅紗でくるんで玉とした物）で、それにたっぷり石灰がふくませてある。

「いざ」

と、将台を前にして、両人、馬上の槍を戦わせた。

真槍でないから、ちょっと、勝負の判定は難しいようだが、しかし、腕前の差は歴々とあらわれた。馳け合うことしばし、周謹の体や黒馬の肌には、白い痕が斑々と描き出されたのにひきかえ、楊志の五体や駒には一点の痕もついていない。

勝負あった！　の銅鑼が鳴る。

すると、兵馬都監の李成が進み出て、将台へ訴えた。

「周謹は無念そうです。彼の得意は、弓にあるので、弓を持たせて、もう一度の勝負をご覧願わしゅう存じまする」

「楊志。よろしいか」

「心得ました」

ふたたび、指揮台で青旗が打ち振られ、金鼓一声、馬は馬を追ッて、演武場の南の方へ、パッと馳け出た。

逃げていくのは、楊志だった。

周謹は、三矢を放って、三矢とも、見事、楊志の片手の楯で払われてしまった。

こんどは、楊志が追う番に廻った。――楊志は、弓を引きしぼって周謹の背に迫ったが、わざと急所を射はずして、その肩を射た。しかし、たとえ肩でも何かはたまろう。あっと、相手は馬上からころげ落ちた。

「さすが楊志の武技は中央の武技の一流だった。――周謹はしょせん敵でない。しばらく周謹の現職を楊志にゆずらせ、今日以後は、楊志をもって副牌（部の将校）に取り立て得さす。――管軍書記、さっそく辞令を彼に授けろ」

梁中書が、かく命じると、突如、軍列の一端から躍り出ていう偉丈夫があった。

「今のおことばは、この索超には、大不服です。周謹が拙者の弟子だからとて申すのではありませんが、楊志の武技は中央一流との御意は、聞きようでは、北京総軍には、人もなきかの如く聞ゆる。それほどなご賞辞ならば、この索超を打ち負かしたうえにて、彼へおさずけ願いたい」

「ははは。誰かと思えば、急先鋒とアダ名もある正牌軍（一軍の大将）の索超か。よからん、よからん！　望みとあれば勝負してみよ」

いよいよ、事は物々しくなった。両者にはあらためて、本格的な武装を命じ、試合場所も、将台の欄まぢかに移されたので、梁中書は白銀の椅子を欄前にまで進め、折から北京七門の楼門上には、大きな日輪が夕雲に落ちかけてきたので、縁飾り美しい蓋傘は、彼の冠の上に瑶々として翳されていた。

開始の軍楽。――それがやむと、両側の柵内で、金鼓が鳴り、楼の上では用意！　の黄旗が早や振られている。
どかんと、はるか馬場の末のほうで、烽火用の爆音が、夕空に谺した。見れば、西の門旗の下からは、急先鋒索超、東門からは、青面獣楊志。各〻さんぜんたる鎧、甲のいでたち。さながら戦陣そのままな猛気を飾って、静々、こなたへ相寄って来るのが見える。
「おうっ……」
たちまち、二騎の姿は、魚紋を描いて、もつれ繞った。
索超は、雪白の馬上に、金色の焔を彫った大斧をひッさげ、楊志はするどい神槍を深くしごいて、とうとうと馳け巡りながら虚をさぐる。
この戦いは、見事だった。両者の威風といい、その技といい、見ているにさえ息づまった。――大斧の閃々、槍尖の電光、おめき合うことも幾十合か。馬も汗するばかりなのに、どうしても、勝敗はつかない。満場は声なく、巨大な落日の紅炎は、西の空へ、刻々に沈んでゆく。しかもまだ、相互ともに意気旺なのだった。まさに不死身の人間の戦いかとも怪しまれている。
「ああ。みごと」
梁中書は、いつか夢中で、その銀椅子から立っていた。彼は満足した。大名府に両雄を得たり、といってよろこんだ。
彼のそばから伝令が走った。引分けの銅鑼が鳴る。索超の部下は、万雷のような勝鬨をあげたが、楊志の方には、歓呼もない。
しかし二名は、台下に並んで、ともに、同等な賞を拝領した。そして夜は演武庁の楼上で、盛大な祝賀の宴に誉れを謳われ、その席上ではまた、
「以後、索超、楊志ともに、相並んで、軍の提轄使（憲兵の長）たるべし」
と、任命された。
何が不幸か幸か、げにも人の運命はわからない。これからというもの、楊志は、梁中書に気に入られ、楊志もまた、恩に感じて、心からその人に仕えていた。
いつか夏も近づいて、五月の声を聞くと、その日は、端午の節句だった。
佳節の客もみな帰って、梁中書は蔡夫人と二人きりで、やっと私室にくつろいだ。そして夫人の杯に、菖蒲酒を注いでやりながら、
「どうも、こう忙しい重職になると、めったに、そなたの笑顔を見ることもできんなあ」
と、わざと妻のよろこびそうなことをいった。
蔡夫人は艶な姿態のうちに、つんと、いつものお実家自慢を匂わせて、
「でも、こんな栄誉と福貴は、万人の羨むものではございませんか。勿体ない」
「とんでもない。愚痴をこぼしたわけではないよ。それどころか、そなたの父、蔡大臣のお引立ては、夢寐の間にも、忘れてはおらん」
「そういえば、あなた、やがてもう、父君の誕生日も間近でございますよ。お忘れですの」
「なんの、忘れてなろうか。岳父のお誕生日、七月十五日。

ことしこそは、去年のような失敗をせぬようにと、内々心をくだいておる」
「去年はまあ、とんでもない抜かりでしたわね。お父君のお祝にと、あんなにまで、おびただしい金銀珠玉を東京へ送らせてやったのに、その途中で群盗のため、すべて強奪されてしまったことではございませんか」
まるで良人の落度でも責めるように、蔡夫人の眸が、耳輪の瑠璃より細い鋭い光で、梁中書の横顔を射ていた。それには彼も二の句がなく、今年もまた、早くから頭を悩ませている風だった。
「ねえ。どうなさるおつもりですの。……今度は」
「だからさ、今年もすでに、心がけて、すでに十万貫に価する珍器重宝は、この北京の古都を探って、ひそかに庫に蒐めてあるわさ」
「いいえ。それよりも、その高価な宝を、どうして無事に、東京のお父さまのもとまで届けさすことができるか。そのご要意のほうが、かんじんではございませぬか」
「それには、人だな。なんといっても、よほど信用のおける人物でのうてはかなわぬし、さらには、いかなる賊と出会っても、断じて負けをとらぬ勇者でもなければならぬ」
「この北京何十万の軍には、それに適う一人の人物もいないのですか」
「いや、そんなことはない……」と、あわてて彼は言い消した。
「――勇者はいる。武術の達人も少なくはない。だが考えてみい。十万貫の重宝といったらたいへんな富だ。いかにわしの蓄えと俸給でも、そんな多額な金目の物を、一私人としては、都の岳父に贈りうるはずのものではないからな。……腕ぶしばかり強くても、腹ぐろい人間には、このことは打明けられぬし、使いにも差向けられんというわけだ。それでこの人選には、わしも全く慎重にならざるを得んのじゃよ……」
「ほんに、そう伺うと、人はないものかも知れませんね。けれど今年こそは、お父君に糠よろこびをおさせしては、あなたとしても、申しわけがないでしょう」
「……まあ待て。まだ幾十日の間もあること。全然、心当りの人間がないわけでもない。充分、信用がおける人間かどうか。ま、もう少しみていよう」
いま、梁中書の腹にあるただ一人の人物――その候補者とは、いうまでもなく、かの青面獣の楊志以外な者ではなかった。

十六　風来の一怪児、東渓村に宿命星の宿業を齎すこと

近ごろ。山東は済州の鄆城県に、あたらしく赴任して来た県知事がある。
姓は〝時〟名は〝文彬〟。県民の評判はたいへんよかった。現下世は腐敗の極といわれているものの、なお多くの中には良吏もいたのである。非理曲直すこぶる公明で、私の暇には蘭を愛し琴を奏で書もよく読むといったような文彬だった。
「――自分がこの地へ着任いらい、まだ何も見るべき行政はしていないが、まず県下の治安を第一に確立したい」

彼は或る日、県（県は日本の郡単位）の庁堂の壁に、民治の主旨をかかげて、その日、公庭に集まった全吏員にこう告げていた。

「これまでどこに赴任してみても、およそ吏として、民を安んじ民と和楽をともにするということはじつに難かしい仕事だと痛感しておるが、わけてこの県は難治な地方と思われる。なぜなれば、大盗の巣窟、梁山泊などの水郷もあって、旅途はさびれ、土民の気風も荒く、そのうえ日々聞ゆる兇悪な犯行にさえ、従来、官の実績は何もあがらず、官は無力なものと、民からも悪党からも見くびられておる」

全員はしいんとしていた。みな面目ないふうである。が、列の中ではそれが不服らしく満面をムズムズ燃やし、耳を押ッ立てて聞いていた巨漢二人の顔があった。

いずれも、庁の与力、つまり捕手頭である。

その一人は、騎兵捕手の与力で、名を朱同といい、あだかも関羽のような髯をもっているので〝美髯公〟という綽名があった。

また、もう一名の歩兵与力は、これも身の丈七尺をこえ、人なみはずれな腕力に加えて、およそどんな土塀もちょっとした小川も一跳躍にとびこえる特技のあるところから、県中、この人を〝挿翅虎〟ともアダ名している雷横という者だった。

こう二人は、新知事の訓令にもどこか反撥的な面構えをみせていたので、文彬はその眼気を感知し、微笑を見せながらすぐ次へ移っていた。

「――だが、過ぎたことはぜひもない。ただ、今後はお互いの協力で県下の治安に尽していこう。そこで捕手頭の雷横と朱同に命じるが」

二名は列の中で、ちょっとその直立をただした。

「ご苦労だがさっそく部下をひきいて、一方は西門道から村々を巡邏してゆき、また一方は、東門街道を出て県下を巡り、途々賊あらば捕え、民の難あらば助け、そして二た手の巡警隊は、東渓村の山上で落ち合い、相互の情報を交わし合うがよい」

「心得ました。では、すぐさま」

「いや待て。――東渓村の山上には、天下の奇樹といわれる有名な大紅葉がある。あの葉は他に類のないものだ。おのおのは、相違なく巡邏した証として、そのもみじ葉を持って帰れ。よろしいな、怠れば罪に問うぞ」

文彬新知事。抑えるところは抑え、厳しいところは、なかなか厳しい。

その夕、朱同は西門を立ったが、彼の方はしばらく措き、まず雷横の行く手を見よう。

捕手二十余人をつれた雷横は、べつに東門街道を出て、村々を巡邏し、翌日も県下を歩いてから、約束の東渓山へのぼっていき、例の大紅葉の下に立った。そしてさて、待つま程なく、一方の朱同組もやって来たので、ここで情報交換しあった後、二人は思わず哄笑した。

「いやどうもご苦労さまだ。こんな時にかぎって、小泥棒一ぴき見当りはしねえ。なんのことはねえ紅葉狩りにきたようなものさ――」

帰路は夜にかかった。お互い逆に道を換えて、松明を振りつつ山を降ッたのである。

すると、その雷横組のほうが、麓ぢかい霊官廟のほとりまで来たときだった。ひょいと見ると、廟の扉が、魔の口みたいに開けッ放しになっている。
「おや、廟守もいねえのに、おかしいぜ」
雷横はふと立ち止まった。多年の直感が何か異臭をそこに嗅ぎつけたものらしい。

「やいやい。念のためだ。松明を持って、踏み込んでみろ」
雷横の一と声に、部下の捕手たちは、どやどやと廟のうちへ躍りこんだ。
するとそこには蜘蛛の巣だらけな暗闇を天国として、一人の大男が、お供え物の卓の上に、まっ裸な体を載せ、丸めた着物を枕に、高いびきで熟睡していた。
「ほう、凄げえ面して寝ていやがる……。眼も覚まさねえぜ」
と、捕手もあきれた。
毛脛、胸毛、まっ黒な肌。裸足に馴れた足は象の皮みたいだし、顔は赤痣だらけで、眉毛などあるかないかである。おまけに厚い唇から涎をたらして、正体もない寝ざまなのだ。
「……ははあ、兇状持ちの股旅者ンだな。叩けば何か出るだろう。なにしろ、紅葉の葉ッ端じゃ土産にもならねえからな」
呟くやいな、雷横は、そこの卓を蹴って、男のからだもろとも、引っくりかえし、
「縄をかけろ。四の五をいわすなッ」
と、不意にその男を搦め捕らせた。
もちろん、赤痣の若者も、吠えたり暴れたり、抵抗はしたが、二十余人の捕手に会ってはどうしようもない。手負い猪のように東渓山の麓へと曳きずられていった。
そもそも、この山裾には、一すじの渓川を境として、西渓村と東渓村との、二聚落がある。
かつて、その西渓村のほうでは、白昼でも妖怪が出るという噂がたち、事実、そこの淵で理由なく村の男女が溺れたり、牛馬が引き込まれたり、怪異な変が多かった。
すると或る年。一人の旅僧が、
「わしが鬼魂を鎮めて、供養してあげる」
と、大きな青盤石に経を刻ませ、妖怪退散の法要を行なって去った。
それからというもの、西渓村には無事がつづいた。――西渓村の幽鬼はみな、東渓村へ逃げていったのだ――と言い囃された。
怒ったのは、東渓村の名主、晁蓋である。
「化けものなんざ、いくらでもこいだが、おれが名主でいる以上、そんなケチをつけられちゃあ黙ってはいられねえ。西渓村の奴らめ、明日の朝になって、腰を抜かすな」
晁蓋は、深夜、ひとりで渓川を渡って行き、西岸の供養塔を担いで帰った。そして東渓村の見晴らしのいいところへ、それをでんと据えこんで、澄ましていた。
以来、この庄屋さんに、あだ名がついた。
――托塔天王。
その名のほうが、有名になった。
「おいっ、誰か起きてみねえのか。さっきから表門を、どんどん叩いている奴がいるじゃあねえか。どいつもこいつも寝坊だな」

晁蓋はさっきからどなっていたが、ついには自身寝室を出て、表門へ出ていった。
その朝。いや、夜はまだ明けてもいなかった頃である。
「うるせえな。だれだい、今頃」
開けてみると、黒々とたいへんな人影だ。松明の火光の中には、大の男の縄付が見えるし、顔見知りの雷横もいる。
「やあ、どなたかと思ったら、県の与力さまじゃあございませんか。いったい、どうなすったんで」
「おう晁蓋。こんな大勢して甚だすまんが、部下の者に朝飯をとらせたい。暫時、屋敷のすみを貸してくれんか」
「おやすいこッてすが、何か大きな捕物でも」
「なあに、そんな仰山な獲物でもねえが、霊官廟の内に、うさんな野郎が寝込んでいたので、引ッ縛ってきた帰り途だ。あそこも村の内、おぬしに声をかけないのも悪いからな」
「それは、どうも……ま、ずっとお通ンなすってください。いま雇人どもを起して、さっそく朝飯の支度でもさせますから」
まもなく荘院の内は、大賑わいになった。県のお役人衆とあって、下へもおかず、酒飯はもちろん、風呂まで沸かす騒ぎだった。
そのすきまに晁蓋は、門長屋の暗い一戸を覗いてみた。庄屋として、縄付の男を一見しておく義務を感じたからであろう。
見ると、鳶色の体に無数な傷を負った若者が、両手を梁に吊り上げられたまま、爪先だちに立っていた。大火傷でもした痕か、赤痣いちめんな顔を歪め、苦痛を歯がみで耐えている。
「はて。村じゃ見たことのねえ男だな。おい、どこのもンだ、おめえは」
「遠方から来た者です、へい、この地方に、お訪ねしたいお人があったのに。……そ、それを理不尽にも、いきなり縄目にかけやがッて。……あ痛て、アててて」
「なんだい。いい若いもンがよ。して、訪ねるお人ってえのは？」
「東渓村の托塔天王だ」
「えっ、なんの用で」
「そいつア言えねえ。だが晁蓋さんは、村名主だとか。……旦那、この村は何村ですえ」
「東渓村だよ。そしてこういう俺が、その晁蓋だ」
「あっ、だ、旦那がですかい。……じゃあ、聞いておくんなさい。あっしゃあ、東潞州の生れで」
「あ、たれか来た。早く用向きだけ、ひと口にいえ」
「じつア、ひょんな早耳から、ど、どえらい儲けぐちを知ったんで、それをお報らせに来たんでさ。旦那なら相談になると思って」
「よしっ、後で聞こう」
「後でッたって、この縄目じゃあ」
「助けてやる。――俺の甥になれ、甥によ。五ツ六ツの年に村を離れていたが、風の便りを聞いて尋ねてきたという風にな。……いいか、うまくばつを合わせろよ。場面は俺が仕組んでおく」

なに食わぬ体で、晁蓋はその足で、離亭に休んでいる雷横の席へ顔を出した。
「おや、もうご出立のお仕度で」
「やあ晁旦那。時ならぬ時刻に、えらい厄介をかけて、すまなかったな。夜も白んできたから、ぼつぼつ出かけようと思う」
「ご苦労でございますなあ。またどうぞ、近くへお越しのせつには」
門のほうでは、はや部下たちが、槍、棒、刺叉などの捕具を持って勢揃いし始めている。雷横もまた、颯爽と出ていった。
見送りにかこつけて、晁蓋はその後についていき、そして、門長屋から曳きズリ出された縄付を見て、
「ほ、ほう……。凄い大男ですな」
と、わざと目をみはって呟いた。
――この時、と合点したらしく、縄付の男は、不意に大声で呼びたてた。
「あっ、おじさんだッ。おじさん、助けてください」
「な、なんだって？」
晁蓋は、わざと怪訝な顔してから、ややしばらく、じっと相手を見すまして。
「や、や。おまえは王小三じゃないのか」
「そ、そうですよ、叔父さん。……ああ、叔父さんは、それでも、この小三を、覚えていてくれたんですね」
びっくりしたのは捕手たちである。わけて、雷横は、ぎょッとした。
「えっ、甥御ですか、この男は……。はアて、こんな股旅者が」
「なんともはや、面目もありません。恥をいやあ、てまえの姉夫婦の子です。これがまだ六ツ七ツの洟タレごろに、夫婦とも南京へ夜逃げしたきり音沙汰なし。その後、この小三の奴ア、いたずらして頭に大火傷をこさえ、それが十四、五のころで、親とともに一時は村へ舞い戻っていましたが、都の風に染んだ怠け者、またすぐ出ていってしまいました。……以来、姉夫婦も不運つづきで、赤痣の小せがれは、やくざに誘われて、家にも居つかず、親不孝を売り歩いているたア薄々聞いていましたが、まさか、雷横さまのお縄を頂戴しようとは」
「ふうむ……意外なこともあるもンだな」
晁蓋は、はッたと、偽の甥をにらんで。
「やいっ小三。なぜ、故郷の村へまで来て、悪事をしやがったか」
「ちがいます、叔父さん、あっしゃあただ、腹はへるし、塒もないので、霊官廟で寝ていただけです」
「悪事もせぬのに、なんで召捕られたんだ」
「わかりません。夢みたいなもンで、あっと気がついたら縛られていたんで」
「嘘をつけッ」
激怒を作って、晁蓋は捕手の棒をひッたくり、いきなり男の肩を二ツ三ツなぐりつけた。
「野郎、ほんとをいえ、ほんとを」
「だって叔父さん、ほかに言いようはありませんよ。……仰

っしゃる通り、身を持ちくずし、親不孝をかさねましたから、ひとつ叔父さんにこの悪い性根を叩き直してもらおうと、空き腹を抱えて尋ねて来たんです。だからこそ、盗みもせずに、夜が明けたら、叔父さんとこへ辿りつけると思っていたのに」

「こいつが、ひとを泣き落しにかけようと思やがって。そんな手に、俺がのるかっ」

また振り上げる棒を、こんどは、雷横が慌てて止めた。小三に同情したわけではないが、元々、不審の程度で捕えたに過ぎないのだから、と宥めに廻って、

「当家の甥御とわかれば、仔細はない、はやく、その縄目を解いてやれ」

と、部下へも命じた。

「ちぇッ、運のいい奴だ。小三、このご恩をわすれるな」と、晁蓋は彼をシリ目に措いて——

「どうもせっかくのお役儀を、なんだかこう、ムダ骨折らせたような恰好になって、申しわけございません。ひとつ、もいちど奥で、お口直しをしてからお引揚げくださいませんか」

強って、雷横をねぎらい直し、またそっと、銀子何枚かを心づけた。部下へもまた、それぞれの物を与え、どうやら彼の画策は上々で、まもなく雷横一行は、そこの門を立っていった。

あとの荘院の奥では、それからのことだった。

真新しい衣服頭巾をめぐまれ、朝飯もたべて、すっかり元気を取り戻したかの股旅者は、晁蓋を前にしてその素姓を明らかに語っていた。

「もとより手前はやくざ、生れ故郷は東潞州でござんす。苗字は劉、名は唐、と申しましても、それは顔も知らないうちに死に別れた親のくれた名。人さんからは、この赤面のため、赤馬だの赤髪鬼などとアダ名されております。どうか今後とも、お見知りおきのほどを」

と、型どおりな、初対面の仁義をきって。

「——ご高名は、とうに伺っておりますんで、いちどはご縁をえたいと存じておりましたところ、つい先ごろ、山東、河北の密貿易仲間の者から、耳よりな儲けぐちをチラと聞きこみ、こんな大ヤマを張れる相談相手は、托塔天王、いや晁旦那よりほかに、誰があろうと、お見込み申して、やってまいったような次第で」

「いやよくわかった。だがその、大ヤマを張る儲け仕事たあ、いったいなんだね」

「ようござんすか、ここで申しあげても」

「あ。ちょっと待ちな」と、晁蓋も念を押されて立たざるを得なかった。扉に鍵をかけ、窓の帳も垂れて——「さ。安心して、話すがいい」

「じつあ、近いうちに、北京は大名府の梁中書が、十万貫てえ金銀珠玉骨董を、開封東京へ、密々に送り出すはずですが、よも、ご存知でござんすまい」

「知らぬ。それはまた、なんのために」

「梁中書の女房の親父、いま宋皇帝の朝廷では最高の地位にある蔡大臣への、誕生日祝いに贈るッてえわけなんです」

「まあ、閥族同士の公然な大贈賄というわけだな」

「そうですよ、それにきまってまさアね。いわばみんな、庶民の汗や膏や、よからぬからくりで作った不義の財。そいつ

をこちとらが、狙ッてぶんどったところで、天道様も、よもやこち徒だけを悪いたア仰っしゃるめえて考えますがね」
「去年は、途中で賊のために、盗られたとかいう噂だったが」
「ですからさ、旦那。他人にやらせちゃもったいねえじゃござんせんか。――世間の噂にゃ、托塔旦那は、男伊達だ、槍や棒も旦那芸じゃねえ。しかも、不義には強いお方だと聞いております」
「よしてくれ。俺あ、おだてには乗らねえよ」
「ご免なすッて。そんな気もちで申したわけじゃございません。ただ、なんぼ北京軍の総帥でも、この干乾びたご時勢に、年々十万貫もの財宝を、女房の実家へ貢いでるってえなあ、たいした大泥棒でございますぜ。ようし、それならこっちも上わ手をいって、横奪りしてやろうというわけ。……どうですえ、旦那、ご分別は」
「先にゃあ、去年の失敗がある。よもや今年は、ののめ掠奪められるような凡くらを警固としては出かけまい」
「なんの、この劉唐だって、腕には覚えがあるつもりだ。まして托塔天王様に、うんといって、一つ乗り出していただければだ」
「なるほど、話はすばらしいや。ちょっと、食指が動くな」
「だからさ、お譲り申しますよ。この儲け口を」
「ま。……よく考えようぜ。おぬしも、客間で一杯やって、ゆっくり休んでいなさるがいい。やるかやらぬか、おれも思案の腹をきめ、その上での相談としようじゃないか」
　ぜひなく、赤髪鬼の劉唐は、一応、客間へ引きさがり、あてがわれた酒の膳について、独りがぶがぶ飲んでいた。
　――だが、どうにも彼は、おもしろくない。晁蓋の生返辞が気にくわないのだ。「ははアん。俺をただの与太もンと見て、相棒には不足と考えたに違いねえ」そう思うと、酒が業腹を焚きつけて、我慢がならなくなってきた。
　ふと窓外を睨むと、一頭の裸馬が、裏門につないである。なに思ったか、劉唐は「……ようし」と独り呟いた。そして壁の槍掛から一本の野太刀をつかみ取って、
「与力の雷横もまだ遠くへはいっていまい。――そもそも、あいつのために、縄目にあい、ぶざまな弱音を吹いたので、晁蓋までが、この俺を、だらしのねえやつと、見くびッたのだ。雷横に追ッついて、野郎の詫び証文か片腕でも奪ってきて見せたら、晁蓋もおれを見直すだろう」
　どんな自信があるのか、赤髪鬼はヒラとそこを跳び出すやいな、荘院の裏門から県の街道を馬で矢のごとくすッ飛んでいった。――時に、陽はゆらゆらと牧場の朝露を離れて高く、木々には百鳥の囀り、遠山には丹霞のたなびきが美しい。これで地に人間の争いがなく、宋朝の政に腐爛さえなければ、この世はそっくり天国なのだが。

十七　寺小屋先生「今日休学」の壁書をして去る事

　どうせ、急ぐ道でもない県下巡邏の捕手たちだった。
　すき腹に朝酒の振舞いをうけ、雷横以下、なおさらブラブラ歩きにもなっていた。そして彼方の石橋一つ渡れば、次の隣村という村境でのことである。
「おおうい、待てえっ。雷横、待てっ」

突然な後ろからの声に、ぎょっとして振り向くと、なんと例の赤痣が、ひらと飛び降りた裸馬を楊柳につないで、野太刀に反りを打たせて向ってくる。
「やっ、きさまは、さいぜん縄目を解いてやった、荘院の甥だな。なにしに、この雷横を追ってきたのか」
「詫び証文を貰いにきた。さあ書け。――昨夜はなんの咎もない人間に、理不尽な縄目をかけ、まことに相すまぬ落度であった――と、詫び状一札書いて渡せ」
「ふざけるな。こちらの慈悲も忘れやがって」
「慈悲が聞いて呆れらあ。叔父御からは、銀子何枚かを、袖の下に貰っていたろう。ええ、面倒くせえっ。詫びの一枚をよこさねえなら、その片腕をぶった斬って、貰って帰るぞ」
「こいつがッ……」と、雷横は憤ッて「――晁蓋の甥というので、ゆるしておけば、よくも、いい気になりゃあがッて」
「おおさ！　俺をなんだと思ってやがる。霊官廟じゃあ、寝込みで是非もなかったが、いまはちッと俺さまが違うぞ。いわれもねえ縄目の返礼だ、雷横、覚悟っ」
振りかぶってきた野太刀の迅さ――。雷横はかわすひまもなく、腰の官綬刀を抜いてバシッと受けた。そのまま打々発止と火花の間に斬りむせび合うこと数十合――。
わっと騒ぎ廻る捕手たちが、横から手を出す一瞬のすきもない。
「こんな小僧っ子」――雷横は闘いつつ、まわりの部下へ、豪語した。「――おれ一人でたくさんだ。手を出すな。遠巻きに見物していろ」
しかし、結果は、彼の大言の通りにゆくかどうか、なんともいえぬ形勢に見える。
雷横の刀術に、鳳の概があれば、赤髪鬼の野太刀にも、羽を搏つ鷹の響きがあった。赤髪の影が旋風に沈めば、迅雷の姿が、彼の上を躍ッて跳ぶ。――いずれにも、流儀があり、技があり、法にかなった秘と秘の術競べとはなったので、この勝負、いつ果てるともみえなかった。
だが、雷横の部下たるもの、もう見ては、いられない。
「――あっ、お頭があぶないッ」
誰かが叫ぶ。
同時に、どっと助太刀にうごきかけた。
ところが、すでにその寸前、街道わきの緑蔭静かな一戸の垣の網代戸から、さッと走り出てきた田鶴のごとき人品のひとがある。
「まあ、待たっしゃれ」
と、その者は、手に持っている分銅付キの細鎖で、双互の間を分けへだて、
「お二人とも、刀をお引きください。どうした仔細か、わしに任せてくださらんか。わしの家の前で、こんな芸をやられては、まさかただ、見物しとるわけにもいかんじゃないか」
事に迫らず、からからと笑っての扱い。雷横と劉唐も、思わず太刀を収めて、その人を見た。これなん、この片田舎には過ぎた童塾（寺小屋）の先生、智多星の呉用で、道号加亮、あざ名が学究。略して、呉学人とも、呉用先生とも、よばれている者だった。
黒縁の麻ごろもに、学者頭巾をかぶり、髯長やかだが、さりとて、腰の曲がった老人ではない。白皙にして、なお紅唇

の精気若々しく、眼すずやかな底に、知識人の何かがある。
学人は、代々土着の家柄の人で、世評に聞けば、書は万巻に通じ、胸に六韜三略をきわめ、智は諸葛孔明に迫り、才は陳平にも比肩し得よう、とある。そのうえ済州の地方、この人あって、童歌の清きを失わず、また能く、読書の声を野に保つ……とまで賞めそやされているほどだった。
「退いてくれい、寺小屋先生。怪我をするぞ」
劉唐は、なお息まき。雷横もいうまではなく、官の与力、估券にかかわる。
「学人。ほうッといてください。用捨はならん」
「盗賊ですか。この男は」
「いや、荘院の甥ッ子とかだが」
劉唐が、横から吠えた。
「盗ッ人でもねえ俺を、盗ッ人と間違えて、縄をかけやがッた凡くら与力だ、そいつは」
「まだ吐ざくか」
「いうとも、詫び状よこせ」
「うぬっ。もいちど、縄目を見たいのか」
ばッと、両人の踵が、砂を蹴って、またもや、と見えた一刹那、どこかで、
「ばか者っ、なにをしている！」
と晁蓋の声がした。
息せき切って、あとからここへ馳けつけてきた彼は、馬の背から飛び降りるやいな、二人を割って、まず雷横にあやまった。
「どうも、はや、とんでもねえ奴です。お腹立ちでもございましょうが、どうかご勘弁なすって下さい」
そしてまた、劉唐の肩を、一つ突き飛ばして、
「この酒食らい野郎め、ちょっとの間に、もう酒をくらった揚句、なにを考えて、飛び出したかと思えば」
いきなり、彼の手から、野太刀をひッたくって、刀背打ちに撲りかけた。驚いて、その手もとを抑え、
「あっ。そうまあ、ご立腹なさらずとも」
と、止めたのは呉学人である。
「いま、聞いてみれば、他愛もない間違いの意趣返しだとか。それに酒気があるなら、なおさらのことだ。雷横どのも、お役儀の途上、ゆるせまいが、ここは晁蓋さんと、わしに免じて、ひとつ堪忍してあげてくださらんか」
ふたりの詫びでは、雷横も渋れない。それを機に、雷横は部下をまとめて去り、劉唐は、晁蓋から「先に屋敷へ帰っていろ」といわれて、これもまた、裸馬にまたがり、ニヤニヤしながら戻っていく。
あとは、呉用と晁蓋の、二人だけだ。
「いや今日は、えらいものを見せられたよ。――あなたが来たからよかったが、さもなければ、野太刀と官刀の勝負、さあ、どっちとも分らなかったな。雷横は有名な刀術の使い手だが、どうして、あの赤痣もなかなか強い。ひょっとしたら、達人雷横も、やられたかもしれん」
「へえ？　……そんなでしたか、あの赤馬が」
「ハハハハ、赤馬はよかったな。まさに後漢の呂布の愛馬赤兎を思わす風がある。甥御さんと伺ったが」
「いやいや、先生、それには深いわけあいがあること。いか

がでしょう、折入ってご相談申しあげたい儀があるのですが」
「折入ってとは、よくよくのことか？」
「まったくの、よくよくごとで、どうにも、自分の思案には余りましたので」
「待たっしゃい。あいにく、授業の日だが、壁書を残しておくから」
呉用は、一たん家の内へ入った。婆やに何かいいつけ、また、筆を取って、サラサラと書いた一紙を、学童の眼にふれやすそうな教室の壁に貼りつけておいて、
「これでよし。これでよし。さあ、晁蓋どの、同道しようか」
と、外へ出てきた。
晁蓋が、ふと、立ちよどんだのは、呉用が壁に残した貼り紙の文句に、気をとられていたからだった。子供にも読みやすいように、それにはこう書かれてあった。

先生ハ今日
急用デ、オ留守
素読ハ　オ休ミスル
オ習字ハ　家デヤルコト
遊ブ者ハ
蛙ト遊ベ
河ヘ落チルナ

相談事も、事によりけり、というものだ。
北京の梁中書から、都の蔡大臣へ、誕生日祝いに送る時価十万貫のものを、「奪うべきか。見のがすべきか？」また。
「――奪うとしたら先生には、どんな奇策がありましょうか？」とは、いかに、今孔明の称ある智多星呉用先生でも、おいそれと、返辞ができたものではあるまい。
人を遠ざけた晁家の書楼の一室。
「……じつは」
と、声をひそめて、主の晁蓋から、今暁の事の次第、劉唐の本体、またその劉唐が持ちこんだところの情報などを、審かに打ち明けられて、さすがに呉学人も黙考、久しい体だった。
それへ答える前に、彼がひそかに思うには。
これはみな、宋朝腐爛の悪世相が、下天に描きだしつつある必然な外道の図絵だ――。これを人心の荒びと嘆くも、おろかであろう。
単に、悪を悪と見なすなら、悪の密雲は、上層ほど濃い。上層ほど、大きい。しかも、政治にかくれ、権力にものをいわせ、公然と合理づけた悪を行って、恥ずるを知らない。
それに反して、民土の悪は、おおむねが小悪だ。生きるために。また、いささか生命を愉しむために。共通の人間欲のために。あるいは、反逆のために。
わけて今は、反逆の徒が多い。虫のわくごとく地にこれをわかせたものは、宋朝自体の腐土ではないか。〝この世をば我が世〟と思い上がっている貴紳大官ではないか。
梁中書、蔡夫人。蔡大臣。それらも、驕慢星の二タ粒三粒だ。
それにたいし、地にはいつか、上層の驕慢星に闘わんとする反逆星が、宿命したのはぜひもない。
この地煞星（まがつぼし）はもとより庶民の土を藉りて住み、

悪行いたらざるなき悪戯星の性は持つが、しかし、いささかの道義は知り、相憐れむの仁を抱き、弱きはこれを虐げず、時に、漢と漢とが、ほんとに泣き合うことも知っている。
単純むしろ愛すべく、野性、憐れむべきであるが、なお人間らしき人間たる、真性だけは失っているものではない。
これを捨てず、これを刑せず、もし愛情と同鬱の友となって、よく用い、また善導しつつ、いまの糜爛社会に何らかの用途と生きがいをも与えて、ともに、世を楽しむ工夫はないものか。……あれば、宋朝治下の塗炭の民土に、一颯の清風と、一望の緑野を展じるものと、望みをかけ得られないこともないのだ。
「……晁蓋どの」
やっとその沈思から面をあげた呉学人は、
「おやんなさい。智恵も貸しましょう」
ぼつんとだが、一語は明晰に、また断の力がこもっていた。
「えっ。ではお智恵も貸してくださいますか。じつは昨夜、妙な夢を見ましてね」
「どんな夢を」
「北斗七星が、てまえの屋敷の棟へ堕ちてきた夢です。変な、と思っていたら今暁の出来事……吉か凶か、判断に迷っていましたが、先生のおことばで、力をえました」
「だが、わしがやめろといっても、怖らく思い止まるまい」
「ご明察どおりです。この晁蓋にすれば、なにも危ない橋は渡らずとも、家代々の荘院、食うにも着るにも困る身じゃございません。けれど、いまの世を見渡して、どうにも、腹から愉しめぬものが、日ごろ、もやもやしていたもンです。そこへ持ってきてのこの話でさ。正直申せば、欲と義憤の二タ道かもしれませんがね」
「しかし、梁中書も、今年は去年の轍はふむまい。難かしいぞ」
「覚悟の前です。……が、先生のご意見としては」
「どうしても、粒ヨリな人間七、八人の結束は要る。お宅の雇人や壮丁など、何十人いても、役には立たん」
「ゆうべ見た夢は、北斗七星。……まず先生と、てまえと、赤馬の劉と、ここにゃあ三人しかいませんが、うまく星の数だけ揃いませんかね」
「さアて」と、呉学人は、ふたたび何か眉を沈めていたが、
「いや、ないこともない、はからずも思い出した者がある」
「えっ。先生がそんなにまで、力をこめて、頼もしそうにいう人物というのは」
「三人兄弟。しかも三人とも、義に厚く、武技に秀で、事に当ったら、水火も辞せぬ男たち」
「はて、今時どこに、そんな勿体ない男が、どこに埋もれていたでしょうか」
と、晁蓋は、思わず膝を前へすすめた。
呉学人は、一気に言った。
「その三兄弟とは、阮小二、阮小五、阮小七といって、血をわけた真の同胞。――済州は梁山泊のほとり石碣村に住んで、日ごろは、江の浦々で漁師しているが、水の上の密貿易も、彼ら仲間では、常習とされている。……もとより、文字はない男たちだが、その義心と武には、わしも見込んでいた

者だ。会わぬこともう両三年になるが、よも、わしのことは忘れてはおるまい」
「ああ、阮の三兄弟でしたら、薄々、噂には聞いていました。石碣村といやあ、わずか二日道、使いをやって、ひとつこれへ呼んでみましょうか」
「来るものか、あの兄弟たちが。この呉用が出向いて、相談をもちかけても、よほど三寸不爛のこの舌で口説かぬことには」
「なるほど。それほどな男とあれば、なお頼もしい。先生、お出かけくださいますか」
「行ってもよい。……が、学童らの授業休みの貼り紙に、もいちど、日延べを書いて来ねばならぬ」
「今夜立っても、明後日の午には着きます。その前に、赤馬も加えて、一杯さしあげたいし、その上でのご出立でも」
「おおそうしよう。さてさて、人生の朝暮、なにが起るか知れんものだな」
　彼は一度、童塾へ帰って行き、夕方からまた見えた。そのときは、赤馬の劉唐も同席し、詳しい話は、もうあるじの晁蓋から聞いている容子だった。
　三人は、二更の頃まで、飲んでいた。――時々、声がひそまるのは、密議らしい。北京から東京への道すじを、例の時価十万貫の生辰綱（誕生祝いの荷梱）が行くとすれば、その通路は、どの辺に当るか？　去年と道すじを変えるか否か？
　これらはまだ未知数というしかない。今は、五月初め。誕生祝いは七月十五日とか。――なお七、八十日の間は、たっぷりある。
「準備に日は欠かぬ。だが、三兄弟の誘いこみは、早いに限る」
　呉用は、酒もほどほどに、さっそく旅支度にかかりだす。外は、ぬるい夜靄の夜だし、陽気にはまず申し分もない。
「じゃあ、わざとお見送りもしませんが」
「むむ、人目は避けよう。劉唐さんも、わしの帰るまでは、おとなしく客間に籠っていてもらいたいな」
「もうご心配はかけません。吉左右をお待ちしております」
　門を立って行く呉学人の影は、すぐ模糊たる夜靄のうちに淡れ去った。
　一日おいて。翌々日の午じぶん。
　早くも彼の姿は、水郷石碣村のほとりに見られた。
　かつて、何度も遊んだ土地だ。阮小二の家も、探すまでのことはない。芦汀に臨み、山に倚り、数隻の小舟をもやった棒杭から、茅屋の垣にかけて、一張りの破れ網が干してあった。
「おいでですか、どなたか」
　廂を、覗くと、昼寝でもしていたか。
「だれだね」
　むっくり出てきた若者がある。
　これが阮小二だった。腰切りの漁衣、はだけた胸。その大胸毛は珍しくないが、石盤のような一枚肋骨は、四川の絶壁を思わすに充分である。
「やあ、……これは」
　濃い眉毛も、大きな口も、一時に、あどけなく相好をくず

して、
「お珍しいなア、先生じゃございませんか。いったい、どうした風の吹き廻しで」
「急な頼みごとができたのでな」
「へえ、どんな御用で」
「さる知人の富家で、お祝いごとがある。それで、めかた十四、五斤の金鯉を、どうしても十匹ほど入用と、折入っての、頼まれごとさ。弱ったな」
「まア、お上がンなすって。いや、いっそ、江の向う浦へ行きましょうや。ちょッとおつな旗亭がありますぜ」
裸足で飛び出した阮小二は、すぐ杭の小舟を解き放して、呉用の体を拯いとり、櫂を操ッて漕ぎだした。
江を行くこと、さながら自分の足で颯々と歩くにひとしい。
まもなく、江のまん中を、斜めに過ぎるうち、芦の茂みを透いて、チラとべつな一隻が見えた。すると、こっちから阮小二が呼んだ。
「おうい、小七。……小五はどうしたい、小五はよ」
水 谺して、向うからも答えてくる。
「オウ、小二哥いか。……小五哥いに、なにか用かね」
「大ありだ、呉先生が、おいでなすったぜ」
「なんだア？　呉用先生だって。うそいえ」
「ほんとだ、てめえも来いよ。先生を誘って、これから一杯飲りに行くところだわ」
「こいつはいけねえ、与太をとばして、そいつアとんだ失礼をしちまった」
芦むらを漕ぎ分けて、さっそく近づいてきたのを見ると、これなん、村では活閻羅ともアダ名のある末弟の阮小七。
釣でもしていたか、竹ノ子笠に、碁盤縞のツツ袖水着、笠の翳ながら、大きな出目は、らんと燿き、筋骨はさながら鉄といえば言い尽きる。ひたと、舷そろえつつ。
「ごめんなさい、先生。あんまりお久しぶりなもんで」
「行くかね、いっしょに」
「ぜひ、お供を。……ちょっくら、おふくろの家へ寄って、小五哥いも誘いましょうや」
近くの岸へ寄る。ここにも、水を繞らした小部落があった。その一軒へ、舟の上から。
「おふくろ。小五哥いは、いますかい」
「いないよ」と、膠もない返辞。
「――漁師の親のくせにして、あたしゃあ、ここ幾日も、魚の顔を見たことがないよ。あの子ときたら、毎日、ばくちばくちの追い目でさ。あきれたよ。たった今も、あたしの簪を引ッたくって、消えて行ったばかりだよ」
小二は、頭を掻いて、逃げるように、また漕ぎだした。
「どうも先生、いやなことを、ついお聞かせしちゃって、どうぞお気を悪くなさらないように」
「ははは。そんな内輪ごと、なにも、初めて知ったわしではないよ」
「でもネ、折がまずいや。……小五哥いも、目が出ねえらしいが、どうも早や、あっしら兄弟は、みんな、ばくち好きの、ばくち下手ってやつでしてね」
「近ごろ、いけませんかな」
「近ごろなら、先生、まだいいんですがね、もう一年以上も、

取られっ放しの、素寒貧つづきですよ。魚をとったぐらいじゃ、いくらとったって、間にあわねえ」
「小二哥い、およしよ」と、小七が横からいった。「つまらねえことを、お耳に入れたって、頭を掻いたくせに、自分からまた、シケたぼやきをお聞かせするたあ、どんなわけだい」
「ちげえねえ。先生、笑ってください」
「はははは」と、呉学人は、彼らの註文どおり大いに笑って、
「――いつも、おまえ方は、明るくていいな。運は時のものだ。時が来れば、あっち向きの花も、こっち向きに咲き変る朝もある」
言いながらも、じつは心のうちで、これは脈がある、わが計なれりと、ほくそ笑んだ。
漕ぎゆくほどに、村の漁師町が望まれてきた。旗亭の旗も見える。橋畔の家々の洗濯物も見える。舳はずんずん岸へ寄せていた。
「ああ先生。いい都合だった。ちょうど、小五がいましたよ」
「ほう、どこに」
「ほれ、あんなところに」
小七が指さすところを見ると、なるほど、いま橋袂から降りてきた一人の男が、舟のもやいを解きかけている。
手頸に提げたのは、どうも、縄を通した二夕差しの銅銭らしい。
どこか殺気のただよう眉間は、ばくち窶れのせいだけでなく、異名も、短命二郎といわれているほどだから、独自な人相というものだろう。喧嘩に俊敏なのは、その尖り肩や脛の長さでも察しられ、ボロの漁着の胸もとからは、青ずんだ豹の刺青が見え、その凄味を消すよりは、むしろ増すかのように、頭上斜めにかぶった刺子頭巾の横鬢に、一枝の柘榴の花を挿していた。
相見ながら、漕ぎ近づくと、
「よう小五さん」――呉学人から、声をかけた。
「どうです、いい目が吹いてきそうかね」
「誰かと思ったら……」と、小五はやっと、怪訝顔を解いて笑い出した。
「――先生たあ、思わなかった。さっきから、あの橋の上で、見てたんだがね。どこへ行くんだ、小二哥い」
「この先の旗亭よ。来ねえかい」
「橋際にもあるぜ。妓もいるし」
「いや先生の馳走には、妓よりは風景だろ。これから夕陽が沈む頃あいまで、芦と水と、帰る帆と、それからあの梁山泊の山々が、紅い瑠璃色からだんだん紫色になっていったり、おれたちでも、恍惚するほどな景色に変る。あれがご馳走だ。もう一ト漕ぎして、水っ端の旗亭まで行こうや」
「よかろう、三艘、舳を揃えて繰りこむか」
小五の柘榴頭巾も、自分の小舟へ、ひらと跳び下り、たちまち、櫂音たかく追いついてきた。

十八　呉用先生の智網、金鱗の鯉を漁って元の村へ帰ること

「ああ酒も美味いが、空気までがまた美味い。お互いこんな日に会うのも、生きてこそだな。おまえ方、三人兄弟と一し

ょに、こうして杯を持つのもまことに久々だし」
「先生、よほどここの旗亭がお気に召しましたね」
「ム。貧しい漁村の一杯飲屋も、時によれば岳陽楼の玉杯にまさるというもんじゃ。……江の畔には柳や槐のみどりが煙るようだし、亭の脚下をのぞけば、蓮池の蓮の花が、さながら袖を舞わす後宮の美人三千といった風情」
「ははは、先生のこんな上機嫌は初めて見たぜ。なあ弟」
兄の小二がいうと、弟の小五、小七も口を揃えて、
「よかったなあ、せっかく、ご案内してきても、どうかと思ってたンだが。……ところで兄哥」
と、ここで小五が、口をはさみ、
「おれだけまだ聞いていないが、呉用先生がとつぜん村へ現われたッてえのは、いったい、どういう御用向きなんだね」
「それがサ」と、長兄の阮小二は、ちょっと自分の頭を叩いて――「目方十四、五斤の金鯉を十尾ほど揃えてくれと仰ッしゃるんだが……近ごろの漁場じゃ、おいそれとは、とれそうもねえや。……でも、先生の知人のお大尽が、婚礼に使うんだから是非にと、先生も頼まれちゃったというんだよ。弱ッたもんだな」
「ふウむ、そいつはご難題だぞ。……が、まアいいや、先生、もひとつ、いかがです」
「もうだいぶ酩酊ぎみだよ。日も靉靆と暮れかかるし、心気は朦朧だ」
「先生、とにかく今夜は、汚い小屋じゃございますが、てまえどもの家へお泊りくださいませんか。ここの一杯屋も、晩まではやっておりませんので」
「おう、ご厄介だが、世話になるよ。とにかく十尾の金鯉を持たなければ、友人のてまえ帰れんからのう」
これは口実、呉学人の思う金鯉とは、もとより金色の鱗をもった魚なのではない。兄弟三人を網中の獲物として、首尾よく、晁蓋一味の大仕事の味方にひき入れて帰ることだったが――しかし、その真実を言いだすのは、場所もまずい、と考えて、
「じゃあ、ぼつぼつ立とうか。おいよ。旗亭の亭主、勘定をしてくれい」
「とんでもない、先生に金をつかわせるなンて……。ここの払いは、手前ども兄弟にまかせておくんなさい」
「よかろう。では、わしは手土産でも提げるとしよう。亭主、大甕一壺に酒を詰め、牛肉二十斤、鶏一ト つがい、あの小舟のうちへ積んどいておくれ」
呉用は銀子一両を亭主に渡して頼んでいる。
阮の三兄弟も、それぞれ小舟にもどり、やがて呉用をのせて、夕波の江を漕ぎ渡って、家路についた。
「さアお上がンなすって」
案内してきたのは、昼、行きがけにちょっと寄った阮小二の家である。兄弟三人中、女房持ちは長兄の彼一人らしい。さっそく持って帰った肉や鶏を、女房と漁場の餌採り小僧にいいつけて、料理にかからせ、
「先生、ここなら夜ッぴて飲み明かしたっていいんですから、どうぞ今夜は帯紐解いたおつもりで召上がっておくんなさい」
と、水に臨んだ裏部屋の破れ簾を捲いて、映し入る月の光を囲んだ。

料理もできる。杯も巡りはじめる。
江上でいちど醒めた酔いがぱっと出て、話はすぐ弾みだした。
「なア兄弟がた。またしても、気がかりを言いだすようだが、十尾の金鯉を揃えるぐらいなことが、どうしてそんなにむずかしいのか」
「それやあ先生が、学問や兵法には通じていても、世事にはお晦いからでございますよ」
「ふウむ……こいつは一本参ッたかな。しかし、どういう仔細か、そこを聞こうじゃないか」
「入江や海なら、どんなところにも、どんな魚でもいると思うのが、そもそも世間知らずでサ。――打ち明けて申しますと」
「なんだか、ひどく物々しいのう」
「まったく、物々しいお話ですがね、あっしどもの漁場としているこの石碣湖なンてえのは、猫のひたえみたいなもンで、一尾十斤もする大鯉を揚げるにゃあ、どうしても向うに見える梁山泊の辺まで漕ぎださなくちゃ採れません」
「それ、そこがおかしいじゃないか。梁山泊なら水つづき、しかも彼方に見えている。どうして、そこで採ってこられんのか」
「鬼門ですよ。梁山泊ときては」
「鬼門。いよいよ変だな。どういうわけで」
「イヤ、お話にも何もなりゃあしません」
「まさか、殺生禁制の禁漁区でもなかろうに」
「殺生禁断どころか、ヘタに近よれば、こちとら、人間さまのお命があぶねえんですよ。――ずっと以前は、梁山泊の沖こそ、あっしども兄弟の稼ぎ場でしたのに、イヤひでえことになったもんで、お蔭ですっかり貧乏つづきのこの落ち目、忌々しいが、どうにも仕方がありやしません。なあ弟」
と、兄弟顔見あわせての嘆息だった。
呉用は心ひそかに、しめたと思う。どうやらこの辺に、兄弟の本心を引き出す鍵がありそうである。――と見たので、杯も下において、
「ほ。……それが落ち目の原因とは一生の大事ではないか。あんた方三名、人なみ以上な五体と若さを持ちながら、なんでそんな運命に負けて指をくわえていなさるやら。……はて、わからんな、もすこし打明けたところを聞かせてくださらんか」
せまくても石碣村の浦人仲間では、男名を売っている兄弟三人が、「――なんでそんな運命に負けて指をくわえているのか」といわれたのだから、少々口惜しかったにちがいない。――そこで兄弟こもごも、憤然とじつを訴え始めたが、それこそは、加亮先生呉用の思うツボであったであろう。
「……なにしろ、先生。その梁山泊ッていうのは、群盗の根城なんです。いってみればまア天下に恐い者なしの無法者の巣ですからね、かなやあしません」
「それは初耳だな。いったい、どんな人間どもが寄っているのか」
「白衣秀士の王倫ていうのが大将株でしょうか。こいつはなんでも、東京の役人試験に落第した書生くずれだそうで、以

下、摸着天の杜選とか、雲裏金剛の宋万とか、旱地忽律の朱貴なんてえ手輩がおもだったところで、手下六、七百人もいるんですから、いくら歯がみをしてみたって、こちとら兄弟じゃ手も出せませんや」

「むむ……それじゃあムリもない。そんな豪勢な賊寨か」

「おまけに、近ごろその仲間へ落ちていった、もと宋朝の禁軍の師範、豹子頭林冲というのがまた、めッぽう腕の冴えた男とかで、いよいよ梁山泊と聞いたら泣く子も黙るくらいなもんです」

「が。妙だナ、それも」

「先生、なにを首を傾げなさるんで」

「だって、いかに今は、濁世のどん底とはいえ、上には宋朝の政府があり、地方には各省の守護、管領。田舎には郡司、県吏もいるものを、そんな大それた群盗が、天もおそれず、山東の一角を占めておるなど、信じられんことではないか」

「さ、それがですよ先生。このごろの役人ときたら、賄賂には弱く、人民には強く、検地や事件で村へ来ようもンなら、豚、羊、鶏、家鴨まで食らいつぶしたあげく、晩には娘を伽に出せの、帰りには土産を馬に着けろなンて吐かしゃあがって、そのくせ、ちょっと手強い山賊や無頼漢にでもぶつかると、逃げまわるのが関の山で、たとえ、盗難や乱暴者があって、訴え出たって、間に合う頃に来たためしなどありやしません」

「ひどいな。本当かな、それは」

「嘘だと思ったら、先生もちと、この辺へ住んでごらんなさいよ」

「そりゃ見てはおれまい。幸い、わしの住んでいる土地には、晁蓋というなかなか肯かない荘院がおる。そのせいか、それほどでもないが」

「だから奴らには、金力か腕か、どッちかでなけりゃあ応対もできません。弱い土地の、素直な土民と見るほど、権柄を振り廻すのが、いまの役人ですからね」

「貧土こそわが世の春といったような振舞だな。これや何とかせずばなるまいて」

「そうですよ、先生。なにもさもしい根性で、役人暮らしの垣の内を覗くわけじゃあねえが、大ゲサに言やあ、金銀は秤で分け取り、衣裳は好み放題、食い物は贅沢ざんまい。それがみンな、人を泣かせてせしめているものだから、業腹でたまりません。こちとらなど、働いても働いても、どうしてあいつらの真似もできねえのかしらと、稀にゃあ、情けない気もしてきますぜ」

「なんだ、漢たるものが！」――と呉用智多星は、ここぞと、語気を入れて、叱るように、兄弟の顔を、らんと睨め廻した。

「あんた方は今、いう口も穢れるように、腐れ役人を嘲ったじゃないか。その口ですぐ、役人暮らしの真似もできぬとは、なんたる意気地のない愚痴か、みッともないぞ、いい漢が」

「先生、ごめんなさい、つい、つまらねえ愚痴をこぼし、面目次第もございません」

「いや、あやまるには及ばんさ。だが、わしはおまえ方の、兄弟贔屓で言いおるんじゃ。どうして、これほど立派な漢三疋が、食うや食わずでいなければならぬかと……」

「ありがとうございます。そう仰っしゃってくださるなあ先

生だけだ。もし先生みてえなお方があって、こんな漢どもでも、腕と根性ッ骨を、気前よく束で買っておくんなさる人でもあれやあだが……まずねえなア、今の世じゃあ」
「いやある」
「ありますかえ、先生」
「なきにしもあらずだ。――いッそ、梁山泊へ行ってみたらどうだ」
「だめ、だめ」
兄弟三名、三人ともに、鼻っ先で笑いながら、手を振った。
「そんな智恵なら、なにも先生に教えられねえでも、朝夕に眺めている梁山泊、とうに、そッちへ転げ込んでいますが、あそこには、白衣秀士王倫ていう気に食わねえ野郎が首領に坐っているでしょう。気の小ッけい、侠気も義もねえ男だと聞いています。いくら飢じいッからって、そんな泥臭え野郎の下にゃあ付きたくありませんからね」
「よく言った。その背骨を失ったらもう漢はない。では何か、もしここに、腹から心服できる者があって、かりにおまえ方の漢を見込んだうえ、買うといったら、どうなさる？」
「あはははは。ありッこねえや。そんな人は」
「いやさ、もしあったらば」
「それや、いわずと知れている。漢が漢とゆるしあうことでしょ」
「そうだ」
「そんなら、水火も辞しません」
「ならば改めて、君たち三兄弟に、ひきあわせたい人がここにある。どうだ会ってみないか」
「だれです、それは」
「ここからわずか数十里、東渓村の名主をしている晁蓋だが、これは山東河北きッての人物とわしは平常、観ておるが」
「あ。托塔天王とアダ名のある荘院さんですか」
「知っているのか」
「いや、聞いているだけです。――義に厚く、侠につよく、たいそう金ばなれもきれいな人とは伺っておりますが」
「なにを隠そう、じつは今度のわしの用向きというのは、その晁蓋から頼まれて、或る一用を帯びて参ったわけじゃが」
「では、なんですかい。金鯉十尾ご入用とかって仰っしゃったのは、嘘なんですか」
「方便じゃよ。方便はゆるしてくれい。なんとなれば、君たち兄弟の腹の底を見とどけぬうちは、めッたに口を割れぬ秘密なのだ。しかし、いまはもう寸分、君たち三名の義を疑ってはいない」
「どういうご相談事なので」
「くわしくは、その晁蓋と君たちが、義の杯を結んだうえで打合せるが、かいつまんでいえば、一世の大金儲けと、悪政府の大官を膺懲しようという快事だ。つまり、その二つを、一挙に併せてやろうという目企みだが、ぜひ君ら三兄弟にも、その仕事にのッてもらいたいという晁蓋の切なる望み。……で、かくいう呉用が誘いだしに参った次第だ」
「ほんとですか、先生」
兄弟は、眼をかがやかした。短命二郎の阮小五などは、感激のあまり、自身の首すじを平手で叩いて、
「待ってました。この首は、この漢の値打を知って買ってく

れる人のためにあるようなもンでした。なあ哥き」
「そうだとも。この漢一匹、もし先生が買うと仰っしゃるなら、いつでもと思っていたのに、そのうえ、晁蓋さんまでが、あっしどもを見込んで、力を借りたいというのなら、一も二もありやしません。早速ここで誓いましょう。どんな秘密でも打明けておくんなさい。こう見えても、裏切るような下種どもじゃござんせん」
「じつは、こうだ。――この七月十五日、朝廷最高の顕官蔡大臣のもとへ、その人の誕生祝いとして、値十万貫におよぶ金銀珠宝が北京からひそかに送りだされる。――贈りぬしは北京の大名府に君臨する梁中書夫妻。――もとよりその財貨宝玉は、すべて悪政の機関から搾りとった民の膏血にほかならぬ。……これを奪うのは天の誅罰といえなくもあるまい。途中、その輸送を襲うて、これをせしめる手だてなどは、晁蓋やほかの同志と同席のうえでなお仔細に密議せねばならんが、要はそういう目的だ。すぐわしとともに東渓村まで行ってくれぬか」
「いきますとも」
小二、小五も二つ返辞で、
「おい小七。いつもおめえが、夢みたいにいってたことがよ、なんと、夢ではなくて、ほんまに来たぜ」
と、三兄弟、手の舞い足の踏むところも知らず、といった風なよろこびだった。
――明ければ、早朝から、兄弟いそいそと二日三日の旅立ち支度。呉学人を先にして、東渓村へさして行った。
月はまだ五月初旬の爽涼、若者の心そのままな薫風が袂を打つ。
東渓村へ入ったのは翌々日の午さがり。さすが荘院の示しがよいせいか、石碣村などとはくらべものにならない村道のきれいさ、村の土倉や、屋根もどことなく落ちついて見える。
――と、彼方の一ト構えの土塀門の外、槐の下の木蔭に「今日もや着く？」と待ちうけていた晁蓋その人と、食客の赤髪鬼劉唐のすがたが、はやそこに見いだされてきた。
双方、すでに遥かより相見ながら、
「やあ」「やあ」
と、手を振り上げつつ相寄って行った。

十九　六星、壇に誓う門外に、また訪れる一星のこと

その夜の酒宴のさまなどは、くどくどしい。
呉学人は、兄弟三人のつれ出しに、苦心はしたが、わが功は多くをいわず、
「これが、わしのすすめた阮兄弟だ。まず見てくれ」と、いったあんばい。
晁蓋は、一見すっかり気に入った。また三人の兄弟のほうでも、晁蓋の重厚で、そしてさっぱりした人柄のうちにも、情義の厚そうなところを見て、
「こういう人とのつきあいなら、かねて望んでいた漢づきあい。一生賭けても、悔いはない」
と、はやくも惚れこんでしまった様子である。
赤馬赤馬と呼ばれている赤髪鬼劉唐は、呉先生や晁蓋のあいだにあっては、見劣りすることぜひもないが、これも精悍

にして邪悪ではない。短命二郎小五とは、よい組合せだ。
飲み明かし、語りあかして、さて一睡もつかのまの、翌早朝。
同志六名は、嗽い手水の身清めしたうえ、晁家の奥の間にある祭壇に向って立ちならんだ。――壇の道教神のまえには、紅蝋燭赤々と燃え、金紙の銭、色紙の馬、お花、線香、羊の丸煮などの供え物が、種々、かざり立てられてある。
誓いの儀式だ。土器を取って、羊の生血をそそいだ神酒をすすりあい、やがて呉学人が案文した起誓文を受けて、晁蓋が壇にむかって読みあげた。

――聞説。
宋朝ノ管領、梁中書、北京ニアリテ、民ヲ毒シ、権ヲ用イ政ヲ恣シテ富財ヲ私スルコト多年。然ノミナラズ、夫人蔡氏ノ岳父、蔡大臣ノ都ノ邸ヘ向ッテ、連年、生辰綱（誕生祝いの金品）ヲ贈ルコト実ニ巨額ニノボル。
茲ニ、今年七月十五日ノ生辰ヲ期シ、又モ十万貫ノ不義ノ財貨ヲ密カニ都門東京へ輸送セントス。天冥、豈コノ不義ヲ許スベケンヤ。
即チ、ワレ等六名、天ニ代ッテ、懲罰ヲ下シ、以テ佞吏ノ肝胆ニ一颯ノ腥風ヲ与エントスル者ナリ。モシ盟ヲ破リ、異端ヲ抱ク者アラバ、ソレ天ノ冥罰ヲ受クルモ恨ミナキコトヲ天地ニ誓ウ。――神明、照覧アラセ給エ。
「……いざ、ご順に」
おのおの、紙の銭を焚き、代る代る礼拝する。
「さあ、これで誓いはすんだ」
お供え物を下げて、一同また、客間で飲み直していた。
すると何となく、物騒がしい声が門外の方で聞え出した。はてと、晁蓋が耳をすましていると、そこへ家人のひとりが来て、さも持て余し気味に訴えた。
「旦那、旦那。ご酒宴中、なんとも相すみませんが、ちょっと、おいでなすって」
「うるせえな、お客さまの席へ。いったい、なにをがやがや騒いでいるんだ」
「それがその……なんとも手のつけられねえ強情ッ張りな山伏なんでして」
「山伏だと。よくねえなあ、この頃の行者って奴あ、装恰好だけは、もっともらしく拵えて歩きゃあがって、作法も経文もろくそッぽ知らねえようなのが、ただ食い稼ぎに村へも時々入って来やがる。うるせえから、粟の一升もやって追っ払え」
「ところが、てんでそんなものア眼もくれねえんです。へい」
「じゃあ、なにを施せと、ねだっているんだ」
「旦那に会わせろって、ごねるんですよ」
「ふざけるな。そんな物乞いに、いちいち会っている暇はねえ。それよりは、てめえたち若いもンが大勢ガン首を揃えてやがって、そんな者一人を持て余してるたあ、なんてえざまだ」
「そう仰ッしゃいますが、ま、ちょっと来てごらんなすってください。――自分は一清道人と申す者――とか何とか吐ざ

いて、ちょっと触ろうものなら、すぐ人を手玉にとって、ぽんぽん投げつけてしまやあがるし」
「なに、手むかいするのか」
「そいつア向うでいってる文句でさ。手出しをすると用捨はせぬぞ。晁蓋に会わせぬ以上はここは動かん……なんて啖呵を切りゃあがって、四人や五人タバでかかっても、あっさり片づけられちまう始末なんで。なんともはや、私たちじゃあ手におえません」
晁蓋はやっと、腰を上げた。
「先生、お客人にも、失礼ですが、ちょっと中座させていただきます」
彼が門前へ出ていってみると、なるほど、荘丁大勢、ただ遠巻きにだけして、恐れおののいている様子だ。中には、手脚を傷められて凄愴な面をしている連中も少なくない。
「どこにいるんだ、そいつは」
「ほれ、そこの槐の木の下に、悠々と、憎ていな笑い顔して、腰かけておりますよ」
「あ、あれか」
晁蓋は、つかつかと、彼の前へ歩いていった。
彼のほうでも、晁蓋を見るや、すっくと同時に起ち上がっている。
山行者の着る裾みじかな白衣に、垢じみた丸グケの帯。笈は負わず、笈の代りに古銅づくりの一剣を負っている。八ツ乳の麻鞋は、これも約束の行者穿きのもの。さてまた、年ごろはといえば四十を出まい。黍色の容貌に、腮だけの羊髯をバサとそよがせ、口大きく、眉は少し八の字、どこか愛嬌さえある顔だが、身の丈ときたら一幹の松のごとく、すッくと見え、さらに憎ていなのは、手に鼈甲紙の団扇などを持って、ふところに風を入れていたことだった。
「道士、えらいごけんまくだな」
「騒いでいるのは、こッちではない。勝手にここの雇人どもが、自分で瘤をこしらえておるまでのこと」
「布施は何がお望みなのか」
「またいうか。物乞いじゃおざらん」
「では、なんでお動きなさらぬ」
「あるじの晁氏に会いたいのみ」
「その晁蓋は、じぶんだが」
「や。あなたか」
「用を聞こう。手ッとり早く」
「ここでは申せぬ。折入ッての儀だ。どこぞ二人だけで話したい」
「じゃあ、こっちへおいでなさい。一樹の縁だ、茶でも上げよう」
軽い気もちで、門内へ入れたのである。といっても、奥の客間ではない。間に合せの小部屋だったのはもちろんだ。
通されて椅子によると、さすが礼儀はただしく道士はすぐみずから名のった。
「お騒がせして申しわけないが、拙者は公孫勝、道号を一清と呼ばるる者。生れは薊州の産です。申してはお笑いぐさかもしれんが、幼少より武芸が好きで、あちこちの道場歩きなどで多少名を鳴らしたため、公孫勝ノ太郎とか、入雲龍ノ

太郎などと少しは恐れられたものです。――かつまた、いささか方術（道教の法術）に通じ、自在に風雨を呼び、隠遁飛雲の法も行うが、それも決して広言ではありませぬ。――ところで」

と、公孫勝の一清は、その羊ヒゲを掌のひらで何度も逆さに撫でつついう。にんまりと人を射てくる眼ざしには、なるほど方術師らしい底冷たい眼光があった。「――当村の名主晁氏のお名は、久しく耳にするのみで、御見は今が初めてだが、初対面の手みやげに、じつは軽少なれど、金銀十万貫に値する儲け仕事を持参いたした。なんとお受けとりたまわるまいか」

聞くと、晁蓋はつい笑いだした。

「そいつあ、北方から都へ行く生辰綱（誕生祝いの荷）じゃございませんか」

「あっ――？」

愕然と、一清道人は、相手の顔を、穴のあくほど見まもって、

「ふしぎだ。誰知るはずもないものを、どうして晁どのには、ご存知なのか」

「ははは。なにをいわっしゃる、こっちがびっくりしましたわい」

「それはまた、どうしてです」

「だって、当てずッぽうに、出たらめをいってみたまでですよ」

「いや、それこそ神感と申すもの。あなたは受けなくてはいけません。取るべきを取らずんば何とやら、しかも、密送の生辰綱は、不義の財だ、なんで、奪うに憚りがありましょうや」

こう、説き伏せんとして、一清道人がその弁をふるいかけたときだ。突如、扉を排して顔を現わした者が、いきなり彼の頭へ大喝をくらわせた。

「不敵な密談、みな聞いたぞっ」

「やっ？」

せつな、一清道人は、さッと椅子を跳び離れたが、とたんに、晁蓋とそこへ入ってきた呉用学人とが、声を合せて、哄笑していた。

「いやいや、公孫先生、おあわてなさるな。――ご紹介いたしましょう。このお方は」

言いかけるのを引き取って、呉用は、自分から加亮智多星と名のりを告げ、そして、

「こんなところで、ふとお会いできようとは、じつに意外。一清道人、公孫勝のお名は、夙に江湖（世間）で伺っていました」

「さては、貴殿が呉学究加亮先生でございましたか。さても、広いようで世間はせまい。しかし、さすが晁家のお知り合いは違ったもんですな」

「奥にはまだ、今日しも、心をゆるしあった幾人かが寄っていますが。……ご主人、ひとつ公孫勝氏も、その座へおひきあわせしようではないか」

「先生のおゆるしとあれば」

晁蓋は先に立って、奥なる客間へあらためて、また新しい一人を加え、阮の三兄弟と、食客の劉唐を交じえ、ここに一

堂に会する者七名となった。
「思えば、不思議な」
晁蓋はやがて言った。
「先頃てまえは、わが家の棟に、北斗七星が落ちると夢見て、眼をさましました。ここに偶然、七人の顔が揃ったのも、夢の知らせ、事成就の吉兆でもありましょうか」
「げにも」
と、呉学人は、うなずいた。
「これこそ晁氏の積善の報いだろう。かえすがえす幸先はよい。さっそくにも、劉君は、北京府へ潜行して、生辰綱の輸送路を、どの道にとるか、護送の人員はどれほどか、またその宰領は何者なるかなど、密々探って、その都度知らせてもらいたいものだが」
「いやいや、その儀ならば――」と、公孫勝が口をさしはさんだ。「わざわざ、ヘタな密偵などは止めたがよい。それらのことは、すでに拙者があらかじめ調べ取ってある」
「えっ。おわかりか」
「間道をとらず、わざと今年は、黄泥岡の本街道を行くらしい」
「ならば、それももっけの倖せ。黄泥岡の東一里の辺に、白日鼠とアダ名のある知り人がある。足溜りには、もってこいだし」
そこで、晁蓋の意見も出た。
「決行には、手強にやりますか。すんなりと、おとなしくやりますか」
「臨機応変――」と、呉用がいう。「相手が腕ずくなら腕でゆく。先が智恵で来るなら智恵で挑む。……細かなことは、その場でないと、決め手には出られませんな。さきも、さる者。裏の裏でも掻かれたらたまらない」
「仰っしゃる通りだ」と、晁蓋も公孫勝も、異口同音に、
「妙計と信じたことも、敵の応変によっては、みずからの死地ともなる。余り計に凝って、策士策に溺るなどのことがないように、おのおの、自在身を持って神出鬼没といきましょうや」
ここでほとんど手打ちはできた。夜に入るまで、飲み興じ、あくる早暁には、すでに阮の三兄弟は、もとの石碣村へ、飄として立ち帰るべく、朝飯をいそいでいた。
「時が来たら、そッと急報する。そのさいには、抜からぬように」
「ご安心なすって」
三兄弟はニコと笑って鞋を穿いた。路銀だといって銀三十両を晁蓋が贈ったが、どうしても受けとらない。呉先生は、その物固さを笑って、
「痩せ我慢しなさんな。銀子のちょっとやそっと、受けても辞しても、晁家としては、おなじこった。まず、それは貰って、旗亭の借金でも返しておくほうが上策というもんじゃよ」
かくて。――三兄弟は別れ去り、公孫勝と劉唐とは、晁蓋の名主屋敷に、食客としてとどまった。さらに呉用のほうは、つい近所の住居のこと。家塾に帰って、あいかわらず村童相手の寺小屋先生になりすまし、折を見ては、ちょくちょく荘院の奥を訪ねて、茶ばなしの間に、世間たれも知らぬ密事の打合せをすましては、また何くわぬ顔で、塾の学童の中へもどっていた。

二十　仮装の隊商十一梱、青面獣を頭として、北京を出立する事

ここは北京大名府の梁中書の官邸だ。

後房の園には、黄薔薇の香が蒸れ匂い、苑廊の欄には、ペルシャ猫が腹這っていた。猫は眠った振りして、中央アジア産の白い狆がいま蜂を捕えて嬲っているさまを薄目で見ている。すべてこれらは、有閑な蔡夫人の物ずきが蒐めた愛玩の誇りらしい。

「あら、また水がない！　誰です！　私がいつもいつもやかましくいっているのに、また鸚哥の餌水が切れてるじゃないの」

いま、鸚哥の籠の下に立った蔡夫人は、鸚哥に負けぬカン高い声をして、後房の侍女をよびつけていた。すると、

「うるさいなあ、ちと静かにしてくれんか」

と、書院窓の帳をあげて、良人の梁の顔が、舌打ち鳴らした。

「おや、そこにおいでだったんですか。なにをなすってらッしゃるの」

「なにをって、調べものさ。書類調べだよ」

「お手すきなら、ちょっと、この苑廊の榻（長椅子）までお出ましくださいませんか」

「やれやれ、根気がつきるなあ。茶でも運ばせてもらおうか」

「ま、そこへおかけ遊ばせな。ちと内々のおはなしですから、侍女は遠ざけました。すんでからお茶にいたしましょう」

「なんだね、急に事ありげに」

「だってあなた、今日はもう幾日だとお思いなさいますの。空をごらんなさいませ、もう夏雲ではございませんか」

「そういえば、初蝉が聞えだしたな」

「なにをいってらッしゃるの。蝉なんか、二十日も前から啼いていますわ。いったい、東京へ送り出す父の誕生祝いの品々は、荷拵えばかりなすっておいて、どうなさるおつもり？」

「もちろん、万全を期して、七月十五日までに着くよう、輸送せねばならん。……だがね、誰を輸送使として遣すか、その宰領の人選に、頭を悩ましておるんじゃよ」

「それには、お心あたりがあるなんて、いつか仰っしゃっていたではございませんか。そのお胸の人間ではいけないんですか」

「いけないか、適任か、使ってみなければわからんさ」

「使ってみての上なら、誰にだってわかることじゃありませんか。ばかばかしい」

「おいおい、そう頭ごなしに、大声でいうなよ。中門の外には、衛兵が立っておるんじゃ。聞えたらこの梁中書、まるで赤面ものじゃないか」

「そうそう。兵隊で思い出しましたわ。兵隊上がりの提轄、青面獣楊志とやらでは、いかがなんですの」

「その楊志なら、武芸十八般、腕なら北京軍十万の中でも、屈指の者だが、いかんせん、ここへ来てからの日も浅い、第一心情いかんという点が、まだ充分には信用しかねる。……それで大いに迷っておるのさ」

「そんなことをいったら、どんな人間でも疑えば限りがあり

ませんわ。それにもう日がないじゃございませんか。楊志を召して、お命じになったら、どうですの」
「そなたさえ承知なら、楊志でよかろう。いや、いくら熟考しても、結局は楊志だな。あの青面獣のほかにはあるまい」
「じゃあ、すぐそれをお鳴らししてください」と、蔡夫人は、廊廂に吊ってある喚鐘を指して、良人へ命じた。
梁は、この妻の父蔡大臣のお蔭で立身した者であるから、平常も夫人にはとんと頭が上がらない。唯々として、立って喚鐘を打ち鳴らした。と――すぐ中門外の衛兵が、姿をあらわして庭上に敬礼した。
「青面獣楊志に、すぐ参れと申せ」
「はっ」
衛兵が退がる。まもなく入れ代って、階の前に来てぬかずいたのは、これぞかの北京城の大演武場で十万のつわものの眼をそばだたしめた青面獣その人だった。
「楊志。――そのほうを見こんで、このたび、重大な使命をさずくるが、身命を賭して、やってくれるかどうか」
「ご恩のあるお方の仰せ、いやとは申しません。けれどこの楊志にできることか否か、その辺も伺ってみぬことには」
「わが夫人蔡氏の父蔡大臣の誕生祝いの品を護って、東京までつつがなく送り届けてほしいのじゃ。もちろん、軍兵は望み次第に付けてやる」
「出発はいつでしょうか」
「ここ三日のうちとする」
「して、お荷物は」
「角な荷梱十箇。それには、大名府の役署に命じて、十輛の太平車を出させる。また軍兵のほか、軍部から力者十人を選ばせて、一輛一人ずつを配して付ける。……さらに車輛一台ごとに立てる黄旗の文字には――献賀蔡大臣生辰綱――と書く。まずもって、威風堂々と、山野の魔気を払うて行くがいいとおもう」
「どうも、せっかくですが」
「いやだと申すのか」
「なにとぞ、ほかの者に、お命じ給わりとう存じます。なんとなれば、去年は十万貫に値する高貴な品々を、ことごとく、途中賊難のため、掠奪されたと伺っておりますので」
「だからこそ今年は、なんじを見込んで命じたのではないか。それもだ……」
と、梁はいささか昂奮して、唇を乾かし、眼に赤い濁りを見せて、説得にこれ努めた。
「余は汝を愛しておる。故にだ、どうかして、そちを出世してやりたく思う。それがわからんか」
「かたじけなくは存じますが」
「煮えきらんやつだな。――蔡大臣宛ての献上目録にさしそえて、べつにわしの直書一封のうちに、そちの立身の途をも推薦しておく考えなのだ。――途中つつがなく、生辰綱をお送りすれば、それでもう汝の栄達のみちも開けるのではないか。なにを迷うか」
「しかし、長途の道中には、紫金山、二龍山、桃花山、傘蓋山、黄泥岡、白沙塢、野雲渡などという有名な野盗の巣やら賊の出没する難所があります。楊志も犬死にはいたしたくございませんので」

「まだ、のみ込めんのか。軍兵はいくらでも召しつれて行けばいいのだぞ」
「いやいや、たとえ何百の兵でも、一朝、それ賊が現われたぞと聞けば、あらまし木ノ葉の如く逃げ散ッてしまいましょう」
「なにを申す。ではまるで、生辰綱を送るなと、余に諫めているようなものではないか」
「はい。まったくは、切にご諫止申しあげたいところです。しかし今さら、お取り止めもなりますまい。……どうも是非なき次第、楊志も観念して参ることにいたしましょう」
「や。臍を固めて、行くと申すか」
「けれど条件がございます。――物々しき官用の太平車や旗などは廃し、お贈り物は、すべて人の担げるほどな行嚢にあらため、護衛兵の力者もみなただの強力に仕立てなければいけません」
「まるで山東の行商隊だな」
「それです。それがしも一個の隊商の長に化け、なるべく野盗の眼を避けて、お引きうけした以上は、東京の蔡大臣がご門前まで、無事、おとどけ申したい存念にございますれば」
「まかせる。ただちに出立の準備をせい」

――準備期間の二日は経った。
するとまた、こんどは楊志のほうから、梁中書へ拝謁を願い出た。そしていうには、
「いけません。どうも拙者には、不向きな役です。東京行はご辞退申しあげまする」
「なぜまた、そんなことをごねり出すか」
「でもお約束が違うようです。――洩れ聞けば、ご予定の行嚢のほか、またぞろ、夫人さまから先の大臣邸の女家族のかたがたへ、種々な贈り物がふえ、そのため執事の謝という人物とその他の家来二、三が付いてゆくことになったとか伺いますので」
「ははあ、足手まといだと申すのだな」
「のみならず、夫人直々の執事とか、家来などですと、途々、それがしの命令に服さぬ惧れが多分にあります。賊の出没に加え、難行千里、あらゆる難苦を覚悟せねば相成りませぬ」
「それはそうだ。もちろん、難行苦行だろう」
「一行の者に対しては、あえてムチを振るッて克己させ、時には夜立ち暁立ち。また折には草に伏し、熱砂を這い、もし服さぬ者は、これを斬るぐらいな権は持っていませんと、到底、列を曳きずッてはいけません。しかるに、夫人の執事や家来とあっては」
「いや、その者どもも、他の力者同様に、一切その命に絶対服従いたすように申しつける。もし、汝の命に服さず、楯をついたら、斬りすててもよろしい。……夫人にも、その由はよく申しておこうわい」
「ならば、行ってまいります。願わくは、ただ今のおことばの旨を、お墨付として、一札賜わりおきとう存じまする」
「よろしい。汝もまた、余に対して、重宝十一荷の預り状をしたためて差出せ」
「心得ました。この上は、明早朝に北京西門を出立つかまつりますれば……左様おふくみのほどを」

翌朝の中書官邸は、暁天もまだ暗いうちから騒めいていた。強力に化けた軍の護衛兵は、いずれも屈強な猛者ぞろいだ。それらがおのおの、一個ずつの重い行嚢をかついで勢揃いしたさまはいかにも物々しくまたたのもしい。――梁中書も蔡夫人も、廊の階欄に立ち出てこれを見送っている。

夫妻は、念のためと、執事の謝を呼びつけて、くれぐれ、楊志の命に服すように、喧嘩せぬように、途中病まぬようになど、かさねがさね言いふくめた。

「ご案じくだされますな。てまえは一行中の最年長者。あんばいよく仲を取ってゆきまする。楊志どの。どうぞよろしく」

夫妻の階前で、両名は手を握って、出立した。

同勢すべてで十七名だった。多くは一様な強力姿だが、楊志と謝は隊商の長といった装い。山東笠を日除けにかぶり、青紗の袖無し、麻衣、脚絆、麻鞋の足ごしらえも軽快に、ただ腰なる一腰のみは、刀身のほども思わるる業刀と見えた。

はやくも朝霧の街へ出て、西の城門街の出口へかかる。楊志一人は、手に籐のムチを携えていたが、それを小脇に、山東笠のひさしへ手をかけて、城門の鼓楼を仰ぎ、

「梁中書の御使の者ども、都をさして、ただいま、ご城門を通ります」

と、呼ばわると、上の鼓楼で「おおいっ」という答えが響く。と同時に、門側の番卒隊が不時の開門なので、とくに総勢でそこに立ち現れ、

「お通ンなさい！」

と、巨大な鉄扉をギイと左右へ押し開いた。

時は五月も過ぎて早や大陸の砂は灼けていた。夏雲はぎらぎらと眸を射るばかり地平線を踏まえて高く、地熱は鞋の底をとおして、足の裏を火照らしてくる。

行嚢を負う蟻のごとき列は、早くもポタポタと汗のしずくを地に見つつ喘ぎあるいた。日頃ひと口に、開封東京とやさしく呼び馴れてはいたが、いざ一歩一歩を踏み出してみた千里の輸送路となれば容易ではない。――いやいや、それらの炎日灼土の苦熱は、まだしも克服できようというものか。

やがての行くてに聳える雲の峰の彼方、手に唾して待つ稀代な七斗星のまたたきがあろうなどとは、青面獣も知らず、喘ぎ喘ぎな強力たちも、ゆめにも思ってはいなかった。

二十一　七人の棗商人、黄泥岡の一林に何やら笑いさざめく事

強力すがたの兵十五、六人。それが日々、大陸の熱砂を這うごとく行く影は、炎日の労働蟻が蜿蜒と、物を運んで行く作業にも似て、憐れにもまた遅々として見えた。

おのおのが負う十一箇の行嚢は、そのどれ一つといえ、軽そうなのはない。――すべて蔡大臣の誕生祝いに送られる値十万貫もする貴金属やら珠玉で充たされている荷物なのだ。――彼らの流す毎日の汗も、その中の珠の一粒にすら値するものではなかった。

「なんだ、意気地のないやつらめ。行くてはまだ千里の彼方。今頃からヘタばってどうするか。歩け歩け。しぶるやつは尻を腫らすぞ」

宰領の青面獣楊志の手には、籐のムチが握られていた。

腰の業刀もだてではない。――梁中書から絶対の権を附与され、途中、もし命に反く者あらば斬りすててもかまわん、といわれてきたのだ。もう一名の付添い人、執事の謝といえど、こんどの旅では楊志にむかって一切不満も愚痴も言いだせるものではなかった。

とまれ、北京の城門を出てから、はや十数日。この間、雨を見たのは、たった二回だけで、それも物凄い雷雨をともなった一瞬の大夕立だけでしかない。あとは来る日も来る日も、炎天の道中だった。

楊志はその晩、旅籠に着くと、兵の強力と、執事の謝、あわせて十六人へ、言い渡した。

「さあ、旅はこれからが本旅だ。――風流にいえば千山万水だが、行くての都はまだまだ遠い。――北京は遥か後になり、いよいよ彼方には二龍山、桃花山、傘蓋山、黄泥岡、白沙塢、野雲渡などという難所切所やら野盗の名所が、行く先々にひかえている。……そこで、こちらも腹をすえなくてはならん。ただの荷運びだけが能ではないぞ」

不気味な警告を、こう浴びせて、

「だから、明日からは、寝坊してよろしい。朝は朝寝して、ゆっくり立つ。その心得で休養をとれ」

と、つけ加えた。

だが、兵たちは、うれしそうな顔でもなかった。その日旅の寝小屋で枕につくと、耳こすりで騒めき始めた。

「おい、用心しろよ。青痣がまた、ヘンなことを言いだしたぜ。小便する間もオチオチしていられねえほど、歩け歩けと急かついている奴がよ」

「変だな。七月十五日、七月十五日と、都へ着く日を、呪文みたいにいってるかと思うと、急に、朝寝の遅立ちとは」

「なんでもいいや。寝ている間だけがこち徒の極楽だ。なんとか生命だけ保って、開封東京に着きさえすれば、まさか帰りはこんなこともあるめえ。もうもう来世は金輪際、兵隊にはなるめえぜ」

翌日からは、朝は遅く、夕は早着き。日盛りの旅だけが、以後十数日もつづいた。

これだけなら、彼らのぼやきも減っていただろうが、楊志の思案は、野盗山賊の出現を避けるにあり、七月十五日までの期日に、余裕が出来たわけでもないから、日中の間に、それだけの足稼ぎを生みだすべく、前にもまして、苛烈なムチをふるったのはいうまでもない。

「なに、水が呑みたいと。我慢しろ、我慢しろ。水は汗を多くするばかりだ。口に梅の実を噛んでいると想え」

「そいつア無理だ。いくら梅の実を想ったッて、唾は出ねえ」

「これでも出ないか」

楊志は、籐のムチで、風を切って見せた。

「きさまらは、毎夜、寝飽きるほど寝かしてあるじゃないか。贅沢をいうな」

「だって、こう休みなしじゃあ、息もつづきません。どこか木陰で、一ト息つかせておくんなさい。焦死にます」

「だまれ、どんな夏の旅だろうと、人間の乾物ができた例しはない」

「うへッ。もう眼がまわる。楊輸送使」

「なんだ」

「どうか、弁当でも解かせておくんなさい。もう足が前へ出ません。ふらふらして」
「ちッ。きさまらは、木陰を見るたび、きまッて何か弱音を訴え出しゃあがる。今日はもう幾日だと思う」
「ほら、始まった。わかってますよ」
「わかっていたら、弁当などは、歩き歩き食え、七月十五日が一日遅れても、蔡大臣のお誕生祝いには間に合わなくなる。千日の萱も一日で焼くというもんだ」
「もう欲も得もなくなりました」
「じゃあ、死にたいか」
「情けないことを。これでも、女房子がありゃこそ、塩気のない汗までポタポタ垂らしているんですぜ」
「ならば、四の五をいわずに歩け歩け。やがて都へ着いたら、たらふく、飲んで食って、逆立ちでも何でもやるがいいや」
「……ああ、雨でも降ってくれ！」
　ところが、あいにくな旱天つづき。大夏の太陽は火龍というもおろかである。満天すべて熱玻璃のごとく、今日も一片の雲さえ見あたらない。
　道は、その日の午後、やっと一つの山の小道へかかったが、木々の葉は萎えて、風は死し、谷はあるが、水は涸れ、岩は干割れして、滴る清水の一ト雫もない。
「おお、ここらはもう、太行山脈の一嶺だな」
　空身の楊志にしてさえ、息がきれた。
　峨々たる山容は、登るほど嶮しくなり、雨の日に洗い流された道は、河底をなしている。万樹はあだかも刀槍を植えたようで、虎豹の嘯きを思わせる。
　なにげなく足をとめて、ここまでの旅、またこれからの道のりなどを考えていた楊志が、ふと気づくと、謝執事以下、十一梱の強力やほかの兵も一つの峰の背へ取ッつくやいな、
「もう、だめだ。勝手にしろ」
「八ツ裂きにされても、うごけねえぞ」
「さあ、どうなとしてくれ」
　とばかり、おのおのの荷を背から下ろして、ぐたと伸びるやら、仰向けに寝てしまうやら、ここへきてはもう自暴のやん八をきめこんでテコでも動かぬ態だった。
「あ。げで者めら」
　楊志は振返って、彼らのやけくそな態度に気づくやいな、そこへ飛んでいって、例のごとくムチを鳴らした。
「だれの許しを得て休むのだ。こいつら、一寸の間も、眼が離せぬ」
「まあまあ」と、宥め役に立ったのは、梁家の執事の謝であった。
「なんぼなンでも、この酷熱に、昼休みも与えぬのは、余りにむごい。楊志どの。そうカンカンにお怒りなさるな」
「執事。貴公が休めとゆるしたのか」
「許すも許さぬもない、これへ登りつくなり、自然にへバッてしもうたのじゃ。わしにせよ、これ以上の我慢は、口から臓腑を吐くような苦しさだ。まあ、半刻ぐらいここで休んだところで、まさかお誕生日に間に合わぬこともあるまいが」
「分別者のあんたからして、そう仰っしゃるなら、なんでこの楊志のみ、一同の怨嗟をうけつつ無理な道中を好もうか。

……したが、ここはどこかご存知か」
「されば、はや太行山脈の一嶺にかかってきておる。ここさえ越えれば」
「なにを、暢気な」
「違うか」
「いやさ、あんたのいう通りだから、馬鹿馬鹿しくなるんだ。さっきから、あたりの地勢を見るに、こここそ、黄泥岡といって、世間に不気味がられている盗賊の出没場所。……こんなところで気をゆるしたら、魔の砂塵の一ト吹きと見舞われぬとも限るまいぞ」
　すると、もう度胸をすえて、太々しくなっていた強力の兵たちが、
「あはははは。また楊輸送使のおかぶが始まったぜ。毎日毎日ああいっちゃあ嚇かされてきたもンだ。この真ッ昼間に、そんな幽霊が出るもんなら、おもしれえ。なにも経験だ、お目にかかってみようじゃねえか」
「馬鹿野郎っ」
　楊志は、怒りの一歩を、そっちへ移して呶鳴りつけた。
「きさまらは、泣き言まじりの口癖にさえ、こんな苦役も、女房子のためだと吐ざいているではないか。もし厄難に出あったらどうするか。褒美はおろか一命もおぼつかないぞ。――このほうは宰領として、万が一にも、そのような不覚を踏ませてはと、しいて心を鬼にしておるのだ。わからんか。慈悲のムチが」
「へへん。……わかりませんねえ、慈悲のムチなんてえ文句は」
「こやつ！」
　楊志が本来の形相を現わして、腰なる山刀を抜きかけると、執事の謝は仰天して、あわてて彼の前を阻めた。
「待った！　楊君もいいが、どうもお若い。そのご短気は、みずから事を破るものだ」
「いや、お放しなさい。こいつらは、拙者がほんとに怒ッたら、どんなものか知らんのだ。見せしめのため、どいつか一匹、素ッ首をぶち落して見せてくれる」
「そしたらその先、一人分の行嚢は、いったい誰が、背負って歩くのか。わしは真ッ平ごめんじゃが」
「一箇の荷ぐらいは、どうにでもなる。それよりは全体の士気を厳に保って行くほうが肝腎だ。老人は、黙ッていなさい」
「いや、見ていられん。血気いちずで、十五人もの心の束ねがなるものか。和もなくてはならぬ。いかんせん、楊君はご苦労知らずじゃ」
「ばかをいえ。拙者にはいささか流浪の経験もある。四川・広西・広東の旅もした」
「ただの旅なら、誰もするわ」
「なんの、世は今や、いずこも暗黒同様な末世だ。その穏やかならざる乱麻の世間に、流浪の艱苦もなめたつもりだ」
「おい、楊輸送使」
「なんです？」
「人なき山中だからいいようなものの、余りな放言は慎むがよい。梁中書様のご恩になり、北京府の禄を食みながら、いまが末世とは何事だ。泰平の世でないとは、なんたる言か。その舌を抜かれるなよ」

これには楊志もハッと答えに詰った。
日ごろ、胸にあるものは、何かの弾みには、我れともなく、つい口に出るものではある。――と、悔いられたが、もう追いつかない。せっかく、蔡大臣の生辰綱輸送の大役を果たしえても、後日、謝の口からそんな讒訴を堂上の耳に入れられたらすべては水の泡だろう。――しまった、と臍を噛んだ容子が、突嗟だったが、楊志の面をやや弱いものにした。
――すると。
彼の眼惑いに、ふと鳥影のようなものが、遠くを過ぎッた。すぐ先の、松林の蔭にである。
「あっ？　うさんな男が」
楊志は不意に、そこへ向って、こう叫んだ。
謝との問答で、後味わるくきめつけられた破目も、一切のその場の感情も、この一ト声で、消し飛んだ形だった。――楊志にとっては、いい機であったのかもわからない。何を見たのか、途端に、彼の姿はぱッと迅い足を見せて、彼方の松林のうちへ隠れこんだ一個の男の影を追ッかけていた。
松と松との木の間を、野兎のごとく逃げ走ッていった男の影は見失ったが、その代りに、楊志は、思いがけない一トかたまりの旅商人の仲間に出会った。
彼らは、松林の涼やかな平地に陣どッて、桶を載せた七輌の江州車（手押し車）をあちこちに停め、老若七人、胡坐や寝転びやら、また木の根や車の梶に腰かけている者など、思い思いな恰好だった。そして何か戯れ口おもしろ気に、この日盛りの汗を拭きあっているものらしい。
「やッ？」
彼らは一せいに跳ね起きた。楊志の姿に、びッくりしたもののようである。
「何者だっ、きさまらは？」
馳け寄りざま、楊志が問うと、
「だれだい？　お前さんこそ」
と、先も鸚鵡返しにいう。
「いやさ、きさまらは、どこのどいつかと訊いておるんだ」
「ふん。こちらも、お前さんはどこの馬の骨かと訊いてるんだよ。ははん……黄泥岡によく出ると聞いたがその悪者か」
「ふざけるな。きさまらこそ、それではないのか」
「えらい者ンに買いかぶられたなあ。あいにくこっちは、若いのや老いぼれやらの、しがない小商人だ。ところで、お前さんの方は？」
「わしもじつは開封の商人だ。胡北で仕入れた毛皮などの商品を、強力に担わせて、都へ行く途中だが、この附近は物騒と聞いて来た折も折、いま松林の蔭から、へんな男が、うさんな眼つきで、わし達を窺っていたので、さてはと、追ッかけて来たわけだが」
「ははははは」
「アハハハハ」
七人は、どよめき笑って、
「そいつア、とんだ鼬ごッこだ。こっちも、ここで涼ンでると北の方の麓から物凄い野郎ばかりが十六、七人も、何か担いでやってくるというわけさ。さあ大変だ、黄泥岡の名物がおいでなすッたぜと、胆を冷やして、仲間の一人が、まず様

子を探りにいったわけだ。……ところがよ、どうも、悪者でもなさそうだというんで、なアンだとばかり、涼み直していたわけさ」
「ふウむ」と、楊志もつい釣り込まれて、ニヤつきながら、
「じゃあ、お互いは、商人同士だったわけだな。まアまアそいつは倖せだった。して、おぬしたちは、何商売か」
「この桶をごらんなせい」
「あ。棗漬だね。棗商人かい」
「田舎じゃあ、珍しくもねえが、都へ持ち出すと通がッた呑み助が、酒のお肴には、これに限るなんていうものでね、仲間七人、申し合せて、濠州から出てきたんだが、イヤこの暑さじゃ、桶の棗も茹りそうだ。おたがい金儲けは楽じゃあないね」
「まったくだ。金がかたきの何とかさ」
「どうです旦那、お好きなら、ちょぴり棗をあげやしょうか」
「いや、いらん。せっかくだが」
楊志はニガ笑いを見せながら、もとの自分たち仲間の屯のほうへ戻ってきた。
謝執事は、彼の姿を見ると、すぐ皮肉った。
「楊輸送使。――ご自慢の刀の斬れ味はどうでしたな」
「いや、賊かと思ったら、なんのこッた、つまらん小商人の仲間だった」
「へえ。あんたの口癖から推すと、この界隈には真人間は現われないはずなんだが」
「そうチクチク苛めッこはなしにしましょう。老人は執念ぶかいなあ」
「何さ何さ。それでこそ、われわれも先ず祝着と申すもの。どうじゃな。わしはつい食べ残しの弁当を解いてしまった。あんたも、どうせのことに、一ト涼みなさらんか」
「ままよ、きょうは雨に逢ったとしてしまえ。おうい、一同も休め、休んでよろしい」
これは少々楊志としてはまずかった。てれ隠しの気味がある。すでに兵どもは謝執事との狎れ合いで勝手休みをきめこんでいたのだから、楊志のムチもついに衆の結束と横着には、負けの恰好というしかなかった。
さらにまた、折も折だったといってよい。どこからか、田舎唄が聞えてきた。男の声である。ひょイ、ひょイ、ひょイ……と唄の節には、担い腰の足拍子が巧くのっていた。兵たちは皆、後ろの坂道を振り向いた。一人の男が、桶をかついで来るのが見える。……ぷうんと、焼酎の匂いが彼らの鼻をついた。
「おッと、待ちなよ」
つい出てしまった言葉である。
男は、荷を下ろした。
「へい、なにか御用ですかい」
「焼酎らしいなあ、そいつは」
「お察しどおりで」
「どこへ持っていくんだい」
「山向うの村へね、あさっては、そこの夏祭でさ」
「売れないのか」
「売り物なりゃこそ担いでいくんで。へい。値段によっちゃあ差上げますよ」

「いくらだ、一桶」
「五貫とお負けしておきましょう。ここはまだ半道だから、足賃なしに」
兵たちはコソコソ首を集めあった。鼻のさきに餌を置かれた餓鬼の眼つきといった形である。喉が鳴る。鼻がピクつく。とうとう小銭の音をさせ始めた。懐中を合せて、買おうという相談になったらしい。
さっきから、じろと睨んでいた楊志は、いきなり山刀を鞘ぐるみ腰から抜いて、ずかずかと立っていき、刀の鐺で、桶を叩いた。
「こら、きさまらは、これを買う気か。――買って呑む気か」
「銭はわしたちのものですぜ」
「金はともかく、誰のゆるしを得たというのだ。ツケあがるな、こいつら」
「ツケあがるわけじゃありませんが、旦那も人間なら、お察しなすっておくんなさい。もう意地にも我慢にも……。これを見て飲まねえじゃあ、妄念が残って、腰も上がりませんや」
「ふざけるな、がつがつと、哀れな餓鬼声を出しゃがって、よく耳の穴をほじッて聞けよ。道中売りの酒なぞは、ただの旅でも、滅多に意地汚ねえ涎など垂らすものではないわ。そんな浅ましい欲心のために、まんまと、しびれ薬で根こそぎ懐中を抜かれたなどの例が、どれほど多いか、知らぬのか。心得のない奴らだ」
すると、叱られた兵よりは、酒売りの男の方が、きッと、眼にカドを立てた容子だった。ふン……と鼻先で冷笑を見せたと思うと、すぐ担荷の天秤へその肩を入れかけていた。
「おい、邪魔だよ、桶のそばを退いてくんなよ。くそおもしろくもねえ！　この炎天に、しびれ薬を売りにいく粋狂がどこにあるッてんだ、ばかばかしい」

二十二　〝生辰綱の智恵取り〟のこと。並びに、楊志、死の谷を覗く事

酒売りの捨て科白は、もとより楊志への面アテだったが、兵たちの妄念を、一そう煽り立てたふうでもあった。
「待てよ。おい。せっかく銭を集めたのに」
「いやだ、いやだ。もう売らねえよ。あばよ」
「ま、そう怒らねえでもいいじゃねえか。ああ言っても、おれたちの宰領は、とんだ話のわかる人で、人情もろいところもあるのさ」
「勝手にしやがれ。人の売り物にケチをつけやがって、話のわかるお人かい。これが市や村でのことなら、ただはおかねえところだぞ」
よほど腹が立ったらしい。次第に威猛高となっていた。――と、彼方の松林の蔭から、さっきの棗商人の連中が、どやどやと馳けよってきた。そして口々に、
「なんだ、なんだ？」
と、いう弥次声。事こそあれと、どの眼も、好奇心みたいなものにかがやいている。
「おッと、あぶねえ。なにを怒ったんだよ酒屋さん。まア桶を下へおきねえな」
「おう、ゆうべ麓でお泊ンなすった商人衆でございますね。

まあ、聞いておくんなさい。癪にさわるのなんのって」
「ほう。この衆たちとの口喧嘩かい、おれたちはまたあっちで聞いて、そら、今度こそ、ほんものの泥棒が出やがッたかと思ってさ、びっくりして飛んできたんだ。……が、口喧嘩ぐらいなら、よかったよ。よしねえ、よしねえ、喧嘩なんざあ」
「仰っしゃるまでもありませんや。誰もいさかいなぞしたかねえが、あんまり人を舐めたことを言やがるんで、つい業腹が喚いたんですよ。……人の売り物に、しびれ薬が入れてあるなんて吐かしゃあがるんで」
「誰がよ、誰がそんな、べら棒な因縁をつけたのさ」
「そこにシャチこ張っている、青唐辛子みてえな人相の旦那ですよ。親代々の正直酒屋で通っているあっしだが、こんなに気の腐ッた日はないね」
「いいじゃねえか、もう止せよ。そうムキにならなくっても、相手は黙ってしまったんだから、多分、言い過ぎだったと、腹じゃあ後悔していなさるに違えねえよ。……それよりは、ちょうど俺たちも、喉がひッついていたところだ、みんなに一杯ずつ飲ましてくれ」
「お断りだよ、まッぴらだ」
「なぜさ。おめえもまた、因業だな。無料で飲ませろッていうんじゃねえぜ」
「そんなことアわかッてら。でも元々、こんなところで商はしなくても、親からのお花客に、事は欠かねえ酒売りだよ。ばかにしてやがる」
「冗談いうなよ。なにも俺たちがケチをつけたわけじゃねえぜ。おめえもよほど、おかしな男だ。さ、機嫌直しに売ってくれ。酒売りなんてえ商売は、気合いものだろうじゃねえか」
「お前さん方から、機嫌を直せなんていわれると、おらはまた、馬鹿者だから、つい差上げたくもなってくるがね。だが、あいにく、器がないや」
「よしきた。器なら、あっちにある」
棗商人の仲間の二人が、車のほうへ馳けていった。持ってきたのは、二ツの椰子の実の椀であった。一人は両の掌のひらに、お手のものの棗漬をいっぱい盛ってきた。
それを、桶のふたの上へ開けて、
「ほい、肴はここだよ」
七人は、酒桶を取り囲んだ。かわるがわるに椰子椀に焼酎を汲みあげ、さも美味そうに飲みはじめる。そしては棗をポリポリつまむ。たちまち、一ト桶の焼酎は底になってしまった。
「ああ、こたえられねえ。こんな山路で思いがけなくぶつかッたせいか、甘露とも何とも言いようがねえな。暑さもすッかり忘れたぜ」
「やいやい。機嫌ばかりよくしやがって、焼酎の値段もまだ訊いていねえじゃねえか。酒屋さん、一ト桶干したよ、いくらだい」
「一荷十貫さ。片桶だから五貫だよ」
「よしきた。そら五貫文」
一人が銭を渡していると、べつの一人が、
「――もう一ト椀、負けときな」
と、片荷の桶の蓋を取って、すばやく中へ椀を突っ込み、

一ト口がぶと飲みかけた。ひょいと、振り向いた酒売りは、
「あっ、いけねえッたら！」
まだ半分残っている椀の酒を、いきなり、引ッたくろうとする。ところが、椀を持った小商人は、くるッと、巧く身を外し、そのまま松林のうちへ逃げこんで行った。それをまた、酒売り男も、片意地らしく、
「畜生ッ」
とばかり、追っかけていったものである。すると、後に残っていた連中はまた、その隙をいいことにして、これまた、も一つの椰子椀で、明き巣の桶にたかりだした。ふと、振り向いた酒売りは、さらに仰天した姿で、
「泥棒っ」
馳け戻るやいな、遮二無二に、椀を奪りあげた。そして、逃げる彼らの背へ向って、
「阿呆。親切ごかしの、屁ッたくれ商人め。野たれ死にでもしてしまえ」
と悪たい吐いた。
さっきから見物していた兵たちは、笑いも出ずに、ただ生唾をのんでいた。食い物の恨みは元々深刻なもの。いわんや、焦くがごとき暑熱に渇いている鼻先で、舌つづみを打たれたのでは堪るまい。――しいんと、陰気な沈黙におちて、彼方に腰かけている楊志の背を、いとも恨めしげに見ていたが、ついにもう我慢ならじと、声をそろえて、謝執事に訴えてきた。
「執事さん。ご恩にきますぜ。ひとつ、楊輸送使へお縋りなすっておくんなさいな。――これからもまだ、山坂ですし、峠まで行ったところで、飲み水などありッこはねえ。どうか、あの残りの片桶をわれわれどもが買って飲むことを、ゆるすと、いわせてくださいませんか。もう腹の虫がグウグウ鳴って、おさまりがつきません」
執事の謝も、内心、意欲はおなじものだった。しかし、おいそれとは、同調顔もできないので、いかにも、彼らの哀訴を持て余したかのごとく、歩を楊志の前へ移してきた。そして、彼らの代弁にこれ努めた。厭なら、見て見ぬ振りしていてくれと、いわぬばかりな口吻である。
「ちイ。なんてえ土根性だろう」
楊志は、にがりきったが、しかし、この老執事にも、兵どもにも、さっきの自分の失言を、行く先の都へ着いてから、尾ヒレを付けて吹聴されたりなどしたら始末がわるい。かたがた、これ以上の遺恨を含まれるのも、あとの道中に良策でないとは考えられる。
それもあったし、また、さいぜんから眺めていたところでは、二た桶の焼酎にも、怪しまれる点はなかった。で、不承不承な面色だったが、
「……仕方がない。あんたまでが、そういうなら、今日かぎりのこととして、眼をつぶっていよう。その代り、渇を癒したら、元気よく、ここを出発するように」
「や。ご承知くだされたか。さぞ兵どもも、雀躍りすることでしょう。一同よろこべ。おゆるしがあったぞ、おゆるしが」
なんのことはない、老執事の謝自身が、雀躍りの態だった。兵と酒桶のあるところへ、舞い戻るなり、歓声を揚げていた。
「いやだ、いやだ。おめえらには、売りたくねえよ」

兵は歓声をわかしたが、酒売りはまた、ごねだした。
「こんな、おもしろくもねえ道草を食ってるよりは、村へ行って、祭りの衆に、よろこんでもらったほうが、よっぽど増しだ。さあさあ退いてくんな、退いてくんな。きょうはろくな日じゃねえようだ」
「まだ怒ッてるのかい。もう勘弁しなよ、謝るからさ」
「うるさいよ。お前さん方に謝ってもらう筋はないんだ」
「依怙地だな、ひどく」
「ああ依怙地だよ。悪かったね」
「あれだ。……こんなに、銭を集めて、拝むように頼んでるのに、罪だぜ、このまま置いてきぼりは」
「離さねえのか。困ったな。ええい、もう、そんなに飲みたけれやあ、勝手にさらせ」
「そうはいかないよ、銭五貫、それ、ここへおくぜ」
「五貫じゃないよ」
「えっ、値上げか」
「ばかにするない。残りの桶は、さっきの棗商人が、幾椀か手込めにして、飲んだらしいから、減った分だけ、値引きするしかしようがないじゃないか。四貫でいいよ。一貫文だけ銭を引ッ込めなよ」
「なるほど、正直もンだな、おめえさんは。いや見上げたよ」
近くに転がッていた椰子椀を拾って、兵たちはさあ順番だと、桶のぐるりに真剣な顔を集めた。
——舌つづみが鳴る。喉がキュッという。礼讃、嘆声、随喜のよだれ。まさに亡者に囲まれた天泉の図であった。
「やい、やい。先のやつは、もういい加減にしろ。執事さまをお後に廻しておくやつがあるもんか」
「ほい、こいつは、どうも……さあ、執事さまも一杯おやんなすって」
「いかさま、これはよい焼酎だな。むむ美味い。楊輸送使にも、一椀すすめてみよう」
しかし、楊志はいッかな飲もうとはしなかった。もともと、彼はそう飲み手ではない。だが、喉の渇きは、彼とて同じだった。そこでつい、もう桶も空となりかけたころとなって、
「ひと口、飲るか」
と、わずか半杯ほど飲んだ。
「ありがとう。……おかげで今日は、もとの麓へ舞い戻りとござアい。ははは。じゃあ、皆さん、ごきげんよう」
酒売りの男は、愛想をいうと、空桶担って、もと来た坂道の方へ、すたすたと、足早に立去ってしまった。
このとき、やや離れた松林の一端には、さきの棗商人七名の顔が、まさに眼じろぎもせぬ七体の石像みたいに、じっと、こっちを見すましていたのである。
——と、遥か坂下の方で、もう姿の見えぬ酒売りの男の田舎唄が聞えていた。それが合図だったのだろう。とつぜん、七人は爆笑の声もひとつに手を打ち叩いた。
「どんなもんです！　この首尾のよさ」
「さすが今孔明の智多星呉用先生だ、先生が書いた筋書どおりよ」
「ざまアみろ、悪官府の召使いどもめ」
「くたばれ、くたばれ。心おきなく」
「どりゃ、さっそく、お仕込みに、とりかかろうぜ」

たちまちに見る七名の影は、松林の下蔭から、それぞれが江州車（手押し車）の七輛を押し出し、なんの憚りもなく、楊志、執事以下、十七名の者が、現にいるところへ、どやどやと寄ってきた。

そしてすばやく、車の上の棗漬をみな谷底へぶち撒けだした。そして、それへ代るに、さきに強力の兵が、地へ下ろして並べておいた十一箇の行嚢を、一台に二箇、或いは三箇と積んでしまい、すっぽりと布覆をかぶせるやいな、

「さあ、すんだ。あとは野となれ」

「あとは烏と野獣のお供えもの」

「おさらば、おさらば！」

まるで凱歌の調子である。そのはず、梁中書夫妻から蔡大臣へ贈らるべき金銀珠玉は、ここに道をかえてしまったのだ。それにしても、江州車七輛の布覆の下、十万貫の宝財は、そもどこへ運び去られていくのだろうか。

「あ？　……あ……。ああ」

楊志は、みすみすそれを、眼に見ていた。しかも、どうにもならないのである。どぼんと、頭は空ッぽの音がする。眼にはそれを知っても、視覚神経は、脳髄までも届いてゆかない。爪は、草の根をつかんでいたが、その手の甲へ、ダラダラ涎が垂れるだけだった。腰は鉛の如く重く、満身に悪寒だけが、走り抜ける。口が歪む、声は声のみで言葉となって出てこない。

「執事は？　兵どもは？」

かすかに頭の泡ツブが思考する。

いちど、俯ッ伏せた額をあげて、どろんとした眼で見廻した。

どれもこれも、干潟にのた打つ死魚の恰好だ。一人として、満足なざまはない。「ああ！　ああ！」と、ときどき、唖のような奇声と奇異な身うごきが四辺を埋めているきりだった。

「む、むねん……」

空をつかんで、楊志は起ったが、とたんに、どたと仆れてしまった。昏々として、それ以後は意識の欠けらも彼になかった。――かくて一刻やら二た刻やら、ふたたび、ふと我れにかえったときは、太行山脈の一角に、七月二日の月が、魔の牙とも見える冴えを研いでいた。

かの七人の棗商人は、そも何者の化身だったのか。もう、ここで説くまでもあるまいが、一応いっておくなれば、それなん別人に非ずである。――東渓村の晁蓋、居候の赤髪鬼劉唐、同村の呉用先生および、その呉先生が一味に引き入れた石碣村の江の漁夫、阮の三兄弟とかの公孫勝の一清、以上あわせての七人にほかならない。

いや、もう一人、番外の加盟者があった。

これがなかなかの役者だった。すなわち、酒売り男に扮して好演技を見せた男で、この黄泥岡の近村に住む白日鼠の白勝という遊び人なのである。日頃、晁蓋に目をかけられていた縁から、一味の足溜りとして、白日鼠の家が選ばれ、彼も一ト役買ってでたというわけ。

そこで、次には。――麻痺薬の使われた手順だが、これがまた、すこぶる手のこんだ筋書だった。

事の初め、まず七人が、一つの桶を、空にした。そして、

銭を払った。
その隙に、べつの、も一ツの桶のフタを開け、無断で椀に半分飲んだのが、赤髪鬼の劉唐だ。
劉唐が逃げる、酒売りの役の白日鼠が追ッかける。
その留守に、
残る組が、また無断で、あとの桶の分を、争ッて飲みかける。或いは、飲んでみせる。
酒屋の白日鼠、仰天して戻るやいな、絡み合いの争いと見せ、それを潜って、呉用先生が、すばやく、麻痺薬を椀に入れ、その手で、桶の酒を汲もうとする。――この瞬間、手品のごとく、毒はすでに桶じゅうの酒に、掻き廻されていたものだった。
あとは、同勢わッと逃げる。奪った椀を、酒屋が投げつけて罵り散らす。これで計略の筋は終っていたもので、後世、名づけてこの一場の劇を〝生辰綱の智恵取り〟といったものだった。

× ×

「おや？　……。おれは？」
ふと我れに返り、自分の姿を見廻した青面獣楊志は、二日月の影を、凄い空に仰いで、
「そうだった。計られたのだ。計られじ、計られじ、と思いつつ、ついに俺も、不覚な罠に」
慚愧にたえぬもののように、両の手は、髪の根をつかんでいた。潸然として、無念の涙が頬をくだる。
「なんで生きて北京へ帰れよう。さらばとて、都にはなお容れられぬ身、そうだ、断崖から谷へ身を投げ、黄泥岡の鬼となって、世々の旅人に、こんな馬鹿者があったと、語り草になるのが、せめてもの身の始末。それしか、とるべき道はない」
蹌踉と、彼は、鬼影を曳いて歩きだした。
ほか十六名の影は、寂として、まだ地に伏したままである。彼が、いちはやく、気を取りもどし得たのは、あの毒酒を、彼のみは、椀の半分ほどしか飲んでいなかったためだろう。
――が、それも今や、死の岩頭に立った身には、何の僥倖と思われるはずもない。
「生れて、三十余年。これで死ぬのか。いったい何しに、生れてきたのか」
死の谷を見おろした刹那、楊志の胸には、過去三十年の自身の絵巻が、いなずまの如く振返られた。
父母の面影が映る。弟妹の声が聞える。武芸の師、読書の師、およそ、この身を育んでくれた天地間のもの、ありとあらゆる生命の補助者が、ひしと、彼の袂をつかまえて、「なぜ、死ぬのか」「死は易いが、生は再びないぞ」と、引き留めているような気がした。
「ああ、恐い。意味のない死は、こんなに恐いものか。やはり俺は死にたくないのだ。意味を見つけたいのだ、死の意味か、生の意味かを」
彼は急に、岩頭から後ろへ跳んだ。死神の口から遁れたように、以前のところへ戻ってみると、そこには醜い十六個の影が、まだ眼を白黒させたり口ばたに泡を吹いている。
「ばッ、ばか野郎っ」
満身の声が、ひとりでに衝いて出た。すると急に、気がか

らッとしてきて、
「ようし、おれは死なんぞ。こんなやつらと心中してたまるものかい。そんな安ッぽい一命じゃなかったはずだ。後日、今日の匪賊どもを捕えるのも一使命だし、あとの命は、どう使うか。そいつも、生きてからの先の勝負だ」
ふと気づけば、あたまに失くなっていた自分の一剣が地におちていた。拾い上げて、腰に横たえ、空を仰ぐと、夜鳥の一群が、斜めに落ちていくのが見える。その方向を天意が示す占と見て、楊志は、何処の地へ出る道とも知らず、やがてよろよろ麓の方へ降りていった。

その夜も、かなり更けてから、
黄泥岡の一端では、ようやく、執事だの強力の兵どもも、夜露の冷気に甦って、ごそごそ這い起き、
「さあ、どうしよう？」
と、今さらな不覚を喞ちあっていた。
「楊は、逃げたな」
執事の謝は、身の不始末を棚に上げ、何よりそれを罵った。
「いま思うと、あいつは薄々、毒酒を感づいていたのかも知れんぞ。いやいや、なんでもかでも、この場のことは、そういうことにしてしまおう。よいか者ども」
「こち徒の落度にゃなりませんかね」
「有ていにいったら、みんな首だ。だから先を越して、夜明け次第に、まずこの地方の役署へ訴えを出しておく。よろしいか」
「へい、どんなふうに」

「なにもかも、楊志の仕業と、彼奴におっかぶせてしまうのだ。黄泥岡の匪賊と気脈を通じ、ことば巧みに、われわれどもへ毒酒を飲ませ、あげくの果て生辰綱の宝はみな、横奪りして、消え失せましてござりますと。わかったろうな。どこで調べられても、口を合せて、押し通すのだぞ」
「わかりました。野郎には、遺恨骨髄、どうでも、そういうことにいたしましょう」
「お前らは、生き証人、場合によっては、当地の役署に残されるかもしれん。しかし、わしは夜を日についで、北京府に立ち帰り、かよう云々と、梁中書閣下にお告げする。当然、烈火のお憤りは知れたこと。ただちに、閣下から都の蔡大臣へ、お飛脚は飛ぶし、また済州奉行所へも、賊徒逮捕の厳令が下ッてくるに相違ない」
――ところで、一方の楊志はどうしたか。彼は自分の去った後において、こんな腹黒い相談が成っていたとは、夢にも知らない。
半ばまだ、ぼうとして、その夜は、どこをどう歩いたやら――。しかし、夜が明けてみれば、彼は黄泥岡を南へ降り、さらに道を南へと、あてどもなく歩いていた。
「さアて。しまった」
いったんは死ぬ気であったため、官の路銀、関手形、送り状、それらの一ト包みも、抛ったまま、身には一銭も持っていなかった。
「生きていれば、腹が減るものと、いま気がつくなんざ、滑稽だな。ま、どうにかなるだろう。乞食まではしなくても」
部落へかかった。いよいよ腹の虫が泣きせびる。で、盲目

的に、
「ごめんよ」
とばかり、つい入ってしまったのだった。よくある田舎の飲屋である。愛相のいい女が出て来て註文を訊く。
肉を炒かせ、飯をあつらえた。小酒屋へ入って、飲まないのも悪いと考えてか、その間に、
「酒も少し……」
と、飲めるような顔でいった。女は世話女房ふうの女だが酌の仕方は馴れている。
飲めぬ口なので、青面獣が炎面獣のような火照りになりだした。肉を食い、飯をつめこみ、やおら野太刀を持ち直して腰をあげた。いささか、夜来の自失を取りもどし、足どり、眼づかい、ようやく本来の彼に立ち返っていた。
「あら、お客さん。お忘れじゃあ、困りますよ」
「なに。なにがよ」
「お勘定を、どうぞ」
「なるほど。そうだったな」
「ご冗談を」
「じつは、文無しだ。だが、おれも男だ、きっといつか来て払うよ」
「とんでもない、旅の人なぞに」
楊志は、耳もかさない。女は叫ぶ。そして、しつこく、どこまでもと、追いすがって来る姿を、
「うるさい」
と、一ト睨みに、ねめすえて、また、
「はははは」と、大声で独り笑った。
「おばさん、おばさん。この男一匹を、そうみじめに追い詰めるなよ。これでも、もとはしかるべき家柄に生まれ、ちょっぴり肩書などもあった者だよ。いまにきっと返しにくるから、今日のとこは、貸しておきなよ」
すると、女の背後から、
「ふざけるな。うぬは、食い逃げの常習だろう。おおいっ、みんな来て、この浮浪人を、叩きのめせ」
と、若い男の声がした。
これが女の亭主かもしれない。刺叉を持って、火事場へでも出てきたような威勢である。彼の声に応じて、近隣の朋輩だの百姓だの、いずれも得物を持ったのが、たちまち、楊志の前後をおっとり囲んで、口ぎたない罵声を浴びせかけた。
「おやおや。たいそう集まったぞ」
楊志の酔眼は、辺りを見て、事の大げさな展開に、われながら、あきれ顔だった。
「一杯の朝飯が、えらい騒ぎになったもんだな。これもまた、生きていく勘定のうちに、つい入れ忘れていたようだ。どれ、こうなったら仕方がない。体で勘定をつけてもらおうか」

二十三　二侠、二龍山下に出会い、その後の花和尚魯智深がこと

「あっ、待て待て。――みんな後ろへ退いていろ」
女の亭主らしい男は、なに思ったか、急に大勢の村人をこう制して、相手の風態を、足の先から天っぺんまで見直して言った。

「おい、食い逃げの大将。――どこかでおめえは見たことがある気がするな」
「おう、名のってもいいが」
「聞こうじゃねえか」
「名は騙ったことのねえ人間だ。あからさまにいうから聞け。青面獣の楊志という者だ」
「えっ、青面獣だって」
「おおさ、なんで急に変な面をするのか」
「……と、仰っしゃるなら、もしや以前は、開封東京の殿帥府にお勤めの」
「そうよ。その楊制使のなれの果てさ」
「やっ、こ、これはどうも……」と、男は手の刺叉も抛り出して「知らぬことじゃあございましたが、なんとも、とんだご無礼をいたしました」
「おや、おや。変な風向きになったな」
　と、楊志も古い以前の身素姓までいわれては、ちょっと赤面を覚えたのだろう。自然その真面目を見せずにいられなかった。
「して、そういうお前さんは？」
「てまえも、じつあ開封の町家の生まれで、親代々の肉問屋のせがれ、曹正という者でございます」
「そうかい。道理で田舎者にしちゃあ、歯切れのいい啖呵をきりなさるがと思ったよ」
「いやお恥かしゅう存じます。都にいたころは、近衛軍のご師範、林冲先生に弟子入りしてちょっぴり棒術の真似ごとなどして、人さまから〝操刀鬼の曹正〟なんて綽名され、いい気になっておりましたンでね。……その後、おやじに代って山東へ商用に下り、資本をつかいはたして、つい極道へすべりこみ、今じゃあこんな百姓居酒屋の亭主。今あなたへ食ってかかったのが、つまりてまえの女房なんで」
「おや、そうだったのか。そいつアなんとも悪かったな」
「ともかく、手前どもまでお引っ返しくださいませんか。このままじゃ女房にしても、後味が悪くっていけませんや」
　曹正とその妻とが、楊志を誘って、わが家の居酒屋へ入ってしまったので、騒ぎに集まった近隣の者も、やがて何処ともなく潜んでしまった。
　はからずも、楊志は、曹正夫婦の世話になって、つい数日を、村酒屋の一間で過ごした。で、その間に、彼が黄泥岡で遭った一代の大難をも、そして今は世に身のおき場もない窮地にあることなども、一切打ち明けていたのもいうまではあるまい。
「……ああ、そうでしたか。いや、値十万貫もする〝生辰綱〟なんてものを、このガツガツと飢えている世に、北京から都まで、無事に送ろうなどという目企みからして、自体無理なはなしでござんすよ。まア、ご心配なさいますな、どんなことをしても、夫婦でお匿い申しますから、当分はまあ、ここでご養生でもなすっておいでなさいまし」
「ありがとう。だが、賊に奪われた落度は落度だし、北京の梁中書も、都の蔡大臣も、或いは、この楊志に、もっと悪い嫌疑をかけているかもしれん。なにしろ、天下のお尋ね者だ。――そのお尋ね者を匿ッたといわれて、お宅へ禍いをかけては申しわけがない」

「ま。そんなご遠慮はなさらないで」
「いやいや、恩をアダで返したら、男が立たぬ。明日にでも、お別れしよう」
「といって、どこか行くあてがおありですか」
「こんな時にゃあ、あの梁山泊が思い出されるがなあ」
「あそこなら、林冲先生もおいでになるとか」
「ところが、イヤな奴が一匹いる。王倫という頭領だ。小心者で邪推ぶかくて、ちとばかりな学識などをひけらかす野郎でな。どうも、そいつが気に食わんのだ」
「じゃあ、梁山泊を小っちゃくしたようなもんですが、二龍山の宝珠寺へ行ってみませんか」
「ふウむ、そんな恰好な隠れ家があるのか」
「そこにも、三、四百人は立て籠っておりましょう。山は青州の南です。頭の名を、金眼虎の鄧龍といいますがね」
楊志は、よろこんだ。――すでに黄泥岡で仮死状態にまで陥ちた毒も体から一掃されていた容子である。次の日、夫婦が情けの旅装いに、少々の路銀までもらって、青州へさして立っていった。
かくて、旅路の彼は、ほどなく一座の群を抜いた山を、青州の空の一角に仰いだ。「……これが、音に聞く二龍山だナ」と、さらに麓へ迫り、その夕べ、どこか一夜の寝場所はないかと、吹き渡る松風の中を、あちこち歩き廻っていた。
すると、とある松の根がたから、突然、
「気をつけろッ。盲か、きさまは」
と、彼の背へ、どなりつけた者がある。
「おや、人間でもいたのか」
と、楊志は振り向いた。
見ると、むっくり起き上がった酒臭い大坊主が、いま楊志の足が、ふと躓いたらしい錫杖を拾い上げて大地にそれを突っ立てていた。
「やい、きりぎりす。なんとかいえ」
「なにっ」
「えらそうに、野太刀なぞ横たえやがって、なんで、いい気持でわが輩が寝ているところを、この大事な禅杖を足蹴にしながら澄ましていくか」
「枯れ木でも踏んだのかと思ったら、坊主の禅杖だったのか。天下の大道に、寝ている馬鹿もねえもんだ」
「ふざけるな。ここは二龍山の木戸の下、めッたな人間が通る場所じゃない。あやまれ」
「あいにく、頭を下げるのは、大ッ嫌いな性分だ。ははん、この乞食坊主、難クセつけて、端た金でもセビろうっていうんだな」
「ほざいたな。乞食坊主かどうか、この錫杖を食らってみろ」
とたんに、一颯の風が楊志のいるところをびゅっと通り抜けた。――もし寸前に身を跳び開いていなかったら、楊志の形はもうなかったにちがいない。
「――あッ」
と、楊志も腰の野太刀を噴射するように抜き払っていた。
そしてすぐもう一度、
「……あっ？」と、驚きをあらたにしていた。

相手の大坊主が、せつなに、法衣の諸肌を脱ぎ、その肌一面の花の如き刺青が、ばっと眼に映ったからだった。
「やあ、花和尚。鉄杖を引け」
「怯んだか、腰抜け」
「そう毒づくなよ。まんざら、縁のない仲でもなかった」
「巧く言やがる。どこのどいつだ」
「おれもおぬしも、ともに開封東京にいた者同士よ。まずこの面の金印（額の刺青）を見てくれ。高俅一味の悪官僚のため、むじつの罪に貶されて、北京の卒に追いやられた楊志という者」
「じゃあなにか。都の天漢州橋へ、伝家の名刀を売りに立ち、あの雑閙中で絡んできた無頼漢の牛二を、一刀両断にやってのけた、当時評判だった、青面獣の楊志というのは」
「お。かくいう拙者だ。――そのころ、おぬしは郊外の大相国寺で、野菜畑の番人を勤めていた花和尚魯智深であろうがの」
「や、や。こいつア思いがけない出会いだ。どうして、わが輩をご存知か」
「その刺青は、都の名物と、三ツ児でさえも花和尚の名とともに知っていたもの。……その花和尚がどうしてまた、こんなところに」
「いや話せば長いことになる。……どうだ、そこまで歩いてくれないか。あれに見える馬頭観音の祠に酒がおいてある。一つ聞いてももらおうし、そっちの身の上も聞きたいし……」
魯智深は先に歩きだした。折もよし、楊志も今夜の塒をさがしていたところ。夜もすがら、二人は祠の濡れ縁で語りあかした。

――以後の魯智深の境遇に、大変動がおこっていたのは、当然なはなし。
まず、彼から、そのいきさつを、こう語った。
さきに、兄弟の義を結んだ林冲が、あえなく滄州の大流刑地へ流されていったさい、彼が途中までついていって、護送の端公（獄卒）を、逆に召使いのごとくこき使い、ついに彼らが林冲を途中で殺そうとした目的を遂げさせなかった始末は、やがて都へ帰った端公の口から、輪に輪をかけて、高大臣へ讒訴されていた。
で、たちどころに、「――花和尚召捕れ」の令がくだり、大相国寺の菜園は、数百の捕手で囲まれた。
この晩の騒動たるや大変だった。一箇の魯智深を逮捕するのに、開封東京の王城下は震駭して、都民も寝られなかったほどである。しかも当の智深は、菜園小屋を焼き払い、大相国寺の大屋根を踏み渡り、街中へ隠れ、また暁のころ、城門の警戒線に現われて、あまたの兵隊を手玉にとり、あッというまに鼓楼の甍から城壁を跳び渡って、それきりどこかへ姿を没してしまった。
「――それからはまた、流浪の旅さ。より以前には、延安府で提轄（憲兵）をつとめていたころ、ふと持ち前の腕力をふるッたのがもとで、五台山へ登って頭をまろめ、以後心を入れ代えますと、仏さまにも亡母にも誓ったけれど、どうもいけない。何がわが輩をこうさせるのか、元来、わが輩の持つ業悪なのか。おとなしく飲んで眠って、太平楽に構えていようと思うのだが、何かが来ては、それを突ッつき起してしまうらしい」

魯智深の述懐のあとで、楊志はいった。
「せっかく、まともに立ち返ろうとしている者を、突ッつき起す奴は、世の悪役人だ。いや、拙者の場合は、やや事情も違うが」
彼もまた、ここに至るまでの、逐一を打明けて、二龍山を目あてに落ちてきたわけを話した。
「そいつは、偶然な一致だったな」
と、智深は手を打って、
「じつはわが輩も、二龍山の宝珠寺こそ、世を忍ぶにはもってこいな場所と考え、山寨の頭、鄧龍に会わんものと、訪ねていった」
「じゃあもう、山寨にお住居なので」
「ところが、鄧龍のやつ、どうしても顔を見せん。ただ、麓で試合をしたうえ、おれに勝ったら、客分と敬まって、山寨へ迎えようと、手下に伝言させてきた。そこで、そいつを信じて降りて来たところが、卑怯にも、すぐ三つの砦門を鎖で戸閉してしまい、うんともすんともいってこない。……ぜひなく村から酒を買ってきて、ここで待つこと今日で四日目というわけだ。しかしどうやらこの勝負は、まんまと、こっちが一ぱい騙られたらしい」
「和尚は人がいい。口惜しくはないのか」
「なんとも業腹さ。そこでだ、三つの砦門を踏み潰してくれようかと、考えてみるが、こいつがまた、なんとも頑丈で、いくらわが輩にせよ、あんな関門とは取ッ組めん。また、取ッ組んでも馬鹿らしい」
「ならば、智をもって、乗っ取るしかありますまい。〝生辰綱の智恵取り〟を食った拙者が、そんなことをいうのはおかしいが」
「思案があるなら聞かして欲しいな。このままじゃ、この麓から引き退がれん」
「いや、ここは一度引き退がって、いま拙者が話した居酒屋の曹正の家まで戻ろう。二龍山を教えたのも曹正だから、彼に計れば何かいい智恵が出るかもしれない」
花和尚を連れて、楊志は数日の後、また村の居酒屋曹正の店へ帰ってきた。
「三人寄れば文殊の智恵」
その晩、鼎座の小酒盛りの果てに、どういう妙計が成り立ったか、三名は声を合せて笑っていた。

二十四　目明し陣、五里霧中のこと。次いで、刑事頭何濤の妻と弟の事

かつての名刹、二龍山の宝珠寺も、いまは賊の殿堂と化して、千僧の諷誦や梵鐘の声もなく、代りに、豹の皮をしいた榻の上に、赤鬼のごとき大男が昼寝していた。
「おや、なんだ！　遠くの人声は。――もしや砦門のほうじゃねえか。やいっ、誰か見てこい」
眼をさまして、伽藍の奥から階段の上へ出てきた鄧龍は、虎のような口を開いて、そこらにいる手下の者へ、一ト声吠えた。
「おうっ」
と五、六人が起ちかけると、下の道から賊の小頭と数名が

登ってきて、
「おかしら、近郷の百姓どもが、こないだの大坊主をふン縛ッてまいりましたが、どうしたもんでございましょう」
と、階の下に並んで告げた。
「なんだと」――鄧龍は、意外な顔して「――おかしいじゃねえか、いつぞやの大坊主といえば、五台山を騒がせ、大相国寺の菜園を荒らし、おまけに開封東京から姿をくらましたお尋ね者の花和尚魯智深だろう。……だからていよくここも追ッ払ったが、しかし百姓なんぞの手に捕まるはずはねえ。よく眉に唾をつけて取次いでくるがいいや」
「ところがお頭、百姓どもに質してみると、まんざら嘘でもねえんです」
「どういう仔細だ、嘘でもねえとは」
「野郎、ここを追い返されて、食うに困ったものとみえ、村の曹正っていう男のやっている居酒屋へ、あれからのべつごねりに行っていたらしいんで」
「それがどうしたてンだ」
「酔っ払っちゃあどこの家へも這入りこんで、宿を貸せの、小費いを出せの、文句をいえば、暴れ廻るし、いやもう手古ずり抜いたものとみえまさ。――そればかりか、梁山泊へ渡りをつけて、二龍山の鄧龍などは、いまにおれの手下に付けてみせる。なんて脅し文句を触れ歩いていたというから笑わせるじゃありませんか」
「野郎、そんな寝言をほざき廻ッていやがったのか」
「で、居酒屋の曹正と村名主が首を寄せて、一ト晩、あの大坊主を上座にすえ、ご機嫌をとると見せて、酒の中へ麻痺薬をいれて飲ませたというんでさ。こいつア大出来じゃあござんせんか」
「ふウむ。そいつアでかした。ふン縛ってきたのか」
「がんじ絡めに荒縄をかけたうえ、麻痺薬が醒めたところを、また寄ッてたかッて蹴るやら撲るやらしたもんでしょう。坊主頭も見られたざまじゃありません。そいつをまた、猟師が猪でもしょッ曳くように、大勢して、わいわい山まで持ってきたわけでござんす。自分たちの手で、息の根を止めるのは不気味だとみえ、お頭の鄧龍さまに、ご処分を願いますッて、口を揃えての嘆願なんで」
「そうか。いまの騒ぎはそれだったのか。よしっ、料理してやろう。これへ連れてこい。……が、待て待て、縄付きにしても厳重に取り囲んでこいよ」
やがてのこと。
石弩、針縄、逆茂木などで守られた柵門を三つも通って、一群の百姓と縄付きの大坊主が、大勢の賊に前後をかこまれて登って来た。――そして来るやいな、魯智深は、いきなり背を小突かれて、階の下に膝をついた。百姓たちも揃って、鄧龍の姿を仰いでぬかずいた。
「お頭でございますか。この大坊主のためにゃ、わしら村の者は、どんなに泣かされたか知れません。どうかご存分に、八ツ裂きにでもしてやっておくんなさいまし」
「むむ。よくやった。きさまが居酒屋の曹正か」
「うんにゃ、ちげえますだ」と、その百姓は、クスンと鼻皺を寄せて、隣に控えていた、もひとりの百姓の顔を見た。これなん、百姓姿に化けた青面獣の楊志であったとは夢にも知

らず、鄧龍はジロとその巨眼を、曹正のほうへ移して。
「こらっ、なんだ、きさまの横に置いてある物は」
「はい、はい。これはこの坊主から奪り上げた禅杖と戒刀でございまする」
「坊主の得物か。これへ持ってこい」
「へい、ただいま」
やっと持ち上げるような重さを見せながら、曹正はその二品を、階段の真下においた。いやそれはちょうど魯智深の鼻の先へ供えたようなものだった。
「たわけめ！」と、鄧龍はどなった。「――持って上がれと申すのだ。なんでそんなところにおくか」
すると、それまで首を垂れていた魯智深が、
「いや、そこでいい」
といったから、鄧龍は跳び上がって驚いた。
「なんだと、この曳かれ者が」
「鄧龍。おまえの首は、もう横を向く間もないぜ」
いったと思うと、魯智深は後ろに廻していた縄目をばらッと解いて、禅杖へ手を伸ばすやいな、猛吼一声、階を躍り上がって、のけ反る鄧龍の真眉間を打ちくだいていた。
縄目は偽結びにしてあったのだ。智深の行動とともに、楊志や曹正なども、慌てふためく賊の手下どもへ立ち向っていたのはいうまでもなく、また、彼らが手もなく慴伏してしまったのは勿論だった。
ここに、宝珠寺の賊寨は、たちまちその主を代えてしまった。――花和尚、青面獣の二人を新たな頭目として仰ぎ、四百の配下は、義を盟って、その晩、庫裡の酒をみな持ち出して、大盛宴を張った。
曹正は、ほかの百姓をつれて、あくる日、村へ帰っていき、二龍山一帯は、その翠の色も里景色も、なんとなく革まった。弱者いじめな極悪非道は仲間掟としていましめ、賊は賊でも、時の宋朝治下の紊れと闘う反骨と涙に生きる漢同士であろうと約したものである。

さて。――楊志の落ちつき先は、ひとまず二龍山宝珠寺と、ここに先途を見とどけることはできたが、なおまだ、黄泥岡事件の後始末は、なにも目鼻はついていない。
いや。この怪事件の詮議は、まだ五里霧中の序の口だ。――江州車七輛にのせて、風のごとく奪い去った重宝十万貫はどこへいったか。その犯人は何者か。天下騒然と、噂はみだれ飛んでいる。
「いまさら、なんとお詫びも、面目もございませんが、憎ッくき下郎は、お手飼いの青面獣楊志。――彼奴のために謀られて、途中、輸送に従っていた十六名の者、みな毒酒を呑まされて……かくのごとき始末にござりまする」
黄泥岡から、夜昼なしに、都へ舞い戻った梁家の執事の謝は、下手人は、楊志と狎れ合いで、道に待ち伏せしていた七人の匪賊であると、主君の前に讒訴した。
仰天したのは梁中書である。
老いの涙を垂らしていう謝執事の言に、嘘があろうとは思えない。怒髪天を衝く、とはまさにこれを耳にしたときの彼の形相といってよい。
「なに、なに。楊志が途中で賊と狎れ合い、きさまらに毒酒

をのませて、あの重宝を持ち逃げしたとな。……むむ忘恩の犬畜生め、よくもわしを裏切りおったな。きっと逮捕して、切り刻まずにおくべきや」

また、一方。

開封東京の大臣邸では、蔡大臣の誕生日となっても、梁家から祝賀品は、ついにその日になっても届かない。

「さあ、どうしたのか？」と、気が気でなく、朝野の賓客を集めた招宴も一こう栄えず、蔡大臣の不機嫌はなはだしいうちに終っていたが、やがてその夜も深更のこと。北京からの早飛脚だった。

「あっ⁉　また今年もか」

梁中書の詫び状と、また事態の顛末を報じてきた一状をも併せ読んで、蔡大臣は、身をつき抜ける憤怒とともに、自己の誕生日が、二年もつづいて、賊に呪われた不吉感に、身の毛をよだてた。

夜明けも待たず、彼は腹心の心ききたる家臣を呼んで、

「黄泥岡は、済州管下だな。すぐ済州奉行所へ下っていけ。そして下手人どもを召捕えるまでは、余の目付として、奉行所にとどまり、与力どもを督励しておれ」

と、厳命した。

目付役をうけたまわった家臣は、即夜、馬にムチを打って済州へ急いだ。

来てみれば、土地の奉行所は、いまやごッた返している。

それもそのはず、北京大名府からは、管領職の名をもって、矢つぎ早の犯人逮捕令、公文書、叱咤の伝令、また早馬と、夜も日もなく責め立てられていた折である。ところへ、またもや、

「ただいま、蔡大臣閣下の御命により、直々のお目付役がお着きです」

と、報ぜられたので、奉行は、目を廻すどころではない。寝不足のうえにも畏怖を加えて、対座の間も、まったく錯乱のていだった。

「はるばるのご下向、なんとも恐れ入りまする。偵察局、刑事部、目明しどもまで、全能力をあげて、はや事件の追求にかかり、必死を誓って、もし勤務に怠慢の者あらば、罷免、減俸などの罰則まで立てて事に当っておりますれば、日ならずして、目鼻もつくやと存じおりまする次第。……何とぞ、ここしばらくのご猶予をば」

「あいや、お奉行」と、目付は、きびしい顔をして言った。

「――日ならずして、などという生ぬるさでは心もとない。蔡大臣が、この身を目付役として、差し向けられた一事でもおわかりだろう。黄泥岡に出没したと聞く七人の棗商人、一人の酒売り、また梁家の裏切り者、青面獣楊志。それらの悪徒を、一人のこらず、十日以内に、縛め捕って、東京へ押送せいとの厳達でおざるぞ」

「えっ。十日のご期限ですと」

「万が一にも、十日を過ぎるときは、お気のどくだが、お奉行自体に、沙門島（流刑の孤島）までお出かけ願う仕儀と相成るかもしれん。もとより此方もまた、のんべんくらりと、手ぶらで都へ帰る面もない。どの道、あなたと生死はともにする気でまいったから、左様ご承知おきありたい」

奉行は青くなった。

それ以前とて、やってはいたが、さあこうなると、一刻が気が気でない。
「刑事部屋の室長、何濤を呼べ」
即刻、役室へ移って、彼は自分にかかった重いものを、部下の精鋭に押しつけた。
「何濤。何をしておるんだ、毎日なにを」
「お奉行。お奉行には手前どもの働きが、まだ鈍いとでも仰っしゃるんですか」
「口ごたえいたすな。そのほう自身とて、寸刻たりとも、刑事部屋で悠長そうな顔していられる場合ではあるまいが」
「冗談いっちゃあ困ります。配下の目明し何百人を、夜昼なく、蜘蛛手に分けて、犯人のホシを嗅ぎ歩かせているんですぜ。そのうえ刑事頭の自分がただ眼いろを変えて、ほッつき歩いても始まりますまい。こう腕ぐみに顔を埋めて、苦心しているのが、おわかりないのか」
「だまれ。それくらいな経験は、わが輩も舐めておる。進士の試験を通って、一郡の奉行となるまでには、あらゆる難に当り、なまやさしいことではなかった。どうでも、十日以内に、犯人全部を挙げてみせろ」
「そいつあご無理だ。神わざじゃアあるめえし」
「いや是が非でも、蔡大臣のご厳命だ。お目付も来ておられる。もし、そのほうが十日以内に、犯人を検挙しえぬなら、わしの奉行職も馘だが、きさまもただは措かんぞ。まず遠島だ」
「べら棒な。いくら大臣のお目付が督励にきたからって」
「そう申すのは、なおまだ、必死の捜査が足らん証拠だ。よしっ、この上命が、ただならんものであることを、その肉体に刻んで、寝る間も、忘れることのないようにしてつかわす。書記！　刺青職人をこれへ呼べい」
奉行もいささか逆上気味だ。――左右に命じて、やにわに、何濤の両腕を捉えさせ、その額に〝○州へ流罪〟と、一字空けの流人彫を刺れさせたのだ。まるで、値段未定の半罪人の札を貼りつけたようなものである。
「オオ痛え。永年、甘い汁を吸っていた報いか知らねえが、こうなると、奉行所勤めも辛いもンだな」
額の血を抑えながら、何濤は刑事頭の一室へ下がってきた。ふと見ると、黄昏れかけた向う側の目明し溜りでは、連日の奔走で、草臥れてはいるのだろうが、わいわいと馬鹿話に笑いどよめいている。何濤は、むかっとして、そこの扉口から呶鳴りつけた。
「やい、てめえたちはみんな本職を罷めて隠居の身分にでもなったのか」
「オヤ、室長。お顔をどうなすったんですえ？」
「見やがれ、おれの面体を」
「あっ、たいへんだ」
「他人事みていにいうない。いいか、十日以内に、黄泥岡の一件のかたをつけなけりゃあ、おれは遠島と言い渡されたんだ。なんでえ、てめえたちの暢気さは」
「へい、申しわけございません。といったって、こち徒も、足を棒にして、そこらじゅうを、クルクル嗅ぎ歩いちゃいるんですが」

「それでゲラゲラ笑っていられるのか。べら棒め、真剣真味に苦労してるなら、草の根を分けても、野の末、山の隅々まで、狩り立ててみろ、常日ごろにゃ、やれ飲ませてくれの、家に病人があるから助けてくれのと、そんな時ばかり、人に男泣きを見せやがってよ」

「おいおいみんな。ひと休みしたら、また手分けして出かけようぜ。室長の額を見たら、ぐッと応えてしまったよ。今夜は一つ夜どおしだ。仕方がねえや、蟋蟀になった気で、当分、草の根を分けて歩くんだな」

――そんな声を背に聞き流して、何濤は気分が冴えないまま、その晩は、家へ帰ってしまった。

彼の妻は、晩酌の膳にも浮かない良人を見て、

「どうしたのよ、あなた。……そのお顔の刺青はさ」

「例の一件さ。刑事頭の女房が、そんなこと、クドクド訊かねえでもわからねえのか」

「と、察してはいますけれどさ。なんぼなんでも」

「是が非でも、十日以内に挙げろッてんだ。しかもまだ、下手人どものホシは五里霧中、なあ女房、わが家の灯を、こうして見るのも、あと十日限りかも知れねえぜ」

「よしておくれよ、心ぼそい」

「だって仕方があるめえじゃねえか。お奉行だけの一量見でもなし、こんどのことあ、蔡大臣直々のご厳達ときていやがる。過ったなア、俺も一生の道を」

「……おや、誰か玄関へ。お客かしら？」

「なアに何清だろ。……弟の何清が、また博奕で摺って、不景気な面を見せにきたにちげえねえ。今夜は、俺は会いたくねえな」

「よござんす。わたしが、お酒でも飲ませて、上手に帰しておきますから」

廊を馳け出していった先で、彼女の愛相がいつもより弾んで聞えた。何濤の弟何清は訪ねてきた兄が風邪気味だと聞かされて、ぜひなく、嫂ひとりを相手に、美味くもなさそうに、出された杯を渋々手に取りはじめた。

「姉さん。いやに今夜あ、陰気じゃねえか。どうも姉さんの顔まで湿ッぽいや」

「だって清さん。おまえだって、ご存知のはずだろうに」

「なにがよ」

「うちの良人の心配事さ。あれ、あんな顔してるわ。兄弟効いのないおひとね」

「だって、知らねえもの。なに不自由なしの刑事頭でよ、しょっちゅう、裏口からは甘い収入があるし、世間さまにはこわ持てされ、そのうえ姉さんみてえな水もしたたる美人を女房に持ち、いったい何の心配事があるのか、おれには不思議さ」

「おふざけでないよ。ちゃんと、ほんとは知ってるくせに。黄泥岡の一件を、清さんが耳にしていないはずないわ」

「あ。あれかあ」

「それごらんな」

「ははは」

「いやな笑い方をするわねえ。いい気味だとでも思っていなさるのかえ」

「邪慳なことを言いなさんな。おれだって、兄貴あっての弟

だ。だがネ、兄貴も悪い弟を持ったもんで、ときどき、風邪も引きたくなるだろうな」
「まあ、へんだよ今夜の清さんは。なんでそんな嫌味をいうのさ」
「イヤしみじみと、時にゃア懺悔がしたくなるのさ。こうして、姉さんの、心ならずものお酌なんかしていただくと、なおさらのことだ」
「もう、してやらないからいい！　変に絡んでばかりきてさ。――今日もお役署には、蔡大臣のお目付とかが来て、十日以内に挙げなければ、お奉行も馘、うちの良人も遠島だなんて、顔に金印（いれずみ）まで打たれて帰ってきたんだよ。お酒はいいが、悪ふざけは、やめてくださいよ」
「へえ、そいつあ初耳だな。そんなことなら、もちッと早く来れやよかったが、またやくざな弟めが、いつものでんで、銭でもセビリにきやがったかと思われるのも辛いと思って、つい閾を高くしていたが」
「ちょっと待ってよ。清さん、いまいったのは、何のこと？」
「なあに。こんなやくざな弟野郎でも、ひょんなことから、ひょんな役にも立つもんだということさ」
「じれッたいねえ、清さんてば。……もしやおまえ、黄泥岡の一件のことで、なにか、心当りでも持ってるんじゃないの」
「まアねえ。どうせ兄貴があてにしているなあ、日ごろよく小費い銭を撒いている組下の目明しだろうから」
「だから、話せないとお言いなのかえ」
「でもないがね。兄貴が、よくよくのッぴきならぬ破目とでもなりゃあ、そりゃ俺だって、見ちゃいないさ。……だが、兄貴は腕ッこきの目明し頭だ。てめえなぞ、出る幕じゃねえよと、鼻ッ先であしらわれるかも知れねえからな。……いや姉さん、どうもご馳走さまになりましたね、またそのうちに」
「あっ、待ってよ。そう、せかせか帰らなくってもいいじゃないの。いま、うちの良人も呼んでくるからさ」
「だって、お風邪なんでしょう。へへへへ」
「あなた。あなた！」
　妻に呼び立てられるまでもなく、何濤はさっきから、部屋境の廊で、耳をすましていたのである。それへ顔を見せるやいな、何清の手を握りしめて言った。
「悪かった。まあ、気を悪くしないで、もう一杯飲み直してくれ」
「おう、兄さんか。酒はたくさんだよ。なるほど、ひどい顔になんなすったな」
「日ごろはつい、おめえの身持ちを案じるあまり、つれない顔も見せたろうが、この兄が一生の頼みだ。知っているなら打明けてくれ」
「ふン。黄泥岡の小泥棒のことですかい」
「小泥棒！　おめえ勘ちがいしちゃあいけねえぜ」
「だってさ、兄さん。あんな者あ、知れきっていらあ」
「げッ。ほんとか」
　何濤は、奥へ馳けこんで、手文庫の内から、銀子十両を持ってきて、弟の膳のそばへ、ぽんと置いた。
「少ないが、当座の褒美だ」
「兄さん、すまねえが、おれはツムジ曲がりだ。こう横を向くぜ」

「どうしてだ、弟。不足なのか」
「よしてくれ、鼻薬なんぞ嗅がされると、なお言いにくいや。やくざな弟、ろくでなしな弟。そいつが、たんだ一ぺん。こう兄貴に向って、ちょっぴり威張った顔がしていられるんだ。こいつあ、銭金に代えられねえ」
「じゃあ、どうしたら、うんというんだ」
「ああいい気分だ。兄貴、嫂、二人を並べて、こう反ッくり返っている味は」
「じらすなよ、金はお上が出すご褒美。それでも不足というんなら、そうだ、頭を下げる。清、この兄貴が、頭をさげて、こう頼む」
「むむ！　教えてもいい」
「ありがたい。どこだ？　賊の巣は」
「ここだよ」
何清は、自分のふところを、ぽんと叩いた。
「ぬすッとどもは、みんな一ト束に、おれの鼻紙挟みに収まっている。逃げッこはねえ、安心しなよ、兄さん」
「えっ、おめえの鼻紙挟みだと」
「手品師じゃねえが、まずご一覧に入れやしょう、たねも仕掛けもございませんとね。……証拠はこれさ」
両手を深く懐に差し入れて、何清は、鼻紙挟みを取り出した。薄べったい革財布とともに、一冊の手帖が折畳んである。その手帖だけを、掌の上に残して。
「さて、これにはちょっと、いわく来歴の説明がなくッちゃおわかりになりますまいて。姉さん、そこの窓も後ろの扉も、みんな閉めておくんなさいな。壁にも耳、灯取り虫にも油断はならねえ。……よござんすかい、じつアねえ兄さん、こういうわけだ」
「……もう二た月ほど前。あれやあ六月の半頃ですがね」
何清は、声を沈めて語り出した。
「ごぞんじの安楽村に、王っていう安宿がありまさ。宿屋掟のご定法で、毎晩の泊り客には、行く先、職業、住所、年齢をちゃんと書かせる。――戸を卸して寝る時刻にゃ、そいつを帳場が書き写し、七日目ごとに、村名主に届けに行く。名主はまた、そいつを纏めて、月に一回、お役署へ届け出る。……ま、兄さんにゃ、こんな話は余計ごとだが、そういった手順でござんしょう」
「む、む」
「ところが、宿屋の王のおやじは、夏の初めごろから、病気で寝こんでしまッたし、若い雇人たちも、字盲ばかりときていやがる。……そんなとこへ、ちょうど安楽村の賭場で、すっからかんになったあっしが、銭無しだったが、ままよと思って、泊りこんだものだ。……よござんすか。さア立つ日となったが、払いはできねえや。そこでふてぶてしく腹を割って、またの日に来て払うぜ、てえと、機嫌よく二つ返事さ。おかみが出てきて、その代りに、半月ばかり帳場の帳付けをしてくださいませんか。そのうちには、亭主も起きられましょうからという相談。物好きたア思ったが、面白半分、つい二十日ほど、安宿の手代になって、泊り客の送り迎えをやっていたんでございますよ」
「へえ、おめえがねえ」

「するッてえと、忘れもしねえ、あれは七月に入ったばかりのこと」
「え。七月三日？」
「そうです。七人の棗売りが七輌の江州車（手押し車）を揃えて、ぞろぞろと、夕方の店さきに草鞋を脱いだじゃございませんか」
「……」
何濤の喉の肉が、ごくと鳴った。
「――あっと、あっしゃあ、とたんにその中の一人に眼をみはった。いや、眼のやりばを反らして、いっそう旅籠の手代らしく、気をつけましたよ。というなア、七人のうちでも、どうやら頭だった無口な男に、見覚えがあったんでさ。ちょっと思い出せなかったが、寝てからよくよく考えてみると、もう数年も前に、やくざ仲間の者に連れられて、頼って行った先がある。――なんと、その時ちらと見た、そこの主人にちげえねえ。鄆城県は東渓村の大名主、たしか晁蓋という男でさあね」
「ふウむ、そして」
「はてな。夕方、なんと宿帳につけたかしらと、翌朝、念入りに調べてみると、七人みんなが、どれも李姓だ。李春、李長、李達、李周といったあんばいに。……それで国もとも濠州の同村、行く先は東京、商売は棗売り。つまり東京へ売り捌きに行くとある。……おかしいなあ、名主が交じって、とは思ったが、その朝はまア、ご機嫌ようと見送ったのさ。そして一日たった次の日だ、やくざの仲間が誘いにきて、行かねえかッてんで、ふところは淋しいが、村のばくち場を覗きにいき、夜になったら、取られたやつと二人で、ぼんやり帰ってくると、村の三ツ叉道を、妙な野郎が、二つの空桶を担いで素っ飛んできやがった」
「なるほど」
「連れの男が、オヤ今のは白日鼠の白勝らしい。おういっ白兄哥って、呼んだけれど、返事もしなけりゃあ、振返りもせず消えちまった。なんのこッた、人違いだぜと、こっちも笑って、そこでは連れの男と何気なく別れて帰って来たが、さてその次の日、黄泥岡のあの一件が、安楽村へも、ばっと聞えてきたじゃあございませんか。――七人の棗売りと、一人の酒売りが、うまく狂言をかいて、あの道へさしかかった十七名の生辰綱輸送の兵に毒酒を食らわせて、十万貫の重宝を、一瞬に掻ッ攫っていってしまったという騒ぎ。いやもう、村じゅう寄ると触ると、四、五日はその話で夢中でさ。……ははアんと、こっちはその間に、宿帳の名前をズラと自分の手控えに書き写しておいたという次第でございますよ。さ、兄さん、証拠のこれは進上する。どうか手柄にしてください」
「おお、かたじけない。貰っておくぜ」
何濤は、狂喜した。すぐ何清を連れて、奉行所へ馳けつけていく。ただちに一室を閉じて、奉行との密談しばらく、二人はまたすぐ腕ききの捕手十名ほどを選りすぐッて、安楽村へ急行した。
村へついたのは、すでに夜半過ぎだ。遊び人白日鼠の家は、岡ッ引きには、日ごろからもう眼の中のものだった。トントントンと叩いてみる。寝巻き姿の女房が顔を出す。あっと、逃げ込むのを追い込んで、

「白日鼠。早ええもんだな。もう黄泥岡から、お迎えときたぜ」
何濤が、一喝くれると、白日鼠は、夜具の中から転がりだして、
「だ、だん那。なにをとんでもねえこと仰っしゃって。あっしゃあ、ごらんの通り、この夏の暑気あたりで、うんうん、高い熱で唸って寝ている始末じゃござんせんか」
「そうかい。病人ならなおのこと。悪足掻きはしねえがいいぞ。お手当をしてやるから、素直にお縄をいただいて見物していろ」
たちまち、女房と二人を、後ろ手に縛しあげ、天井裏、床下と、手分けして家探しにかかる。贓品は彼の寝台の下、地下数尺の下から掘り出された。一つかみほどな、金銀宝石の入った麻袋だ。
がたがた骨慄いしている女房と、満面蒼白な白日鼠に目隠しをさせ、馬の背に乗せて引っ返した。奉行所の門に入って、白洲にひきすえると、夜は明けていた。――しかし二人とも、頑強に口は開かない。
一応、休息に入って、本格的な白洲開きになる。拷問は、半日もつづいた。女房のほうは耐えきれない。で、良人の白日鼠も、ついに口を割って、白状におよんだ。
「もう、こうなっちゃ意地も約束もございません。申しあげます。へい……一件の主謀者は、東渓村の名主、晁蓋に相違ございません。てまえは、むかしお世話になった縁故から、酒売りの一ト役を頼まれて、筋書どおりに、働いたまでございます。ほかのことも、ほかの六人の衆も、いったい誰と誰なのやら、いっこうに存じませんので」
「よしっ、それだけで充分だ、あとの六人なざ、芋蔓でしょッ曳ける」
何濤は、奉行の手から一札の公文を授けられた。管轄ちがいの他県へ出るので、役署と役署の交渉が要る。
といって、そんな手つづきに手間どって、こっちの手配が漏れたら取り返しはつかぬ。――この間、何濤の苦心たるや容易ではなかろう。それに、なお、犯人の面通し（容貌の鑑定）のためには、さきに生辰綱輸送の行に加わり、その後、証人として奉行所に居残っていた強力の兵三名を現地へ同伴して行くなどの用意もあった。
「まずは、おれ一人で、鄆城県へ急ぎ、県の役署と万端を打合せておく。大勢の捕手組その他は、面通しの者を帯同して、後からこい」
何濤は、部下にこう言い残して、その夜半にはもう単身で、馬を県外に飛ばしていた。

注

毌の真ん中の縦棒が下につきぬけたもの　↓　毋
てへん＋弃　↓　拚